

平成 26 年度
エコツアーリズム推進アドバイザー派遣事業
事例集



平成 27 年 3 月

平成 26 年度
エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業 事例集
目 次

頁

1. 本事例集について	1
2. エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業について	3
2-1. 目的	3
2-2. 実施方法	3
2-3. 派遣地域とアドバイザーのマッチング	6
3. アドバイザー派遣事業 平成 26 年度取組事例	7
3-0. 取組事例インデックス	9
3-1. 株式会社別海町観光開発公社野付半島ネイチャーセンター(北海道野付郡別海町)	12
3-2. いちのせきニューツーリズム協議会(岩手県一関市)	24
3-3. 新潟県妙高市(新潟県妙高市)	32
3-4. 特定非営利活動法人 いろは企画(栃木県真岡市)	45
3-5. 小山市渡良瀬湧水地治水推進・ラムサール賢明な活用・周辺整備推進期成同盟(栃木県小山市)	56
3-6. 赤城山エコツーリズム推進準備会(群馬県前橋市)	73
3-7. 一般社団法人 檜原村観光協会(東京都檜原村)	90
3-8. 『ようこそ鋸南』プロジェクト(千葉県安房郡鋸南町)	99
3-9. 横浜市(神奈川県横浜市)	114
3-10. 東伊豆ECOツーリズム協議会(静岡県賀茂郡東伊豆町)	123
3-11. 特定非営利活動法人三保の松原・羽衣村(静岡県静岡市)	136
3-12. 一般社団法人 飛騨市観光協会(岐阜県飛騨市)	152
3-13. 恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク推進協議会(福井県勝山市)	162
3-14. いけだ農村観光協会(福井県今立郡池田町)	173
3-15. うだ夢創の里(奈良県宇陀市)	187
3-16. 那賀町役場企画情報課 地域おこし協力隊(徳島県那賀郡那賀町)	199
3-17. 一般社団法人庄原市観光協会(広島県庄原市)	206
3-18. グランドワーク大山蒜山(鳥取県西伯郡大山町)	216
3-19. 宮崎県高鍋町(宮崎県高鍋町)	226
3-20. 奄美群島広域事務組合(鹿児島県徳之島)	236
4. アドバイザー派遣報告会	247
4-1. 開催概要	249
4-2. 議事概要	250
参考資料 エコツーリズム推進法と環境省の関連施策について	263
1. エコツーリズムに取り組む地域への支援	265
2. エコツーリズム推進法について	266

1. 本事例集について

地域の自然環境や歴史文化を対象として、その魅力を解説し、地域の観光に活かしながら、地域振興につなげていくエコツーリズムの推進に向けた取組が各地域で行われています。

平成 20 年 4 月にエコツーリズム推進法が施行され、環境省では本法に基づくエコツーリズム推進に向けた事業の一環として、「エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業」を実施してきました。

本事業は、エコツーリズム取組地域の中で、外部アドバイザーの助言・指導によってより良い取組の方向性を探ろうと希望する地域を対象として、専門知識を有するアドバイザーを派遣し、各々の地域の個別の状況・課題に対して、個別に助言・指導を行うものであり、平成 26 年度は計 20 団体への派遣を行いました。

本事例集は、派遣地域とアドバイザーから提出いただいた報告レポートと、報告会の議事録を取りまとめたものです。また、巻末には、新たにエコツーリズムに取り組む地域に参考としていただくためにエコツーリズムと環境省の関連施策の概要を付記しました。

これからエコツーリズムに取り組もうと考えている地域や、取組始めて間もない地域、既に取組を実践しており改善を目指す地域等のみなさまに、取組を進める上での参考資料としてご活用いただければ幸いです。

平成 27 年 3 月
環境省自然環境局総務課
自然ふれあい推進室

2. エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業について

2-1. 目的

エコツーリズムに取り組む地域を対象に、各々の地域の個別の状況・課題に対し個別に助言・指導を行うことで、エコツーリズムのより一層の推進を図ることを目的とし、取組経験や専門知識を有するアドバイザーの派遣を行った。

【過去のアドバイザー派遣団体数】

	17年度	18年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度 (本年度)	総計
派遣団体数	5団体	6団体	10団体	10団体	16団体	12団体	20団体	18団体	20団体	117団体

2-2. 実施方法

地域からの派遣申請を受け、予め就任を依頼しているアドバイザーの専門性等を勘案して派遣アドバイザーの選定（マッチング）を行った後、アドバイザーと地域が直接調整を行い、アドバイザーが現地に直接訪問して個別の指導・助言を行う形式とした。

(1) 派遣対象

エコツーリズム推進に取り組む地域のうち、下記のような団体を対象とした。

- ・エコツーリズムや、地域の観光振興を図る目的で組織された協議会
- ・地域の観光協会、観光連盟、商工会議所、市町村の担当課など
- ・広域圏で形成された①、②の団体

なお、個別の団体・企業による職員向けの研修・勉強会を目的とする場合は対象外とした他、申請主体又は関係団体として市町村の行政機関が参画していることを必須要件とした。また、「復興エコツーリズム推進モデル事業」および「平成26年度生物多様性保全推進交付金（エコツーリズム地域活性化支援事業）」にすでに採択されている場合の応募は不可とした。

(2) アドバイザー

申請地域の抱える地域課題の内容や取組の熟度に応じた助言・指導ができるように、予め幅広い分野のアドバイザーに就任を依頼した。

また、環境省が就任を依頼しているアドバイザー以外であっても、申請地域で派遣を希望する有識者を、一定基準下で派遣できることとした。

【平成 26 年度エコツーリズム推進アドバイザー（25 名）】

所属・所属	氏名 (五十音順・敬称略)
北海道大学大学院 農学研究院 准教授	愛甲 哲也
NPO 法人片品・山と森の学校 副代表、尾瀬ガイド協会 専務理事	安類 智仁
有限会社オズ 代表取締役／旅館 海月 女将	江崎 貴久
鹿児島大学名誉教授、桜島ジオパーク研究会座長	大木 公彦
株式会社生態計画研究所 早川事業所／ 南アルプス生態邑 所長・主席研究員	大西 信正
みなかみ町 観光課 観光振興グループ 主査	小野 宏和
観光・地域づくり研究員	緒川 弘孝
文教大学 国際学部国際観光学科 教授	海津 ゆりえ
株式会社ジェイティービー 旅行事業本部 観光戦略部長	加藤 誠
NPO 法人 黒潮実感センター センター長／理事	神田 優
公益財団法人日本生態系協会 地域計画室長	城戸 基秀
NPO 法人 信越トレイルクラブ 事務局長 (一般社団法人信州いいやま観光局事務局次長)	木村 宏
株式会社 ピッキオ マーケティングディレクター／取締役	楠部 真也
国際教養大学 国際連携部長／地域環境研究センター長／教授 東アジア調査研究センター長	熊谷 嘉隆
東京大学大学院 農学生命科学研究科 教授	下村 彰男
環境カウンセラー (広報戦略)、エコツーリズムアドバイザー、 環境ディレクター・プロデューサー、フォトグラファー	鈴木 順一朗
株式会社ツーリズムワールド 代表取締役	高梨 洋一郎
なべくら高原・森の家 支配人	高野 賢一
株式会社南信州観光公社 代表取締役社長	高橋 充
公益財団法人日本交通公社 理事・観光文化研究部長	寺崎 竜雄
NPO 法人 霧多布湿原ナショナルトラスト事務局事業／ 霧多布湿原センター館長	阪野 真人
一般社団法人田辺市熊野ツーリズムビューロー プロモーション事業部長・国際観光推進員	ブラッド トウル
株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役	松田 光輝
有限会社屋久島野外活動総合センター 代表取締役	松本 毅
アイ・エス・ケー合同会社 代表	渡邊 法子

(3) 募集・派遣スケジュール

平成26年7月24日から8月21日の4週間の応募期間を取って一次募集を行い(ホームページ、環境省関連団体のメールマガジン他を活用)、9月中旬に派遣実施地域を確定し、10月下旬に地域とアドバイザーとのマッチングを行い、平成26年11月～平成27年2月にかけてアドバイザーの現地派遣を実施した。二次募集については以下の表参照。

表 派遣実施スケジュール (一次募集)

平成26年7月24日～8月21日	派遣地域の募集
9月中旬～	派遣地域の決定
	派遣地域とアドバイザーのマッチング
平成26年9月～平成27年2月	アドバイザー派遣の実施

表 派遣実施スケジュール (二次募集)

平成26年9月1日～9月30日	派遣地域の募集
受付次第順次	派遣地域の決定
	派遣地域とアドバイザーのマッチング
平成26年9月～平成27年2月	アドバイザー派遣の実施

(4) 派遣の条件等

派遣にあたっては、事業内で40地域・回(※1回当たり17時間稼働を目安)を上限とし、アドバイザーの旅費(※現地までの交通費、現地での宿泊費※前後泊含む)及び謝金を事務局負担とした(※現地での移動費用、施設利用料、入場料、その他アドバイスの実施にあたって現地で発生した費用等は申請地域が負担)。

(5) 審査・選定

上記への公募に対して、下記の審査基準で書類審査を行い、総合的視野(地域間のバランスや、資源性のバランス、その他環境省関連事業の実績等)も考慮した上で選定を行った。

【審査基準】

- ・応募資格を満たしていること。
- ・エコツーリズムに取り組む目的が明確であること。
- ・多様な主体が連携しながらエコツーリズムに持続的に取り組む体制がとれること。
- ・地域の現状や課題に対し、アドバイスを希望する内容が明確であること。
- ・アドバイザーの助言や指導を取組に反映させる仕組みがあること。

2-3. 派遣地域とアドバイザーのマッチング

派遣要請があった地域からの要望や地域の実情等を勘案し、アドバイザーの専門分野とのマッチングを行った。結果、派遣地域として 20 地域、アドバイザー16 名（内 5 名は複数地域に派遣）を決定した。

【派遣地域とアドバイザーのマッチング結果】

No.	都道府県	市町村・地域	申請団体	派遣 アドバイザー	派遣日
1	北海道	野付郡別海町	株式会社別海町観光開発公社	楠部 真也氏	10/28～ 29
				松田 光輝氏	2/6
2	岩手県	一関市	いちのせきニューツーリズム協議会	木村 宏氏	12/6～7
3	新潟県	妙高市	新潟県妙高市	下村 彰男氏	1/10～11
4	栃木県	真岡市	特定非営利活動法人 いろは企画	江崎 貴久氏	12/4～6
5	栃木県	小山市	小山市渡良瀬湧水地治水推進・ラムサール賢明な活用・周辺整備推進期成同盟	鈴木 順一郎氏	12/15～ 16
6	群馬県	前橋市	赤城山エコツーリズム推進準備会	海津 ゆりえ氏	11/11 12/2 1/20
7	東京都	檜原村	一般社団法人檜原村観光協会	安類 智仁氏	1/27～29
8	千葉県	安房郡鋸南町	『ようこそ鋸南』プロジェクト	緒川 弘孝氏	1/27～29
9	神奈川県	横浜市	神奈川県横浜市	城戸 基秀氏	11/27～ 28 1/27
10	静岡県	賀茂郡東伊豆町	東伊豆 ECO ツーリズム協議会	渡邊 法子氏	2/22～24
11	静岡県	静岡市	特定非営利活動法人 三保の松原・羽衣村	下村 彰男氏	11/26～ 27 1/15
12	岐阜県	飛騨市	一般社団法人飛騨市観光協会	楠部 真也氏	10/23～ 24 1/21～22
13	福井県	勝山市	恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク推進協議会	鈴木 順一郎氏	11/10～ 12
14	福井県	今立郡池田町	いけだ農村観光協会	楠部 真也氏	11/7～8、 1/27
				山田 桂一郎氏*	11/7～8
15	奈良県	宇陀市	うだ夢創の里	緒川 弘孝氏	12/15～ 17
16	徳島県	那賀郡那賀町	徳島県那賀町	寺崎 竜雄氏	2/12～14
17	広島県	庄原市	一般社団法人庄原市観光協会	高梨 洋一郎氏	1/21～23
18	鳥取県	米子市	グランドワーク大山蒜山	大木 公彦氏	1/28～29
19	宮崎県	高鍋町	宮崎県高鍋町	加藤 誠氏	2/19～20
20	鹿児島県	徳之島	奄美群島広域事務組合	海津 ゆりえ氏	12/27

*環境省が予め就任を依頼したアドバイザー以外で、地域から推薦があった有識者。

3. アドバイザー派遣事業 平成 26 年度取組事例

3-0. 取組事例インデックス

(1) アドバイス分野別

団体名 (所在地)	エコツアーリズムに関する意識啓発、資源の発掘	エコツアーリズムに関するガイド制度づくり	ガイド人材の育成、ガイド制度づくり	利用と保全の仕組みづくり	環境教育の実施	地域が協働する進体制づくり	事業者 エコツーラーの商品化と 事業化	フィールド環境の 整備・計画	環境省施策・事業の活用	頁
株式会社別海町観光開発公社 (北海道野付郡別海町)	○	○	○			○	○	○		12 頁
いちのせきニューツーリズム協議会 (岩手県一関市)	○	○	○	○	○	○	○	○		24 頁
新潟県妙高市 (新潟県妙高市)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	32 頁
特定非営利活動法人 いろは企画 (栃木県真岡市)	○	○	○	○			○		○	45 頁
小山市渡良瀬湧水地治水推進・ラムサール賢明な活用・周辺整備推進期成同盟 (栃木県小山市)	○	○				○	○			56 頁
赤城山エコツアーリズム推進準備会 (群馬県前橋市)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	73 頁
一般社団法人 檜原村観光協会 (東京都檜原村)		○								90 頁
『ようこそ鋸南』プロジェクト (千葉県安房郡鋸南町)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	99 頁
神奈川県横浜市 (神奈川県横浜市)	○					○	○			114 頁
東伊豆 ECO ツーリズム協議会 (静岡県賀茂郡東伊豆町)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	123 頁
特定非営利活動法人 三保の松原・羽衣村 (静岡県静岡市)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	136 頁
一般社団法人 飛騨市観光協会 (岐阜県飛騨市)	○		○			○	○		○	152 頁
恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク推進協議会 (福井県勝山市)	○	○	○	○	○	○	○	○		162 頁
いけだ農村観光協会 (福井県今立郡池田町)	○	○				○	○			173 頁
うだ夢創の里 (奈良県宇陀市)		○	○				○	○		187 頁
徳島県那賀町 (徳島県那賀郡那賀町)	○					○	○			199 頁
一般社団法人庄原市観光協会 (広島県庄原市)	○	○		○	○	○	○		○	206 頁
グランドワーク大山蒜山 (鳥取県西伯郡大山町)	○	○	○	○	○	○	○			216 頁
宮崎県高鍋町 (宮崎県高鍋町)	○	○		○	○					226 頁
奄美群島広域事務組合 (鹿児島県徳之島)						○				236 頁

(2) 取組段階別

取組段階	申請団体	頁
胎動期	いちのせきニューツーリズム協議会	24 頁
	『ようこそ鋸南』プロジェクト	99 頁
	特定非営利活動法人 三保の松原・羽衣村	123 頁
	うだ夢創の里	187 頁
	徳島県那賀町	199 頁
始動期	特定非営利活動法人 いろは企画	45 頁
	小山市渡良瀬湧水地治水推進・ラムサール賢明な活用・周辺整備推進期成同盟	56 頁
	赤城山エコツーリズム推進準備会	73 頁
	一般社団法人 檜原村観光協会	90 頁
	神奈川県横浜市	114 頁
	一般社団法人 飛騨市観光協会	152 頁
	いけだ農村観光協会	173 頁
	一般社団法人庄原市観光協会	206 頁
	宮崎県高鍋町	226 頁
	奄美群島広域事務組合	236 頁
改善期	株式会社別海町観光開発公社	12 頁
	新潟県妙高市	32 頁
	東伊豆 ECO ツーリズム協議会	162 頁
	恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク推進協議会	123 頁
	グランドワーク大山蒜山	216 頁

(3) 地域別

地域	申請団体	頁
北海道	株式会社別海町観光開発公社	12 頁
東北地方	いちのせきニューツーリズム協議会	24 頁
関東地方	小山市渡良瀬湧水地治水推進・ラムサール賢明な活用・周辺整備推進期成同	32 頁
	一般社団法人 檜原村観光協会	45 頁
	特定非営利活動法人 いろは企画	56 頁
	赤城山エコツーリズム推進準備会	73 頁
	神奈川県横浜市	90 頁
	『ようこそ鋸南』プロジェクト	99 頁
北陸地方	新潟県妙高市	114 頁
中部地方	恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク推進協議会	123 頁
	一般社団法人 飛騨市観光協会	136 頁
	いけだ農村観光協会	152 頁
	特定非営利活動法人 三保の松原・羽衣村	162 頁
	東伊豆 ECO ツーリズム協議会	173 頁
近畿地方	うだ夢創の里	187 頁
中国地方	一般社団法人庄原市観光協会	199 頁
	グランドワーク大山蒜山	206 頁
四国地方	徳島県那賀郡那賀町	216 頁
九州地方	奄美群島広域事務組合	226 頁
	宮崎県高鍋町	236 頁

3-1. 株式会社別海町観光開発公社

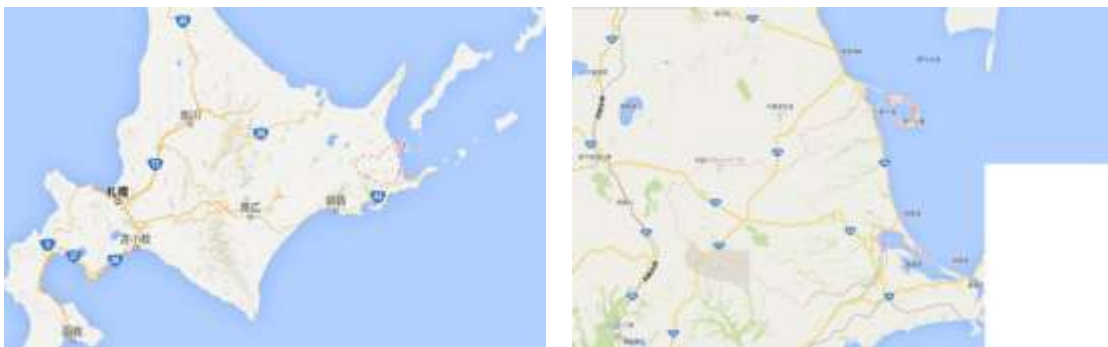
野付半島ネイチャーセンター（北海道野付郡別海町）

(1) 地域の概要

【人口】約 1500 人

【地勢】

北海道東部、根室管内の中央に位置し、大きさは東西に市に 61km、南北に 44km、北方領土の国後島までは最短 16km。



【面積】

1,320k m²。

【気候、自然】

夏の平均気温 18℃。北海道でも冷涼な地域。夏期は霧も多い。

降雪は比較的少ない。冬期、朝晩は-15℃にもなり、日中でも 0℃を越えない真冬が続く。

内陸部は北海道らしい広大な牧草地が広がる。海岸部の野付湾や風蓮湖周辺では森林、草地、塩湿地、湿地、干潟と多様な環境を併せ持ち、野生動植物の生息地としてはもちろん、渡り鳥の中継地としても重要となっている。

【歴史】

- ・マンモスの歯の化石
- ・きつもん擦文・オホーツク文化
- ・アイヌ文化
- ・江戸時代の通行屋、にしん鱈漁番屋
- ・明治 漁獲を利用した缶詰所
- ・おくゆきうす奥行臼駅通所（町指定文化財、北海道指定文化財）

【観光】

酪農（生乳生産量日本一、牛の飼育頭数）

漁業（サケ、コマイ、アサリ、ホッキ、ホタテ、北海しまえび）

日本最大の砂嘴・野付半島
原生花園（野付半島、風蓮湖）
ゴマフアザラシ（野付湾では夏期に見られる）
ラムサール条約登録湿地（野付半島・野付湾、風蓮湖）
野付風蓮道立自然公園、
北海道遺産（野付湾・打瀬舟）
温泉

【地域資源の概要】

野付半島

根室半島と知床半島の上に位置し、北方領土の国後島までは最短距離の 16km。全長約 26km。日本最大の砂嘴。北からの海流によって砂が運ばれ、少しずつ堆積してできた半島で、付根の形成は 3,000 年前と言われている。中央部の森には擦文時代の竪穴式住居・チャシ跡、先端部には江戸時代の通行屋遺跡など人々の暮らした跡ものこる半島。森林、草地、湿地、塩湿地、干潟など多様な自然環境が揃っており、道東らしい広大な自然が楽しめる。バードウォッチングポイントとしても人気で、230 種を超える野鳥が観察されている。タンチョウ、オジロワシ、オオワシは有名であり、人気も高い。渡り鳥の中継地としても重要で多い時期には約 20,000 羽の渡り鳥が羽を休めて行くといわれている。ラムサール条約にも登録された。5 月下～10 月にかけては原生花園で様々な花が見られる。クロユリ、センダイハギ、エゾカンゾウ、ハマナス、ノハナショウブ、ウラギク、アッケシソウの群落が見事。

漁業も盛んで、アサリ、ツブ貝、ホタテ、ホッキ貝、サケ・マス、コマイなどが獲れる。特に野付湾で獲れる北海しまえびは有名な特産品。初夏と秋の決められた期間のみ、北海道遺産である打瀬舟で漁が行われる。

(2) アドバイザー派遣申請の背景

1) アドバイザー派遣申請の背景

野付半島はいままで「トドワラ」という枯木が林立する景勝地で売ってきたが、近年自然現象により衰退が激しくなっている。また、エゾシカによる食害も深刻で、花が少なくなってきた。年間 3000 人近い観光客をガイドしているが、このままの状態を維持することは困難と思われ、「トドワラ」に代わる新たな資源を開発して集客しなければという思いがあった。

2) これまでの取組

これまで年間 3000 名近いお客様のガイドを行ってきたが、目玉商品である「トドワラ」の衰退が著しく、これに代わる資源の発掘、商品化が喫緊の課題と考えていた。

(3) アドバイザー派遣の概要

日 時	◆ 1回目：平成 26 年 10 月 28 日（水）～29 日（金） ◆ 2回目：平成 27 年 2 月 6 日（金）
場 所	北海道野付郡別海町
ア ド バ イ ザ ー	株式会社ピッキオ 代表取締役 楠部 真也 氏
参 加 者	◆ 1回目：別海町役場、別海町観光協会、野付半島ネイチャーセンター、別海町観光船、野付半島ネイチャークラブ 合計 10 名 ◆ 2回目：別海町役場、別海町観光協会、野付半島ネイチャーセンター、野付半島ネイチャークラブ 合計 7 名
スケジュール・方法	◆ 1回目 【1日目】 ・視察：観光船、トドワラ、遊歩道、半島先端部 【2日目】 ・視察：伝馬船、オンニクルの入江 ・話し合い ◆ 2回目 ・視察：オンニクルの森（スノーシュー散策） ・話し合い

(4) アドバイスの内容

1) 1回目派遣

場所	視察内容
観光船	アザラシ、半島遠景、国後島
トドワラ	トドワラの枯木群、シカ食害、木道
遊歩道	水鳥、山並み、景色
伝馬船	野付湾内
オンニクルの森	散策道、遺跡、枯木群
ナラワラ	枯木群

①観光資源について

- ・資源は充分すぎるほどある
- ・トドワラの衰退を除いても、充分感動できる景色がある

②プログラムの作り方

- ・他施設の真似をする
- ・たくさん作ってたくさん失敗する

③ガイドの質の向上

- ・アンケートの実施（返送してもらうアンケート）
- ・アンケート結果は評価に反映

④売り方

- ・資源はあるので、どうやって売っていくかが最重要課題
- ・プログラムより広報が大事
- ・原稿料を払ってでも雑誌に記事を載せてもらう（るるぶ、まっふる、ANAの機内誌など）
- ・宿泊施設との連携がカギ。どこと連携するのか？（根室、標津、羅臼？）
- ・誰かが儲かる仕組みを作ると連鎖していく
- ・誰に売りたいのか？対象をはっきりさせる
- ・資源とターゲットをしっかりと

⑤インバウンド

- ・アジアより欧米を狙え（アジアから集客した結果、国内旅行者が激減したところも）
- ・欧米人は長期滞在型、資金も豊富
- ・欧米人は野鳥、動物が見られるならそれに見合う対価は支払う
- ・近隣まで欧米人旅行者は来ているので、ここにどうやって引っ張るか？
- ・外国人への広報（ロンリープラネット、ナショナルジオグラフィックなど）

⑥情報共有

- ・ネイチャーセンター、役場、観光協会との情報共有ができていない（特にメディア出演に対して）
- ・客層のリサーチ、ガイド数、満足度、入り込み数、売上げなど

2) 2回目派遣

場所	視察内容
オンニクルの森	散策道、遺跡、枯木群
先端部	ワシ類

- ・人との交流も資源（地元ならではの物、食べ方）
- ・素材は人を呼ぶものと来てから体験するものを把握する
- ・知床の入り口としての野付
- ・ツアー参加に条件をつける（ターゲット以外は排除する）
- ・リピーターのためのプログラム。何度か来る内にその時々良さが分かる。シーズンオフに呼び込む。レベルの高い特別な体験。

(5) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

①エコツーリズム、又は、地域資源について理解が得られた

- ・自分たちが思っている以上の資源があることが分かった。
- ・衰退し目玉にならないと思っていたトドワラの景色もまだまだ感動を与えられる景色である。
- ・景色と生き物の両方がある地域はなかなか無い。さらに野生動物が近くでリアルな生態が見られる。
- ・人工物が一切視界に入らない広大な景色はそうそう無く、感動が大きい。
- ・整備された道が必ずしも必要では無く、されていないからこそ楽しめる事もある。
- ・穏やかな海に恵まれている。観光船の出航率も良く、カヌーに向いている。

②今まで課題としていたことがより明確になった

- ・トドワラの衰退ばかり心配していたが、それを上回る資源があり、それで充分やっていけること、そしてその売り方のほうが課題だということが分かった。

③今までの課題に対して取組方が分かった

今ある資源でプログラムを充実させる。広報の仕方を考える。

④今までとは別の課題が明らかになった

対象を誰に、どこと連携し、どうやって売るのがか。インバウンドも視野に。

2) 今後期待される効果

プログラムのラインナップと近隣との連携により、集客数の増加。外国人観光客の増加。

3) 今後の取組

まずは別海町観光開発公社、別海町役場観光課、別海町観光協会、ネイチャークラブで話し合いを設け、別海町として観光の方向性をはっきりさせ、やるべきことを整理し、それぞれの役割を明確にしていきたい。

- ・利用客のリサーチ（客層、どこから来たか、どこに泊まるか、何を求めているか、満足度）→個人ガイド利用客への細かいアンケートの実施。
- ・メディア掲載の記録・情報収集、そしてそれを共有する。
- ・近隣ガイドツアーの分析、他地域でのガイドツアーの視察。
- ・現在のプログラム分析（対象別に分類、他地域のガイドツアーと比較）。
- ・宿泊施設への情報提供・周知。→プログラムの一覧・チラシなどの作成。
- ・対象別に宣伝内容・方法を変化させる。

(6) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

①外国人の動向や嗜好

「外国人」でも地域により求めるもの、滞在方が違うこと。アジア人は森羅万象・景色を好む。欧米人は野生動物を好み、長期滞在型、ロングトレイルを好む。野付半島は欧米人向きである。また欧米人を呼び込むことはブランド化へとつながる。

②他地域の事例

田野畑村のサップ船。(野付湾での伝馬船に似る)

アドバイザーの勤める軽井沢でのガイドプログラム。(ムササビウォッチング、スターウォッチング、レンタル品、体制、大人向け・ファミリー向けの内容とガイド)

③広報の仕方

情報源はガイドブックと口コミが多い。広報は途切れないよう、手元に残る雑誌で。対象を考えてラインナップを宣伝する。

④プログラムの作り方

まずは他の地域で行っているものを真似する。酪農体験などは雨の日対策になる。対象を考えてプログラムを作る。

2) 感想

野付の資源に対して、自分たちが感じていることと、外部の人が感じることはかなりの違いがあることが分かりました。ネガティブなことばかり考えていましたが、資源は今あるもので充分であり、力を入れるべきところが違っていたということが分かりました。それから他地域のことをもっと知るといことも私たちの課題だと思いました。

いただいた多くの助言を無駄にしないよう、ひとつでもカタチにしていきたいと思います。2日間、大変有意義な時間を持つことが出来ました。どうもありがとうございました。

【記録写真】

< 1回目派遣の様子 >



トドワラ木道を視察。
枯木群が年々少なくなり観光の目玉にならないと思っていたが、まだまだ十分感動できる景色である。木道も幅が狭く、手すりもないので危険に感じていたが、安全が確保できていれば冒険心も味わえるので、がっちりとした整備が絶対では無い。日韓人には好みの景色である。

半島先端方面の視察。
ガイド付きでしか行けないという特別感を付けると良い。サイクリングにも良い。欧米人は数十キロ歩くことも苦ではなく、歩きながら生き物も見られる好条件の場所。外国人が日本で見たい生き物であるオオハクチョウやエゾシカが数多く、近くで見られる。



新たなガイドルートとして検討中のオンニクルの森を視察。
今回は伝馬船で上陸した。ガイド利用での上陸ではいくつか条件があるが、よくよく調べればクリアできるはず。風が強い日であったが問題なく出航できたのは野付湾が非常に穏やかなため。穏やかな海が常に隣接しているのはこの強みである。遊歩道などの整備された道・決められた道でなく自由にあるけるといのは魅力。人工物が一切見えない景色は貴重。牡鹿が雌鹿を追う光景などリアルな生態が見られる。森林内は安全管理（落枝やスズメバチ）をしっかりと行い、情報を共有していくことが重要である。



話し合い。

資源は十分過ぎる。重要なのは対象を絞ったラインナップ、宣伝、売り方である。利用客のリサーチ、現状の分析、情報収集と共有が不足していると感じた。

< 2回目派遣の様子 >



新たなガイドルートとして検討中のオンニクルの森を視察。

今回はスノーシューを履いて散策した。ネイチャーオフィスで行っているスノーシュー体験の内容などを教えていただいた。



話し合い。

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

株式会社ピッキオ 楠部 真也 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

北海道野付半島は北海道の道東に位置した海沿いの町です。この町は農業、漁業ともに盛んであり、北海シマエビなどの特産品があります。

野付半島周辺ではトドワラ、ナラワラ、原生花園などが以前より有名で、打瀬舟などの古い漁法も残っており、オオワシ、オジロワシ、ゴマフアザラシなども比較的容易に見え、自然資源としては申し分の無い地域であると言えます。

エコツーリズムについては野付半島ネイチャーセンター<http://notsuke.jp/>を中心にグリーンシーズンにツアーを開催しています。

②課題

野付半島のエコツーリズムの最大の課題は集客であろうと思われます。自然資源は全く申し分なく、ツアーに参加さえしてもらえれば一定の満足度を得られることは間違いありませんが、残念ながら集客に苦勞する状況にあります。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

前述のとおり、野付半島の自然資源に関しては非常に魅力的で、“どれ”と特定できるものではありません。

②上記地域資源に魅力を感じた理由

野付半島に生息する野生動植物はどれも魅力的であるだけでなく、その地理上の特性（砂の半島で、丘陵地がない）から、非常に見やすいという利点もあります。伝馬船で行く野付半島は非常に魅力的で、日本有数ではないかと思いました。

3) アドバイス（講義等）の概要

自然資源としては全く問題なくツアーの実施は可能です。ツアーは2種類体験しましたが、何れも魅力的でした。課題は集客にありますので、必要なことを議論しました。アドバイスとして、

- ① 広報戦略
- ② 宿泊施設との連携
- ③ 他地域との連携

の3点をアドバイスとして伝えました。

まず、魅力的な野付半島の自然を一般観光客に認知してもらう必要があります、その為には行政を巻き込んでの“広報”を通じて、道内外のメディアに野付半島の魅力を発信してもらうよう取り組むべきではないかと伝えました。続いて、別海町内に

ある宿泊施設と積極的に協力体制を構築することで、双方にとって集客につなげられる可能性を伝えています。最後に、観光客は道東を周遊する傾向がある為、別海町外とも広域連携を図れないかとも提案しました。別海町付近には、一大観光地である知床、宿泊施設が多い川湯温泉、都市としては根室があり、これらとの関係をより強固にすることで、野付半島のエコツアーの集客につなげられる可能性が広がると考えました。

また、アドバイスというほどではないものの、野付半島は日本人だけでなく、海外観光客に対しても魅力的に映ると思われましたので、その可能性についても言及しました。実際、近隣の鶴居村や根室市は外国人バードウォッチャーを集客していますので、野付半島でもそれは可能ではないかと思われます。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

別海町では、エコツーリズムに取り組んではいます。一方で、全体構想に対しては取り組んでいない状況です。

②全体構想への意向について

積極的な意向があるとは言えないと思われますが、全体構想認定を得ることによる具体的なメリットがわかれば取り組む可能性もあると思われます。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

本来、別海町は全体構想策定に動き出していきたい地域です。しかし、観光産業があまり盛んでない町ですのでまずは、野付半島でエコツーリズムを通じて観光消費が増大するという実例を作ることが必要ではないかと思われます。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

一泊二日で訪問させていただきました。繰り返しになりますが、野付半島はコンパクトではありますが、世界自然遺産の知床にも匹敵する非常に魅力的な自然資源です。このような光景を日本で見ることはなかなかできないと思います。

それだけに、今後の野付半島のエコツーリズムについては期待と不安、両方をもってみえています。現状はなかなか集客に結び付いていない状況ですが、試行錯誤を繰り返しながら何とか生業としてガイド業を定着させ、地域振興に役立てていただければと思います。

株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役 松田 光輝 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

野付半島「トドワラ（原生花園）」をフィールドとして、株式会社別海町観光開発公社に所属するガイドを中心にエコツアーが実施されている。エコツアーは主に夏に行われ塩湿地や海岸草原に咲く花のガイドングが中心となっている。

②課題

観光客が夏季に集中しているため、通年を通しての常駐ガイドが少なく、繁忙期はアルバイトガイドで対応している。質の向上や新規プログラムの開発、受入れ体制等に苦慮しているようである。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

- ア. タンチョウ、ゴマフアザラシ、オオワシ、オジロワシ等の野生動物。
- イ. 塩湿地や海岸草原の環境及び海浜植物。
- ウ. 砂嘴が織りなす独特の景観。

②上記地域資源に魅力を感じた理由

- ア. タンチョウの繁殖地は細長い砂嘴にあるため、採餌行動などが比較的至近距離で見られる他、冬季のオオワシ・オジロワシは氷下漁のおこぼれの魚を狙っているため、人間に対する警戒心が非常に弱く、写真撮影なども比較的容易である。このように季節によって、タンチョウ、オオワシ、オジロワシなどの世界的に見ても一級の野生動物資源が観察しやすい条件が整っている。また、夏から秋にかけては、観光船からゴマフアザラシが高確率で見られ、尚且つ干潮時に干潟で休憩する姿は他地域ではなかなか見られない光景である。
- イ. 北海道には海岸草原や湿地の植物を観察できる原生花園が幾つもあるが、塩湿地の植物が観察しやすい場所は限られている。塩湿地から海浜性、草原性の多様な環境があり、植物の種類が多いのも魅力の一つだ。
- ウ. 日本最大の砂嘴が織りなす風景は、他地域で見られない独特の景観を作り出している。成長と浸食が同時進行で進む砂嘴は、景観や環境に常に変化をもたらすのも魅力の一つと考えられる。また、トンボロ（陸繋砂州）などがある地域等とジオツーリズムを切り口とした新たな連携も可能である。

3) アドバイス（講義等）の概要

- ①資源性は高く、海外からの観光客にも魅力的な地域になるはずである。優位性のある資源を把握し、それに合わせたターゲットにPRしていくことが有効だ。

- ②資源を効果的に使うためには、新たなコースづくりや整備が必要となる。民間事業者だけでは予算や許認可の問題で限界があり、各行政機関との連携が必要である。
- ③タンチョウやオオワシ、オジロワシなど観光資源として魅力のある野生動物を持続的に活用するためにはルール作りが必要となる。
- ④道東方面には原生花園が多く、他の原生花園との違いをPRできなければ集客することは難しい。特に人気のある原生花園はオホーツク海側に集中しており、根室方面はマイナーである。しかし、オホーツク海側の原生花園とは開花時期が異なり、棲み分けや連携ができる。
- ⑤野付半島「トドワラ」の知名度はあまり高くはないことと、別海町の宿泊キャンプ及び選択肢が非常に限られている。「トドワラ」よりも知名度の高い知床や阿寒との連携、宿泊施設としては近隣の市町村との連携が重要となる。
- ⑥一年を通してガイド業で生計を立てられるようになるためには、単価の高い商品開発とシーズンオフ（冬季）の商品開発及び誘客が必要となる。

4) エコツアー推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

全体構想について具体的な検討などはされていない。

②全体構想への意向について

関心はあるが、メリット等について地域内での検討が必要。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

別海町の産業構造で観光業（経済効果）の占める割合はあまり高くなく、観光に対する地元住民の関心は低いと思われるので、観光に対する関心をどう高められるかがポイントになる。そのためには別海町の観光資源の可能性について、地元住民に周知しなければならない。まずは、エコツアーのメニュー数と参加者を増やすことが一番の近道だと考えられる。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

自然環境の資源性は高い地域で、エコツアーガイドが生計を立てることができる地域だと思います。ただし、農業・漁業が中心の町で、地域の協力を得られ難いかもしれませんが、確実に実績を積んで行けば必ず注目を集め、理解者や協力者が増えるはずです。まずは、お客様一人一人に満足度の高いサービスを提供して、評価を得てください。お客様の評価が高ければ、口コミなどで認知度が上がり集客に結びつきます。地道ではありますが、お客様のニーズに応えながら頑張ってください。

3-2. いちのせきニューツーリズム協議会（岩手県一関市）

(1) 地域の概要

【人口】

一関市 12.2 万人 京津畑自治会 130 人

【地勢】

一関市 中心部の平地と周囲の中山間地域 京津畑 山間地標高 300m 以上

【面積】

一関市 1256 平方キロ 京津畑 東西 4km 南北 7km 程度

【気候、自然】

岩手県の中で積雪は少ない地域だが、京津畑は比較的雪が多い

【歴史】

京津畑は薪炭・林業と農業の組み合わせによる産業が営まれてきた

【観光】

一関では日本百景の^{げいびけい}猊鼻溪のほか、巖美溪、一関温泉郷、須川岳(栗駒山)など

【地域資源の概要】

標高 900m 以下の山林と人里が広がっており、里山の自然と風景に触れることができる。

視察検討したサイクリングコースは室根町の J R 大船渡線 折壁駅を起点として京津畑の「山がっこ」に至る峠越えも含めた山林中心の「A 峠越え縦走コース」（約 36km）と京津畑から川沿いに下流へと向かい^{げいびけい}猊鼻溪に至る「B のんびり川下りコース」（約 25km）。

またウォーキングについては京津畑地区内を中心とした昔からある林業などで使われた道や県道の旧道を視察し検討した。

(2) アドバイザー派遣申請の背景

1) 背景

地域の交流拠点となる、宿泊・食事施設は整備され、体験の面でも農作業体験などは打ち出してきたものの、一般個人利用は多くなく、さらなる来訪者の増加が施設の維持と地域活性化のための課題となっている。

2) これまでの取組

廃校となった小学校を再生した施設、京津畑交流館「山がっこ」を整備。宿泊、食事の提供のほか、弁当などの加工出荷を行う「やまあい工房」を併設し、また地区の会館としての機能も持たせて地域の拠点として活用。

山がっこの体育館を会場に住民総参加とあってよいイベント、「食の文化祭」を毎

年開催。地域に昔からある料理や地元食材を活かした手作り食品が一堂に集まり、地域住民の数倍もの来場者がある一大行事。

(3) アドバイザー派遣の概要

日	時	平成 26 年 12 月 6 日 (金)
場	所	岩手県一関市内 室根町地域(室根山 他) 大東町地域(内野地区・京津畑地区・産直ふるさと大東 他) 京津畑交流館「山がっこ」 東山町地域(産直センター季節館・猯鼻溪 他)
アドバイザー		一般社団法人信州いいやま観光局 事務局次長兼飯山駅観光交流センター所長 木村宏氏
参加者		12 名
スケジュール・方法		<p>【1 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「山がっこ」よりサイクリングコース候補ルート視察 (B) ・信越トレイルクラブの取組について ・サイクリングコース視察を踏まえたアドバイス <p>【2 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・京津畑地区内 トレイル候補コース視察 ・トレイルを中心にアドバイス ・今後の方針について話し合い

(4) アドバイスの内容

1) 講義 信越トレイルの取組について

信越トレイルに至る前段の様々な活動の紹介や信越トレイルの立ち上げ・整備・維持についての具体的な体制・ノウハウなど

2) 視察を踏まえたアドバイス

①サイクリングに関して

サイクリングの実施は課題が多い。今回視察したコースは起伏が大きく初心者には危険。ブレーキコントロールに慣れた中級者以上で比較的若い世代向け。自転車もしっかりとしたブレーキを装備した車種の必要がある。

トラブル時に対応できるサポート拠点が必要だが、現状、自転車店など候補となる施設が無い、または少ない。

休憩ポイントももっとこまめに必要、自転車を止める設備もいる。

道案内標識も整備する必要がある。

道路では自動車の追突事故の危険がある。自転車レーンの整備が望ましい。

室根山から海が見えるのは素晴らしい、長野では望めない点。

猯鼻溪の岩壁は圧巻。舟下りでくるより徒歩ルートの方が見た感じ迫力がある。

②トレイル(ウォーキング)に関して

京津畑地域内は赤松または杉の林が多いので、景観としては魅力に欠ける。

一方で地区内の家屋は大きく立派なものが多いので、興味をひかれる。家ごとのサクセスストーリーみたいなものがあれば魅力となるのではないか。

地域内の神社など、話を聞けば興味の湧くポイントはある。

③今後の取組へのアドバイス

まず地域の人が積極的であることが不可欠、地域で必要性を感じていない取組はする意味がない。

仮にトレイル整備で考えるなら、関係する行政との協議、地域での説明会などによる賛同を得てから、そこに外部のボランティアなどが加わっていく流れが必要。

山がっこの宿泊者が、1泊の人が2泊してみたいと思うような取組を目指すべき。地域集落内の「見所」を調査してマップをつくり、集落歩きをメニューに。

一歩踏み込んだメニューとして集落周辺の山道を整備して散策路があるとなお良い。

マップ作りや山道の整備はすでに関わりのある大学生や、やまあい工房などの顧客にまず呼びかけ、ボランティアの形でそれ自体を楽しんでもらいながら進めるとよい。

一関全体としては、京津畑をモデルとして各地に集落内を歩いて楽しめる整備を進め、「集落歩きができる町一関」といった売り出し方ができたらよい。

その先の取組として集落の間を人が移動する手段としてサイクリングという案もありなのではないか。

(5) アドバイザー派遣の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

①エコツーリズム、又は、地域資源について理解が得られた

初心者者のサイクリングには向かない、杉が多い山で歩く魅力に欠ける、集落内には民家や神社など外部の人が興味を持つ資源が点在している

②今まで課題としていたことがより明確になった

サイクリングはサポート体制の整備が不可欠

③今までの課題に対して取組方が分かった

まず取り組むべきはウォーキングに関するメニュー

④今までとは別の課題が明らかになった

地域内の山は針葉樹が多く、散策の魅力に欠ける面がある

⑤その他

山よりもより足元の里からの取組の実現性が高い、フィールド整備そのものが体験メニューとなり集客する要素となる

2) 今後期待される効果

これまでは宿泊・食事の提供にとどまっていた取組が、集落を楽しんでもらうという新たな要素を加えた展開につながる。

3) 今後の取組

以前から地域の調査に来ている大学生などの協力も得ながらさらに資源の調査とそれに基づいた集落内のマップ作りを検討する。

集落を囲む里山にある山道を調査し、来訪者が気軽に散策できる道の整備を目指す。

(6) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

1) 参考となった事項

信越トレイルクラブの活動に接し、参考とさせていただくことが出来ました。

2) その他感想

アドバイザー派遣により各項目でも記載したとおり、多くの点を学ぶことが出来ました。

収益性の確保についてはアドバイザーから、ボランティアを巻き込んだ活動や各種助成金などの情報収集の重要性など多角的な視点をいただき、また意見交換の中で地元参加者からはすでに地域に調査に来ている大学生の協力など仕組み作りについて新たな課題と可能性も掘り起こすことが出来ました。今後の課題として検討して行く土台作りが出来たと思います。

【記録写真】



写真 1：室根山頂、視察



写真 2：大東町内 視察



写真 3：^{げいびけい} 狢鼻溪 視察



写真 4：「山がっこ」講演・意見交換

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

一般社団法人信州いいやま観光局

事務局次長兼飯山駅観光交流センター所長 木村 宏 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

いちのせきニューツーリズム協議会は、教育旅行の受入を農家と協力し、民泊スタイルで受け入れる仕組み作りや、営業活動を通じ地域経済の活性化や、地域資源活用した観光地づくりを進める、昨年度以降その実績を上げている。教育旅行の受入実績を踏まえ、新たなスタイルの観光客の受入を模索するなか、平成 23 年に廃校を整備した京津畑地区の GT 推進拠点「山がっこ」を活用として、新しいコンセプト、健康趣向でエコツーリズムを意識した仕組みを模索するに至った。

②課題

本事業の拠点として検討することとなった「山がっこ」は、加工所を併設しており、地域の女性を中心に加工品の製造販売拠点として、また都市農村交流の拠点として宿泊室もあり、一般客の他に大学のゼミなどの受け入れもしている。村内の高齢化も進むなか、新たな活動拠点になり得るのか、地域住民の理解、賛同が得られるのが課題だ。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

一関市の最北部に位置する京津畑地区は、山間にぽっかりと佇む風情の集落で、現在は約 50 戸が暮らす。かつては金山や鉾山で生業を立てた人や、薪炭材の出荷も盛んだったそうだ。集落はほとんど杉林に囲まれ、最北部には赤松の森も若干あるが、ほぼ植樹の森でかつての森林活用の様子がうかがえる。

いくつかの小さな村落が峠からの道沿いに点在し京津畑の村を形成している。集落を歩くこともでき、風光明媚な村の様子が美しい。

また、「山がっこ」に併設された加工施設「(京津畑郷土食研究会) やまあい工房」では、京津畑に伝わる伝統食、郷土食の加工販売がおこなわれるなど、郷土の食文化を熱心に伝え、守る方々がいらっしゃることは、大きな財産である。毎年秋には「食の文化祭」という行事がおこなわれ、郷土食の伝承や地域住民や来訪者との交流の場にもなっている。

②上記地域資源に魅力を感じた理由

地域資源の魅力の演出には廃校を活用した「山がっこ」の存在は大きい。住民のよりどころに来訪者を受け入れるイメージがぴったりで、村の方々や加工所の女性の集いやイベントに外来者が参加し、同じ屋根の下で暮らしているような雰囲気させてくれる。迎える側に構えるところがなく違和感なく施設に入っていけ

ることは、地域資源を守り活用することを目的とする施設としては大事なおもてなしではないかと感じた。

3) アドバイス（講義等）の概要

今回の構想は、GT 推進の拠点施設「山がっこ」を活用した、新しいエコツーリズムの提案として、サイクリングの拠点としてサイクルツーリズム、トレッキングの拠点としてトレッキングルートの整備と活用があげられており、サイクリングを核とした各地の取組を事例として紹介。

- ・今治市観光協会：<http://www.go-shimanami.jp/cycling/>
- ・瀬戸内しまなみ海道振興協議会：http://www.oideya.gr.jp/shimanami_cycling/
- ・大山王国：<http://web.sanin.jp/p/daisenking/1/24/15/>
- ・コグステーション：<http://daisenwonder.com/cogstation/>
- ・自転車によるまちづくり事例（国土交通省）：
<http://www.mlit.go.jp/road/road/bicycle/introduce/city.html>

また、トレッキングルートづくりや活用方法などは、NPO 法人信越トレイルクラブの活動の経過などを紹介し、メンテナンスの大事さや地域住民の理解と協力、ボランティアの協力体制などについての事例を紹介しながら話をした。

- ・信越トレイルクラブ：<http://www.s-trail.net/>

アドバイスとしては、まずサイクリング構想についてであるが、構想は室根町の駅を起点に室根山への山岳路をはじめ、いくつかの峠を越え「山がっこ」につくルートがひとつと一関市を代表する景勝地のひとつ「猯鼻溪」の川沿いの村落を走るルートのふたつ。ルートはどちらも交通量の少ない舗装道路を利用し、周辺の景色も変化に富んでいる。室根山からは気仙沼湾や太平洋が一望でき感動のシーンでもある。更に旧大東町内の広大な草地も美しい。山間を縫って峠を越える度美しい集落の姿が現れる。また猯鼻溪の川に沿ったルートでは野菜の直売所や飲食店も点在し、休憩の場所としてもふさわしい。猯鼻溪も自転車を降り少し寄り道感覚で溪谷における遊歩道を利用して見学できるコースもあり、意外性もある。

しかし、両コースともアップダウンが多く、高低差も 500 メートル超、一般のサイクリスト、ましてや初心者には不向きなコースであった。アップダウンに耐えうる自転車も必要である。自転車は「エコ」という観点では観光地も積極的に取り入れても良いものではあるが、そのメンテナンス体制や案内、道路インフラの整備、自治体や地域の協力は不可欠でこのあたりの体制づくりが必要不可欠。その覚悟や「山がっこ」で受入体制が構築できるかが課題だ。

一方、ウォーキング（トレッキング）の構想については前述のとおり、村内の集落や林道、登山道といった先人から受け継がれた道が多数のこり、村の長老もかつて登った天狗岩山などの村落の登山道についての認識もしっかりある。これらの道

の刈り払いや普請も場所によってはおこなわれており、この道の観光利用については可能性がある。信越トレイルのボランティアが整備する山道の様子や、地域住民や観光関係者がともに道づくりや整備にあたっている事例をお話し、「山がっこ」の考え方によっては京津畑地区全体でトレッキングルートを整備し、新たな客層の取り込みにつながるのではないかという話をした。

地区内の山林はほとんどが植林の森であり、その歴史は歩く人にとっては話題性は感じられるが、広葉樹が少なく変化に富んだ森と呼ぶにはやや無理がある。ルート整備が進むようであれば新たな樹種の植林も、未来に続く夢となるのではないかと感じた。

「山がっこ」の有効利用策のひとつとして検討してみてもどうか、地区の皆さんの奮起を期待したい。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

いちのせきニューツーリズム推進協議会としては、全体構想の理解も深く、現在おこなっている事業に加え、新たな活動地域を模索し、住民への啓発活動を実施しながら、エコツーリズム推進の意欲がある。しかし、過疎高齢化が進む山村部での事業展開は住民の意識喚起に要する時間や工夫が必要である。今回拠点と定めた京津畑地区は、食文化の継承と紹介という事業を展開しており、エコツーリズムの導入により相乗効果が期待できる。ある程度下地を作り全体構想への取組となって来るであろう。

②全体構想への意向について

意向はニューツーリズム協議会が持っており、地域の住民との合意形成が課題であろう。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

やはり実践地域における、住民との意思の疎通や相互理解であろう。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

今回訪れた京津畑地区は、一関でも際奥の小さな集落で、隠れ里の風情を感じさせるところであった。歴史や伝統を守る人々も多く、住民のそういった意識も高いところであろう。廃校になった学校を中心としたコミュニティーは強固なものがあり、様々な活動の拠点でもある。是非、この拠点を大事に、また上手に活用して新たな活性化策を模索していただきたい。高齢化や人口減少は否めないが、多くの応援団を獲得することでこのコミュニティーが継続できることを望みます。ニューツーリズム協議会の皆さんも側面から応援し、新たな活力が生まれてくることを期待しております。

3-3. 新潟県妙高市（新潟県妙高市）

(1) 地域の概要

1) 妙高市の概要

【人口】

34,629人(男 16,874人 女 17,782人 H26年10月31日現在)

【地勢】

妙高市は、新潟県の南西部に位置し、新潟県上越市、糸魚川市、長野県飯山市、長野市、北安曇郡小谷村、上水内郡信濃町に接している。市内の西部には百名山の秀峰妙高山に代表される標高2,000～2,500mの山岳が峰を連ね、裾野には広大な妙高山麓の高原丘陵地帯を形成し、北東部には高田平野が広がり日本海へと続いている。また、妙高連峰に源を発し、中央部を貫流し日本海に流下する関川をはじめ、渋江川、矢代川など大小の河川は肥沃な扇状地を形成し、北部には優良農地が広がっている。妙高山麓一帯は上信越高原国立公園に属し、雄大な自然景観と四季折々の変化に富み、湧出量の豊富な温泉や多くのスキー場を有する観光地となっている。

【面積】

445.52㎡（東西に33.7km、南北に30.1km） 新潟県土の約3.5%

【気候、自然】

気候は、日本海側特有の気候で、夏季は高温多湿、冬季は大陸からの季節風により、たいへん雪の多い地域ですが、降雪による豊かな水資源と緑豊かな自然環境に恵まれた、色鮮やかな四季の変化に富んだ美しい地域である。

【歴史】

2005年（平成17年）4月1日新井市に中頸城郡妙高高原町ならびに妙高村が編入合併し「妙高市」へと改称した。

【観光】

妙高市は、妙高山麓の大自然に抱かれた国立公園妙高と広大なスキー場が広がり、そこから湧き出る5つの源泉が7つの温泉郷をつくりあげ、さらに、ここで生まれ引き継がれてきた風土や風光明媚な景観などの豊かな観光資源を有している。グリーンシーズンには日本百名山の妙高山や火打山への登山や森林セラピーロードを活用したトレッキング、また、主要観光産業であるスキー観光では入込客数が減少傾向にあるものの、近年、海外からのインバウンド旅行者が増加傾向にある。なお、1月20日に開かれた中央環境審議会において上信越高原国立公園から当市域が属する妙高・戸隠地域が分離独立し新たに「妙高戸隠連山国立公園」の誕生が決定し、また、3月14日に迫った北陸新幹線上越妙高駅の開業を更なる契機とした観光振興策が必要となっている。

2) 地域資源の概要

①観光資源

- ・日本百名山：「妙高山」「火打山」「高妻山」
- ・日本の滝百選：「苗名滝」^{なえなたき}「惣滝」^{そうたき}
- ・平成の名水百選：「宇棚の清水」
- ・森林セラピー基地認定（H20. 4月）：森林セラピーロード6カ所
- ・妙高高原温泉郷（7・5・3の温泉）：
 - 7つの温泉地（赤倉・新赤倉・池の平・妙高・杉野沢・関・燕）
 - 5つの源泉
 - 3つの湯色（乳白色・茶褐色・透明）
- ・8つのスキー場：赤倉、池の平、妙高杉ノ原、関、斑尾高原など

②文化・歴史

- ・斐太遺跡群（S52 国指定）^{ひだ}
- ・観音平・天神堂古墳群（S53 国指定）
- ・鮫ヶ尾城跡（H20 国指定）
- ・旧関山宝蔵院庭園（H25 国指定）
- ・関山神社 仮山伏の棒使いと柱松行事（H25 県指定）

③安全・安心な食

- ・笹ずし・笹箕ずし
- ・加工食品（「かんずり」など）
- ・日本酒（3つの酒蔵）
- ・大葉の無農薬ミスト栽培
- ・妙高ゆきエビ（淡水養殖）
- ・妙高雪国どじょう（棚田での養殖）
- ・クラインガルテン妙高（滞在型市民農園）
- ・道の駅あらい（新井ハイウェイオアシス）
- ・妙高山麓直売センター
- ・旬の山菜やとまとをはじめとした高原野菜

(2) アドバイザー派遣申請の背景

1) アドバイザー派遣申請の背景

妙高市は平成 17 年度に旧新井市、旧妙高高原町、旧妙高村が合併し誕生いたしました。合併に際し何よりも大切にしたのは地域の人々に親しまれ観光地としての名の通った「妙高」という名称でした。以来、人と自然が共生しすべての生命を安心して育むことができる「生命地域の創造」をまちづくりの基本理念に掲げるとともに、上信越高原国立公園内の「国立公園 妙高」を旗頭に環境の保全との賢明な利用の中での地域振興に向けて、市民が力を合わせまちづくりを行ってきました。

また、上信越高原国立公園からの分離独立が決定し新たに誕生する「妙高戸隠連山国立公園」のほか平成 27 年 3 月 14 日には北陸新幹線が開業することから、さらなるエコツアー活動の充実を図ることが、地域の活性化と交流人口の拡大につながっていくものと考えている。

2) これまでの取組

これまで豊かな自然環境を守り継承していくことや、地域資源を活用した観光地としてのイメージ向上を目的として、自然環境の保護・保全活動や健康をテーマとした市民参加型イベント「エコ・トレッキング」を開催してきました。ここまで当地域のすぐれた自然環境を伝える中で、市民の自然に対する保全意識の高揚につながり一定の成果が出ていると考えておりますが、宿泊や連泊などに結びつかない等、観光関連事業者や農家など多方面に経済的な波及がおよばず、提供するエコツアーの商品化等が課題となっている。

3) 今後の課題

- ・新国立公園を中心とした観光・自然資源の磨き上げと再評価
- ・自然歩道や登山道の整備と多様な活用
- ・高山植物の保護や特定外来生物の駆除など自然環境の保全
- ・妙高特有の魅力ある自然景観の保全と形成
- ・インストラクターやガイドの育成
- ・エコツーリズムに関連する若者の雇用の創出
- ・関係機関や関係団体による保護・活用に関する横断的な組織の設置など

(3) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 27 年 1 月 10 日 (土) ～11 日 (日)
場 所	新潟県妙高市
アドバイザー	東京大学大学院 下村 彰男 氏
参加者	妙高市役所職員他 合計 9 名
スケジュール・方法	<p>【1 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・観光資源について説明 ・視察：道の駅あらい、関山神社、妙高山麓直売センターとまと、北国街道（新井宿～小出雲～二本木～関山宿～田切～関川宿） <p>【2 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視察：赤倉温泉スキー場、赤倉観光リゾートスキー場、赤倉観光ホテル

(4) アドバイスの内容

1) 妙高市の取組内容の説明

DVDによる観光資源説明／妙高市観光PR用DVDによる説明



妙高市観光PR用DVDによる
観光資源説明



妙高市の取組み説明

2) 現地視察①



上越妙高駅 東口エントランス
「もてなしドーム」



上越妙高駅「光のテラス」から妙高山を望む



道の駅あらい 農産物直売所



北国街道 関山神社境内

3) 現地視察②



赤倉観光リゾートスキー場



赤倉観光ホテル
ホテルの歴史について支配人より説明

4) 斑尾高原観光協会の取組内容の聞き取り

会場／斑尾高原観光協会 山の家

観光協会などで実施しているアクティビティについての説明。

下村：森林セラピーなどのトレッキングガイドはどうなっている。

地域：ペンションのオーナー約30人によるトレッキング委員会が対応している。

下村：様々なアクティビティを実施しているが、人気があるのは何か。

地域：グリーンシーズンはトレッキングよりもラフティング、ジップライン、ツリーイングが人気である。これからは雨天時や子どもたちに対応した事業を増やしたいと考えている。

下村：最近では観光が変わってきている。リアルタイムの情報提供が必要。別府ではPRのためのNPO法人がある。ここではいかがか？また、新たな取組はないか。

地域：PRはパンフレットや観光協会HPで行っている。新たな取組としては「斑尾パスポート」を購入すると26種類のアクティビティの中から好きな組み合わせ

で1日楽しんでいただけるようになっている。

オーナーの皆さんは、ほとんどが都会から来られた方なので様々な情報や知識を持った方がおおい。いろいろな発想が生まれてくる。

下村：地域の課題は？

地域：ペンションオーナーの世代交代や廃屋が問題となっている。

オーナーは2代目が継ぐというより、別の方が新たなオーナーになるパターンが多い。

下村：廃屋は処分できないのか。

地域：持ち主が処分することになっており手が出せないのが現状。



斑尾高原観光協会での聞き取り



山の家 2階から飯山市を望む

5) 妙高高原ビジターセンターの取組内容の聞き取り

会場／妙高高原ビジターセンター

主に妙高高原ビジターセンターが主催しているイベント内容についての説明

地域：施設は建設から31年経過している。建物が狭いため各種イベントは20人を限度として行っている。周辺には100種類の野鳥がいるためバードウォッチングを実施している。高齢者のリピーターが多い事業である。また、子たちを対象としたキッズ探検隊のようなものを実施したいと考えている。館長となって間もないが、VC自体の市民に対する知名度が低いような気がする。市内小学生が総合学習で使用されているが、地域全体で盛り上げていかなければと考えている。友の会のようなものを組織し楽しみながら盛り上げていきたい。

下村：冬のイベントでスノーシューはどこで、どのような内容で実施しているか。

地域：主にアニマルトラッキングで動物の足跡をたどっている。会場はいもり周辺で実施している。

下村：大毛無などでやる場合は内容が変わるか。

地域：基本的には変わらないが、スタッフの人員に限りがあるため、池の平周辺でのイベント実施となってしまう。看護大は大毛無でセラピー効果の学科で使用している。

6) 講評検討会

会場／妙高高原メッセ

下村アドバイザーより近年のエコツーリズムについて説明

①「交流自立型まちづくり」の方向性

ア. 地域資源を活かすための発見が必要。

- ・ **自律（自立）型**…地域コミュニティの再生・自立、住民主体のまちづくりの推進。

地域（生活様式・風景等）が均質化傾向にある → 主な要因としては「ひと・もの・かね・情報」の流動の広範化及びスピード化。

それによりアイデンティティ、地域コミュニティの拠り所の喪失、コミュニティ意識の希薄化という結果になっている。それを回復させることが地域コミュニティの再生・自立につながる。

- ・ **交流型**…交流促進（観光振興）来訪者（地域外者）との協働

観光客の楽しみ方（観光志向）の変化が見られる → 要因としては観光の「形態」「資源」の変化によるもの

これまでの観光形態は主に「周遊型」であった。移動しながら優れた資源（景観等）そのものの非日常性を受動的に楽しむことが主流であった。しかし近年は一箇所に長期滞在し、景観と地域の自然や歴史・文化との関係を能動的に楽しむ「滞在・滞留型」へと変化してきている。

②行政の関連動向

2004年に「景観法」が、2008年には「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」（歴史まちづくり法）が公布、2004年には文化財保護法が改正され、文化財をより広く総合的にとらえ、かけがえのない文化遺産として地域社会の発展や観光振興に積極的に活用しようとする動きに変わってきている。

- ・ 美しい国づくり政策大綱（2003年）
- ・ 景観法（2004年）
- ・ 歴史まちづくり法（2008年）
- ・ 文化財保護法の改正（2004年）
- ・ エコツーリズム推進法（2007年）

③新たな観光志向が求められる「資源」

- ・ 観光資源とは以下の両者が一体化したものである。

「記号」・・・各地域の個性的な風景、料理、祭り等

「意味」・・・個性を形成し支える独自の生活様式（文化的アイデンティティ）

日本の各地には多様な風景・景観や料理等があり、資源性に富んでいる。それら「記号」を通して、それを支える生活様式「意味」が求められている。

④地域の個性について（風景・景観を例に）

- ・ 文化的景観への関心は世界的。ヨセミテ州立公園やイエローストーン国立公園のような自然的景観の保護を目的に1972年にユネスコにて世界遺産条約が採択された。また、1992年から文化的景観ジャンルが設けられた。（アジアの棚田、欧州のブドウ畑 等）

⑤エコツーリズムの目的（目指すもの）

- ・ 「地域（自然）環境」への負荷が小さく、持続的な保全管理に貢献する
- ・ 「来訪者」に豊かな観光体験と、自然・地域に対する認識・理解を提供する。
- ・ 「地域住民」の地域への帰属意識を高め、経済面での支援を行う

⑥新しい「たび」の形

- ・ 周遊型の旅行 ⇒ 滞在・滞留型へ
- ・ 「たび」とは、他日（非日常）、他火（食事の違い）を楽しむことができるものである。
- ・ 情報社会の「たび」
- ・ 地域を知ることの楽しさを伝える仕組み
- ・ ガイドによる情報伝達をはじめとするガイドランスの工夫が必要となる。

⑦新しい「自然保護」の形

- ・ 人為の排除による静的な自然保護
- ・ 適正な利用を前提とし、モニタリングを組み込んだ、動的、順応的な環境管理による自然保護
- ・ 自然保護には2とおりの考え方がある。

⑧新しい「地域運営」の形

- ・ たびびと（域外からの来訪者）との協働による地域づくり（地域運営）へ
- ・ {地域（自然）環境 ⇔ 地域住民}

↓

{地域（自然）環境 ⇔ 地域住民 ⇔ 来訪者 ⇔ 地域（自然）環境}の新しい「地域運営」の形へ。

- ・ 来訪者からは精神的支援、労働支援、経済的支援などが期待できる。

⑨エコツーリズム推進の課題

- ・ インタープリテーション技術の向上とプログラムの開発
- ・ 環境負荷に対する知見と対応策の検討
- ・ 地域の運営・管理費用に対する受益者負担の仕組みの開発
- ・ 来訪者を受け入れる体制の核づくり
- ・ 様々な地域情報の収集と発信の検討
- ・ 地域個性の明確化（資源化）

⑩新たな「観光」の形成（目標）

新たな観光の計画論〔魅力づけ（文化アイデンティティ）、中核組織（担い手、財源の確保等）〕

- ・周遊観光（移動・立寄り） → 滞在型観光（滞在・滞留）
- ・非日常型資源（優れた資源） → 非日常型資源（生活様式）
- ・立寄り客（賑わい） → 準（第二）住民



講評検討会の様子



講評検討会の様子

(5) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

①エコツーリズム、又は、地域資源について理解が得られた

- ・妙高市における観光資源及び環境資源の再確認
- ・環境、観光部門及び農林部門のなど市役所内での連携の必要性

②今まで課題としていたことがより明確になった

- ・妙高市の全体としてのエコツーリズムに係る計画をはっきりさせること
- ・計画についてはコンサルタントなどを活用し様々な知見からまとめることの必要性

③今までの課題に対して取組方が分かった

- ・妙高市のシンボルである妙高山とそこに住む人たちとののかかわり、北国街道や修験の山としてのプログラムづくり
- ・妙高山（景観）→ストーリー付け（個性・味覚） →地域で共有

④今までとは別の課題が明らかになった

- ・上越妙高駅での情報発信
- ・上杉や鮫ヶ尾城など歴史をキーワードとした上越と絡ませた取組
- ・目的にあった妙高市らしさが伝わるプログラムのコーディネート

⑤その他

- ・妙高市における雪との付き合い方
- ・雪の使い方（それ自体が生活文化）

2) 今後期待される効果

- ・新国立公園の誕生決定により、妙高山をはじめとした新たな活用面でのきっかけづくりとなった。
- ・観光振興における妙高山や火打山、雪などさらなる観光資源の活用
- ・自然環境を地域で守ることの意識の醸成

3) 今後の取組

- ・新国立公園の誕生を冠とした記念イベントの実施
- ・新国立公園の自然環境の保護と活用を推進する運営組織の立ち上げ
- ・自然環境の保全を目的とした、市民参加による希少動植物の保護、外来生物の駆除に関する活動の実施

(6) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

1) 参考となった事項

- ・妙高市に存在する多様な観光資源、自然資源の再確認
- ・妙高山と地域住民との生活のかかわりを外部へ伝えることの必要性
- ・エコツーリズムと妙高市の基本理念である「生命地域の創造」とのつながり

2) その他感想

- ・普段あたりまえのように目にしている妙高山や妙高の自然・景観であるが、訪れる方にとっては、それを見ることや、そこに根付いた生活習慣、郷土料理などに触れることを目的に訪れることが多い。そのため再度、妙高市にある地域の個性を収集し明確にしておく必要があるのではないかと感じた。また、その後の情報を的確に発信する仕組みについても、見直しが必要だと感じた。
- ・エコツーリズムが自然観光資源に触れ、自然の成り立ちなどの知識や理解を深める活動というイメージが強かったが、その地域の人々の暮らしや歴史文化も絡めていく必要があるということを教えていただいた。
- ・非日常を求めて来られる旅行者に対し、受入れる側が地域の特性や個性を解説し、感動を覚えてもらうことで、経済行為として成り立っていく。そのために、地域の人々が自然環境の保全や昔ながらの生活習慣、歴史文化を尊重し守っていく活動に繋がれば好循環のサイクルとなることも理解できた。
- ・新国立公園の誕生が決定し、今後エコツーリズムの充実を図っていくうえで今回のアドバイザー派遣事業は有意義であったと考える。エコツーリズムの実践が「環境保全」「観光振興」「地域振興」「歴史文化の保護」につながることを意識し、市内関係者や近隣市町村とも情報交流などの連携を図りながら「妙高戸隠連山国立公園」を中心としたエリアを盛り上げるための取組を進めていきたい。

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

東京大学大学院 下村 彰男 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

エコツーリズムを市政の柱の一つとして設定しようとしており、具体的な動きとしても、後述するように「エコツーリズム推進基本計画」「妙高ビジョン」「第二次妙高市総合計画」等を検討中である。

②課題

検討を役所の内部で進めており、地域の関係者を巻き込んで検討を進めることが重要である。協議会の設置はもちろんのこと、全体構想の具体的な策定作業においても、地域の関係者の適切な参加を検討する必要がある。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

- ・妙高山
- ・産物をはじめ、地域資源の多様性

②上記地域資源に魅力を感じた理由を書いてください

- ・妙高山は、越後富士と呼ばれるように、その形状は秀麗で、妙高市はもちろんのこと周辺地域からも広く目にするのできる地域のシンボルである。
- ・また、地域の農産物生産を支えている水の多くは妙高山を源流としており、関川や矢代川などを通して供給されている。
- ・米を中心に農産物に恵まれているだけでなく、海にも近いことから海産物もあり、温泉も豊富である。そして、歴史・文化の側面でも北国街道、修験、近代スポーツ、芸術関係と、妙高市を語る資源が非常に多様であり、これらも多くは妙高山に結びつけることができる。

3) アドバイス（講義等）の概要

- ・観光をまちづくりに活用することの意義について
- ・地域の資源、地域の個性について
- ・エコツーリズムの考え方や概念について
- ・エコツーリズムを進めるうえでの課題について
- ・特に、担い手や財源の問題について

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

- ・現在、妙高市役所内に関連部署からの代表を委員とする「エコツーリズム推進本部」を設置しており、「エコツーリズム推進基本計画」を検討している。
- ・また妙高戸隠連山国立公園の分離独立を契機に振興を図るための「妙高ビジョン」についても検討を進めている。
- ・その他、2015年度からの「第二次妙高市総合計画」においてもエコツーリズムを重要な柱の一つと位置づけており、これも年度内策定に向けて検討中である。

②全体構想への意向について

- ・上記の諸計画をもとに、全体構想を検討・立案する意向がある（と判断した）

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

- ・エコツーリズム推進協議会の設置
- ・地域で共有する、目標像・コンセプトの再検討

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

- ・エコツーリズムを組み立てていくうえでの地域資源は非常に豊富であると考えられる。
- ・妙高山は姿も認識し易く、実際、市内はもちろんのこと周辺地域からも、よく見ることができ、地域のシンボルとなっている。そして、新井からは「はね馬」と呼ばれる雪形が見え、春を象徴する風物詩になっているなど、人々の暮らしとも結びつきが深い。
- ・また、関山神社、宝蔵院に代表される、妙高山に関わる信仰や修験の歴史・文化も、地域には蓄積されている。
- ・妙高山を源流とする河川や流れは、関川や矢代川へと流れ込み高田平野を潤し、古くから穀倉地帯を支えてきた。「いもり池」がそうであったように、農業用水に関わる権利や管理の歴史についても、妙高山と麓の農業地帯とを結につける資源になるのではないか。
- ・妙高山は、もっぱら「見られる対象」として捉えられているが、赤倉を終焉の地とした岡倉天心は「東洋のバルビゾンに」という構想を持っていたわけで、中腹から眺める農地・農村の風景も美しかったと想定される。現在の観光写真でも「農地と妙高山」を写したものが少なからずあり、妙高山を単体として資源とするのではなく、裾野における人々の暮らしや営みと一体化した「姿」を地域資源とすることを検討した方がよいと考えられる。
- ・上記を考えると、農地と妙高山（森林等）の間の集落部の景観・風景を整えていく必要がある。地域における建物の形態や様式、集落形態、そしてそれらに関わる生活様式（雪との関わりを含）に関する知見をもとに、建物や集落の風

景・景観について再検討する必要があると考えられる。

- また、近代スポーツとしてのスキー（リゾート）の歴史についても、赤倉温泉スキー場、赤倉観光ホテルなどを通して地域にストックされており、こうしたスキー場等も妙高山と地域の暮らしとの関係史の一環として扱える可能性がある。
- この他にも、温泉、北国街道、上杉氏等々、地域資源の素材は豊富である。これらは現時点では断片的に提示されるに止まっており、これらを相互に結びつけ、「妙高（市）」を特徴づけたり、地域の物語として伝えるような「地域資源」にまで昇華されているとは言い難い。
- エコツーリズムを展開し、核としての数々のエコツアーを設定していくためには、明確な地域像としての目標を検討し、地域で共有する作業が必要であると考えられる。
- また現在のところ、諸計画の立案について役所を中心に検討を進めているが、計画系のコンサルタントに依頼したり、アドバイスを受けたりした方が良いと考えられる。そして、可能であれば、地域（新潟県等）に対する造詣の深い計画系の専門家に、頻度高く（折にふれて）相談できるように、「アドバイザー」といった存在の設定についても検討した方がよいと考えられる。

3-4. 特定非営利活動法人 いろは企画（栃木県真岡市）

(1) 地域の概要

【人口】

80,782人

【地勢】

栃木県南東部に位置し茨城県と隣接する内陸地

【面積】

167.21 平方キロメートル

【気候、自然】

内陸型気候に近い湿潤温帯気候の太平洋側気候区 寒暖の差が大きい

【歴史】

旧石器時代より人が住み、芳賀地域の中心として栄え江戸時代には木綿産業が発達した。現在は大規模な工業団地を有する。

【観光】

井頭公園、真岡鐵道、大前神社、いちご

【地域資源の概要】

いちごの生産量日本一、真岡鐵道 SL 運行、日本一えびす様

(2) アドバイザー派遣申請の背景

1) アドバイザー派遣申請の背景

真岡市は今までに農業と商業が盛んな為、観光に力を入れてこなかった。観光に注目し活動を始めたのは4年前からである。当該地域では今までにエコツーリズムに関する取組は全くされていない事と、基本的なエコツーリズムの認識が不足している為、アドバイザー派遣事業を行った。

2) これまでの取組

地域環境の保全に対する活動として、竹林の整備・鮭の稚魚の放流などは行ってきたが、いかに人に周知させるのが課題。

(3) アドバイザー派遣の概要

日	時	平成 26 年 12 月 4 日 (木) ~ 5 日 (金)	
場	所	栃木県真岡市 根本山、青谷地区、(株)トヨタ、五行川鮭の孵化場、益子焼つかもと、イチゴ団地	
ア	ド	株式会社 オズ 代表取締役 江崎 貴久 氏	
参	加	者	合計 15 名
スケジュール・方法			【1日目】 ・開校式 ・視察：根本山自然観察センター、青谷地区、(株)トヨタ ・意見交換会 【2日目】 ・視察：鮭の孵化場、益子焼つかもと、イチゴ団地 ・講義

(4) アドバイスの内容

1) 講義

プログラム名 『幸せになれる地域づくり』

現場からの意見

ガイドは基本的な技術は必要だが必ずしもしゃべる必要はない。

プログラム作りはイメージが重要。

個性・創造性を前面に押し出す。

毎日継続出来る事が重要。

マイナスの分野を作らない。

2) 視察

①根本山自然観察センター

何気ない風景も他にとっては価値になり得る。空が広い・山に入る事が出来る。

②いちご団地

日本一のいちごで三流の食べ方をさせている。食べ方も一流に！高品質化を目指す。

3) 意見交換会

真岡の根っこは何か？

真岡の魅力とは？モノではないもの。

真岡市の取組はどこを目指すのか？

今までの取組を整理する時期にかかっている。



根本山自然観察センター、自然観察指導員の案内で森の中を散策



(株) トヨタで企業紹介と工場見学



益子焼 つかもと施設内見学



講義

(5) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

①エコツーリズム、又は、地域資源について理解が得られた

・エコツーリズムに対する基本的な知識が得られた事や、真岡にはいくつも観光地があるが、連携しておらず一つ一つがばらばらだと気付かされた。

②今まで課題としていたことがより明確になった

・エコツーリズムの実践法やどのようにプログラムを作るか。

③今までの課題に対して取組方が分かった

・実際のプログラム作成の考え方。ばらばらになっている観光地を組み合わせ一つのものにする、又、取りまとめるガイドがないのでガイドの育成

④今までとは別の課題が明らかになった

・いかに地域の個性や創造性を出せるか。都心からのアクセスが良くなった事や、日帰りができる気軽さを活かし、受け入れる母体ができたら、いかに周知させていくかが課題である。

⑤その他

- ・行政と民間でより具体的な話し合いができた。

2) 今後期待される効果

今までばらばらに活用していた地域資源を組み合わせる事により、地域の魅力を十分に引き出せるようになる為、地域の活性化と環境保全への活動が活発になる。

3) 今後の取組

- ・地域で活動している各団体に声をかけ、地域の資源活用に向けたプラットフォーム作り。
- ・エコツーリズムのプログラム作り。

(6) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

海島遊民くらぶ

2) その他感想

- ・実際に現場で活動している生のアドバイスを聞く事が出来た。
地域資源を個別化せずに連携させ、『地域』という接点で行政と民間のそれぞれの役割を理解し利潤をもたらす。また、その地域資源とは何なのか、真岡の土台となる物を掘り下げて、何を持って成したいのかを考える。という基本的概念を教えて頂きとても参考になりました。
- ・エコツーリズムの取組事例、国策としての方向と地域の向かう所の考え方など、基本的な考え方を共有する事が出来た。

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

株式会社オズ 代表取締役 江崎 貴久 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

これまで、エコツーリズムについての事前知識はほとんどなく、先行してどこかからの推薦やアドバイスがあったわけでもなかった。SNSでエコツーリズムを知り、興味を持ったことからの依頼であった。間接的な情報でも興味を持つことができたことがこの事業に対する国民の評価的な事例であり、エコツーリズムを推進する上でも貴重な事例であると思われる。ただ、エコツーリズムの要素はいたるところに見られるが、その概念がなかったために体系立てられていない状況である。

ア. 真岡市行政

観光産業としてはほとんど存在しておらず、農業や神社が観光要素を取り入れた付随的な観光である。環境保全の取組として、根本山を管理し根本山自然観察センターを設置、直接運営している。ここでは、職員が無料で自然解説や自然体験を実施している。これは、条例により管理運営が定められており、実質的なエコツーリズムの実践場所と言ってよい。

そんな中、宿泊施設の運営や観光拠点整備など、行政が観光に乗り出している理由は、観光産業そのものの発展というより、元から盛んな一次産業や工業をさらに活性化するためには地域と結び付けたり住民と結び付けたりすることの必要性を感じており、その手段として観光という切り口が適切であるとの方針に基づいている。そのため、現在は観光における中長期の計画はない。ただ、観光ネットワーク事業として2013年まで3年間区切りで2回、計6年間の事業を実施してきている。現在は終了し、それをもとに受け入れ態勢準備を行っている。この事業目的は、

- i 観光まちづくりのためのネットワークづくり
- ii 市民参加のための啓発
- iii 事業展開のアイデア出し

であった。それをもとに観光協会を窓口の商品開発がされている。しかし、ツアーメニューについては、現在のところ定番のものではなく、イベント時にのみネットワーク事業で活動を始めた人々がガイドツアーを実施し始めたところである。

イ. 真岡市観光協会

真岡市観光の中心は、「とちおとめ」・「SL」・「真岡木綿」であるが、今後「人」や「歴史・文化」に見られる真岡市の魅力を活用していきたいと望んでいるようである。

その情報発信基地として中心市街地に「久保記念観光文化交流館」が2014年10月23日にオープンした。敷地内には久保貞次郎氏の紹介や貴重な資料の展示や観光案内所・特産品の展示・紹介スペースもある「久保記念館」は昔の日本銀行宇都宮代理店真岡出張所真岡支金庫を移築している。その他、「美術品展示館」や真岡市の特産品や加工品の物販コーナーである「観光物産館」、「まちづくりセンター」やフレンチレストランも併設している。

また、観光協会組織を再構築し、現在は市役所内からこの観光文化交流館へと移転し活動が始まっている。

ウ. NPO法人いろは企画

真岡市観光のアドバイザー的な存在でもある方々が設立・運営している観光まちづくり団体である。理事長である柳田氏は大前神社の神主さんで、地域内で住民が求める活動をこの団体を通して支援している。鮭の孵化場の維持や森林の多面的機能活用の促進、尊徳ファームでの農作物や加工商品開発など多岐にわたった活動を行っている。特に観光集客面では、真岡市民であり隣接町益子町最大の益子焼製作販売会社「つかもと」のゼネラルマネージャーである福島氏が、この団体の理事を務めながら、これまでのノウハウを生かして真岡市の観光を進める上での指南役を果たしている。

②課題

観光への取組が最近行われるようになった市であるため観光地ではなく、受入体制も企画も初期的な段階である。これまでのワーキングではブレインストーミングが実施されてきているが、行政主導でのマーケティングの観点での取りまとめに留まっている。そのため、特産品開発やイベントといった、商品化が可視化しやすいものはマーケティングの道筋に沿って振興されやすいが、地域資源の保護活動そのものが観光資源化されるような持続的な地域活性化に必要な地域資源のマネジメント（資源の保護と活用、地域の課題解決の仕組み）と一体化した新たな商品開発手法には着手されていない現状がある。今後は、持続可能な地域振興における観光戦略と計画を明確にする必要があり、観光協会やその他の民間のアクションの道筋をリードする必要がある。取組の全体像が明らかになれば、各種団体・個人の活動も戦略的となり、地域活動における労力のロスが軽減されると推測される。

特に、いろは企画での数多く取り組まれている資源管理に関する事業は、商品開発の場と資源管理の取組の場がリンクされていないため、本来、地域マネジメントやエコツーリズムの基盤であり、地域内でとても重要であるにもかかわらず補助金が終了するとともに継続が困難な状況に陥ってしまっている現状がある。これは、保護や管理業務で得られる貴重な価値のあるデータや専門性を、収益を生む具体的な企画にアウトプットする仕組みを構築すれば継続できる可能性も高

くなる。こうした基盤的な取組は、特産品の背景にある魅力や現時点でまだ発見していない地域資源の掘り起こしに大きく関わりをもつものである。地域の根幹に関わるこのような民間の保全活動を自立に近づけていくためには、あらゆる地域資源や取組が観光資源となりうるという発想のテクニックを地域に根付かせる必要がある。そして市民活動とも連動できる観光を進めるために、エコツーリズムを理解した上で、地域経営の観点から「資源に責任を持つ観光のあり方」としてのステップに立っていただく必要があると思われた。

③実践する主体

今回の視察アテンドを行ってくれたNPO法人いろは企画は、エコツーリズムの実践可能な団体である。外部要因として、真岡市行政も現在観光に力を入れつつあり観光のマーケティングとマネジメントが計画できれば、協力体制が可能になると思われる。内部要因としては、事業基盤を確立する取組が必要である。拠点・多様な人材・多様な資源はそろっているの、それらを位置づける事業方針や戦略があれば、多様な事業の経験も技術や能力の蓄積となり、団体として持続的な発展が期待できる。それにより、資金調達能力を高め自立も可能である。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

ア. 朝、広大な黒々とした畑から水蒸気が立ち上る様

時期・時間限定で、特別感のあるツアーが可能。大地への感動も大きい。関東平野の違った顔が見える。



イ. 野菜畑と地元野菜を使った普段の食文化

広大な畑では、様々な種類の作物が育てられており、時期的には枯れた作物の畑であったが、そんなものの形がわからない作物さえ、多様性に富んでいた。

歩いて見えた範囲だけでも「この作物はなんでしょう？」とクイズができそうなイメージが湧いた。また、イモフライやビルマ鍋など、野菜をふんだんに使った大人数で楽しめるメニューは実際のプログラムでも活用できる。

ウ. 鮭の孵化場

自然の豊かさの象徴であり、循環と命を感じることができる感動がある。施設は手作り感があり大きなものではないからこそ、地域の愛情と努力に共感できる。設置されているソファやストーブ、管理当番表など、インテリアにコミュニティ感があり、人を招き入れるにも地域の温かみを感じられる雰囲気がある。収益を生まないと今後の存続が懸念される。



鮭の孵化場 孵化する前の卵の様子



施設内の風景

エ. 根本山

落葉樹のなだらかなフィールドで、高齢者にも幼児にも歩きやすい地形で幅広いターゲットに向けたエコツアー展開が可能である。このフィールドを管理している根本山自然観察センターは市の運営で行われており、同センターの職員がイベント行事で様々な体験プログラムを実施している。

前述したように、条例により運営についての規定があり、有料ガイド等の商業的な活動が禁止されているわけではないが、このフィールドを活用して今後エコツーリズムを実践する市民や団体が有料のプログラムやガイドングを行うには、行政内での調整が必要である。しかし、その影響を多面的に考慮した上で広く常時に活用できる場にすることは可能であり、この根本山の活用方法に伴う管理システムを再構築するためにかかるコスト以上に、地域への経済的・文化的・教育的効果を生み出すことができると思われる。



根本山 視察の様子

オ. 歴史・文化と大地の関係

自然史に基づいた歴史・文化は、今回視察していないが、歴史的建造物の資材となっている石材や隣接する益子町の益子焼にも見られるように大地や地質とも密接なかわりがあると思われる。

②上記地域資源に魅力を感じた理由

- ・観光資源化が比較的簡単に可能である。
- ・活用するために、非常な努力や能力を要することではないので、誰にも参加できるから。
- ・広々とした平野と水の豊かさ両方が揃っているからこそ、生み出される魅力と真岡市の住民の人柄で、真岡市だからこそ伝えられるメッセージがそこに現れていると感じたから。
- ・地理・地形から生み出される特有の自然と人柄は、その後の特産品や観光商品のブランディングに広く活用できる。

3) アドバイス（講義等）の概要

ベースは、当社「海島遊民くらぶ」の事例紹介とともに。

- ①観光とは：「観光立国推進基本法」「らしさとならでは」
- ②エコツーリズムとは：「エコツーリズム推進法の概要」
- ③プログラム作りの概要：プログラムの起点、経済効果とルール作り
- ④地域貢献：島っ子ガイド
- ⑤地域の協力体制の必要性：地域のブランディング
- ⑥地域を巻き込む：目的設定、メッセージ、テーマ・コンセプト、ターゲット
- ⑦PR：2010年度信州DCキャンペーンを事例に
- ⑧エコツーリズム推進協議会の事例：鳥羽市エコツーリズム推進協議会
- ⑨全体構想について：国の役割、市町村の役割、メリット
- ⑩真岡市への課題とアドバイス

◆観光のメリット→地域の持続的発展のために◆

- ・地域の魅力を付加価値化し、新たな収入を増やす
- ・地域ブランディングで効果的な特産品の販促
- ・地域に誇りを持つ住民

【全体構想が認定されると可能になること】

- 地域資源の保護**
これまで法的に保護措置が担保されてこなかった自然観光資源についても「特定自然観光資源」に指定することができます。
- 立ち入りの制限**
- 広報**
国が、認定地域の取組みを全国にPRします。
・エコライフフェア、ツーリズム EXPO ジャパン等イベント出展への優先的なご案内
・マスコミ等の問合せや視察依頼に対し、先進地としてご紹介
- 特定事業者によるツアー参加者の認証**
エコツーリズム推進協議会の構成員である特定事業者が、ツアー参加者に自然観光資源についての案内を行う場合
おまけ○中心市街地において、自治体の実施する講習を受講すれば外国人の通訳案内が可能

観光によるデメリット
・資源の乱用
・安心・安全度の低下
・物価の上昇

地域観光における規制
・旅行業
・運送法
・通訳案内士

真岡市の観光の課題

<p>民間事業者・NPO</p> <ul style="list-style-type: none"> ・持続可能性のためのシステム構築が必要 	<p>行政</p> <ul style="list-style-type: none"> ・真岡市で観光に取り組む目的と効果の指標を明確に。
<p>資金を生み出す力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・品質向上と有料化 ・事業の発展・拡大のステップ →安心と意欲が持続する雇用 	<p>観光資源の商品化力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域資源→観光資源の活用ルール ・共有できる目的、組織の役割分担 →効率的な動きと効果的な集客
<p>人材確保・育成</p>	<p>地域資源の保護</p>

地域内のマネジメント機能・観光戦略 どこへ、どのように進むのか？

皆さんは、とても頑張っています。
無いのは、目的地とその道のりが選択できる地図がないだけです。

「どこへ・何のために」＝目的
「何を大切に・どんな道順で」＝戦略
「どんな方法で」＝戦術

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

- ①全体構想への取組状況について
現在は何も行っていない。
- ②全体構想への意向について
今回初めて知っていただいたので、まだ顕在化はしていない。
- ③全体構想認定に向けて、今後必要なこと
まずは、地域資源の観光資源化を通して民間のガイドを育成し、エコツーリズムを誰もが実践できる間口の広いものであることやそれに伴い地域がどのように変化するかを想像できる経験を共有することが必要。実体験に基づかない限り、全体構想は行政だけのものになりかねない。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

ものづくり観光で集客実績を上げている益子町に隣接し、目の前をとおり過ぎる観光客を手探りで誘致している努力は、戦略的である。戦略を構築するには客観性が必要であるが、この外からの視点をもつ「よそ者」にあたる人材がマネジメントとマーケティングの知識を有することが強みになっている。この地域は都心部から比較的近い田舎暮らしが実現できるため、Iターン人材が集めやすいことも、客観的なエコツーリズムや観光地域づくりを進める上で強みとなっていくと思われる。

また、同時に住民は豊かな水資源となだらかな平野によって育まれた気質であり、これこそがこの地域の歴史を作ってきたことが感じられた。外部環境を把握し、新たに挑戦することにはっきりとした根拠がうかがえる点が感性の高い地域であると感じた。

現状の課題として、多くの事が同時進行で進んでおり、地域マネジメントが難しくなっている。現在、世代間や立場の違いで、個々には理にかなった戦略があるにもかかわらず、調整や共有ができていないために、現場で活動する人材が全体像を把握できず相乗効果を阻む原因となっている。これは、全体像を描いていないことに問題があると思われる。まずは、地域内の活動と戦略の整理が必要である。マネジメントは、観光からの観点だけではなく、地域経営の視点から行うことが必要である。観光と地域活動に境界線が薄れる今、地域の最大効果を上げるには地域内の自他の取組の把握や知識の共有が鍵となる。それにより、観光による地域活性化のロードマップと地域の総合的なロードマップが整合性のあるものになっていくと期待される。

具体的には、行政はこれまでのネットワークをもとに総合計画に則った観光の基本方針や計画を打ち出す時期に来ている。特に真岡市の場合は、観光産業の発展ではなく、元々ある産業と地域を結び付けることによる地域活性化を目的にしている。その媒体が市民活動であり、市民参加によって暮らしも産業もともに豊かにしていく方針であるので、観光産業に軸を置いた観光の基本計画ではなく、まさにエコツーリズムの全体構想に構成されるような自分たちの地域資源を観光にどう活用すれば将来にわたり真岡市の豊かさを持続させ、膨らませることができるのかといった基本方針や計画がふさわしいと思われる。そのためには、市民参加で検討できる場が継続して必要であり、行政が設置する必要がある。そこに至っては、住民やこの地域に関わり真剣に生きる人々で構成され、「今見えているもの」から派生した単なる意見出しや多数決ではなく、計画策定を通してリーダーの人材育成をしていくチャンスとしていくことが望ましい。それにより、市民の役割を市民自身で明確に打ち出す機会にすることで、エコツーリズムによる地域の持続的な発展が期待できる。

3-5. 小山市渡良瀬湧水地治水推進・ラムサール賢明な 活用・周辺整備推進期成同盟(栃木県小山市)

(1) 地域の概要

1) 小山市の概要

【人口】

165,175人(平成25年10月1日)

【地勢】

栃木県南部に位置し、東京圏からは北に約60km、県都宇都宮市からは南に30kmの距離にある。市域の東側は茨城県に接しており、隣接市町は東に真岡市・茨城県結城市及び筑西市、南に野木町・茨城県古河市、西に栃木市、北は下野市に接している。

地形は、関東平野のほぼ真ん中でほとんど起伏がなく、市中央部には思川が、東部に鬼怒川が、西部に巴波川が流れている。

鉄道は、南北のJR宇都宮線と東北新幹線を軸に、東からJR水戸線、西からJR両毛線が小山駅で結節し、道路は、国道4号と新4号国道、国道50号の広域幹線道路が市内を貫通しており、交通の要衝地となっている。

【面積】

171.61km²

【気候、自然】

小山市は、やや内陸性をおびた太平洋側気候を示し、おおむね温暖で住みよい気候であるといえる。また、冬季の乾燥した北西の強い季節風「男体おろし」や夏に見られる激しい雷は特徴的な風物詩である。

市の中央に思川、東に鬼怒川、西に巴波川などが流れ、本州以南最大の湿地で平成24年7月3日にラムサール条約湿地に登録された渡良瀬遊水地や国のため池百選に選定された羽川大沼等のほか、周辺部には農地や平地林が広がる「水と緑と大地」の豊かな自然環境と、美しい田園景観を有している。

また、多様な都市機能が集積した市街地を集落地・農地が取り囲む、都市と田園の調和のとれたまちを形成している。

【歴史】

小山市は、縄文時代の寺野東遺跡や古墳時代の琵琶塚古墳・摩利支天塚古墳、鎌倉室町時代下野国の守護を務めた小山氏の居城祇園城跡等7箇所の国指定文化財など、古来から連綿と続く、数多くの誇れる歴史的・文化的資産を有している。

特に、本市は、徳川家康が上杉景勝討伐に会津に向かう途次、小山の地で石田

光成挙兵の報が入り、急きよ軍議「小山評定」を開き、関ヶ原の戦いでの東軍勝利へと日本の行く末を決定づけた歴史にちなんで「開運のまち」として全国発信している。

【観光】

恵まれた立地条件を最大限に生かした、都市と農村の交流を推進しており、国道50号沿には、都市と農村の交流拠点施設としての道の駅「思川」や市民農園が、中心市街地には、まちの駅「思季彩館」が観光情報交流センターとして設置されている。

【地域資源】

平成22年11月にユネスコ無形文化遺産に登録された本場結城紬をはじめとして、伝統工芸、農畜産物、歴史などを小山ブランドとして創生・発信を推進している。また、北関東最大級の「小山の花火」のほか、「間々田八幡宮蛇祭り」「胸形神社花桶かつぎ」など各地域の伝統行事も数多く行われている。

2) 派遣地域（渡良瀬遊水地及びその周辺地域）概要

小山市南西端に位置する渡良瀬遊水地は、4県4市2町（栃木県栃木市・小山市・野木町、群馬県板倉町、埼玉県加須市、茨城県古河市）にまたがる面積約3,300haを有する日本最大の遊水地である。渡良瀬遊水地内には、渡良瀬川、思川、巴波川の3河川が流れており、大きな洪水の時には、3河川の水を調節池に溜めて、利根川本川の洲流量に影響を与えないようにする役割を持っている。このように渡良瀬遊水地は利根川水系の治水に大きな役割を果たすとともに、世界的に湿地面積が減少する中1,500haのヨシ原に絶滅危惧種183種を含むたくさんの動植物が生息する自然の宝庫として、貴重な存在となっている。このようなことから、渡良瀬遊水地は、平成24年7月3日にラムサール条約湿地に登録された。

渡良瀬遊水地に隣接する生井地区は、西は栃木市と東は野木町に接し、思川と与良川に抱かれた自然豊かな田園地帯である。生井地区は栃木県内でも最も標高の低い地域で、昔から度重なる水害に悩まされてきた地区で、そのような土地に暮らす人々の知恵として母屋より高く土盛りした「水塚」や洪水時の一時的な移動手段としての「揚舟」が今でも残っている。また、養蚕業・生井桑摘み唄、ヨシ産業など歴史的・伝統的な文化資源が継承されている。

寒川地区は、小山市の南西部、国道50号の南に位置し、西側は栃木市に隣接しており、地域内には、巴波川や永野川、与良川が流れる自然豊かな田園地帯である。生井地区と同じように、昔から水害に悩まされてきた地区で、巴波川決壊口記念公園が堤防強化と地区の環境向上のために整備されているほか、地域内には、胸形神社の「花桶かつぎ」や毘沙門山古墳など、歴史・伝統文化的な資産が存在する。

【人口、面積】（平成25年10月1日）

生井地区 1,982人 12.16km²

寒川地区 1,545人 6.43km²

【地域資源、歴史、観光など】

生井地区

治水（水塚・揚舟）：水害の多い土地に暮らす人々の知恵として、母屋より高く土盛りした「水塚」や洪水時の一時的な移動手段としての「揚舟」が今も残る。

ヨシズ産業：渡良瀬遊水地に広がるヨシ原で収穫されたヨシは、ヨシズや茅葺き屋根の原料として出荷。

養蚕業・生井桑摘み唄：明治から戦前まで養蚕業が盛ん。その養蚕文化を語り継ぐための「生井桑摘み唄」。

川魚淡水魚漁：水と共に運ばれてく上流の肥沃な土壌が川や沼を豊かにして様々な漁が行われ、川魚を使った食文化が発展。

生井桜づつみ：「渡良瀬遊水地の桜づつみからの富士」が国土交通省の「関東富士見百景」に選定。

白鳥八幡宮古式祭礼：鳥居につるされた鬼の面を射る「鬼面射弓」。その年の悪霊の村への侵入をはばもうとする行事だといわれている。頭屋制の名残を今に伝える貴重な祭り。

寒川地区

巴波川決壊口祈念公園：堤防強化と地区の環境向上のため整備された桜づつみ。

胸形神社花桶かつぎ：美しく着飾った7歳の女の子が花で飾られた桶をかつぎ、夜道を神輿・山車とともに、天満宮から胸形神社へと寒川地内を歩く。

毘沙門山古墳：田園風景の中に浮かぶ5～6世紀(推定)築造の古墳。

(2) アドバイザー派遣申請の背景

1) 派遣申請の背景

小山市南西端に位置する渡良瀬遊水地は、面積 3,300ha を有する日本最大の遊水地で、利根川水系の治水に大きな役割を果たすとともに、絶滅危惧種 183 種を含む貴重な動植物が生息する自然の宝庫となっており、平成 24 年 7 月 3 日にラムサール条約湿地に登録された。小山市では、第 1 に治水機能確保を最優先とした「エコミュージアム化」、第 2 に「トキ・コウノトリの野生復帰」、そして第 3 に「環境にやさしい農業を中心とした地場産業の推進」を「賢明な活用の 3 本柱」として、多くの人を呼び込み地域振興を図るため「渡良瀬遊水地関連振興 5 ヶ年計画」を策定し、その推進に努めている。

また、渡良瀬遊水地周辺は昔から水害に悩まされてきた地区で、そのような土地に暮らす人々に知恵として母屋より高く土盛りした「水塚」や洪水時の一時的な移動手段としての「揚舟」が今でも残っている。さらに養蚕業・生井桑摘み唄、ヨシ

産業など歴史的・伝統的な文化資源が継承されており、それら地域の誇りである文化資源を保存、有効活用して、地域活性化の推進を図っている。

2) 地域課題

- ・渡良瀬遊水地をはじめとした地域資源の魅力が市民にあまり認識されておらず、また地域の人も身近な存在がゆえに、地域の魅力として感じられていないところがある。
- ・エコツーリズムとは何か、エコツーリズムに対する共通理解が、市役所内部や地元・関係団体内で十分にされていない。
- ・小山市では渡良瀬遊水地関連振興5ヶ年計画に基づき、渡良瀬遊水地及びその周辺地区を対象とした各種事業を推進している。将来的にそれら各取組をどのように魅力的なエコツアープログラムとして組み合わせていくのが課題となる。
- ・ガイドの発掘や育成、働く場の確保が大きな課題となっており、エコツーリズムの推進にあたって中心的な役割を果たす人物（コーディネーター的役割）の育成、また運営団体の育成が必要である。
- ・渡良瀬遊水地は4県4市2町にまたがり、また多くの市民団体・関係団体が関わっているなど、多種多様な主体が存在している。それら多様な主体の協働・連携・ネットワークの構築が重要である。

(3) アドバイザー派遣の概要

日	時	平成26年12月15日(月)～16日(火)
場	所	栃木県小山市(渡良瀬遊水地及びその周辺地域)
アドバイザー		鈴木 順一郎氏
参加者		45名
スケジュール・方法		<p>【1日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ミーティング(渡良瀬遊水地ラムサール推進室、市役所関係課) ・現地視察(渡良瀬遊水地、生井桜づつみ、与良川排水機場、生井地区) <p>【2日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ミーティング(渡良瀬遊水地ラムサール推進室、市役所関係課) ・懇談(地元期成同盟会役員) ・講演(地元期成同盟会委員)

(4) アドバイスの内容

1) 現地視察

渡良瀬遊水地及びその周辺地域（主に生井地区）の現地視察を行った。

- ・ 渡良瀬遊水地（越流堤・第二排水門、鷹見台、谷中湖、湿地資料館）、生井桜づつみ与良川排水機場
- ・ 生井地区（ヨシズ農家、ふゆみずたんぼ、ホンモロコ養殖場、水塚・揚舟、旧思川、しんますや（ホンモロコ料理の試食））
- ・ 道の駅思川

2) 市関係課とのミーティング・アドバイス

① 渡良瀬遊水地ラムサール推進室

ア. 現状・課題等

渡良瀬遊水地関連振興5ヶ年計画の推進

- ・ 平成24年7月3日にラムサール条約湿地に登録された渡良瀬遊水地の賢明な活用として、第1に治水機能確保を最優先とした「エコミュージアム化」、第2に「トキ・コウノトリの野生復帰」、そして第3に「環境にやさしい農業を中心とした地場産業の推進」を賢明な活用の3本柱に、多くの人を呼び込み地域振興を図るため「渡良瀬遊水地関連振興5ヶ年計画」を策定し、その推進に努めている。

イ. 助言等

- ・ 市役所内の様々な課が関わっているものであり、全部の課の共通認識がなされないといけない。言うまでもなく、ラムサール推進室がその中心的役割を果たさなければならない。一体的に進めなければ、一般の方からはバラバラに見えてしまう。しっかりと連携できるよう音頭取りをお願いしたい。
- ・ 関係者以外は、ラムサール条約の意味をあまりわかっていない。渡良瀬遊水地がいかに貴重な存在であり、ラムサール条約湿地に登録された意味を市全体に伝えていくことが重要である。
- ・ 渡良瀬遊水地の賢明な活用の土台・ベースとして、エコツーリズムの考え方をぜひ活用していただきたい。渡良瀬遊水地及び周辺地域の環境を保全しつつ、たくさんの人に来ていただき、結果としてお金を落としてもらおう。
- ・ 小山駅や道の駅思川にラムサール条約・渡良瀬遊水地の紹介・PRコーナーを設置した方が良い。

② 農政課

ア. 現状・課題等

i. ふゆみずたんぼ

- ・ 環境にやさしい農業を中心とした地場産業の推進の中心的取組。コウノトリ・

トキの野生復帰にも大きく関わっている。

- ・周辺水田のラムサール条約湿地登録に向けては更なる環境整備が必要（無農薬と減農薬）。
- ・地元の協議会が主体となっている。補助金を無くした場合、その後協力してくれるかどうか心配。また、協議会メンバーは全員が高齢者で、後継者問題もある。
- ・コウノトリやトキが来ただけでは収入が上がらない。プラスアルファが必要。販売先確保も重要。実際に現金が伴わないといけない。
- ・昭和 40 年代にお金をかけ圃場整備し、米・麦をつくれるようにしたのに、今さらという感がある。冬に水を張ると麦が作れない。米だけの収入になってしまう。

ii. ホンモロコ

- ・ふゆみずたんぼ農家の収入確保の取組である。今後の生産拡大、販路拡大が課題となっている。

イ. 助言等

i. ふゆみずたんぼ

- ・ふゆみずたんぼの意味を、いかに伝えていくかが重要。
 - ・子どもたちにふゆみずたんぼに素足で足を突っ込んでもらったり、泥の感覚を覚えさせる。泥を楽しんでもらう。
- ⇒（農政課）田植え前にふゆみずたんぼでドッジボールをやってみたいと考えている。
- ・雑草を手で抜くなどを子どもたちに体験させる。自分たちが手伝った実感が大切である。
- ⇒（農政課）通常は、田植えと稲刈りの体験だけだが、草取りや水管理なども含めて全部できればいい体験になると思う。
- ・ふゆみずたんぼは生き物を育むたんぼである。生き物観察なども入れて、そこに付加価値をつけてはどうか。
 - ・農家も子どもの教育のためなら、将来のためなら、協力してくれる。子どもたをうまく利用していただきたい。

ii. ホンモロコ

- ・川魚だけれども非常に品のいい味。日本酒とも非常に合う。日本酒とセットで売り出してみてもどうか。
- ・子どもには「せんべい」のようにすると食べやすい。栄養的にも優れており、アピールポイントになる。
- ・ぜひ名前に「おやま」を入れていただきたい。ラムサールホンモロコでは、知らない人はイランから持ってきたと思ってしまう。他の物もラムサールの前に

「おやま」を付けた方がいい。

③農村整備課

ア. 現状・課題等

i. 渡良瀬遊水地への研修施設の整備

- ・新たな研修施設はどういった利用が想定されるのか。
- ・エコミュージアム整備や観光との関係はいかにすべきか。

ii. フラワーロードの整備

イ. 助言等

- ・どうしても拠点施設は必要になってくる。博物館的要素が必要。ラムサール条約登録湿地として価値が高いものだとわかるような展示。ラムサール湿地の権威を表明していくこと。権威が高まらないと、価値が出てこない。
- ・学芸員等を置いて、何に対しても答えられるようにすることが大事。そうすると周りの意識もどんどん変わってくる。
- ・人が滞在するには飲食ができる、道の駅的なものも必要になる。
- ・施設は学術的な要素で固めた方がよい。研究施設のイメージを持たせることがひとつ大事である。それにプラスして、一般の人たちが集まることができる施設として、飲食、お土産。
- ・飲食やお土産も地元の人たちの還元となるようなものでないといけない。ただし、地元任せすぎると問題で、行政がどのように適切に関与していくかが重要。
- ・展望スペースに望遠鏡。ただし、屋上だと動物が逃げってしまうので、屋内に整備した方がよい。藤前干潟がよい事例である。
- ・施設は生井桜つつみあたりにあるといいと思う。また、飲食・お土産施設の中に案内所を設置し、それをうまく機能させていけると非常にいい。
- ・フラワーロードについては、拠点施設をまず考え、拠点施設を考えながら進めるとわかりやすくなる。

④商業観光課

ア. 現状・課題等

ヨシの活用

- ・使用用途の拡大を図っていきたい。

イ. 助言等

- ・ブランディングのキーは、なぜヨシ紙を使うことを進めるのか、強力な理由づけがあると定着していく。理由づけをしっかりと、勝手に走っていくが、それがないと、どんなに頑張っても定着しない、使ってもらえない。
- ・ストーリーが重要である。今から 90 年前に遊水地が作られ、生態系が保全・再生され、ラムサール条約に登録された。そして、ヨシ焼きなど人の手が入っ

て自然が保たれていおり、ヨシと人々が共に生きてきた。それを忘れないための「ヨシ紙」など。

- ・紙なのでいろんなアイデアがあると思う。折り紙もいい。ふゆみずたんぼで千羽コウノトリのイベントでもやれば注目され、絶対にマスコミも来る。
- ・折り紙も、渡良瀬遊水地の動植物、チュウヒ、カモなどいろいろなものを作れる。渡良瀬遊水地の動物、植物のトランプやかるたも面白い。
- ・ヨシ紙は色のをせるとくすむ。くすんだ色は、古代色、和の色に近づく。味のあるものが作れる。和食屋での箸入れなど、可能性は無限大。
- ・環境教育にも使える。ヨシ紙を使った絵画コンテストはどうだろうか。子どもたちに将来の種として植えつけることが大事。
- ・動物図鑑のような子供向けの冊子、大人向けには写真集。すべてヨシ紙でつくる。写真集もシリアルナンバーなどをつけてプレミアム感を出すとよい。
- ・体験施設でのヨシ紙づくり体験や、お土産でのヨシのペーパークラフト。
- ・渡良瀬遊水地のPR・宣伝に使うものはすべてヨシ紙が理想だと思う。

⑤建設政策課

ア. 現状・課題等

i. エコミュージアムの整備

- ・国土交通省の湿地再生掘削による浅い池、深い池等を活用し、自然観察・体験の場として整備を図っている。
- ・全体およそ15年計画で国が掘削していく。短期の5年でいろいろ実験的なことをやっていきたい。
- ・ひとつの課題が木道整備と8.6ha掘削池の維持管理である。
- ・おもしろいゾーン分けはどのようなものか。

イ. 助言等

- ・エコミュージアムは流行で、いろいろなところでやっている。ただ、どこもエコミュージアムのエリアが明確でない。エリアが子どもでもわかるようにきちんとする必要がある。
- ・実は、都会に住む人は、山や川にきても、そこに入っていいのかどうか分からないものである。エコミュージアムは、しっかりとエリアを決め、ルールの中で自然と触れ合えるものである。
- ・ヨシの間の木道は、ヨシが高いのでまるで迷路、横からヨシを見ても何も面白くない。ヨシの上に出る高さから覗くととてもおもしろい。普段入れないところに入るアドベンチャー感が大事。沖縄では、マングローブ林で海の上に木道を設置しているところがある。上から見ると生き物がよく見える。エコミュージアムとして目立つ存在になる。
- ・ヨシ焼きのときに撤去できる木道はどうか。ヨシ焼き後、再度設置して、ヨシ

焼後の再生の観察もできる。

- ・コツはディズニシーを作るイメージ。ここに行けば、これが見れるというゾーニングが重要。また、エンターテインメント性を入れる。
 - ・ありがちなのは教育的・環境保護団体的になりすぎる。それを嫌う人は来ない。まずは楽しんでもらい、結果として学んでもらい、環境保全につなげることができる。
 - ・特定のリピーターだけでなく、どんどん広げていくことが大事。
 - ・看板でゾーン・エリアが一目でわかるようにしないといけない。観察できる動植物や観察のコツなどを記載する。看板自体も動物の形をしていても面白い。
 - ・揚げ舟を使って、水路に舟を回すというのも面白い。スポーツ要素を入れるとカヤックが面白い。カヤックは目線が水面に近い。土手の上から立ってみるとどうしても自分中心だが、自然の中から、自然からの目線で見るととても印象に残る。
 - ・ゾーニングには研究施設で何を主にしてしたいかが重要。ゾーン分けの考えが今出てこないのは、ベースとなる研究機能がないからである。意味づけをしていくと長く続く。
 - ・一つ提案として、プレ的、模擬的にプレエコミュージアムはいかがか。小さいエリアでもいいので、実験的に体験してもらった方がいい。
- ⇒ (建設政策課) 今年掘削したところ (8.6ha の掘削池) で試験的に考えている。

⑥生涯学習課

ア. 現状・課題等

ガイドの育成

- ・今年度渡良瀬遊水地講座として年4回実施、来年度はガイド養成コースとして年8回程度の実施を予定している。
- ・ガイドの養成方法を確立し、またガイドマニュアルを作成していかなければならない。
- ・ガイドのモチベーション維持、一生懸命続けられるコツなどはあるのか。

イ. 助言等

- ・第一にボランティアガイドがよいのかどうかの話がある。ボランティアガイドのデメリットは責任を持たせられないということ。リスクマネジメントが重要。
- ・ボランティアに対して強く言えない部分もある。やはりボランティアとしては限界点がある。
- ・ガイドを使ってリピーターが増えるのは、ガイドに惚れてくれるからである。新しい話題を常に提供してくれるガイドが不可欠である。
- ・ボランティアガイドをまとめるプロのガイドが必要である。NPOなど、もしくは市内部に市職員でプロのガイドを育成するなど。やはりボランティアはボ

ランティアで、実際にボランティアガイドでの失敗例をたくさん見てきた。ガイドで食べているNPOなどのプロのガイドは迫力も知識も違う。

- ・ボランティアガイドが全部だめということではなく、最初はボランティアガイドをテスト的にやってみてもよい。ただし、次の段階でプロの血を入れないといけない。NPO等のガイドの下でボランティアガイドをうまく使う。NPO等が指導的立場に立って、またマニュアル作成などもそこに任せればよい。狭山丘陵が良い事例である。
- ・ボランティアがいけないのではなく、ボランティアを育てていきながら、責任を持てる所と将来ジョイントしないといけない。
- ・一番大事なのはリスクマネジメント。例えば、高齢者が倒れた時に、心臓マッサージから搬送まで、マスターするのはガイドの使命
- ・今からできることは、ボランティアガイドを指導する専門家を見つけ、その方の指導のもとガイドの養成をしていく。
- ・ボランティアガイドは、実は本来のボランティアではない。時間とお金があり、興味があるから、ガイドをする、下手をすると自己満足になってしまう。そこに使命感を持ってもらうには、次世代に伝えるという使命、自分たちが伝えないとなくなってしまうという危機感、これしかない。
- ・まずは、プレエコミュージアムで小学生などのガイドをして、子どもたちの反応を見るとわかりやすい。実感してもらうしかない。

3) 懇談

地元団体（渡良瀬遊水地関連地域活性化協議会）役員からの意見聴取

- ・一番つらいのは、若い人たちが住まないこと。地元の小学校は市内で一番子供が少ない小学校である。地理的には非常に便利な場所だが、過疎化が進んでいる。
- ・ラムサール条約湿地登録で盛り上がっているが、若い人が気持ちよく住める地域ではない。地元の団体数が多く、自治会の役員など避けてしまう。地元の行事も多い。
- ・50年、100年後に住んでいる人たちが喜ぶように、今考えて行動していかなければならない。
- ・ただし、頭からしっぽまでを全部小山市がやるのではなく、地元で、みんなでやっっていこうという地域にしていきたい。

4) 講演

①エコツーリズムとは

- ・エコツーリズムの基本的な考え方は、今ある自然を保全しながら、多くの方に来てもらって、楽しんでいただきながら、自然の良さを感じてもらい、地域に

お金を落としてもらう。

- ・今後渡良瀬遊水地でいろいろな事業が行われるとき、エコツーリズムの考え方が役に立つと思う。

②ラムサール条約登録湿地渡良瀬遊水地の魅力

- ・VTR「日本のラムサール湿地」を紹介。
- ・ラムサール条約登録湿地は価値がある。日本の登録湿地は皆有名なところばかり。渡良瀬遊水地もこれらに肩を並べる、非常に価値の高い存在。保全していかなければならない。
- ・渡良瀬遊水地の自然が当たり前。今さら大事だといわれてもピンとこないと思う。しかし、実はなくなってしまって初めて気づく。
- ・エコミュージアムを実はよくわからないという方が多い。実際にわかりにくいものである。自然そのものが自然の博物館という意味である。渡良瀬遊水地は相当広く、防災面や鳥の営巣地などもあるので、全体をエコミュージアムとは言えない状況である。今後小山市では、実験的に小さなエリアを決めて進めていくようである。
- ・渡良瀬遊水地は世界に誇れる例だと思う。90年前に防災の目的でつくられ、人々の生活に近い、人とのかかわりが他の湿地よりも大きい。それは、これからも人が関わっていかないと保てない湿地でもある。
- ・小山市の方へお願いがある。渡良瀬遊水地が価値のあるものだとして小山市全体に広報していただきたい。私は、生物の数が多きことに非常に驚いた。これだけのものを持っている、宝であるということに皆の気持ちが向かないといけない。そうすると、渡良瀬遊水地を地元だけでなく市全体で考えるようになる。もう一つ、渡良瀬遊水地の中に人が集える拠点づくりを進めてほしい。すでに構想はあるが、博物館的な役割を持たせて、まずは小さいエリアからわかりやすく伝えてほしい。

⇒（小山市）市の渡良瀬遊水地ラムサール推進室が中心となって、3本柱の賢明な活用の推進や、先ほどのアドバイスにもあったPRを積極的に進めていきたい。

- ・この地域は、だんだんと人が増えてくる。対応策をとらないといけない。特にごみで、弁当ごみなどはカラスが増える原因になる。ヤンバルクイナの森も、弁当ごみでカラスだらけになってしまった。生態系が変わってしまう。
- ・どこから渡良瀬遊水地を見るのがきれいか。実は昨日一周してきたが、栃木市のハート湖は明らかに人が遊ぶところ。小山市側は、自然の生き物がのびのびと遊んでいる。それをうまく利用するのが、人を集めるコツである。
- ・素晴らしいヨシ原が広がっている。ヨシが高いので高架木道がいい。ヨシ原は上から見ると魅力が伝わる。いつも入れないところから見るアドベンチャー感

が大切。沖縄のマングローブ林も、陸から見るのと上から見るとだと全然違う。工夫できれば人もたくさん来る。ヨシ焼きのときは、たとえば一度取り外せて、終わったとき戻せるような木道はどうか。

- ・次の世代に、ヨシ原の大切さ、文化・生活とのつながりが伝わりにくい。今の皆さんが伝えないといけない。小山市の子どもたちにツアーを行ってぜひ伝えていただきたい。

③質疑応答

(参加者) 小山市の小学生に春の新緑の渡良瀬と、秋のヨシ原、年2回は授業の中に入れてほしい。

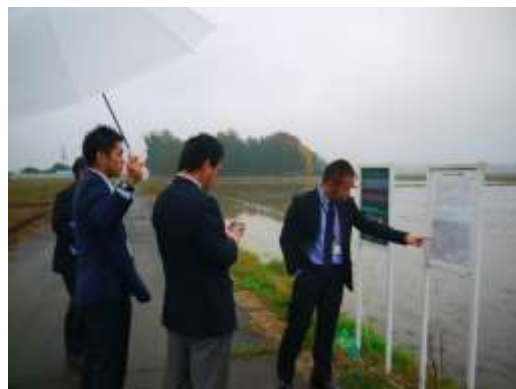
(小山市) 今年始めたバス補助制度を使って小学校が続々ときている。ただ、今後どういう風に見せるのか、新緑や秋のヨシ原などいいところを見せられるように検討していきたい。

- ・学校だけに限らず、いろいろな方に来ていただき体験をしてほしい。
- ・そのためにはガイドが必要。皆さんには積極的に参加していただきたい。
- ・人がたくさん来ると近隣の人の意識も変わってくる。日本にいろんなラムサール条約登録湿地があるが、実は湿地のすぐ隣に住む人がラムサール条約や湿地についてよく知らないことが多い。関係者だけが一生懸命で近くの人に意義が伝わっていないことがある。
- ・地元で取り組む、ラムサールふゆみずたんぼ、ラムサールホンモロコがあるが、ぜひ「おやま」という言葉を入れてほしい。ラムサールと聞くとラムサール条約を知らない人は、イランのラムサールを思い浮かべる。知らない人からしたらイランから連れてきた魚になってしまう。「おやま」をつけるようにしていただきたい。
- ・ふゆみずたんぼ。雑草を抜くときに子どもたちに裸足で泥に入らせて雑草取りをさせると、とても喜ぶ。今の子どもたちは裸足で泥の中に足を入れるだけで喜ぶ。田植えや収穫の体験は行っているようだが、雑草抜きなどその途中の体験もとても大切である。
- ・市ではヨシ紙を作っている。子どもたちが千羽コウノトリを作ってふゆみずたんぼに飾るなどすれば、マスコミが必ず来て、注目される。
- ・日本全国を回ってきて感じたことは、自然は変化していき、時に無くなってしまいうものもある。そして、無くなる時はあっという間に無くなるということもある。無くなる手前で気づく感覚を持つかどうか。次の世代に伝えるためになるべく五感を使って覚えてもらうしかない。小学生のうちに、ヨシ原の中での体験をやってもらうなどが大切である。それを面白くするために、エコミュージアムや拠点施設が必要で、エコツーリズムの考え方も重要になってくる。まずは、渡良瀬遊水地の価値をもう一度見つめなおしていただきたい。

【記録写真】



①現地視察 ヨシズ農家



②現地視察 ふゆみずたんぼ



③市関係課とのミーティング



④地元住民向け講演会

(5) アドバイザー派遣の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

- ・エコツーリズムの基本的な考え方を理解できた。
- ・身近にある当たり前の存在である渡良瀬遊水地が、いかに素晴らしい価値を持つのか再認識できるきっかけとなった。また、それを次世代へ伝えていくことの大切さを気づかされた。
- ・渡良瀬遊水地関連振興5ヶ年計画を推進していく上で、行政とは異なる視点で様々なアドバイス・ヒントを頂き、市関係者にとって、今後の事業展開に向け、非常に貴重なきっかけ作りの場となった。

2) 今後期待される効果

- ・渡良瀬遊水地の賢明な活用にあたり、エコツーリズムの考え方を土台・ベースとしてうまく活用ができる。
- ・渡良瀬遊水地の価値やラムサール条約湿地登録の意味を広く「伝える」ことに

よって、市全体の盛り上がりにつなげることができる。

3) 今後の取組

- ・渡良瀬遊水地の魅力・価値を外部に発信することももちろん重要だが、渡良瀬遊水地がラムサール条約湿地に登録された意味を含めて内部・市民全体に対して積極的に周知・PRする取組を進めていきたい。
- ・アドバイザーから頂いた助言を活かしながら、またエコツーリズムの基本的な考え方をベースにうまく活用しながら、渡良瀬遊水地関連振興5ヶ年計画を推進していきたい。なお、事業推進にあたっては、市関係課、また地元やNPO等関係者との更なる連携・協力体制の構築と適切な役割分担を図っていきたい。

(6) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

1) 参考となった事項

アドバイザーが製作されたVTR「日本のラムサール湿地」を交えながら、ラムサール条約登録湿地の価値についてお話しいただき、参加者一同、渡良瀬遊水地の価値、渡良瀬遊水地がラムサール条約湿地に登録された意義というものを改めて考えるきっかけとなった。

また、沖縄マングローブ林の木道の映像など、具体的事例として非常に参考となった。

2) その他感想

渡良瀬遊水地の賢明な活用に関する各種事業に対して、外部の視点から様々なご指摘やご提案を頂き、今後の事業展開を行っていく上で大変参考となった。また、何より、渡良瀬遊水地の魅力・価値について、地元住民だけでなく、われわれ行政側としても再発見することができた。

最後に、今回、この「エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業」を活用して本当に良かったと感じています。どうか今後ともご指導のほどよろしく願いいたします。

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

環境映像ディレクター・プロデューサー 鈴木順一郎 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

小山市南西にある渡良瀬遊水地は、貴重な動植物が生息する自然の宝庫として平成24年にラムサール条約湿地に登録された。この渡良瀬遊水地は、4県4市2町にまたがる日本最大の遊水地だが、小山市側の自然は特にその貴重性が高い。これを受け、小山市ではラムサール条約湿地としての渡良瀬遊水地を核とした観光やエコミュージアム化、また環境教育等を5カ年計画として進行中である。今回、小山市は、エコツーリズムの考え方をどのようにこの5カ年計画の中に落としこめるか模索した。

②課題

ラムサール条約湿地に登録されたことから、5カ年計画が作られ、渡良瀬遊水地を核とした地域活性化を目指しているわけだが、まだまだ一部の行政関係者や関係する学者にしかラムサール条約湿地に登録された価値が伝わっていないのが現状である。登録されたことが先行してしまい、その価値をしっかりと広報することが必要である。その認識が確立されてこそ、官民一体の地域づくりが推進されると思われる。つまり、こうした共通の認識がなければ、目的達成のために関係するすべての人々が同じ方向に歩けない。小山市渡良瀬遊水地ラムサール推進室では、こういったことも含め、今後どのように5カ年計画に対して結果を出していくのかを課題としていた。大変熱意のある推進室であり、それだけに、小山市内の関係する部署と地域住民をどのように牽引し、どうすれば同じ方向に歩けるのか、ここにエコツーリズムの考え方を取り込むことによってどのような効果が期待できるのかが今回の大きな課題であった。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

特に魅力的なのは、言うまでもなく自然の豊かさである。ただしここでいう自然のすばらしさは、原生林的な豊かさではなく、人々が生活として自然を利用し保全を繰り返してきた結果、貴重な動植物の聖地が残されてきたということである。これが渡良瀬遊水地のどこにも負けない最大の魅力であり武器である。

②上記地域資源に魅力を感じた理由

ヨシ原を利用し使って生活してきた渡良瀬遊水地周辺の住民にとってここは生活の場である。そこにはルールがあり、毎年ヨシ焼きが行われる。こうした人々の生きるサイクルと自然のサイクルが同調し貴重な動植物が未だに残っているのである。言い換えれば、こうした人間の活動に、貴重な動植物が、四季の決まっ

たサイクルとして認識し、バランスを保ってきたという点が素晴らしい。いわば人と自然の共存を象徴するエコミュージアムそのものである。この点が非常に重要である。

3) アドバイス（講義等）の概要

今回、個別にアドバイスをさせていただいた箇所が多いため、細かなことは小山市からのレポートを参考にさせていただきたい。ここでは大きく二つのことを書かせていただく。

①行政へのアドバイス

ラムサール条約推進室が中心となって小山市行政内の各部署がそれぞれ5カ年計画に対して動いている。言ってみれば急に始まった政策に対し、それぞれ各部署のご担当は精力的にお考えになっているのだが、私の印象としては、同じ目的に向かってるように見えて実はどこに向かってるかを共有できていない印象であった。これは行政で陥りがちな問題である。大事なのはラムサール条約湿地を核とした5カ年計画を実行することが目的ではなく、5カ年計画を実行することで何ができるのか、どんな効果が期待できるのかを共通の認識にするかである。そういったコンセプトで各部署の方々にはアドバイスをさせていただき、その上でエコツーリズムがどのように関係してくるのかをお話した。

②地域住民へのアドバイス

事前の懇談で気づいたことは、地域住民の皆さんにとって、これまであたり前に存在し、利用し、生活してきた渡良瀬遊水地が、ラムサール条約湿地に登録された認識はお持ちであるのだが、何故、登録されたのかという理由・価値が伝わりきっていなかったという点である。大事なのは、何故登録されたかという「理由・価値」を伝えることである。あたり前に生活しているとその価値にはなかなか気づかないものである。そんなことから、エコツーリズムの考え方を解説した後、あらためてラムサール条約湿地に登録された意味や価値をお話させていただき、その上で、エコツアー等によるエコツーリズムの可能性をお話した。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

現在は、まずはエコツーリズムの考え方をどのようにラムサール条約湿地と絡ませるかを模索されている段階なので、全体構想へ取り組む段階ではない。

②全体構想への意向について

ラムサール条約湿地であるというタイトルがあるので、これを今後どのように活かしていくかが課題であり、今現在、エコツーリズム全体構想よりも重要である。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

まずは現状を整理され、共通・統一的な具体的目標を絞り込むことである。その後、エコツーリズムをどのように取り入れ活かすかを検討していただきたい。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

渡良瀬遊水地は、幸いなことに4県4市2町にまたがる日本最大の遊水地である。つまり、小山市のエリアははっきりしている。そのため、小山市部分のゾーニングについて特色をつけやすい。4県4市2町にまたがることがデメリットになることも多いと思われるが、逆にそれをチャンスと捉え、エリアマネジメントに有効に活かしていただければと思っている。

人々が生活しながら保全・共存してきた渡良瀬遊水地を核とした地域の活性化には大きな期待と可能性を感じる。

3-6. 赤城山エコツーリズム推進準備会（群馬県前橋市）

(1) 地域の概要

1) 前橋市の概要

【人口】

340,012 人（平成 26 年 9 月末日現在）

【地勢】

前橋市は群馬県の中央部よりやや南に位置し東京から北西約 100 キロメートルの地点にあります。市域の北部は上毛三山の雄、赤城山に至り、北から南に向かって緩やかな傾斜となっています（最も高いところは赤城山（黒檜山南面）の海拔 1,823 メートル、最も低いところは下阿内町（しもあうちまち）の 64 メートル）。市の中央部から南部にかけては、海拔 100 メートル前後の関東平野の平坦地が広がり、本市を両分する形で南流する利根川の両岸に市街地が開けています。

【面積】

311.64 平方キロメートル。群馬県の面積の約 4.9 パーセントを占めています。以上前橋市が中心になりますが、赤城山を中心にして渡良瀬川の西、利根川の東、JR 両毛線の北を活動範囲とします。その中には東側は桐生市の一部、西側は渋川市の一部が含まれます。

【気候、自然】

北西に連なる赤城、上信越の山々に囲まれて、やや内陸性を帯び降雨量は少ないほうです。年間の平均気温は 14 度から 15 度ですが、気温の差は大きいので四季の変化に富んでいます。例年 11 月から翌年 4 月にかけて晴天が多く、北西の季節風が吹き、特に冬期の風は強く、俗に「赤城おろし」と呼ばれています。6 月から 8 月にかけて、南東の風が吹きます。夏期は気温が高く、激しい雷がおこります。

【歴史】

前橋は古くは「まやはし」と称しました。「厩橋」が「前橋」に改められたのは西暦 1648 年から 1652 年、酒井忠清が城主であった頃だと言われています。

「厩橋」の名は、現在利根川の流れているあたりに車川と称する流れがあり、そこにかかっていた橋を「駅家（うまや）の橋」と呼んだことから、自然に地名になったと伝えられています。

前橋市域には、700 余基もの古墳がありました。この中には、東国では最も古いとされる天神山古墳から、終末期古墳の典型とされる宝塔山古墳に至るまでの各期のものがあります。また、墳丘や石室にも巨大なものがあり、副葬品にも優秀なものが多く出土しています。こうした優れた古墳文化を背景として、律

令体制の中にあつては、国府設置の場となり、上野国の政治的中心地となりました。このため国分寺や山王廃寺などの建設される所となり、仏教文化の華が咲きほこりました。

群馬（くるま）の郡、駅家（うまや）の郷、群馬（くるま）の駅など前橋の地名が出てくるのが10世紀平安中期で、平安から鎌倉時代にかけては、日輪寺の十一面観世音像、善勝寺の鉄造阿弥陀如来座像がつくられました。

厩橋城が築かれたのは文明年間（1470年代）とされていますが、この城は戦国時代、上杉・武田・北条氏等の攻防の的となり、特に永禄10年（1567年）の戦いでは、武田・北条氏のために、当時繁栄していた天川原、六供方面の町並みが焼き払われ、街の中心は旧利根川の河原であった低地に移りました。これが現在の中心街です。（利根川の変流は1400年代だと言われています。）

徳川時代になって酒井氏が川越から移って城主となり、9代150年の長きにわたって城主となり、その後松平氏に代わりましたが、松平氏は利根川の洪水による城地決壊のため、わずか19年で川越に移城し、前橋は99年の間廃城の状態が続きました。このため街は衰微の極に達したので、城の再築を願って街の復興を図り、慶応3年（1867年）松平氏を再度前橋に迎えましたが、まもなく明治維新となりました。

これより先、前橋の主産業の製糸は安政6年の横浜開港と藩主松平氏の奨励により盛んとなり、明治に入って「糸のまち」前橋の名はますます高まりました。明治14年に県庁が前橋に置かれることになって街の繁栄の基礎が築かれ、部、南部の両耕地整理、昭和に入って上水道を布設しました。太平洋戦争終結の直前、すなわち昭和20年8月戦災を受けて中心市街地の8割を焼失するという被害を受けましたが、これを機に戦災復興事業を施行して市の復興を図るとともに、昭和29年以来近接町村を合併して市域を拡大し、昭和35年には消費都市から生産都市への転換を目標に、首都圏都市開発区域の指定を受けて工場誘致を実施し大いに成果を上げました。

また、近代的都市建設のための都市改造事業、区画整理事業等を積極的に進めるとともに、昭和42年5月に城南村を合併しました。

平成13年には特例市の指定を受け、平成16年12月5日には、大胡町・宮城村・粕川村と合併しました。平成21年4月には県内初の中核市へ移行するとともに、5月5日には富士見村と合併し、平成24年には市制施行120周年を迎え、さらなる飛躍を続けています。明治22年町制を施行、同25年県内最初、関東で4番目、全国で41番目に市制を施行しました。

【観光】

四季を通じて赤城山観光があります。

春：山上のアカヤシオツツジ、に始まりレンゲツツジ、シロヤシオツツジ、トウ

ゴクミツバツツジ、等 6 月初旬～中旬が最盛期で人出も駐車場を探すのに大変になるほどです。

夏：覚満淵（小尾瀬ともいわれ）の花々（ニッコウキスゲ、ノハナショウブ、カラマツソウ、等）、句碑巡り

秋：10 月中旬の紅葉、

冬：雪祭り、ワカサギ釣り、そり遊び、スノウシュウによるトレッキング 等

1 年を通して、赤城 7 峰の登山、特に百名山に指定されている黒檜山は多くの登山客が来ます。中腹には赤城温泉および 4 か所の日帰り温泉が賑わっています。

【地域資源の概要】

赤城山は明治の初めから多くの文豪（志賀直哉、太宰治、武者小路実篤、与謝野晶子、等）がこよなく赤城山を愛して訪れており、その足跡や資料も多数あります。因みに文人グループ白樺派は赤城の白樺から命名されております。

日本のウインタースポーツの発祥の地の一つです、特にスキーでは、コルチナダンペットで開かれた冬季オリンピックで猪谷千春（元 IOC 委員）氏が銀メダルをとりましたが、その父猪谷六合雄がジャンプの日本記録を何回も塗り替え、昭和 3 年には赤城でジャンプの国際大会が行われました。（両名とも赤城出身です）

来年の大河ドラマ「花燃ゆ」は群馬県の初代県令楢取素彦とその妻文を取り上げ主に前橋が舞台になります。

農産物では梨、りんご、ブドウ、小麦 等「赤城の恵み」として売り出しております。

畜産が盛んです。とんとんの町前橋として売り出しておりイメージキャラクター「ころとん」もあります。

赤城の湧水を利用した酒造メーカーが 3 か所あり、見学、試飲が可能です。

日本棚田百選にしてされている室沢地区棚田があります。

施設は、ぐんま昆虫の森、サンデンフォレスト、ドイツ村、ぐんまフラワーパーク、電力中央研究所、国立赤城青少年交流の家、前橋市立赤城少年自然の家、赤城自然園、音羽倶楽部、バラ園、前橋文学館（萩原朔太郎顕彰施設）

赤城山環境ガイドボランティア養成講座の修了生が 6 年目となり 130 名を超えました。

赤城山検定 3 級の合格者は今年で 2 年目になりますが、73 名になります。

赤城を語る人材のネットワークがあります。

(2) アドバイザー派遣申請の背景

1) エコツーリズムの取組にいたる準備会の設立趣意書

①設立の趣旨

群馬県の上毛三山の一つで日本百名山でもある赤城山は、標高 1,828 メートルの黒檜山を主峰として、その他の外輪山に囲まれた火口原に大沼、火口湖の小沼が水をたたえ四季を通じて自然に親しむことができます。

春は、50 万株のツツジが咲き競い、夏は、ふもとから比べマイナス 10 度の涼を求めて多くの人が訪れ、秋は、色とりどりの紅葉にいろどられ、冬は、一面白銀の世界に包まれ、大沼、小沼は全面結氷します。

私たちは、この赤城山と周辺地域の資源を子ども達に継承していかなければなりません。

しかし、このような自然環境ゆたかな赤城山周辺への観光客も年々減少し、ピーク時の半減状態を低迷しております。多くの人が集まる地域、人が人を呼ぶ地域を目指す中では、赤城山を観光する人が生態系に影響を及ぼすことなく、生物多様性の保全に留意し、自然環境、歴史文化資産を保全しつつ、自然を楽しむことができる活用方法を早急に導入することが急務となっています。

これを実現するためには、赤城山周辺地域住民が、この貴重な自然環境の共有を図り、その価値の保全と自然環境、歴史文化資産を有効に活用し、地域振興を図り持続可能な地域づくりを目指すために一体となって取り組んでいくことが必要となります。

②目的

このような認識のもと、エコツーリズムを通じて赤城山周辺の地域振興や、自然環境、歴史文化資産の保全と、それらを推進する次世代人材、後継者人材の育成を行うことを目的として、赤城山エコツーリズム推進準備会を設立したいと考えております。

エコツーリズム推進法の基本理念にある「自然観光資源が損なわれないよう生物の多様性を保全しながら、元気な地域社会をつくる」エコツーリズムは有効な手段であると考えられます。

「エコツーリズム推進基本方針」にある、エコツーリズムを推進する意義は「ルールの設定による自然環境の保全とそれに関する行動による効果」「地域固有の自然環境や生活文化の魅力を見直す効果」「新たな観光振興の可能性などに加え、持続的な地域づくりへの効果」などが相互に影響し合い、好循環をもたらすことにあるとされています。

これらの効果を生み出すエコツーリズムは、この赤城山地域の発展、向上に寄与するものと確信しております。

皆さまのご賛同をいただければ幸いです。

(3) アドバイザー派遣の概要

日	時	平成 26 年 11 月 11 日 (火) 平成 26 年 12 月 2 日 (火) 平成 27 年 1 月 20 日 (火)			
場	所	群馬県前橋市			
ア	ド	イ	ザ	ー	文教大学国際学部国際観光学科 准教授 海津 ゆりえ 氏
参	加	者	合計 37 名		
スケジュール・方法	【1回目】 ・講演：「エコツーリズムの理解と進め方」 【2回目】 ・視察：サンデンフォレスト株式会社、県立ぐんま昆虫の森 ・講演：「地域の宝さがしについて」 【3回目】 ・グループワーク ・討議、総括、講評				

(4) アドバイスの内容

1) 【1回目派遣】

第2回 赤城山エコツーリズム推進協議会発足に向けた 準備会

①講演「エコツーリズムの理解と進め方」

海津先生：

今年のゼミ生に4人も群馬県出身者がいます。これは何かの始まりかもしれません。また、群馬県は尾瀬があり自然保護の発祥の地とも言えます。

エコツーリズムは急いで結論を求めるのではなく、大きく育てていただきたい。私自身もお手伝いが少しでもできればと思っています。

今日は、新たにエコツーリズムについて学んでほしいと思う。準備会というのはこのような勉強会を重ねていくことだと思う。

エコツーリズムはかなりグローバルな動きである。求められることが多くなっている。会社のCSRとしても全国民が注目している。

観光はかわりつつある。旅行者が個人型になり、旅行社離れをしている。地域は少子高齢化している。地域の生き残りの中でも観光は注目されている。また、3.11以降、誰かの役に立ちたいと思う人が増えている。エコツーリズム協会の調査では「行った先で、自然や文化、人との交流を求める人、知的な満足を求めている人」の割合は、1999年に55.6%が今は9割以上の人がそういうことに参加することを求めている。自然と触れ合うニーズは高まっている。

作ったものではなく、本物と出会える「真正性」を求めている。

今は、観光の担い手と地域づくりの担い手が一緒であり、地域の中に観光資源

がある。観光の専門家だけではニーズに応えきれない。農家が頑張ると観光が栄える。

エコツーリズムとは、推進法の中では、自然観光資源の保護に配慮をしながら、それにふれあい、知識や理解を深める活動と定義している。地域振興が入っていないが、結果として付いてくるものだという理解。

エコツーリズムの発端は、1980 年前後から海外で始まった。コスタリカやケニアやタンザニアの東アフリカなどで課題の克服としてスタートした。野生生物の保護と観光の両立をめざし、殺さないで見るだけの観光をエコツアーと呼んだ。

日本では、西表島で1990年ころから始まったが、これを仕掛けたのも環境省である。地元は資源だけ使われていたが、国立公園とその周辺でツアーをつくり、経済を地域内で留めるようにした。

そして、2003年にエコツーリズムの推進調査を行い、2007年にエコツーリズム推進法をつくった。環境省のページにエコツーリズム総覧というデータベースがあるので見てください。

53地域から手が挙がり、13地域をモデル地域として選定。3年間年間500万円の予算を分配して始まった。カテゴリーは3つに分かれていて、一つ目は自然豊かな地域。これはいずれもその後、世界自然遺産になった。二つ目は、もともとの観光地をエコツーリズムにシフトしたいと思っている地域。

三つ目は、里山地域で、これが一番手を挙げた地域が多かった。

里山は、観光とは縁がなかった地域で外から人を受け入れることが課題。裏側の意図は地域にずっと在った食べ物や文化の伝承保全がおおきな課題としてあった。これが「日本型エコツーリズム」と呼べるのではないか。

日本はバリエーションが多い。ひとつのエリアでも二つの資源があるところもある。

エコツーリズムは、「守っていく、伝えていく、つないでいく」ことがテーマでありそれが理念としてある観光を言う。また観光の原点として「国の光を観る」という中国の占いの本の言葉が素で、『光』は地域の宝を示している。そして地域の資源を活用するコミュニティービジネスである。

図のようなきれいな三角形が理想で、資源の保全が小さくなると経済追求型になってしまうので資源が続かないものになってしまう。

二つ目の特徴は、進めていくにはいろいろな方の参画が必要で、図のような5つの主体が必要。ルール作りなどは研究者や専門家の役割で、行政は、地域を繋いだり、人材育成また自治体の基本構想に載せていくことで裏付けをしていただくことが必要。

エコツアーは、エコツーリズムを形にしたツアー商品である。自然を体験するだけではエコツアーではなく、自然の切り売りになってしまう。体験の理由が地

域と結び付きがあることが必要。

岐阜県の飛騨地域では、外国人の参加がすごく増えている。

エコツーリズム協会では、エコツアーの良い基準を出している。

ディープでアドベンチャー的なものばかりではなく、子どもたちが参加できるバリエーションをつくるとか、マストツアーの中にちょっとしたエコツアーを取り入れているところもある。いろいろなバリエーションがある。

事例として、西表島では94年に準備会が始まり、島の方々が島のガイドブックを作成し、その出版記念パーティーをきっかけに島の方だけでエコツーリズム協会が始まった。メインは島の文化を伝えていくことをやっている。ツアーは参加者がつくればよい、という発想。

小笠原は、1989年からホエールウォッチングが始まりで主なツアーの対象はほぼ動植物である。ガイドさんたちが自主ルールをつくっている。

無人島は東京都が育成した認定ガイドしか案内できない仕組みも作ってある。

知床は、マストツーリズムからエコツーリズムにシフトした場所である。ホテルも大きいものが4つくらいあり、ここで自然情報を流している。

尾瀬は、県条例により小学校5年生が尾瀬自然学校に参加することになっていて、それによりガイドもビジネスとして生計が立つ仕組みになっている。裏磐梯は、大きな予算をかけないで、毎年住民参加型で自然をモニタリングしている。毎年の調査で自然の変化が解るようになっている。

長野県軽井沢町では、星野リゾートの敷地内で行っている企業型ツアーである。毎朝9時から2時間ツアーがあり、予約なしでも参加できる。

徳島県の吉野川では、石積職人から技を学ぶという小さなツアーをやっている。職人はもう一人しかいない。毎年大学生が実習に来てツアーを支えている。

白川村では、木の皮のヒデ細工。飯能は、エコツーリズム推進法認定第1号で、林業が疲弊する中、新しい試みとして市長のトップダウンで始まった。市民総ガイドを目指している。

岩手県宮古市は震災復興を兼ね、神社に神楽がありそこまでトレッキングをするツアーと、トレッキングと防災ツアーもある。

飛騨古川は自転車ツアー。長いコースと短いコースがあり、海外で浸透して外国人の参加が増えている。高山に来ている外国人が流れてきている。

高山は市街地ではなく郊外のNPO主体で普及の実証実験をしている。

三重県鳥羽では、今年推進法の認定を取った。離島ガイドを小学生が総合学習と連携してやっている「島っ子ガイド」を行っている。3年生からガイドになり、1～2年生は見習いで付いていくだけ。5～6年になるとベテランである。うまくいっている。

このようにいろいろな地域があり、赤城とつながるところとそうでないところ

があると思う。

地域の宝探しをすすめるには、まず宝と思うモノ出し合うことが必要。それをそのまま売っていかうとするとたいがい行き詰る。宝の意味を調べ、地域の人でまず伝えるツアーをしてその価値の確認をする。実証実験をして自信がついたらツアーにしていく。

宝さがしの切り口は、『自然、生活環境、歴史・文化、産業、名人』である。徳之島では、ひしゃくでほうじ茶を泡立て「ふり茶」というものがある。また、夕方には有名な闘牛の牛が散歩をしている。このようなことは、行かないと見えない。これらを宮古市では、学生も参加して月別のカレンダー作りをして整理している。

地域が持っている宝をストーリーとして伝えることにより、それが素敵な体験となれば「もう一回来よう」となる。1回だけでは、地域活性にならない。

協議会をつくったらそこに首長さんが入る。議論を続け全体構想をまとめる。これが通れば国が認定地域として認められる。

鳥羽市の例では、必要性の理解、自治体の理解、ワークショップ、協議会メンバーの役割、予算(鳥羽では30~50万円)く

認定に向けたプロセスを淡々と進めていく。

赤城ではまず、宝探しをしながら地域の理解を深めることが必要だと思う。

共通理念をつくる必要がある。

②質疑応答

Q1：エコツアーは首長が中心になるとの話であったが、エリアによっては広域になり、複数市町村にまたがる場合はどうなるか?

A1：沖縄の慶良間では、渡嘉敷村と座間味村で海域を共有し、二人の村長がサインをしている。協議会は両村にある。奄美にも同様の例がある。赤城は、陸続きの広域になるので良い事例になるのでは。

Q2：さきぼと外国人のツーリストが増えているとの話だったが、省庁の動きはありますか?

A2：観光庁は動いている。プロモーションをやっている。また、多言語化の動きはある。観光庁が本を出している。

Q3：裏磐梯で住民参加のモニタリングをしているとのことだが、どんなことをしているのか?

A4：10項目くらいある。まずば、水質調査。ザリガニ、オウハンホンソウという植物の調査。野鳥の会が毎週調査している。さらに熊棚の調査。湖周辺のトレッキングコースの景観保持のためにアシ狩り。外来の水草調査などを福島大学、エコツーリズム協会、ビジターセンターなどの協力で行っている。

Q5：農家民泊など旅行業法や消防法の問題にならないか?

対処方法、セミナーなどはあるか？

A5：関係者を呼んで勉強会をする必要があろう。また、車でガイドすることも推進法を取るメリットである。

通訳案内・ガイドなどもルール違反を黙認している部分もある。

2)【2回目派遣】

第3回 赤城山エコツアーリズム推進準備会

～グループワーク「宝さがし」～

(数字)は同じ意見の方の数です。

①生活の宝

○チームA

後閑養鶏のプリン、昭和村の生クリームのシェークリーム、キャベツ、ハウレンソウ、田口菜、粕川納豆、宮内菜、時沢大根、石倉ネギ、とうもろこし(赤城県道沿い)、とうふ、豚肉、とんとん広場のしゃぶしゃぶ、鮎、そば(3)、おつきりこみ(2)、良農園の野菜、焼きまんじゅう(2)、酒、キノコ狩り、青木山荘、塩原蚕種(2)、赤城型民家、黒沢家住宅、やぐらのある農家、防風林、赤城神社のお祭り(3)、ムカデ伝説、上州座繰り、飛石稲荷、つっかけまんどう祭り、雪まつり、月田のさらち、赤城神社えんむすび、名峰赤城

○チームB

林牧場のソーセージ、つめっこ汁、時沢大根、赤城山日本酒、ぶどう、赤城神社、えんむすび、数が多い(2)、むかで伝説(2)、戦場ヶ原、1200年の歴史、円筒型分水、赤城おろし、国定忠治の岩屋、大胡ぎおんまつり、大胡荒れじし、幕府埋蔵金、赤城やま(唯一やまと読む)、赤城姫渕名雄等伝説、建物基礎が2m

○チームC

伝統料理、そば、うどん、日本三大うどん、田口菜、時沢大根、養蚕農家、神社、立志式、山伏、滝行、国定忠治、国定駅、方言、赤城と日光の戦い、大前田英五郎、徳川埋蔵金、女性が働く、メディア発信

○チームD

とんとん、生ハム、切り干し大根、干し柿、そばかぎ、自然の氷、赤城型民家、人なれ、民話、木の器、木のおもちゃ、陶芸、トナカイの角

○チームE

おつきりこみ、焼きまんじゅう(3)、室沢棚田の米、赤城の湧水を利用した酒、粉の文化(ひもかわうどん、パスタ)、漬物、醸造酒しょう油蔵、ななめ間口と敷地が長い、赤城神社(3)、貴船神社、威光寺にある赤堀道元の姫の帯、養蚕塩原蚕種、赤城型民家、二之宮・三夜沢・大洞の赤城神社、阿久沢家住宅、織物、鍵屋根

○チームH

ワカサギ料理、時沢上泉大根、うどん、粉文化、ホウレンソウ、おっきりこみ、酒、二毛作地帯(米・麦)、リンゴ、ブルーベリー、焼きまんじゅう、手作りみそ、養豚、養鶏、赤城の恵み、上毛かるた、そば街道、トウモロコシ街道、山椒つみ、栗ひろい、キノコ狩り、だんべ踊り、初市まつり(だるま)、信仰の山、水争い、古道、切りバラ、赤城神社、粕川の棚田、アイスバーン、城、鈴が岳・地蔵岳のお社、薪割りストーブ、キャンプ場、防風林、国定忠治、釣り、青木旅館の屋根と廊下、古墳、明治～大沼の製氷業、4月8日山開き、運動会(上毛三山リーグ)、空っ風、大前田英五郎、伝説

②自然の宝

○チームA

市内から1時間以内でスキー場、赤城山スキー場(そり遊びのメッカ)、あじさい園(荻窪)、降雪赤城山、結氷大沼、標高700mk道沿いツタウルシ、大桑の木(音羽倶楽部)、鳥がみられる場所、天然温泉、千本桜+芝桜、鳥居峠の霧景色がきれい鍋割山、富士山が見える長七郎山、スカイツリーが見える鳥居峠、つつじ(2)、珍しい動物、紅葉と霧が同時に見える箕輪地区、大沼(2)、小沼、覚満淵(3)、鹿が多い、紅葉、西林寺、上泉伊勢守の墓、桃木川の土手から見る赤城山、鳥見小屋、星がきれい(2)、ハイキング、登山、市内と山頂との温度差10℃、眺望・スカイツリー東京タワーサンシャイン

○チームB

イノシシ、タヌキ、鹿、水、千本桜、雪、御神水、サントリー、氷、乙女滝、ホタル、棚田、ジャンプ台、赤城神社、からっ風、温泉、大沼、ケーブルカー

○チームC

桑畑、キャベツ、湖、田口のホタル、大沼(3)、小沼(2)、スキー場、広瀬川、風呂川、赤城おろし、空っ風(2)、不動大滝、伝説、河岸段丘、大洞の牛、ニッコウキスゲ、つつじ(2)、白樺(2)、千万桜、笹、嶺公園のミスバショウ、リンドウ、星空、夜景(5)、花火(2)、眺望・スカイツリー富士山、高山植物、紅葉、覚満淵、湿原、百名山、ワカサギ(2)、末、松枯れ、朝焼け、イノシシ、鮎、雷、日照時間が長い、上毛三山、山付近の道、赤城山の景色、鹿

○チームD

富士見からの夜景、鳥居峠から見る覚満淵、鳥居峠から見る朝日、ホタル(2)、おとぎの森のミズナラ(2)、野菜がおいしい、粕川町中之沢の湧水、自然豊かなキャンプ、水がおいしい(2)、赤城おろし、溪谷(渡良瀬川沿いの橋)、渡良瀬の四季、沢入の白御影石、大間々の崖、滝、清流の魚や生き物、すそ野の広さ、サンデンから見る夜景

○チームE

赤城神社、覚満淵、遠望景勝、夜景、レンゲツツジ、赤城神社のでかい鯉、ワカサギ、紅葉、千本桜、赤城自然園、雷、すそ野の長さ2位、木の皮、雪山、アスピリンスノー、富士山、湖・大沼小沼

○チームF

松枯れ、富士山が大きく見える(2)、星がきれい(3)、大鷹、ヒメギフチョウ、からっ風(3)、ホタル、オオムラサキ、おとぎの森(癒しの空間)、空気が澄んでいる、いつでも山へ行ける、赤城山コース、高山植物、標高がいきなりに上がる、赤城山の各登山コース、大沼小沼のカルデラ湖、夜景、白樺林、夏涼しい(2)、白樺牧場はレンゲツツジ、秋の景色、雪質がよい、霧氷・風氷、すそ野が広い(2)、ミズナラ、ブナ、不動様、水がきれい、雪質がよい・パウダースノー、前橋から1時間の避暑地、氷上ワカサギ釣り、鳥居峠からの雲海

3)【3回目派遣】

第4回 赤城山エコツーリズム推進準備会（議事録）

①海津アドバイザーによる総評

（グループワーク）お疲れ様でした。前回引き続き、たいへん盛り上がったと感じる。私もこの地域の住民だったらぜひ入りたい思えるほどでした。よかったことはグループの中で「へ～それは知らなかった」というような反応があること。ある意味、（それを説明している）あなたこそが「名人」として自分の名前を書いてもよいくらいだと感じた。

宝さがしの総括として、この赤城山には非常に大きな可能性があるということを実感した。今回の集まりだけでなく、引き続き宝さがしは続けていただきたい。

さて、赤城のエリアは、たいへん自然が厳しいところである。冬は寒く夏は暑い、厳しい自然のある地域では、人が生きていくために知恵が蓄積されている。（発表の中でも）いろいろな知恵が生きていると思う。

さて、少し『名人』の掘り起しが少ないとも思う。

名人には物語がある。ぜひ名人に話を聞きに行ってみてほしい。

これから宝を磨いてほしい。それは自分が知っていることを、他人の意見で別の角度の知識が加わり深まっていくことである。

モニターツアーの目的は宝を誇る活動である。まず身内でやればよい。自分が宝だと思うものを人はどう思うかである。楽しんでほしい。

宝は『点』でツアーとは、それを結んで物語にすることである。

いきなり外に売らずに、焦らないで発信できるものを見つける。新しい宝も見つかる。

推進協議会をつくるということは、何を伝えるか、大事にしたいもの、たとえば国産の鶏は少なくなったとか、なぜ赤城で豚を買うのかなどの意義を共有して発信する。ブランドをつくっていくことが推進協議会である。伝えていく仕組みを作っていく中で「赤城ならでは」のものではできてくる。

宝の何かを捨てる必要はなく、多様であればあるほどいろいろな人たちが魅力を感じる。学生が知らないことに驚くことがあるかもしれないが、年齢や環境によって生きている世界が違うもので、それを伝える方法をたくさん活かしてほしい。

そんな中、モデルになるのは埼玉県の認定第1号の飯能市である。ここは、「市民総ガイド」を目指している。市民が作ったツアーを市が発信するシステムでいろいろなツアーを発信していて、リピーターも増えている。

赤城でも、鉄道を使ったツアーや食にこだわるものや名人を訪ねるツアーがあってもよい。そして、宝さがしを続けながらカレンダーにしていく方法もある。

みんなでわいわい言いながら続けていくことである。 以上

(5) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

エコツーリズム、又は、地域資源について理解が得られた（エコツーリズムとは何か、について従来型のマス観光との違いなどについて共通理解ができました。）

今まで課題としていたことがより明確になった（具体的内容：地域や業種ごと個々に取り組んでいた観光について、エコツーリズムの旗の下で一つになれたような気がしています。勝負はこれから。これらをどのように結び付けていくかです。）

今までの課題に対して取組方が分かった（いいものをちゃんと広報していくこと。群馬県人の特徴とも言えますが、発信力が弱い事の自覚ができてきたと感じています。具体的な方法を模索したいと思います。）

今までとは別の課題が明らかになった（これはこれからだと思います）

2) 今後期待される効果

農業、工業、商業、畜産業、交通関係者など地域の異業種の方々が同じテーブルで話をする事そのものに意義を感じています。

3) 今後の取組

「宝さがし」で抽出した資源について、高崎経済大学の水口先生のゼミ生による資源モニタリングを行い。それをもとに「赤城山エコツアーカレンダー」を作成。

2月21日（土）には、今までの準備会の進捗状況の報告会を兼ね、シンポジウムを国立赤城青少年交流の家で行う予定。

3月には、有志住民によるモニターツアーを2回実施する予定。

夏をめどにエコツーリズム推進法にのっとりた協議会発足に向け、月1回のペースで委員会を開催していく

(6) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

- ・エコツーリズムについて、共通理解が得られた。
- ・地域の異業種の方々が同じテーブルで話をする事に意義を感じた。

【記録写真】



1月20日「宝さがし」第2弾 グループワークの様子



海津アドバイザーによる総括の講義の様子



グループワークの写真

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

文教大学国際学部国際観光学科 准教授 海津 ゆりえ 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

対象地域は赤城山、わたらせ溪谷、利根川、両毛線に四方を囲まれた一体的な空間である。スカイライン、河川、交通によって分断された行政域をまたいだエリアで、赤城南麓として古くから人流・物流両面から交流があった地域である。同地域で信頼度が高く、自然保護活動の歴史と実績のある「赤城自然塾」を事務局としてエコツーリズム推進法による認定地域を目指しており、今回のアドバイザー派遣事業はその支援活動となる。

「赤城山エコツーリズム推進協議会発足に向けた準備会」が平成 26 年 10 月 16 日を第 1 回として開始、平成 27 年 1 月に第 4 回を実施し、2 月 21 日に「赤城山エコツーリズム推進協議会」設立総会を迎えるに至っている。

②課題

協議会設立や、その後の認定取得までのロードマップを描き、計画的に準備を進めておられるため、プロセスにおける課題は少ないが、観光振興に課題を抱えていることやブランディングへの課題等を背景として自治体や企業、文化施設や個人商店等幅広く多様な人材をメンバーに擁していることから、今後の組織づくりや商品開発、広報、受け入れ体制などの一連の体制作りが課題であろう。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①赤城^{おろし}嵐と国定忠治で有名な赤城山麓の一体的な風景とスケール感、空の広さは他にない魅力である。赤城山の恵みは水、土壌、まだ若い森林、広い敷地を活かした様々なビジネス等に及び、ジオパークとしての資源の生態系を築いている。

②厳しい気候と火山という特殊な自然条件が育んだ食は年間を通じて多彩である。食の魅力は旅の原点である。

③豚の牧場と地産地消レストランや自然保護活動等の CSR に力を入れる企業、造り酒屋や起業農家、地域の魅力掘りおこしに力を入れる鉄道会社など、赤城山と結びついた多様なビジネス。「なぜここでこのビジネスなのか」、のストーリーができていく。数々の伝説や日本史に登場する歴史エピソード、いわれなどが多数。集落や寺社等、まちあるきの範囲でも出会える資源も豊富である。

3) アドバイス（講義等）の概要

アドバイスは①第 2 回準備会・②第 3 回準備会・③第 4 回準備会の 3 回に亘って行った。各々の議題とアドバイス内容は以下のとおりである。

①第 2 回：2014 年 11 月 11 日

第1回準備会の際に桜井良維英氏より、エコツーリズム推進法について講義を終了していたため、「エコツーリズムとは何か」に焦点を絞り、講義という形でアドバイスをを行った。要点は次のとおりである。

- ・エコツーリズムの定義、歴史
- ・エコツアーの多様性(多様な事例の紹介)
- ・エコツーリズム開発の進め方

宝探しとエコツアーの実施の並行実施を勧め、次回以降は宝探しを取り入れることとした。

②第3回：2014年12月2日

宝探しのワークショップのため、実施方法の講義を行う。宝探しは自然、文化を取り上げてグループワークで行った。高崎経済大学学生や市職員も加わり、世代や立場を越えた作業が開始された。狙いは宝の再確認と、エコツアーにどのように結びつけるかをボトムアップ型で考えてもらうことである。

③第4回：2015年1月20日

宝探しワークショップの2回目として、歴史、産業、名人についての宝の掘り起しを行った。前回メンバーに新しい参加者を加えて賑やかに実施された。グループ内に語り部を発見するなど収穫があった。

次回は事業外で3月20日に行う。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

全体構想を作成することを前提として協議会を発足している。2015年2月21日に協議会が正式に発足したところである。今後はスケジュールに乗って構想提出までスムーズに進むものと思われる。

②全体構想認定に向けて、今後必要なこと

本地域は、自然保護活動や観光振興において歴史的な積み重ねを有しており、また自然を基盤とする企業活動も活発であることから、エコツーリズムへの理解や必要性の認識に確かなものがある。これだけの多彩な参加者を毎回集めて議論の場を設定しうるだけのポテンシャルは、そう多くの地域にあるものではない。また青少年を対象とした環境教育の指導を行ってきた自然塾のワークショップ運営能力は高く、まとめる力量がある。構想策定への取組も安心感をもって支援できそうである。期待値も高い。

一方で、大きな会議体をボランティアベースで支えていくためには、モチベーションを絶やさずに済むよう、計画をしっかりと立て、メンバーの参加・活躍場面をふんだんに作ることと、事務局機能を分担するなどガバナンスが発揮できる体制づくりが重要である。目先の利益ではなく、10年、20年の地域づくりとして、

市や県の計画に盛り込み、公的なサポートを明確にしていくことが重要である。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

前橋、沼田、高崎、桐生など「赤城」一帯の自然・文化全般に亘る高い資源性、みなさんの郷土愛の強さ、話し出したら立て板に水の多いこと、企業の方々の謙虚な姿勢など、感銘をうけることばかりです。エコツーリズムはこれまでの観光の取組や組織などの否定や塗替えではなく、新たな視点やルール、配慮を組み込んで地域全体と観光を見つめ直す、リセットの機会です。これまで繋がっていなかったところに橋をかけていく、そんなつもりで取り組んでください。事務局が疲弊しないことも秘訣です。

赤城の魅力は奥が深いのです。いずれはガイド養成なども行い、たくさんのプログラムとガイドを育てて行きましょう。

3-7. 一般社団法人檜原村観光協会（東京都西多摩郡檜原村）

(1) 地域の概要

【人口】

2,406人（平成26年9月1日）

【地勢】

檜原村は東京都の西に位置し、一部を神奈川県と山梨県に接しています。村の周囲を急峻な山嶺に囲まれています。総面積の93%が林野で平坦地は少なく、村の大半が秩父多摩甲斐国立公園に含まれています。村の中央を標高900mから1,000mの尾根が東西に走っており両側に南北秋川が流れていて、この川沿いに集落が点在しています。

【面積】

105.42km²

【自然】

自然の宝庫、東京都の奥座敷といわれており、豊かな自然は多くの動植物を育み、奥秋川の清流と奥深い山々は、格好の繁殖地として多くの鳥獣や植物が東京の中で見ることができる数少ない貴重なところです。

【歴史】

村の歴史も古く、明治22年の立村以来百有余年、名称も区域もそのまま秋川源流の大自然の中で貴重な歴史を積み重ねてまいりました。縄文時代の遺跡をはじめ多くの出土品が発掘されており、伝統芸能は式三番叟、神代神楽、囃子、太神楽、獅子舞等が連綿と伝承され、毎年初秋には各地域で盛大に上演されます。

【観光】

観光面では、村の80%が秩父多摩甲斐国立公園となっており、豊かな自然の佇まいそのものが観光資源であります。村を訪れる観光客は、四季、さまざまな彩りに魅せられ年間37万人にも及んでおります。また神戸岩や払沢の滝、歴史・文化遺産を展示した郷土資料館や滝巡りなどの観光ルートや、山岳自然公園の都民の森が人気の的となっており、加えて、民宿の多い数馬地区に「数馬の湯」として温泉センターもあり、日帰り観光を含め多くの方々に親しまれています。

【地域資源の概要】

①払沢の滝

日本の滝百選に入る払沢の滝は檜原村の滝を代表する名瀑で、通年多くの観光客が訪れます。落差は4段で約60m。最下段（落差約26m）の落ち込みにある深い淵はとても神秘的で、古くから大蛇が住むと伝えられてきました。また払沢の滝は厳冬期に美しく結氷することでも知られています

②神戸岩

神戸川上流にある高さ約 100m、幅約 140m の大岩壁がそそりたつ豪快な岸壁で都の天然記念物に指定されています。目の前に大きく立ちほだかる自然芸術は圧巻です。岩間のトンネルから裏側にも出られます。

③都民の森

檜原都民の森は、標高 1,000 メートルから 1,500 メートルの高地で自然を身近に感じ、楽しむ事ができる山岳公園です。ブナが残っており貴重な財産であるとともに学術的にも貴重な自然林で、高齢者や車いすを利用されている方でも気楽に利用できる施設です。

(2) アドバイザー派遣申請の背景

1) アドバイザー派遣申請の背景

檜原村は、大半が秩父多摩甲斐国立公園に含まれており、三頭山を頂点とする自然林や秋川源流域の滝や溪谷美、四季折々の花など豊かな自然環境を有している。過疎化が進む中で、このような豊かな自然を活かし、自然環境保全と地域活性化を図るエコツーリズムに着目し、NPO法人をはじめとする市民団体によって試行的な取組が行われるようになった。

また、秋川流域のあきる野市および日の出町を含む広域圏でジオツーリズムに取組む機運が高まっており、檜原村においても受入体制を検討する必要がある。

2) これまでの取組

- ・暮らしぶり体験ツアーに関わるガイド講習会（檜原村村観光協会）
- ・地域資源掘り起し調査とエコツーリズム講習会の開催（NPOフジの森）
- ・森林セラピー推進協議会での協議（檜原村）

(3) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 27 年 1 月 27 日（火）～29 日（木）
場 所	【視察】 払沢の滝、神戸岩、都民の森・セラピーロード、数馬集落、兜造の宿泊施設、小林住宅、数馬分校記念館 【講習会】 地域交流センター
ア ド バ イ ザ ー	NPO 法人片品・山と森の学校 副理事 安類 智仁 氏
参 加 者	合計 13 名
スケジュール・方法	<p>【1 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 檜原村観光協会にて講師紹介及びガイドダンス ・ 視察：払沢の滝、神戸岩、小林家住宅 ・ 講習会：尾瀬のガイドの取組について <p>【2 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 視察：都民の森セラピーロード、数馬集落、数馬分校記念館 ・ 講習会：ネイチャーガイドの基本スキルについて <p>【3 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 講習会：檜原村におけるガイド組織について

(4) アドバイスの内容

1) 尾瀬のガイドの取組について

①尾瀬ガイド協会の設立

ガイドが提案し、自治体の支援を得て設立

②尾瀬のガイド登録

ア. 尾瀬自然ガイド：地域限定

イ. 尾瀬登山ガイド：全域

③ガイドレシオの重要性

1：15 以下となるようにガイドを派遣。顧客満足度の観点からも重要。

④尾瀬自然学校

群馬県内の小中学校が対象の校外学習でガイドレシオは 1：8。

⑤ツアーバスの受入

ツアーバスで初めて尾瀬を訪れる人を受け入れ、ガイドで楽しんでもらい、リピートしてもらうことを目指す。事業戦略上、ツアーバスはガイド料が安くても外せない。

⑥広域連携の必要性

ピークが異なる地域と連携することで、ガイド不足を補っている。谷川岳と尾瀬は連携しやすい。また、スノーシーズンは、スキー場でガイド事業を行っている。ガイド事業を通年で行うには、広域で活動する場を確保する必要がある。



弘沢の滝視察



神戸岩視察



小林家住宅視察



小林家住宅外観



講演の様子



講演の様子

2) ネイチャーガイドの基本スキルについて

①ガイドに求められる基本スキル

ア. 専門性

見えるものを解説することに加えて、その背景にあるものを解き明かし、見えないものを伝えていくことで、参加した人に満足してもらえる

イ. エンターテインメント

今ある地域資源から、楽しさを創り出していく能力が必要になる。

ウ. オリジナリティ

特別性の演出。地域らしさ、地域ならではの、そのガイドらしさ、そのガイドならではの、を演出する。

エ. コミュニケーション

人と人との関係をスムーズにする。情報の伝え方、聞き方の技術が求められる。

②情報の伝え方

ア. 理解のゴールを示す

イ. 相手を見る

ウ. 情報を分ける

エ. 一区切りを小さくする

オ. 情報構造を開示する

カ. 欲張らない

キ. 曖昧さを無くす

ク. 根拠を示す

ケ. 引率する

コ. イメージさせる

③聞き方の技術

ア. 促しと繰り返し

イ. 要約

ウ. 質問

エ. 共感

④プログラム運営に必要な能力

ア. 価値観の考え方・ハート

イ. 安全管理

ウ. 解説

エ. 運営

オ. 経営



都民の森視察



都民の森セラピーロード視察



数馬集落視察



講演の様子



講演の様子

3) 檜原村におけるガイド組織について

①ガイドや組織が連携するには

- ・情報のアンテナを張る
- ・足で稼ぐ
- ・面白いことを発見する力を養う
- ・チャレンジする気持ちを持つ
- ・尾瀬保護財団では、毎週情報発信を行っている

②ツアー受入の考え方

- ・あまり安く受けない（参加費の目安 1,000 円/h）
- ・最少催行人数を設定しない

③今後の進め方

- ・先進地視察研修（上野村、片品村、みなかみ町など）
- ・関連組織の情報交換（観光協会、NPO フジの森、数馬観光デザインセンターなど）
- ・ガイドのネットワーク化（元都レンジャーの協力、ガイド・ウォークの会など）



講演の様子

(5) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

①エコツーリズム、又は、地域資源について理解が得られた

- ・視察先を初めて訪れた参加者も多く、アドバイザーに対する地元ガイドの解説を通じて、参加者に対しても地域資源の理解が深まった

②今まで課題としていたことがより明確になった

- ・ガイド人材の確保・育成が課題と認識していたが、アドバイザーの指摘により、ガイド料の設定が大きく影響していることが明確になった
- ・尾瀬の取組を通じて、ガイド組織の重要性を理解できた

③今までの課題に対して取組方が分かった

- ・エコツアーリズム先進地の尾瀬でもガイド組織づくりに何年もかけており、地道に取り組むことが重要であると理解できたが、特にガイドと行政との連携や情報共有がポイントになることが分かった

2) 今後期待される効果

- ・今回参加したガイドおよび関係団体において、エコツアーリズムに関する情報交換が進む
- ・エコツアーリズム先進地への視察研修の機運が高まる（尾瀬、谷川岳等でのガイドの実態を安類アドバイザーから学ぶ）
- ・安全管理や解説だけでなく、経営を意識したガイド事業が展開されるようになる
- ・ガイドのリーダーによるガイド組織設立に向けた機運が高まる

3) 今後の取組

- ・ガイド同士の情報共有の場の設定
- ・町内関係組織が連携したツアーの実施
- ・ガイド研修の継続実施（講座・視察）
- ・ガイド組織の設立

(6) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

- ・尾瀬ガイド協会での研修制度
- ・尾瀬保護財団及び群馬県の支援活動
- ・谷川岳エコツアーリズム推進協議会と尾瀬との連携

2) その他感想

アドバイザーの活動拠点である群馬県片品村と檜原村との共通点が多く、尾瀬の取組を詳細に解説してもらうことで大変参考になった。

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

NPO 法人片品・山と森の学校 副理事 安類 智仁 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

檜原村は島嶼を除いた東京都唯一の村であり、奥多摩町とともに都内最西部に位置している。村のシンボルである三頭山周辺にはツガの巨木が多く、かつては幕府直轄の御林として林業が盛んであった。また御岳山信仰の拠点でもあり、御岳山ケーブルカーが敷設されるまでは大岳山とともに参拝者で賑わったと考えられる。

現在の人口は約 2,200 人で、採石業、芋類を中心とした農業、観光業が主な産業であり、特に観光業では都内からのアクセスの良さを活かしたオートキャンプや釣り、三頭山登山や都民の森などでの自然体験活動が盛んである。

また村をぐるりと取り囲む山々の稜線では、日本で最も古くから行われている山岳耐久レースである「長谷川恒夫カップ」が毎年開催されるほか、ヒルクライムやマウンテンバイク目的の来村者が多い。

②課題

自然資源の豊かさや、都内からのアクセス面、現在の利用状況など、様々な面でエコツーリズム推進のポテンシャルを持っている地域であるが、その推進体制が築かれていない点が課題である。この根底には歴史的背景による地区間のわだかまりがあるため、行政も資金投入しづらい面があると思われる。地元側で受け皿となれる組織作りが必要である。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

村内を取り囲む山々は標高 1000～1500m 付近にあり、生物多様性のホットスポットであると思われる。今回の訪問は冬期であったが、グリーンシーズンに稜線や沢沿いを歩いてみたくなった。

また山岳耐久レースコースだけあって長大な稜線が続くが、あちこちに村内へと下山するエスケープルートが作られており、近年ブームとなっている登山のステップアップ的的山域として活用できると考えられる。

3) アドバイス（講義等）の概要

受入側からガイドの組織化や、ガイドング技術についてのオーダーがあったため、尾瀬認定ガイド制度やその協会づくりの経緯についてアドバイスを行った。また同協会で尾瀬認定ガイド向けに行われている研修プログラムを用いてガイドング技術についても紹介した。

・尾瀬ガイド協会 (<http://www.ozeguide.net/>)

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

推進体制づくりの段階のため、現状では全体構想には着手していない。

②全体構想への意向について

同上。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

同上。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

地域の資源を活かした様々なチャレンジを繰り返している雰囲気や派遣期間中に感じる事ができた。それと同時に各団体が個別に努力されているため、つなぎ合わせる存在が必要である事も派遣中にお伝えしました。

様々な団体が集まって地元と行政をつなぐ役となり、そこで地区間の垣根を越えられるような共通目標が設定できれば大きく進展できていると感じています。

3-8. ようこそ鋸南プロジェクト（千葉県安房郡鋸南町）

(1) 地域の概要

【人口】

8,673人（平成26年4月時点）

【地勢】

鋸南町は千葉県の南、房総半島の西南、安房地域にあり、北は富津市、東は鴨川市、南は南房総市に接し、西は東京湾に面している。都心から65kmに位置し、風光明媚な海

岸線を有し、また海岸より山間部にかけては低山ながらも豊かな山系を有し、北部には標高329mの鋸山がある。中央部以東は狭い山間地帯で、中央部以西は海岸に向かって平坦地となり、最西端に市街地が展開している。公共交通機関としては、JR内房線と、国道127号線や館山自動車道が南北に走り、生活幹線となっている。

【面積】

45.16㎡ 東西10.75km・南北7.30km

【気候、自然】

年間平均気温は18.1℃（平成25年平均）、冬季（12～2月）平均気温は8.4℃で、昔から「鋸山を越えると肌着が一枚いらぬ」と言われる温暖な気候。温暖な海洋性気候と風光明媚な海岸線は古くから海水浴場として栄えてきた。北部には、名刹日本寺や日本一大きな石仏を有す標高329mの鋸山があり、また冬季は町内のいたるところで水仙の芳香が漂う。

【歴史】

縄文・弥生時代	紀元前200年頃	田子の台遺跡	田子の台遺跡には現在竪穴式住居が復元されている。
古墳時代	大和時代300年頃	浮島	伝説の島として景行天皇が浮島に行幸の際、磐六鹿命が魚介を調理して献上したという伝説が残る。
奈良時代	725年	日本寺	鋸山に日本寺が建設される。海中より出現したと伝えられる梵鐘がある（国指定重要文化財）。
平安時代	1180年	源頼朝上陸地	石橋山の合戦に敗れた頼朝は三浦半島から逃れ、勝山海岸に上陸。兵をたてなおし、12年後に鎌倉幕府を築きあげる。上陸地には記念碑が建立されている。
	1181年	日本寺	源頼朝日本寺復興。
鎌倉時代	1253年	妙本寺	妙本寺の日蓮愛染不動感見記は、日蓮が開宗した翌年に描いたとされる書。初期の筆跡として大変貴重なもの（国指定重要文化財）。
南北朝時代	1333年	日本寺	日本寺兵火にかかる。
	1335年	妙本寺	日郷上人妙本寺を開く。
江戸時代	1630年	捕鯨	近代捕鯨の祖、醍醐新兵衛定明（初代）が生まれる。

	1704年	捕鯨	近代捕鯨の祖、醍醐新兵衛定明（初代）没。このころまでに鯨突組を確立。
	1779年	安房の名工	安房の名工（石彫り）武田石翁が生まれる。
	1806年	勝山藩	小林一茶、勝山藩に駐留する。
	1845年	捕鯨	英国捕鯨船が勝山沖に停泊する。

【観光・地域資源の概要】

年間観光客数 83 万人（平成 25 年調査調査地総計）

鋸山・日本寺

名刹日本寺や日本一大きな石仏を有す標高 329m の鋸山は、富津市・金谷よりロープウェイでもアクセスできる南房総有数の観光地

水仙 日本三大水仙生産地

海水浴場 房総海水浴発祥地

ばんや 年間 40 万人が訪れる漁協直営の飲食店

菱川師宣記念館 「見返り美人」で有名な浮世絵の創作者菱川師宣の誕生の地

(2) アドバイザー派遣申請の背景

1) 背景

千葉県安房郡鋸南町は鋸山の南に位置し、東京湾に面するとともに、町の総面積 2,325ha の約 3/4 を農林地面積が占める自然資源が豊かな町。また、農業従事者が町の全就業者数の 16% に達するなど、農林漁業が町にとって重要な産業となっている。さらに、江戸時代から菜花や水仙の有力な生産地であったことから、特に年末～夏にかけて、水仙、菜花、頼朝桜（河津桜）、アジサイ、スターチスなどが町内の至る所で見られ、これら花の観賞のために町内を訪れる方は年間約 10 万人に上る。一方で、近年の定住人口の減少（直近値で 9,000 名弱）、高齢化の進展（高齢化率約 40%）、農業従事者の減少（直近約 600 戸余）が進んでいます。併せて少子化も進展しており、かつて 3 校あった町内の小学校が廃校により 1 校に集約されるなど、地域活力の減退、地域コミュニティの核の喪失、農業の担い手不足と耕作放棄地の増加などが懸念されている。

2) 地域課題

2012 年度より「農山漁村活性化プロジェクト交付金」等を活用し、廃校利用による都市交流施設の整備、およびその周辺環境の整備を町で進めている。都市交流施設を核とし、併せて施設周辺に広がる豊かな自然環境を体感してもらうことで、首都圏や海外からの集客を促進することを検討している。

既に町内では、町民からなる各種団体が、ハイキング、ポールウォーキングなどエコツーリズムの概念に近いプログラムや、町外からの農業体験の受け入れ活動などを実施中。

しかし、それぞれの活動が十分に連携しておらず、また町全体で共有すべき自然

環境の保全・活用の理念や方針なども十分に想定・共有されているとはいえない状況。

3) 申請目的

上記の課題を解決するため、エコツーリズム推進アドバイザー派遣を利用させていただき、エコツーリズム推進に当たっての資源の発掘、取組体制の構築、組織の立ち上げ、新たなプログラム開発等を行いたいと考え申請した。

(3) アドバイザー派遣の概要

日	時	平成 27 年 1 月 27 日 (火) ~ 29 日 (木)
場	所	千葉県安房郡鋸南町
アドバイザー		観光・地域づくり研究員 緒川 弘孝 氏
参加者		合計 14 名
スケジュール・方法		<p>【1日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視察：海岸線側、水仙ロード、菜の花圃場 ・鋸山ガイドツアー体験、菱川師宣記念館見学 <p>【2日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ウォーキングイベント企画者ヒアリング ・視察：佐久間ダム、をくづれ水仙郷等 ・農業体験実施団体圃場視察・ヒアリング ・講義：「エコツーリズムによる地域振興のあり方」 <p>【3日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ばんや定置網漁体験視察 ・クロススポーツコース視察・ヒアリング ・ワークショップ：お宝マップ、季節暦作成

(4) アドバイスの内容

<講義> 「エコツーリズムによる地域振興のあり方」(鋸南町中央公民館)

1) 講義内容

エコツアーとは、自然と文化を楽しんでもらい、それらを守る気持ちを育み、地域のために対価を支払ってもらうことというのが前提であり、特別な自然でなくとも地域を知った人だからできる説明の仕方によって「地域の宝」となること学ぶ。(参考:ニュージーランド・マオリの暗闇の中で動物の気配を感じるナイトツアー。森に祈りをささげる行為だけで、知識ではない深い畏敬の念を感じることができる。)

日本で参考になる事例としては、当町で進めている廃校利用の宿泊を既に実施している南アルプス生態邑がお勧め(その他は日本エコツーリズム協会のウェブサイトで検索できる。)

エコツアーを実施するメリットは、滞在時間が長くなることで、感動も深くなり、

ファンを作ることに繋がることである。

但し、どのように展開するかの前に、なぜエコツアーに取り組むのかを考えることが必要である。

エコツアーを実施することで、減少を続けている人口が増加に転じる程の働き口にするのは困難であるが、地域の自然と文化を守る気持ちを持った人が住み続けられる町とすることの助けとなるのではないか。

お客さんが水仙を見に来る本当の目的は、気持ち良い自然、家族等と過ごす時間を楽しむためであり、そのようなニーズに合った観光を作ることが必要。

また、日帰り誘致圏としては有利だが競合も多く、1泊ならほぼ全国がライバルとなるため、五感を使った本物の体験で訴求する。

質疑

Q:どのように地域の資源を拾い上げれば良いか。

A:外部から来た人の目線で探してもらい、モデルコースを作成してモニターツアーを実施することで、お客さんの反応を見る。

Q:エコツアーは誰が始めて行けば良いのか。

A:意欲を持った人が行動しないと立ち上がらない。

Q:ある町で実施できていることでも、同じような条件の隣町で実施できないのはなぜか。

A:これも意欲を持った人が居ればできる。一番の地域の宝は人である。

Q:今回視察頂いた感想は。

A:ボランティア精神で頑張っていらっしゃる方が多く、それは素晴らしいことだが、ガイド料や参加費などを頂けるように工夫できると、地域に少しでも経済効果が生まれ、後に続こうという人もできる。

Q:地域にお金が落ちるには、どのような工夫が考えられるか。

A:質が高いエコツアーをつくりつつ、食事や宿泊とのセットメニューにすることを考える必要がある。一方で、同様のツアーをダンピング価格でやらないことも必要となる。

2) <ワークショップ>「お宝マップ」・「季節暦」の作成（中央公民館）

鋸南町にある「地域の宝」を探するための方法として、地図にそれぞれが良いと思う場所を張り付けていく「お宝マップ」と、月毎の花、食べ物、祭・イベント等を記載する「季節暦」を作成するワークショップを実施した。

今後、異なる参加者も交えて、発展的に実施することで、エコツーリズムの題材となりうる「地域の宝」を発見、さらには連携することで付加価値を生み出すことができることを認識した。



お宝マップ作成

3) <視察>

①鋸山ガイドツアー体験視察

現在町で実施中の有料ボランティアガイドのガイドツアープログラムで、鋸山・日本寺エリアの案内を体験視察して頂いた。

コースは、鋸山ロープウェイを使い山頂展望台へ、そこで景色と石切場であった鋸山の歴史や地質を説明。その後、日本寺境内にある、百尺観音、地獄覗き、千五百羅漢、大仏、本殿エリア、そして下山後、土木遺産に認定されている石造橋「汐止橋」の案内を含め、2時間の視察を終了した。

講師より、ガイドをする上で心がけているポイントや、外国人案内時の対応方法等についてヒアリングを行いつつ行程を進めた。

②ウォーキングイベント企画者ヒアリング・体験視察（保田川沿い）

町で実施している味わいハイキングの企画、案内人に、企画実施の経緯や、現在の取組内容、注意点等についてヒアリングを行い、その後河津桜（頼朝桜）の花がほころび始めた保田川沿いウォーキングを体験視察した。

③農業体験実施団体代表者ヒアリング・圃場視察（佐久間地区）

現在農業体験を受け入れている2団体（AK アグリ、佐久間アグリサポート）の代表者へ受け入れ方法や対応方法についてヒアリングし、活動を実施している圃場も視察した。

④ 鋸南クロススポーツクラブ担当者ヒアリング・コース視察（嶺岡林道）

町内で「きよなん頼朝桜リレーマラソン」、「きよなんヒルズマラソン」、「きよなんアクアスロン+オーシャンスイム大会」、「鋸南アドベンチャーフェスタ トレイルランレース」等を実施するスポーツイベント企画団体に活動についてヒアリングを行い、その後「きよなんヒルズマラソン」のコースである嶺岡林道を視察した。

⑤ 町内視察・菱川師宣記念館・ばんや定置網漁視察

海岸エリアは、市町境の北端・明鐘崎から保田、勝山地区の海岸を経て南端・岩井袋と隣町岩井海岸に至る海岸線、里山エリアは「江月水仙ロード」と町特産品である菜花の圃場見学、みかん畑、佐久間ダム、「をくづれ水仙郷」等をご案内し、当町が海と山との両方が近接した町であることを実感頂いた。

町内出身の浮世絵画家、菱川師宣の作品を始めとした浮世絵の博物館である菱川師宣記念館を見学。

漁協が実施している定置網漁見学プログラムを視察した。

(5) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

① エコツーリズム、又は、地域資源について理解が得られた

エコツーリズムとは何かについて、講演後全参加者が理解の深まりを実感する結果となった。

② 今まで課題としていたことがより明確になった

当町の取組はまだ胎動期であることから、何が課題であるのかの認識も関係者間で共有できていなかったが、まずは無理にエコツーリズムを推進することが必要なわけではないこと、またエコツアーガイドの素質を持った方を探すことが課題であることを確認できた。

③ 今までの課題に対して取組方が分かった

エコツアーガイドの素質を持った方の中でも、特に意欲の強い方を中心に、ガイド講習への参加や他地域事例の視察をしてもらうことが最初に取り組むべき課題だと分かった。

④ 今までとは別の課題が明らかになった

エコツーリズムに繋がる可能性のある既存の活動であっても、活動の目的や意欲によって、エコツーリズムとして成立可否に違いがあることが認識できた。そのため、そもそもエコツアーを推進するかどうか、推進するとすればどのように関係者及び住民の機運を高めて行くのかについても、今後検討を要することが明らかになった。

2) 今後期待される効果

今回の視察を通じ、現在エコツアーになりうる活動を行っている関係者の中から、エコツアーガイドの素質を持った関係者と接触できたため、今後研修や他地域事例の視察のサポートを行い、その上で当町においてエコツーリズムをどのように進めるかの検討素地の形成が期待される。

3) 今後の取組

来年度は今回参加者や関係者が参加する、ガイド講習や他地域事例視察のサポートを検討して行きたい。その上で、当町に合った形のエコツアーとはどのようなものかを検討するスタートの年としたい。

(6) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

南アルプス生態邑

エコツアーとともに、小学校を改装した宿泊施設がある参考事例。

2) その他感想

緒川講師が強調されていたのは、エコツーリズムを展開するための手法ではなく、地域に合ったエコツーリズムについて、関係者が目的意識を共有することの重要性であった。更には、今あるものを活用するという供給者の視点では無く、お客様の目線で考えるという点についても、説明の仕方を変えながら強調されていた。今後、当町での取組を検討する上で、この2点を基本指針として大切にしていきたいと考えている。

【記録写真】



打合せ



鋸山視察



町内視察



定置網漁体験視察

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

観光・地域づくり研究員 緒川 弘孝 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

千葉県鋸南町では、現在のところ、エコツーリズムへの取組を行ってはいませんが、地元グループにより開催されている「鋸南町味わいハイキング」では、町内外の歴史、文化、自然をとこところで解説しながら歩くイベントが毎月 1 回程度のペースで、昨年まで 116 回実施されている。また、町内を案内するボランティアガイドが鋸南町地域振興課に登録されており、鋸南町随一の名所である鋸山・日本寺を中心にガイドをしている。

鋸南町は、足立区の福利厚生施設やスポーツ施設が立地し、生徒・児童の合宿も多いところから、一部の農家が農業体験に対応している。

鋸南町には、総合型地域スポーツクラブである「鋸南スポーツクラブ」があり、アクアスロン（水泳と長距離走の競技）やトレイルランなど、自然環境を活かしたスポーツイベントを開催している。

地元の保田漁協では、定置網漁の見学や遊覧船の事業を実施している。

鋸南町は、江戸時代から続く水仙の名産地であり、水仙の畑と一体的に道路沿いなどに水仙を植えた二つのエリア（江月地区水仙ロード、佐久間ダム周辺）を中心に、シーズンには水仙が咲き誇る名所となっており、多くの来訪客がある。

②課題

地域でのエコツーリズムへの取組は、まだこれからであり、まずは、エコツアーガイドをはじめとしたエコツーリズムの担い手探しが、最初にして最大の課題となる。

エコツアーのガイドの担い手としては、現在、ボランティアガイド、鋸南町味わいハイキング、農業体験などを実施しているガイド・インストラクターが、その候補となり得るが、いずれもボランティア的な料金設定のもと、ガイドをしており、現状以上の収入を求める意向は少なく、社会貢献の一つとして考えておられるようである。

しかし、エコツーリズムを持続させ、地域に根付くものとするためには、ツアー料金は有料とし、ある程度ガイドに収入が発生する料金設定とする必要がある。まず、地元経済に貢献するというエコツーリズムの重要な使命、後継者の担い手の確保、プロ意識の醸成、エコツアーとしての質の確保などについて理解してもらうことや、前述の候補の方々以外からもガイドを探すことが課題となる。

また、地域のエコツーリズム推進の中核となるコーディネーターや窓口の機能を果たす組織が必要となる。本事業の申請者となった「ようこそ鋸南プロジェクト」が、その第一の候補となると思われるが、現状でも多くの事業やプロジェクト

トを抱えており、新たにエコツーリズムに取り組むためには、持続的な財源や人材の確保が課題となる。

こうした課題の解決には、まず町民や鋸南町役場など地域全体で、エコツーリズム推進の意義について理解を広げ、深め、取組への気運を高め、支持を得ることも必要となってくるであろう。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①東京近郊では、いち早く訪れる春

本事業のワークショップで、季節暦（フェノロジーカレンダー）を作成したところ、既に町の観光資源となっている頼朝桜（河津桜）が、他の桜に先駆けて2月に満開となるだけでなく、1月から水仙、菜の花、梅が咲き、他の地域に比べ、いち早く花のシーズンが開幕することが分かった。

一般的な観光地では、冬の時期に見所がなく、集客の谷間となっている冬の時期に、鋸南町では観光客のピークの一つが来るということは、ユニークである。現在は、ほぼ頼朝桜と水仙だけをPRして観光提供し、一部、菜花の摘み取りを農業体験として提供しているが、他の花や植物などでも、地味ながら春の訪れを感じる自然のものは沢山あると思われる。

寒い冬の時期を過ごしていると、「いち早く春を感じたい」という気持ちになってくる。一足早い水仙や桜を見るだけでなく、春を感じるものを食べたり飲んだりし、植物の芽や鳥の鳴き声から春の兆しを教えてもらい、地域の春の伝統行事や生活文化を知る。そうした「一足早い春」を探すエコツアーは人気を集める可能性がある。

関東周辺での「一足早い春」が来るライバルとしては、河津桜や下田・爪木崎の水仙まつりなどがあるが、春をまとめたパッケージとすれば、十分な差別化が可能である。

②「をくづれ水仙郷」の田園風景

佐久間ダムから少し坂を上ったところに位置する「をくづれ水仙郷」は、佐久間ダム周辺よりも先行して、水仙が植栽され、観光客が訪れるようになった場所であるが、現在、多くの観光客は佐久間ダムの池周辺を巡るだけのようである。

しかし、ここから水仙のお花畑と夏みかんの木と田園が広がる様子を見下ろす風景は非常に趣があり、これも鋸南町ならではのユニークな魅力である。

をくづれ水仙郷をはじめ、鋸南町の水仙の名所を訪れる観光客は、今のところ、ただ水仙を見て帰るだけになっており、物足りなさを感じさせる様子である。自分が観光客となった立場となってみれば、をくづれ水仙郷のような場所で、一休みして、お茶を飲みたいところである（そのような場所の確保と寒さ対策が必要ではあるが）。

エコツアーとするならば、水仙の花が咲く道を歩きながら、江戸時代から続く鋸南の水仙の歴史やエピソードなどを聞き、ところどころで、地元の人が教えるとおきの絶景のポイントで、しばし佇み、そのうち一ヶ所では、腰を下ろして一休みをし、温かいお茶を飲み、地元ならではの菓子を食べながら、田園風景を眺め、のんびりとした時間を過ごして、春の訪れを感じる、というような組み立てが考えられるだろう。

③移住者の暮らし

今回、視察することはできなかったが、町内には、多くの移住者がおり、ログハウスを建てたり、自然食にこだわったりと、思い思いに里山や里海を楽しんでいるようである。

そうした移住者は、地元の人たちよりも、地域の自然や文化に関心が高く、知識もあり、楽しみ方も知っている可能性がある。都会暮らしの人にとっても、そうした人たちのくらしは、興味深く、魅力的である。町内には、自然の風景を活かしたレストランや喫茶店もあり、エコツアーと組み合わせた休憩や食事のスポットとして連携すると、魅力を増幅する相乗効果も期待できる。

④鋸山日本寺

千三百年の歴史がある鋸山日本寺は、現在も、多くの観光客を集める鋸南町随一の観光地であり、鋸山の山頂からの絶景をはじめとして、切り立った崖に彫られた百尺観音、座像としては日本一の大きさを誇る大仏、おびただしい数の石仏群からなる東海千五百羅漢など、見所は沢山ある。

しかし、多くの観光客はロープウェイや有料道路などで山頂近くまで来て、歩いてすぐに山頂に到着するため、期待感の積み重ね方が不十分であり、絶景への感動や、垂直に切り立つ崖に挟まれて神秘的な雰囲気を持つ百尺観音などに対する驚きが、薄いのではないかと思われる。

麓から徒歩で山頂まで登ってくれば、そうした期待感が高まって来る。その山道沿いの自然や文物にも面白いものがあるとのことで、それらを解説しながら、時間をかけてワクワク感をつのらせ、山頂での感動を高める。帰りには絶景を眺めながら「呑海楼」でお茶を頂き、お客様に「来てよかった」と思ってもらえるように、お客様の旅の時間を組み立て、演出するのも、エコツアーならではの役割である。

外国人観光客に対しても、魅力となり得る場所ではあるが、タイやスリランカなどの仏教国などでは、きらびやかな仏像が一般的である。地味な印象がある日本の仏像については、その価値や文化的背景などについて、エコツアーなどで丁寧に解説することが、今後、人気を集める鍵となるかもしれない。

⑤海と漁業

富士山を望み、コンクリート護岸ではなく、砂浜や岩場などの海岸線が広がる美しい景色が、東京近郊で楽しめるのは、鋸南の魅力である。さらにそこから、海の生物観察や料理体験、漁業体験などのエコツアーに展開していけば、その魅力も膨らんでいく。

現在も、地元の保田漁協が、定置網漁見学や遊覧船などの事業を行っており、漁師や漁師OBと連携したエコツアーづくりの可能性も見える。

⑥スポーツ環境

鋸南町には、勝山サッカーフィールド、岩井袋運動場（野球場）、サンセットブリーズ保田（フットサル、スカッシュコート）、B&G 海洋センター（体育館、プール）、町営弓道場など、各種スポーツ施設が充実し、総合型地域スポーツクラブである一般社団法人鋸南クロススポーツクラブでは、スポーツスクール事業やスポーツイベント事業を実施している。

こうした鋸南町のハード・ソフト両面での充実したスポーツ環境を求めて、多くのスポーツ合宿が行われているが、小中学生などの合宿では、スポーツの練習だけでなく、農業体験などを組み合わせるニーズがある。もし鋸南町でエコツアーを提供できれば、それを利用したいという潜在的ニーズは少なからずあると思われる。

⑦農業体験

前述のように、現在でもスポーツ合宿を行う子供たちに対して農業体験を提供する農家があるが、まだ小規模に留まっている。一方で、東京都民にとっては、1時間半で来て本格的な農業体験ができる便利な場所でもあり、農業体験への潜在的なニーズは大きいと思われる。町内には、多くの耕作放棄地があり、かつ今後さらに増加していくことが見込まれ、そうした潜在的なニーズにも応えられる余地はある。課題は、担い手である。

3) アドバイス（講義等）の概要

①講演

講演では、まず日本各地やニュージーランド各地のエコツアーの事例を紹介し、エコツアーとはどういうものを説明した。ただし、今後、エコツアーを提供するためには、まず自らがエコツアーに参加してみることが必要であるため、関東周辺でのエコツアーを紹介した。特に、鋸南町で整備予定の新しい道の駅は、小学校を改装した宿泊拠点となり、エコツアーの拠点ともなる可能性もあるため、同様の例である山梨県早川町の南アルプス生態邑（ヘルシー美里）への視察を提案した。

「エコツーリズムとは何か」を、その歴史的経緯から説明するとともに、エコ

ツーリズムは三要素（観光、環境保全、地域貢献）からなり、いずれも欠くことができないことを強調した。

エコツーリズムを地域で推進する場合、手っ取り早くノウハウから入るのではなく、まずエコツーリズムの目的と目標をしっかりと地域自らが考えて、設定し、共有することが重要であることを強調した。また、日本と鋸南町の人口推計のグラフを提示し、今後も避けられない人口減少傾向の中、エコツーリズムに過大な期待をするのではなく、実現可能な目的を設定する必要性を説明した。

エコツアーづくりの基本となる考え方は、ただ「地域にこれがあるから売る」というような自分たちの都合を優先するのではなく、お客様が誰かを考え、その「お客様が買いたいものを売る」というように、お客様の気持ちになって考える“お客様目線”へと、発想を逆転させることが必要であることを示した。

エコツアーの要となるエコツアーガイドは、「地域の宝」と「お客様」をつなぐために、地域の宝を探し出し、解釈し、演出し、加工して、お客様が理解して楽しめるようにする役割であることを説明した。さらに、エコツアーづくりで必要な視点は、「お客様に伝えたいことは何か？」「お客様に楽しんでもらいたいことは何か？」であるとして、そのポイントを示した。

②意見交換

講演後に、質疑応答を交えつつ意見交換を行った。以下に、そのポイントを挙げる。

- ・地元の人が気付きにくい地域の宝探しは、ようこそ鋸南プロジェクトのスタッフをはじめとした外部から来た人たちが、誉めたり、感動や感銘を受けた様子を示すことがコツの一つである。
- ・「エコツーリズムは誰がやるのか？」という問いは、地域に住む人たち自身が選択するものであり、強制することもできないものであり、「やりたい」という人がやるしかない。
- ・エコツアーガイドの主な三条件は、①ガイドしようとする分野に興味があり好きなこと、②お客様が楽しめるように対応できること、③やり続ける熱意があることであり、このうち三つとも満たすことが理想であり、少なくとも二つは満たす必要がある。
- ・ガイドに決まった型はなく、上記の三条件さえ満たせば、個性はむしろ大事にすべきものであり、話す内容やガイドの方法に何らかの規定を設ける必要はない。
- ・ボランティアでは長続きしないし、後に続く人が出にくくなる。ダンピングにならないように、有料である程度の価格以上とすべきである。
- ・味わいハイキングなど、既存のツアー的なプログラムは、ボランティア・ベースであり、料金を引き上げてエコツアーにするのは難しいと思われる。無理に

統一する必要もなく、有料のエコツアーとはターゲットやコンセプトが違うものとして、併存させた方が良い。

- ・エコツーリズムを推進していくには、地域全体が参画しなくても、熱心な中心メンバーが4、5人いれば良い。成功例ができれば、自然と自分もやりたいという参画者が増えて来る。

③ワークショップ

エコツアーのテーマやネタとなる地域の宝を掘り起し、地域で共有するための道具として、お宝マップとフェノロジーカレンダー（季節暦）をつくる作業をした。

世代も出身もバラバラな参加者からは、それぞれ提供する情報の種類に違いがあり、驚きもあったようだ。また、これまでの観光マップには載っていない、自分が好きな絶景スポットや風景、魅力的なお店、映画のロケ地なども、お宝になり得るという新たな切り口も、アドバイスした。

また、エコツアーの開発シートを用いて、参加者一人ずつ、エコツアーの企画を考えてもらい、真っ暗闇になる環境を活かした星空観察、カッコイ漁師（漁師萌え）、安房勝山藩の歴史と食など、ユニークなテーマの企画が試作された。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

エコツーリズムに取組もうとし始めたところで、エコツーリズムやエコツアーについて、まだ取り掛かっていない段階で、「全体構想」について、実質的な検討をすることは難しいが、法的根拠に基づく地域資源の保護措置や立ち入り制限が必要な場所は、特に存在しないと思われる。

環境省を通じた広報や特定事業者によるツアー参加者の送迎についても、まだエコツアーの開発も行っておらず、担い手も固まっていない段階では、必要な状況にはないと考えられる。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

私は東京に長年住みながら、東京から1時間半という近い場所に、このように海と山の豊かな自然と美しい景色に恵まれた鋸南町があることを、今回の訪問で初めて知り、大いに驚いた。特に、海岸線から東京湾の対岸を望めば、海の向こうに富士山が浮かび上がる風景は、強く心に残るもので、日本が誇るべき風景の一つかもしれない。

しかし、この東京という巨大都市から便利すぎる交通アクセスは、両刃の剣であり、来訪者のほとんどが、短時間の「見るだけの観光」で帰宅してしまう。これでは、地元で観光事業をいくら頑張っても、地域にお金があまり落ちず、エコツーリズムの三要件の一つである「地域への貢献」が満たされない。

一方で、水仙まつりや頼朝桜、各種スポーツイベントをはじめとした様々な観光や交流の事業の関係者やボランティアガイドなど地元の皆さんは、自分のことは度外視して、ただお客様に喜んでもらおう、地域に貢献しようという無私ので精神で奉仕されている。そのもてなしの精神には感銘を受けた。

しかし、ボランティア精神だけでは、参画する人の範囲に限られるし、特定の人たちだけの熱意では、後に続こうという人が出て来にくい。地域の持続可能性を考えると、どうしても地域の人々が暮らしていくのに必要なお金の話は避けて通れない。お金を頂いてサービスすることで、観光は「産業」になる。産業であれば、それにたずさわり、収入を得ることで、地域に留まって生活しようという人も出て来る。ボランティア精神だけで観光をやると、どうしてもそういう可能性が伸びてこない。

都市からのお客様をもてなし、喜んでもらうことが地域の方々の生きがいとなることは間違いない。しかし、観光事業の目的が、それだけになってしまわないように、十分、注意する必要がある。自分たちがもてなす方として楽しむだけでなく、お客様にも「ありがた迷惑」ではなく、心から楽しんでもらう。そして、それに対して正当な報酬を頂き、自分や地域の人たちに少しでも経済的な効果を生じさせるようにして、次世代へつなぐ。そうしたポイントを常に念頭に置きながら、担い手づくり、エコツアーづくりをすれば、鋸南町のエコツーリズムの可能性は大きく開けて来ると確信する。

3-9. 神奈川県横浜市（神奈川県横浜市）

(1) 地域の概要

【人口】

約 370 万人（横浜市全域）／関連区（4 区）：約 70 万人

【面積】

エリア全体で約 700ha（樹林地、農地、公園、河川等を含む）

【地勢】

「つながりの森」のコア区域である円海山周辺は、多摩丘陵から三浦半島の先まで続く丘陵地の一角をなしており、多摩丘陵の南端部と三浦半島に続く三浦丘陵との結節点となっています。この多摩丘陵から三浦半島の先まで続く丘陵地は神奈川県東部で最も大きな緑地です。エリア内に多く見ることができる、横浜市の特徴的な地形である「谷戸」地形は、水と緑に囲まれた自然豊かな環境となっています。

【自然】

①円海山周辺（コア区域）

樹林地がおおよそ十字を描くように南北と東西にのびた水と緑の豊かな環境です。

樹林地のほとんどは、かつて薪炭林として利用されてきた落葉広葉樹林と用材として植林された針葉樹林となっています。そのほか、常緑広葉樹や竹林も見られます。

②コア区域以外の地域

多くが住宅地となっていますが、公園緑地、寺社林や畑等が点在しています。また、身近な水辺として、小川アメニティやせせらぎ緑道があります。

③生物相

横浜市全域で確認された動植物の半分以上の種が、円海山周辺の樹林地等で確認されています。また、絶滅のおそれのある貴重な生き物も多く確認されており、市内の生き物にとって、重要な生息・生育環境となっています。一方で、特定外来生物はアライグマをはじめとし7種、要注意外来生物は29種が確認されています。

【歴史・観光】

国の史跡にも指定されている称名寺を始めとし、歴史的に重要である施設、スポットがあり、多くの人が訪れます。

また金沢動物園を始めとし、市内の貴重な動植物の生息地・生育地であることを活かし、野鳥観察会、自然散策会等を開催しています。また、活動の拠点施設として自然観察センターや宿泊施設があり、宿泊施設ではバーベキューや陶

芸を楽しむこともできます。



上図：横浜つながりの森マップ

(2) アドバイザー派遣申請の背景

1) アドバイザー派遣申請の背景とこれまでの取組

横浜市では、生物多様性基法の地域戦略である、生物多様性横浜行動計画（ヨコハマbプラン）に基づき、平成24年7月に「横浜つながりの森構想」を策定しました。「横浜つながりの森」は、連続した緑地として市内最大である円海山を中心としたエリアであり多様で貴重な動植物が生息・生育している「横浜の生物多様性の宝庫」と位置づけられています。

本構想では、この「横浜つながりの森」を市民全体で、体感・感動し、次代、次々代につないでいくことを目標とし、「生き物の多様性を大切にすると」「自然を楽しむ」を柱として、保全と活用のバランスを保ちながら取組をすすめることを基本方針に、それぞれ具体的な取組を定めています。

この具体的な取組のひとつとして、「エコツーリズムの推進」を掲げており、「地域の資源を活用したプログラムの充実」や「エコツアーのルール（マナー）の設定」などに取組み始めています。

2) 地域の課題について

「横浜つながりの森」のエリアは、樹林地、都市公園、道路、河川、民有地など様々な種類からなり、管理者も異なります。市民団体の活躍する場所も多く、それぞれ環境の保全や活用についての考えを持っています。エコツーリズムの推進にあたっては、保全を重視する立場と、活用を進めようとする立場の間で、考えの違いが問題になることがあります。

また近年、利用方法として団体でのハイキングやトレイルラン、マウンテンバイクでの通行など、環境への負荷が大きいと考えられ、安全面でも問題のある活用方法が増えることになりました。これらに対しても、場所ごとに管理者や土地の属性が異なるため、エリア全体の利用について、一部の管理者が利用の制限等をお願いすることが難しい状態となっています。

またエコツーリズムの推進により、利用が増えることによる環境負荷について、利用者へのマナーの普及啓発等が課題となっています。

(3) アドバイザー派遣の概要

日 時	◆ 1回目：平成 26 年 11 月 27 日（木）～28 日（金） ◆ 2回目：平成 27 年 1 月 19 日（月）～20 日（火）
場 所	横浜つながりの森エリア内
ア ド バ イ ザ ー	公益財団法人日本生態系協会 地域計画室長 城戸 基秀氏
参 加 者	◆ 1回目：横浜市環境創造局 10 名、横浜市緑の協会 1 名 合計 11 名 ◆ 2回目：横浜市環境創造局 11 名他、合計 16 名
スケジュール・方法	◆ 1回目（2日間） 【1日目】 ・視察：横浜自然観察の森、上郷森の家、金沢市民の森、瀬上市民の森、氷取沢市民の森 【2日目】 ・視察：能美堂緑地、釜利谷市民の森、金沢動物園植物区エリア・動物園エリア ・全体振り返り、課題抽出 ◆ 2回目（1日） ・城戸先生講演：「エコツーリズムとルール」 ・講演内容について質疑応答及び意見交換 ・横浜つながりの森ルールに関する意見交換会

(4) アドバイスの内容

1) 1 回目派遣

- ①ハイキングコースについて
 - ・公道と民有地の区域が明確でない。
- ②ハイキングコース内サインについて
 - ・サインが分かりにくい。また、サインがあるところとないところが混在している。
- ③ルールについて
 - ・ルールの周知は、つながりの森の認知度を上げることに繋がる。
 - ・ルール策定にあたり、市民意見の集め方について検討。
- ④看板の文言について
 - ・主体の異なる看板が混在する。
 - ・法律等に基づき規制するものと、お願いするものを分ける。
 - ・マップに掲載されていない横道が数多くあり分かりにくい。
 - ・全域のルールとエリアを限定したルールを分けることも検討する必要がある。
- ⑤普及啓発について
 - ・現場でのPRにも力を入れてほしい。
 - ・蓋付きのケースに入れて設置するなど、森の中で配れるとよい。
 - ・団体利用者に対しては、利用の際の届け出先や方法を明確にし、届出と合わせ

てルールを普及啓発すると効果的。

⑥今後の課題

- ・ハイキングコース沿いに設置されている、異なる設置主体の看板の文言を整理する。
- ・ルールやマナーの策定にあたり、根拠のあるものとなないものを区別する。
- ・関係者へのルール周知方法の検討
- ・案内版の表現方法を確定することを目指す。

2) 2回目派遣

①講演会・意見交換

- ・横浜市でエコツーリズムを推進する場合は、現在地域内で活動している自治会やサークル活動にツアーガイドを依頼することもできるのではないかと。エコツアーのガイドに深い専門知識が必ずしも必要なわけではない。
- ・今回の派遣事業は主にハイキングコースの利用ルールの検討がメインだが、ルール策定後はエコツーリズムのツアー内容についても具体的に検討してもらいたい。

②意見交換会

- ・事務局作成のルール案に、ストックの利用も含め「施設や道を傷つけないよ注意してください」というようなマナーを一つ入れたほうがよい。
- ・バードウォッチングなどの道路や広場の専用については、一般的な迷惑行為の禁止として項目を入れたほうがよい。
- ・利用者が感じる迷惑行為は多様であるため、具体的に項目を列挙するのではなく、様々な迷惑行為に運用マニュアルで対応することも一つの手だ。
- ・森の入り口に散策マップを配架することが望ましい。利用者にとって便利であり、認知度向上にもつながる。

③今後の課題

- ア. ハイキングコースに入る前に、利用者がマップを手にすることができるか（たとえばマップの掲載されている看板近くに配架する等）検討する。
- イ. 集団利用や、大会の開催について市の考え方を決める。
- ウ. ルールの表現方法については、今後実施するアンケート等の意見を反映し具体的な内容を記載するかを検討する。
- エ. ルールの運用を規定するマニュアルを作成する。

(5) アドバイザー派遣実施の効果

1) 1回目派遣

①課題と取組方の明確化

第三者の視点でハイキングコースを全域にわたり視察することにより、課題が明確化しました。(看板設置主体によって異なる表現、ルールとマナーの整理等)それにより、課題解決に向け取り組むべき事項が明確になりました。(看板の文言の一覧化、ルールとマナーを整理すること等)

②今後の取組

今回明確化された課題を関係者で共有し、平成27年1月に開催する関係者意見交換会で、横浜つながりの森ルールの詳細を検討する。

2) 2回目派遣

①課題と取組方の明確化

11月にハイキングコースを視察したアドバイザーが、他都市との比較を交えながらアドバイスを行うことにより課題及び課題解決に向け取り組むべき事項が明確になりました。(ルール文言の表現方法、ルールの周知方法等)

②今後の取組

今回の意見交換会での意見を集約し、ルール策定に向けた作業を推進します。

(6) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

アドバイザーの方と関係者で包括的に現地を確認することにより、机上で意見交換するよりも意識の共有が図ることができました。また、課題を明確化されたことにより、今後のスケジュールを立てることが可能となりました。

日程を現地視察と意見交換会の2回に分けることにより、時間的に余裕をもって課題を検討することができました。他都市の事例も踏まえたアドバイスは的確で検討課題の具体化への参考になりました。

【記録写真】



視察前の打ち合わせ



拠点施設の視察



ハイキングコースの視察



現場の課題について職員より聞き取り

現

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

公益財団法人日本生態系協会 地域計画室長 城戸 基秀 氏

1) 地域における取組の現状と課題

横浜市では、市南部の円海山周辺の区域を「横浜つながりの森」エリアとして、保全・活用を推進しており、平成24年7月に策定された「横浜つながりの森構想」では、取組の一つとして「エコツーリズム」の推進があげられている。現在は、散策マップの作成・配布や、看板設置などにより、市民への普及広報に力を入れている。

「横浜つながりの森」エリアには、都市公園、市民の森、特別緑地保全地区のほか、農地や公道なども含まれており、多くの関係者が存在している、現在、構想の実現にむけた取組が進められているが、関係者間の合意に基づく取組の推進が課題となっている。

なお、今回のアドバイザー派遣は、関係者間の合意に基づくルールを検討支援を主な目的としている。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

「横浜つながりの森」は、都市近郊のアプローチしやすい場所に、水辺や湿地などの谷戸環境や、森林環境などの多様な環境があること、また、これらを結ぶトレイルがあることに魅力を感じた。

また、エコツーリズム推進法の自然観光資源とは意味合いが異なるが、「横浜つながりの森」には、既に市民に親しまれている「市民の森」「横浜自然観察の森」「金沢自然公園」といった拠点があり、それぞれの拠点において管理者と市民が長年培ってきた様々な取組があり、これが地域の魅力を高めていると感じた。

3) アドバイス（講義等）の概要

今回の派遣の主な目的は、ルールの検討であったため、エコツーリズムの基本的な考え方や里山タイプのエコツアーが行われている飯能市を例にエコツーリズムの概要について説明したのちに、2日間の現地確認を基に、ルールを検討する際の考え方等について意見を述べた。

具体的には、現在ある看板類などをチェックし、その内容から共通点を把握すること、「横浜つながりの森」の共通ルールとつながりの森を構成する「横浜自然観察の森」「金沢自然公園」「市民の森」などの個別ルールを区分すること、「横浜つながりの森」の基本方針に合わせて、ルール設定の理由・根拠を明確にすること、ルールの運用にあたっては、マニュアルなどを作成し更新すること、などを提案した。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

「横浜つながりの森」においてエコツーリズムは取組メニューの一つであることもあり、全体構想の策定に取り組む意向は現在のところもっていない。

「横浜つながりの森」は約 700ha と広い面積を有するものの横浜市内の一部の区域であり、関係者も行政関係者が多い。そうした点を考慮すると、推進協議会を設置し、全体構想を策定するためには、まず、全体構想の必要性（ルール的位置づけの明確化や、特定自然観光資源の指定など）についての関係者の合意形成が必要と考えられる。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

以前、この地域を訪れたときには緑地の連続性についてはほとんど考えたことがなかったが、今回は、まとまりのある区域としての意識を強く持てた。このように、公園や自然観察の森、市民の森、歴史資源といった管理者や所有者の異なる区域を「横浜つながりの森」としてまとめ、活用と生物多様性の保全を進めていくこの取組は、先進的であり、プロモーション等の効果が高いと感じた。

会議でもご意見をいただいたが、「横浜つながりの森」構想に示された方針である「エコツーリズムの推進」を具体化していくための、より詳しい内容や役割分担などを検討していただくと、都市近郊における魅力的なエコツーリズムが推進できると感じた。ぜひ、周辺住民などと一緒に魅力あるエコツーリズムを進めていただきたい。

3-10. 東伊豆ECOツーリズム協議会（静岡県賀茂郡東伊豆町）

(1) 地域の概要

【人口】

13,191人(男性/6,246人 女性/6,945人) (平成27年2月28日現在)

【地勢】

東伊豆町は伊豆半島東海岸中央部に位置。東側は相模灘に面し伊豆大島、利島、新島、式根島、神津島、三宅島、御蔵島（八丈島は見えません）の伊豆七島を望み、北側は万二郎岳(1,299m) 万三郎岳 (1,405m) 遠笠山 (1,197m) 箒木山(1,024m) といった標高1,000m級の天城連山が連なっています。東側は全て海岸線となっていますが平地は少なく、相模灘に流れ込む河川流域と山間部盆地に僅かに広がるだけです。町内の多くは天城連山の丘陵エリア、山岳エリアとなり、伊豆半島最高峰の天城山万三郎岳（標高1,405m）まで海岸からの直線距離、最短で約6,000mで、場所によっては急峻な地形となっています。隣接する市町は伊東市、伊豆市（旧天城湯ヶ島町）、河津町です。

【面積】

77.83km² 東西15.04km 南北13.78km

【気候、自然】

<平均気温>

3月～5月14.2度・6月～8月24度・9月～11月19.4度・12月～2月7.1度

年平均気温・約16.2度（観測地は標高130m）

<平均降雨量>

3月～5月315.5mm・6月～8月131mm・9月～11月210.8mm・12月～2月133.3mm
年間総雨量2,372mm（平成24年観測値）

東伊豆町は東側が相模湾に面しているため北東の風が入り込みやすく、盛夏時でも極端な猛暑になることは殆どありません。別荘が建ち並ぶ山間部は避暑地として利用されています。また、冬期も極端に寒くなることはないのですが、北東風（ならいの風）の影響と急峻な地形のために寒気と共に上昇気流が発生、海岸付近は降雨でも僅か数十メートルの標高差で雪になることは珍しくありません。

【歴史】

東伊豆町の人々の起源は、稲取ゴルフ場遺跡から発掘された十数個の細石器から始まります。人々が移動生活をしていた約12,000～13,000年前の先土器時代の人々が狩猟などに使用したものと推測されています。また、人々が集落を形成し定住をはじめた縄文時代早期（約9,500～6,500年前）の遺跡が町内、奈

良本地区の峠遺跡と穴ノ沢遺跡、白田地区の宮後峠遺跡の発掘によって確認されました。

峠遺跡から発見された石器製作跡は、矢じりを製作した工場跡とされ、剥片が数ブロックにわかれて出土、流れ作業によって石鏃製作が行なわれていたことが予想されます。現在は別荘地の一部となり、縄文時代の貴重な矢じりの製作工場跡は埋め戻され、分譲地として別荘が建てられています。その他、竪穴状遺構や土坑が発見されており、その種類、量などから国内において貴重な遺跡といえます。同町、稲取地区の細野遺跡や崎町遺跡から弥生式土器が出土、東伊豆町でもこの時期から稲作が行なわれていたことがわかります。

奈良時代から平安時代にかけて、伊豆は流刑の地となり、多くの貴族、僧侶、武士が流されました。源頼朝は、蛭ヶ小島（現菰山町）に流されたおり、伊東・川津といった伊豆の豪族と親交を結び、稲取の八幡神社にも参拝したと伝えられています。頼朝が建久三年（1192）に鎌倉幕府を開くと、東伊豆と鎌倉の往来も盛んになり陸上交通が発展しました。同時に稲取港をはじめ伊豆の港も海上交通の発達とともに中継点として栄え、南北朝・室町時代には、紀州から来た鈴木一族によって管理されるようになりました。その後、鈴木一族に変わり、伊豆の港は豊臣・徳川の浦奉行役の管理下として幕府の直轄地となりました。

江戸時代になると海運の進歩により稲取港も大いに繁栄、徳川家康の江戸城大改修、天下普請の際には西国大名たちにより築城石を切り出し、船で運搬、東伊豆町でも大川、堀川（現北川）、稲取などから切り出された石が稲取港から江戸へ向けて出航しました。

その後、東伊豆町の支配は幕府から沼津藩主水野氏へと代わります。当時の人々の産業は漁業が主となり、延宝六年（1678）に白浜（現下田市）から天草を転植、天草漁が盛んに行われるようになったのです。

明治時代に入ると東伊豆町は菰山県から足柄県に、明治9年には静岡県に属するようになり、東伊豆町は近代化の道を歩み始めます。町の発展に稲取村の村長を務めた田村又吉翁、^{いがくし}醫學士の西山五郎先生が大いに貢献しました。現在、町の主要産物となっているみかん栽培を広めたり、天草の製品開発に尽力するなど、東伊豆町の発展に生涯をささげました。また、赤痢が多くの人命を奪う中、飲み水の影響であることに気付き、稲取では日本人により水道施設を国内はじめて敷設するに至りました。（国内初めての水道施設は横浜ですが、日本人による水道施設の敷設は稲取がはじめてとなります）

また、町の発展に尽くした人物として木村弥吉翁があげられます。木村翁は明治41年に旧城東村大川に移り「絹サヤエンドウ」の早生栽培を成功させました。絹サヤエンドウは「成金豆」と呼ばれ、大きな収益を上げました。その収益で熱川に旅館を建て全国有数の観光地に発展させたのです。その後、昭和に

なって北川温泉、稲取温泉が発見に至っています。

戦後、着実に発展した東伊豆町は、昭和34年に稲取町と城東村が合併して現在の東伊豆町となりました。昭和36年には伊豆急行が開通し首都圏からの交流人口が大幅に増加、観光の町として脚光を浴びるようになりましたが、全国的な交通網の発達とともに、地理的に交通事情が発達しにくい環境から現在では観光交流人口が減少しています。

【観光】

風光明媚に恵まれた町内は海岸エリア、山岳エリアともに景観に優れ、天城山系の噴火がもたらした多くのジオサイトが点在しています。

また、歴史に関する観光資源も多く、稲取地区の雛につるし飾りや北川地区の鹿島踊り最南端伝承地、幕末の志士たちが奔走した東浦路、江戸城築城石採石地など多くの観光ポイント、観光資源を有しています。

【地域資源の概要】

①古道（東浦路）

平安時代～大正時代にかけて小田原～下田間の伊豆半島東海岸を通った街道街道。現在でも一部国道に取り込まれているが生活道路として存在、街道沿いには道祖神や道しるべが点在しています。東伊豆町の古道沿いには縄文時代の遺跡、江戸城築城石採石跡、神社、お寺があり、歴史を肌で感じる街道となっています。

②江戸城築城石採石跡（石丁場）

関ヶ原の戦いで戦勝した徳川家康は慶長九年、江戸城大改修の天下普請を発布。西国大名に築城石の調達課役を命じました。伊豆東海岸は天領地であったこともあり、採石の地として選定され、東伊豆町内からは大量の石材が石積船によって海上輸送され江戸まで運ばれていったのです。その採石跡が400年以上の時を経た現在でも現存し、石工達が刻んだ刻印や矢穴を確認することが出来ます。

③ジオサイト

東伊豆町は天城山系の最高峰、万三郎岳を有し、伊豆東部火山群の一部を成形しています。伊豆半島創世記の痕跡と火山が創りあげた複雑な地形を観察することが出来、ジオサイトとして注目されつつあります。

④歴史文化

東伊豆町には知られざる歴史が存在しています。国内にて水道施設が誕生したのは横浜ですがイギリス人技師によって設計施工された施設です。東伊豆町稲取地区に施設された水道は疫病から村民を守るため、船大工たちによって造り上げられた日本人による国内初めての水道施設なのです。また、同町は江戸城無血開城の立役者、幕末の三舟と言われる勝海舟、高橋泥舟、山岡鉄舟との関わりがあり、それぞれの書、山岡鉄舟の御位牌が存在しています。

(2) アドバイザー派遣申請の背景

昨年度、東伊豆 ECO ツーリズム協議会に於きまして「エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業」を採択いただき行政指導では無く、民間主体の団体としてエコツーリズムへの取組をアドバイスしていただきました。その後「大人のふるさと学級（現名称：東伊豆ふるさと大学）」の開催を実施、地域住民への参加を募り、当エリアのグリーンツーリズム、ブルーツーリズムに対する啓蒙とガイド養成の基礎作りを実践してきました。並行して地元ケーブルテレビの取材協力の下、映像を等して地元住民への参加働きかけ、行政への参加働きかけを行い、全体構想の策定を見据えた組織作りを行って参りました。

「大人のふるさと学級」参加者からは今まで知り得なかった地域の歴史、文化、自然に触れ、観光資源とすべくエコツーリズムに対する意識を言葉にして表現していただくことが出来ました。

行政の対応は「全体構想」に対する認識は殆ど無く、官民協同によるエコツーリズムへの取組をしていこうとする意識を感じることは無く、書類が出来たら持ってきたという姿勢を貫かれています。

1) <課題>

- ・行政がエコツーリズム推進法に対する理解度が殆ど無い。
- ・エコツーリズムに対して行政主導で対応する意識が無い。
- ・財源の確保が困難なため協議会自体が疲弊してしまっている。
- ・エリア内に国として保全すべき貴重な埋蔵文化財が点在するも協議会として啓蒙活動以外の活動が出来ない。
- ・協議会を明確な事業体に移行していきたいが手法が判らない。
- ・「大人のふるさと学級」においてガイド志望の参加者に対して今後の対応を組み立てなければならない。

2) これまでの取組

①「大人のふるさと学級（現名称：東伊豆 ふるさと大学）」実施

2014年4月 「古道を歩く（片瀬～大川）」

2014年5月 「築城石を訪ねて」稲取地区石丁場を歩く

2014年6月 「シラヌタの池と大杉」

2014年7月 「稲取夏祭り 縁起を知る」

2014年9月 「稲取 重陽の節句 はんまあ様縁起」

2014年10月 「北川・鹿島神社／鹿島踊り縁起を知る」

「大川・三島神社／三番叟を見る」

2014年11月 「江戸時代の公害反対運動」

2014年12月 「エコエネルギー巡り 風力発電～小水力発電～温泉熱発電」

2015年2月 「古道を歩く（稲取～白田）」 荒天延期3月17日実施予定

②江戸城築城石石丁場調査

伊豆大川・寺山石丁場調査

伊豆稲取・本林石丁場調査…未確認大型築城石確認

伊豆稲取・海岸線丁場調査…築城石積載時の櫓礎石複数発見

(3) アドバイザー派遣の概要

日	時	平成 27 年 2 月 22 日（日）～24 日（火）
場	所	東伊豆町内古道（東浦路） 本林石丁場～志津摩海岸
アドバイザー		アイ・エス・ケー合同会社 代表 渡邊 法子 氏
参加者		東伊豆 ECO ツーリズム協議会 他合計 7 名
スケジュール・方法		【1日目】 ・視察：旧稲取灯台、安房見の坂、灯台資料館、はさみ石、熊沢権現神社 ・東伊豆ふるさと大学事業化と法人化について 【2日目】 ・視察：本林石帳場、志津摩海岸 ・本林石丁場の保全、観光資源化について ・東伊豆町、歴史資源の観光化について 【3日目】 ・エコツーリズム推進法、全体構想について、副町長へ説明 ・勉強会：法人化準備について、法人化後の組織体制、 次年度以降の「東伊豆ふるさと大学」運営について

4) アドバイスの内容

1) 視察箇所

・古道「東浦路」

室町・平安時代から存在する古道。一部がそのままの状態で見られ、吉田松陰、坂本龍馬が下田に来航した黒船を目指し駆け抜けた街道。

・旧稲取灯台

明治初期の私設灯台。当時では珍しい三面ガラスの灯籠が設置されている。

・ハサミ石

東伊豆海岸随一の絶景と言える巨岩。1978年1月14日に発生した伊豆大島近海地震により周辺で大規模な崖崩れが発生し陸路のアクセスが非常に困難になった秘境です。現在は遊歩道が整備されつつあります。

・本林石丁場群

東伊豆町と河津町との境付近にある江戸城築城石採石跡。東伊豆 ECO ツーリズム協議会メンバーにより未確認の刻印石、築城石、石丁場が発見されています。

2) アドバイス内容

①東伊豆 ECO ツーリズム協議会の法人化について

東伊豆 ECO ツーリズム協議会は協議会として存続させ、将来的には町長に会長職を兼任していただくのがベスト。東伊豆 ECO ツーリズム協議会に属する形で、たとえば「歴史・文化プロジェクト」を発足させ、個々のプロジェクトの目的を明確化させることで事業を確立させ、法人格を持たせるようにした方が良いのではないか。

現状、いくつか町の予算が付く事業が発生しているモノの法人格がないため、予算の落としどころがない事案が発生している。早急に法人格（他法人格の傘下でも支所として）を持つべき。

民間主体という特異な形式の協議会であるが、やはり行政の参加は不可欠。全体構想策定に向けて粘り強く行政とも関わっていく必要がある。

②各視察箇所について

東浦路…昨年度の視察箇所と合わせて十分な観光資源となる素材。トイレ設置やインフォメーション、ガイド養成が不可欠であるが歴史上重要な文化財でもあるので、保全についても検討が必要。また、危険箇所が存在したり季節によっては立ち入れない箇所があるため観光化の際、観光客の安全の万全を期すことが必要。

旧稲取灯台…灯台周囲は整備されているが観光地としてのアクセス方法、場所が不明確。また、隣接する灯台資料館が民家と見違えるため、灯台まで観光客の足が向きにくいところは改善すべき。灯台資料館に展示されている刺繍は、この地方の物語を題材に作成され大変貴重な文化財であるが、展示方法に難があり、現状では痛む可能性がある。保全方法を検討すべき。

ハサミ石…大変珍しい巨岩であるが遊歩道が途切れた箇所からの歩行が困難。観光資源とするには観光客の安全確保が第一。

本林石丁場…比較的アクセスしやすい江戸城築城石採石跡であるが急斜面の上り下りがあるため安全確保が必要。町内に点在する私有地の石丁場とは異なり、一部町有地となっているので、保全を考慮しながら観光資源として期待が出来る。

(5) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

①エコツーリズム、又は、地域資源について理解が得られた

副町長への説明により今まで行政の協力を得ることが出来なかったが、今回の派遣事業にて行政の理解度が多少高まったと期待しています。

②今まで課題としていたことがより明確になった

昨年度より法人化について検討をしてきましたが、「大人のふるさと学級」の実施により事業化の兆しが出来、法人格を持つことの意義が理解出来ました。

③今までの課題に対して取組方が分かった

町内に点在する貴重な埋蔵文化財が私有地に存在するという課題は非常に解決しにくい問題であると感じています。この問題への取組について現状、地権者との話し合いによること以外、解決策がなく、保全すべき貴重な文化財が放置され続けていることに対して、どのようにして良いのか？取組方については不明確なままとなっています。また、全山史跡状態の伊豆大川谷戸山では違法建築物が確認され、どのように保全すべきなのか・・・苦慮するところです。

④今までとは別の課題が明らかになった

基本的に大きな課題は前年度と変わりありません。行政の理解と参加を望む次第です。

2) 今後期待される効果。

東伊豆ECO ツーリズム協議会をベースとするプロジェクトの立ち上げで、プロジェクトに法人格を持たせることで事業化を明確化させることが期待出来ます。

3) 今後の取組

協議会をベースとする別組織の立ち上げを検討、実践していきます。

(6) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

- ・法人化について
- ・地域資源の価値、及び、観光資源としての利用について



東伊豆 ふるさと大学資料「いにしへの散歩道」



三本松



稲取旧灯台



東浦路



はさみ石



安房見の坂



熊沢権現神社

本林石丁場群

四百年の時を刻んだ
石丁場の息吹が聞こえる。

この石丁場は、寛文年間（1700年代）に築かれたと推定される。石の表面には、当時の加工技術がよく残っており、溝の深さも均一である。周囲には、同じような石が散らばっており、かつての丁場跡を窺わせる。石の材質は、地元の花崗岩で、堅く滑らかな質感がある。

この石丁場は、天明年間（1820年代）に築かれたと推定される。石の表面には、当時の加工技術がよく残っており、溝の深さも均一である。周囲には、同じような石が散らばっており、かつての丁場跡を窺わせる。石の材質は、地元の花崗岩で、堅く滑らかな質感がある。

この石丁場は、天保年間（1850年代）に築かれたと推定される。石の表面には、当時の加工技術がよく残っており、溝の深さも均一である。周囲には、同じような石が散らばっており、かつての丁場跡を窺わせる。石の材質は、地元の花崗岩で、堅く滑らかな質感がある。

この石丁場は、明治初期（1870年代）に築かれたと推定される。石の表面には、当時の加工技術がよく残っており、溝の深さも均一である。周囲には、同じような石が散らばっており、かつての丁場跡を窺わせる。石の材質は、地元の花崗岩で、堅く滑らかな質感がある。

四百年の時を刻んだ石丁場の息吹が聞こえる。

本林石丁場群

写真・文章：伊藤 俊彦
撮影協力：「美作の自然博物館」
「美作の自然博物館」

この地図は、本林石丁場群の分布を示しています。地図には、主要な道路と河川が描かれています。赤い記号で示された各地点は、調査された石丁場の位置を示しています。赤い記号の種類は、調査の有無や写真の有無を示しています。

- ：多数の写真あり
- ：調査済
- ◆：美作石・美作石
- ▲：美作石・美作石

調査期間は、平成25年度（2013年度）です。調査場所は、美作市本林の石丁場群です。

本林石丁場群資料



石丁場内視察



矢割石



釘抜紋



築城石群



副町長への説明



今後の体制について

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

アイ・エス・ケー合同会社 代表 渡邊 法子 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

平成 25 年に発足した東伊豆町 ECO ツーリズム協議会は民間が主体で設立されました。観光が主要産業の東伊豆町ですがこれまで観光については海岸線の温泉場が中心でした。東伊豆町には海だけでなく山の自然資源や築城石丁場などの歴史文化資源も豊富であり、活かしきれていない魅力的な自然観光資源をエコツーリズムの推進によって活かそうとする取組が始まり、本事業の取組は、本年度で 2 年目となります。

昨年度の実施では課題としては以下の点などがあげられました。

1、山の景観や生息する動植物等の自然環境資源の活用方法と商品化 2、築城石をテーマに築城石丁場の保全と地域振興をおこなう推進方法 3、古道など、その他の地域資源の発掘および活用方法と商品化 4、エコツーリズム（着地型）商品の企画、販売の仕組み作り 5、効果的な情報発信の仕組み作り 6、人材育成の仕組み作り 7、事業の継続化 8、行政との連携、協働

本年度は①人材育成の仕組み作り、②行政との連携および協働、③築城石をテーマに築城石丁場の保全と地域振興をおこなう推進方法、以上 3 点の課題について重点的に活動が鋭意、推進されました。

②課題

ア. 人材育成の仕組み作り

東伊豆ふるさと大学を立ち上げ、広く町民に呼びかけ、山の景観や動植物等の自然環境資源、古道や築城石丁場等の歴史文化資源を学び、体感する機会をつくり、人材養成事業の基盤を構築しました。事業化、継続化が課題です。

イ. 行政との連携

全体構想の構築にむけて町行政に働きかけ、まずは東伊豆町 ECO ツーリズム協議会として全体構想の素案を作成する運びとなり、基盤が整備されました。今後は、素案作成において基礎知識等の共有や研鑽が課題です。

ウ. 築城石丁場の保全と地域振興への活用について

エコツーリズムで活用できるよう基盤整備を開始しました。保全と活用が課題です。

2) 魅力を感じた地域資源

①築城石採石跡（築城石丁場）

当該地域には、山の資源としての伊豆石が江戸築城の折に数十年にわたって切り出され運び出された築城石採石跡が確認されており素晴らしい歴史・文化遺産

として点在しています。400年の時を超えた今でも、石工達が刻んだ刻印や矢穴を確認することができる素晴らしい地域資源であると思います。ぜひ保全しながら後世に伝えてほしい大切な資源として魅力を感じました。

②古道（東浦路）

東浦路という小田原から下田間の伊豆半島東海岸を通る古道があり、街道沿いには道祖神や道しるべが点在しています。案内人のガイドを聞きながら巡れば、さらに歴史を肌で体感できる素晴らしい資源であると感じました。

4) アドバイス（講義等）の概要

昨年度示された課題に向け、鋭意推進活動を重ね、エコツーリズムを理解し賛同して共に活動する仲間づくりや商品化するために欠かせない人材養成事業を起こしていこうという気運が高まってきました。法人格を持って事業を継続化していきたい旨、協議会会員からの意見も一貫して聞かれました。そこで、まずは、全体構想を構築するため協議会として町行政と協働体制を構築する必要があることを伝えました。まずは全体構想の素案を作成して協働体制構築の糸口を作る方向性を示しました。さらに、法人設立には事業の明確化と担い手が必須であることを伝え、事例として

<http://inatorionsen.com/> 稲取温泉観光合同会社

<http://www.sc-tango.org/> NPO まちづくりサポートセンターsc-丹後 等を挙げ、エコツーリズム推進の事業化ならびに法人化に向けた体制づくりについて具体的に助言しました。

5) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

東伊豆町 ECO ツーリズム協議会が素案を作成する方向性で推進中です。

②全体構想への意向について

東伊豆町行政と協働の体制づくりが急務な状況です。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

保全に係る地権者との調整・ルールづくりが必須です。

6) 地域に対する印象、今後地域に期待すること

人材養成事業としての「東伊豆ふるさと大学」の受講生が、回を重ねるごとに増えており、受講生は非常に楽しそうに参加しています。いかに継続事業としていかが課題だと思えます。ガイド養成やテキスト制作など具体的な事業を展開し、さらに活動への地元参加者を増やししながら、事業の継続化を促進してください。

3-11. 特定非営利活動法人三保の松原・羽衣村（静岡県静岡市）

(1) 地域の概要

【人口】

7,000 人三保半島内

【地勢】

駿河湾に突き出た砂洲。今は半島であり内側に清水港を抱える。

【面積】

265.54 km² ※平成 23 年 2 月 1 日現在（清水区）

（うち旧蒲原町の区域 14.69 km²、旧由比町の区域 23.06 km²）

【気候、自然】

温暖で雪はまったく降らない。見ることが出来るのは富士の雪だけである。

【歴史】

古代白村江の戦いで有名な廬原氏はここから船を作り出港している。東西の境に位置し、要衝であり、権力者が攻防を繰り返す。江戸時代は長く直轄地であり徳川家康の印象が強いが、その前は今川文化の華開いた場所である。

【観光】

日本平、久能山東照宮、登呂遺跡 東海大学海洋博物館、次郎長史跡、エスパルスドリームプラザ、羽衣の松

【地域資源の概要】

温泉地ではないが、知名度の高い歴史のある観光地がコンパクトに点在しており、東京・名古屋などの首都圏から近いため行楽客はもちろん古くから修学旅行のメッカでもあった。近年はこれにサッカーを中心としたスポーツ合宿も付加されるようになった。東西の中程にあり、地の利も高い。有名な史跡が多く、自ら宣伝の必要がないため、あるがままに今日までに至った観光地でもある。

半分が工業立地でもあるせいか町全体が文化に疎く地域の文化が地域に啓蒙できていない情けない状況にあったが、三保松原の富士山世界文化遺産登録、東照宮の国宝指定、さらに、興津清見寺は世界記憶遺産の申請にあり、この地区の歴史ある観光地の地域に根付いた復興に繋がることを期待している。また、清水港は三保半島に抱かれた天然の良港として発展を遂げているが、登録後には海外からの客船が倍増した。いままでのようにあるがままのもてなしではなく富士山世界文化遺産の三保の松原を念頭にクールジャパンを戦略とした観光政策が求められているが、そこまで真剣に考える人はまだわずかである。この機会を逃したら、この地区が生まれ変わるチャンスはない。特に三保の松原は観光資源が自然資産そのものである。観光力を生かしながらこの自然環境を維持し後世に伝え

るためには、新しい市の都市設計の一環として観光を位置づけ観光政策を作り実践する他はない。

(2) アドバイザー派遣申請の背景

1) アドバイザー派遣申請の背景

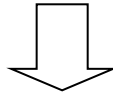
三保の松原は富士山世界文化遺産の構成資産として登録されるまで、国指定名勝、県立自然公園の指定をうけながら、森林計画もなく、薬剤散布をするだけで荒れるに任せられていたというのが実態で、世界文化遺産に向けた取組も静岡市にはなかった。遅ればせながらとはいえ、今、必死に世界文化遺産に向けた取組がスタートした。しかし全体像の見える構想はなく、迷走状態の印象は拭えない。登録から1年半。世界文化遺産登録のお祭り騒ぎに翻弄されながら、これからの展望と指針、方策を模索している。しかし渦中にいると本質がわからなくなり不安も大きい。大きな指針の必要性を感じていたが、どこから整理したらよいかわからず、苦しんできた。もう一度原点にもどり足元を見つめ客観的なご意見を聞かせていただき、今後に生かしたい。

2) これまでの取組

- ①松葉掻きと草取りの整備ボランティア活動 5年目
- ②松葉堆肥の研究 静岡大学農学部 平成26年度
- ③三保の松原美の世界の出版 三保の松原 文学散歩 絵画、文学の総括
文化芸術の啓蒙
- ④能羽衣ワークショップ 語り「羽衣」 清見寺琉球駿河羽衣交流会
- ⑤現代音楽公演など舞台芸術の企画
- ⑥松葉ペレット 青松葉の研究に対する協力
- ⑦行政に対する景観再生に対する要請活動
- ⑧富士山世界文化遺産への取組を評価していただき静岡県知事より表彰を受けました。

環境、文化にわたる 上記のような内容を平成15年より積み重ねてきました。静岡県はもとより市とのスクラムも綿密になっています。先生から新たな知見をいただき方向性を練り、未来に向けた構想プランを綿密に構築し、共通認識を持つことにより、人間の絆をより強固なものにしていきたいと考えます。そして、世界に恥ずかしくない日本の顔となる観光地を築き上げたいと考えます。

そこで羽衣村は、今までの実績を踏まえ羽衣ルネッサンス構想を提示しています。(議事録にもあるので重なります。)



羽衣ルネッサンス構想

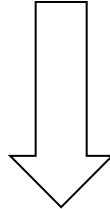
- ① **三保の松原現代の理想郷づくり** 三保の松原と共生したくらし
(環境整備と人間との共生)
- ・ 松と枯れ松葉の関係 → 富栄養化、戦前の循環システム
 - ・ 松葉掻き作業 → ボランティア活動の増員、廃棄物として処分方法
 - ・ 有効活用の検討 → ペレット化、たい肥化、粉末松葉
 - ・ 三保の農産物への活用 → 折戸ナス、トマト、枝豆、メロンなど
- ⇒ 一連の作業を体験し、それが松原再生に繋がるというエコツーリズムへ
(松葉掻き 集荷 粉碎 ペレット化 ⇒ 調理 ボイラー 発電)
環境学習 三保の松原学の研修
- ⇒ 整備の内容を反映した名物、物産を購入することで松原再生につなげる

新たな観光の在り方の構築

- ② **三保の松原美の再生** 三保松原の文化芸術の復興とその源泉となる景
観の再生 (芸術と自然の美の復活)
- ・ 眺める三保松原 → 砂洲の美 和歌や絵画、ビュースポット(日本平、江尻宿、清見寺)、貝島御殿
 - ・ 内海側の現状 → 工業地帯、折戸湾
 - ・ 三保松原の今昔 → 戦前の絵葉書
- ⇒ 対岸からの三保の松原の美の再生を図り、東海道随一と呼ばれた三保の松原の景観のスケールを現代によみがえさせ、世界遺産に相応しい町づくりを図る。日本人の理想郷としての復活、対岸から鳥瞰、俯瞰、ランドマークとしての三保の松原に認識を取り戻す。
- ③ **羽衣観光圏の確立 富士参詣曼荼羅を辿る** 行政区にこだわらない羽衣観光圏の構築
- ・ 曼荼羅に描かれた世界観を実見する (聖地としての認識)
 - ・ 対岸からの眺望地・ランドスケープとしての三保の松原の再認識
(眺望の景物)
- ⇒ 旅に対するロマンや神聖なものへの憧れを創出 ビジット ジャパンへの対応

地域づくりの再生と新たな創出

地域全体が三保の松原という資源景観と共生する社会の構築



地域全体とは 住民や観光事業者だけでなく、企業 工業 学校施設 農業 漁業などすべての人々が一体となって三保松原という自然資産を生かす。

(3) アドバイザー派遣の概要

日	時	平成 26 年 11 月 26 日 (水) ~27 日 (木) 平成 27 年 1 月 15 日 (木)
場	所	静岡県静岡市清水区三保を中心に日本平 果樹試験場、竜華寺、清水港、三保の松原、東海大学海洋科学博物館、興津清見寺、由比、蒲原、五十嵐邸
ア	ド	東京大学大学院 農学生命科学研究科 教授 下村 彰男 氏
参	加	者 【1回目】 静岡市職員、NPO 法人三保の松原・羽衣村他合計 12 名 【2回目】 静岡市職員、NPO 法人三保の松原・羽衣村、農業高校他合計 30 名
ス	ケ	スケジュール・方法 ◆ 1 回目 【1日目】 ・視察：日本平、竜華寺、果樹試験場、清水港周遊 ・三保の松原保全について説明 【2日目】 ・松葉ペレットについて説明 ・体験教育旅行・松葉掻きなどについて説明 ・視察： ◆ 2 回目 ・下村先生発表 ・農業高校生発表等 ・意見交換、今後の方針について

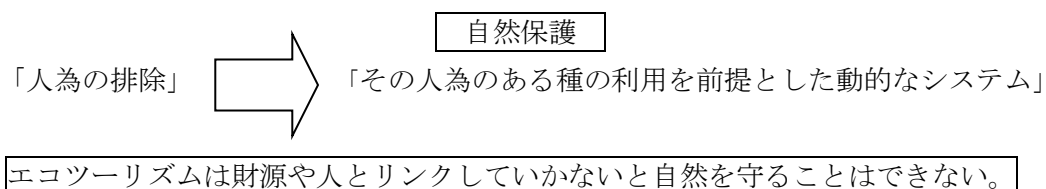
(4) アドバイスの内容

1) 下村彰男先生による視察発表

①エコツーリズムとは

「旅行者が、生態系や地域文化に悪影響を及ぼすことなく、自然地域を理解し、鑑賞し、楽しむことができるよう、環境に配慮した施設および環境が提供され、

地域の自然と文化の保護、地域経済に貢献することを目的とした旅行形態。」
地域への負担が小さく、来訪者に豊かな観光体験、地域に対する理解を提供し、
地域住民の地域への帰属意識を高め、経済面での+をもたらす。



旅→他日、他火
違う場所で違う文化に触れることこそが旅の本質である。
見るだけから見ているものが地域にどのような影響を与えているのかを知る観光へ
地域づくりに来訪者もかかわってもらおう
交流自立型まちづくり、地域ならではの資源とは何かを考えていく必要がある。
地域の文化的アイデンティティが喪失

「自然資産区域における自然環境の保全および持続可能な利用の推進に関する法律」
守るべき自然環境がある場合に、自治体がどういう使い方をするかはつきり決めれば、入域料金を取れる。資金管理のあり方を上手に活用することが重要。

環境負荷に対する知見と対策、

情報と物と一体となった資源を見出すことが課題

②地域の個性とは

2004年に文化財保護法が改正され、景観が文化的なものとして捉えられる。
日本の国土の7割は人とかかっている。自然が文化として受け継がれている。

②三保の地域資源とは

住民で共有すべきこと。来訪者に伝えたいこと。「三保の宝」は何か参加型のプログラム 複数の点的要素をつなぎ合わせる物語づくりが大事になってくる。

するとキーになるのはやはり松

大きな課題が存在

松林は人間が手を入れ続けられない限り、だめになってしまう。

松葉の除去の担い手をどうするか？

また松と富士の風景は時代とともに変わってきている。こういう点もひとつのストーリーとして提案できる。例えば右松、左富士。いまでは三保の松原から望む

富士は左に松で右に富士という点しかないが、かつては三保半島のさまざまな場所から富士を眺めることができたため、右松、左富士という眺望もあった。この眺めを回復するなどし、松+富士のさまざまな風景を楽しめる視点選定する。貝島、興津など、かつて富士を眺める名所であったが、工業地帯になってしまっているような場所を今後どのようにしていくのか、早めにプランを策定しておくことも重要。

松富士10景などを選定してみるとどうだろうか。

清水の港湾は景観保護という名目で、青く塗られている場所があるが、自然と調和する色とは低明度、低彩度が原則である。以下下村先生のパワーポイントより

(2) 同化型景観調和: 検討指標(色彩)

自然地における建物屋根の
カラーシミュレーション例

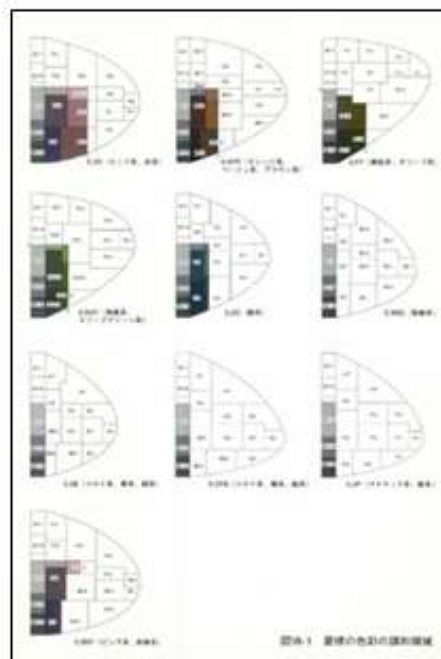
麻生恵(1995)



(2) 同化型景観調和: 検討指標(色彩)

- ・自然風景地における人工構造物の色彩調和に関しては、低明度、低彩度が原則である。(金属物は、+低輝度)

麻生恵(1995)



また、三保の松原の松の持っている神聖的な側面、防災的な側面をそれによって守られていた清水の港湾を一体として考えるとストーリーが作りやすい。

- ・ 園芸農業が盛んであったことや、牡蠣や海苔と関連付けることができるのではないかと。エコツーリズムの継続にはこういった仕組みのプランニングが決定的に重要。
- ・ 自主財源をどう確保するか、またいまだけをどうするのかを考えるのではなく、時間経過を考慮したプランを作っていく必要がある。

2) 生徒さん達の発表「松葉を利用した木質バイオマスガス化発電について」

木質バイオマス化発電が可能になれば自然廃棄物、流木、廃材などすべてがエネルギー源となる。

3) 意見交換

●質問者

- ・ 三保の松原が世界遺産の構成資産に選ばれたということを至宝であることを理解してない人が結構いる。その認識を持たなければと思う。
- ・ テトラポッドの問題、海岸の保護をどうするか？
- ・ 台風による流木の問題をどうするか？
- ・ 流木を使ったアートをやりたい

●下村 テトラポッドは土砂の供給がないときの対応策。

L字突堤で押さえていくのが現在が一番現実的。

京都の桂川では河床を下げようとしたが、河川沿いの歩道を広め取って親水形にしたほうがよいのでは、などさまざまな意見が噴出している。全国的に河川計画を見直す必要がある。

流木もどこかで知らないまま処理されるということではなく、問題として捉えるように芸術的に扱うことも意味がある。

●行政 流木は処理するお金がないというのが実態。

一回の台風でやると、きりが無い。意外と草が多い。

波消しブロックを沿岸突堤にしている。なんとか守っている。今後景観に影響しないような形に進めていく。

●下村

・湯布院の景観について。農家への補助への協力を求めてみると、賛成8割。お金をそういったところからもらえるという時代になってきている。これから資源管理にとってはこういった視点が必要なのでは。が、行政のお金が一番確実なものである。

●文化財課

ヨーロッパと日本における景観に対する意識の違いはどこから生まれるのか。右松左富士のアドバンテージとは。

●下村先生

・帰属意識には歴史がとても重要。昔の人たちは違う風景を見てきたんだよ。ということを知るのも歴史。近代の発展の過程で富士の見え方が変わってきた。清水がどう変容してきたのかを知るための方策としての、右松、左富士。

風景というのは意識するものではない。日常では見ているものは風景ではない。という考え方が支配的。日本の場合は順応性が高く歴史を意識しない。ストックされているものに対する関心が薄い。

・いろんな分野、世代の人間が集まって今日のような意思疎通できる場を上手に作ってもらえればよい。

全体構想があれば、旅行業法の緩和ができると思われる。

うまく制度を活用してもらい、話が出来る場所を担保してもらえれば。

三保そのもの、松そのものはある程度問題なく進む。むしろ旧清水など他のエリアとの結びつきを今後どうしていくかが課題になってくるのではないかと。

一体化させたほうが大きな動きがでる。そのつなぎの部分を歴史的な面や地理的なつながりから作り出していくことで、大きなテーマになっていく。

航空写真は常に見て意識できるような地図の作り方ひとつにも活かしていくなど、ストーリー、ビジョンを持って動いていくことが肝心。

4) 静岡県立農業高校生徒さんによる「青松葉の研究」

青松葉は抗酸化作用が高く人間にとって有益な食品でもある。ケルセチンが豊富、枯れ松葉についても効能は落ちない。また、お茶と混ぜるともっと効果が高まる。農薬散布などの問題もクリアーできる。

5) NPO法人三保の松原・羽衣村提案事項* 今後の方針について



戦前の三保の絵葉書から現在と視点の違いがあることに着目

三保の松原から見た富士の美だけではないスケールの大きさがかつてはある。

①内海の美

② 洲崎の美しさ 富士との対比



工業地帯

真崎が唯一生き残るが見るポイントがない。貝島からは見えるが今は工業地帯

③対岸からの美 興津 龍華寺 日本平 工業地帯が立ちただかり絵にならない。

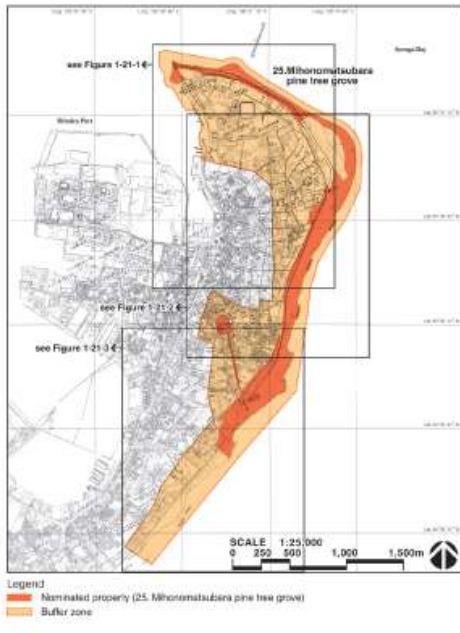
かつての三保の美とは、現地からの景色だけでなく三保の形そのものも入る



工業化の中で消滅させてしまった。

三保の松原は富士山とも一体だが清水港とも一体

ところが構成資産の指定区域に入っていないことで、三保松原への配慮はない。しかし貝島だけでも三保の松原に調和した緑地再生が叶えば三保松原への雰囲気づくりが大きく変わり三保の松原という歴史のある文化景観のスケールを復活させることが出来る。



オレンジ部分が構成資産の範囲

茶色の部分が貝島 埋立部分



江戸時代に描かれた図版

羽衣ルネツツサンス構想について

地域の宝を共通認識するための構想のたたき台をつくった。三保の松原の美の歴史を辿れば、現在のように三保の松原からだけの景観を見るのではなく、広く清水地区の美としてイメージする必要があることがわかる。また、三保の松原へ入る導入部としての雰囲気づくりも大きく関係する。かつてのあるべき姿をすべて復元することは難しいがポイントを清水八景「三保のある景色」などとしてピンポイントで設定することは可能である。もともと、三保半島の内海は貝島御殿や最勝閣があり、興津とつないだ清見潟の景色として歴史的な景観である。少し配慮するだけで

驚くほどの美が復活する。工業地帯となってしまったが、あきらめずに貝島の臨海部を利用するだけでも大きな再生になる。美の再生は富士山世界文化遺産に相応しい工業地区の再構築を必ず促すはずである。できることから進めていきたい。

6) 下村先生からの最終コメント

東海大学 農高の発表すばらしかった。今後こういう機会をたくさん持って共通の視点と問題意識を共有して課題に取り組んでいくことが肝要。ただし、港に関する部分については大きなプロジェクトが出る可能性が高いので、早いうちに手を打つことが大事である。

***エコツーリズムを念頭に置いた今後の方針について**

羽衣村では週2回の定期的な整備活動を行い5年間目に入っている。地域住民 企業 学校関係者 老人クラブと参加者も多岐に渡る。特質すべきは北海道からの修学旅行生である。今後はこのような活動をエコツーリズムとしてさらに強固なものとし、廃棄物の有効利用を促すために以下のようなメニューを加えたい。

- 1 松葉ペレット製造機導入により、現地でのペレット化を実現し現地で松葉を廃棄物から燃料に変身させる。ストックが可能となる。
- 2 ペレット調理器具の導入により、整備活動のお礼に何等かの名物を提供する。パイ、ピザのようなもの。試供品として整備の参加者へ差し上げる。
- 3 整備参加者に上記の作業にも参加してもらい、(ペレット製造、菓子づくり) 整備を楽しいレジャーの領域に引っ張る
- 4 青松葉の食品化を実現する。
- 5 これらの整備活動を羽衣観光圏内でPRしてもらう。
- 6 三保に相応しい物産や名物を創出する。売店でも販売し整備の基金として積上げる。
- 7 羽衣ルネッツサンス構想を地域の人に啓蒙し、三保松原を広域に発想できるよう意識の転換を図る。

(5) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

三保の会議はたくさんありますが、勉強会の形をとることによって、建設的な意見も出て、非常に充実感のある会となりました。このようなことを重ねながら、ベクトルを同じ向きにし、難題に取り組んでいこうと考えています。

①エコツーリズム、又は、地域資源について理解が得られた。

たくさんの事例を参考に三保にあったメニューを組み立てることが肝要。

②今まで課題としていたことがより明確になった

問題点が洗い出されたと考えます。

2) 今後期待される効果

エコツーリズムの共通認識ができ、戦略を考えたツーリズムの提案ができれば自
ずと観光地としての資質も上がるでしょう。

羽衣ルネッサンスの構想を啓蒙し理解者を増やす。

3) 今後の取組

羽衣ルネッサンス構想の推進

(6) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

文化的景観の考え方や今後、環境税などを徴収する仕組みなど、これからの環境
保護に対する新しい考え方。

2) その他感想

関係各署の集まりはありますが、形式的になり、物事が進みません。同じ課題を
話し合い知恵を集めれば縦割りの中でも出来ることは多いと思いました。



下村先生発表



「松葉を利用した木質バイオマス
ガス化発電」について発表



「青松葉の研究」について発表

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

東京大学大学院 農学生命科学研究科 教授 下村 彰男 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

- ・「三保松原」は、世界文化遺産の構成資産として登録されたものの、松枯れをはじめ活性度の低下が問題視されている。申請者であるNPO法人三保の松原・羽衣村は、松原の保全を目的として、松葉の除去や草取り等の林床管理、松の補植、松枯れ木に対する対応等を、行政とも連絡を取りながら実施している。
- ・特に、松葉の除去には力を入れて取り組んでおり、除去作業を進めながら、バイオマス利用をはじめとする除去松葉の活用方法について、地域と連携をとりながら試験的な取組をも進めている。

②課題

- ・松葉の除去をはじめとする松原の林床管理の担い手が必要であり、地域住民の協力や交流人口を活用した仕組みづくりを検討する必要がある。
- ・また、除去した松葉の利活用についても、新たな方策の開発とともに、実際に有効利用していく仕組みを地域や来訪者を組み込んだ枠組みの中で検討する必要がある。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

- ・松（原）

②上記地域資源に魅力を感じた理由

- ・世界文化遺産の構成資産として三保を代表する存在であるとともに、三保を取り巻く地域の自然的、歴史・文化的諸資源を結びつける存在としての可能性も高い。

3) アドバイス（講義等）の概要

- ・エコツーリズムの考え方や概念について
- ・エコツーリズムを進めることに意義について（まちづくりとの関連）
- ・地域の資源、地域の個性について
- ・三保（清水）地域における「地域資源」の可能性について

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

- ・申請団体である NPO 法人三保の松原・羽衣村が「羽衣ルネッサンス構想」と名付けた「構想」を提示している。しかしながら、目指すべき理念を提示してい

るものの、後は断片的な具体的取組について、現状を中心に列記したものとなっており、空間的側面、事業的（ソフト）側面に関して系統的に検討したものになっていない。

- ・静岡市も、「三保松原保全活用計画」「名勝三保松原保存管理計画」「静岡市景観計画」など部署に応じて関連する計画を策定し観光側面についても言及しているものの、まとまった動きにはなっていない。

②全体構想への意向について

- ・個別の動きを超えて、協議会を設定し全体構想立案に向けて動くまでには、時間と契機が必要であると考えられる。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

- ・中心となって推進していく組織が、構想や計画という概念に対して理解を深める必要がある。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

- ・「松（原）」は、三保のみならず、清水（港）や興津、日本平等を含んだ、地域の自然的、地理的、歴史的、文化的側面を語る上で、核としての役割を果たすことができ、地域の重要な資源と位置づけることができる。
- ・したがって、松（原）の保全を、その問題だけに止めず、その形成や変遷の過程をも含めた「地域の物語」として、地域に点在する諸資源を結びつける必要がある。例えば、
 - ・安倍川や日本平を含む広域での三保の地理的、自然的位置づけ
 - ・富士山との関係や人々の歴史的な営みをも含めて歴史的、文化的な枠組みでの三保や松原の位置づけ
 - ・三保等における農業（園芸）の展開と防風・防潮機能との関係 等々
- ・こうした地域ならではの物語の設定が、地域コミュニティの拠り所や来訪者（観光客）の魅力となって、松（原）の持続的な保全管理に対する理解の促進や、支援活動への参加に結びつくと考えられる。
- ・絵画等に描かれている松（原）と富士山との位置関係は地域の近代化、都市化の過程と深く関わっており、現在では構図が限られたものとなってしまっている（左松右富士）。松と富士山との多様な構図の回復・発見と、視点場の選定・整備も展開の手がかりになるのではないか。
- ・現在、清水（港）と三保（松原）とは別々の存在として、その収まりや発展が独自に計画されており、両者の関係についての調整は十分に検討されているとは言いがたい。しかしながら清水および三保の進展は一体的なものであり、土地利用や景観（色彩等）についても両者を一体的に計画していくことが、地域理解の促進にとっても重要である。

- 折戸湾に隣接する弁天崎や貝島を視点場とする右松左富士の風景・景観の回復を含む、内湾の水際線におけるパブリックアクセスの確保は、三保と清水を結びつける上で大変重要な課題であると考えられる。近代において、このエリアに立地した工場等にも移転等の動きが出ているようであり、そうした動きに際して少しでも水際線へのパブリックアクセスが回復確保できるよう総合的に計画を進めることが重要であると考えられる。
- その他、計画づくりに向けて、専門家である計画系のコンサルタント等と接触し、計画を依頼したり、アドバイスを受けた方がよいと考えられる。その際、この地域についてよく知っている専門家であることが望ましい。

3-12. 一般社団法人飛騨市観光協会（岐阜県飛騨市）

(1) 地域の概要

【人口】

25,969名（平成26年10月1日現在）

【地勢】

岐阜県の最北端に位置し、北は富山県、南は高山市、西は白川村に隣接する。県庁所在地の岐阜市から約150km、高山市から北約15kmに位置する。

【面積】

総面積792.31平方キロメートル

【気候、自然】

気候は海拔高度が高いところが多いため、東北地方北部や北海道南部と似て、夏は涼しく冬は雪が多く寒さが厳しい。全体的に内陸気候であり、気温は年平均で10℃である。また、周囲を標高3000mを越える北アルプスや飛騨山脈などの山々に囲まれ、総面積792.31平方キロメートルの約93%を森林が占める。

【歴史】

城下町として栄えた「古川町」、かつて“東洋一の鉱山”といわれた鉱山町「神岡町」、天生県立自然公園、池ヶ原湿原など自然資源豊かな「河合町」「宮川町」の2町2村が平成16年2月1日合併し飛騨市となった。

【観光】

古川町の“瀬戸川と白壁土蔵街”の風景や、起し太鼓に代表される古川祭の他、近年は廃線を利用した「レールマウンテンバイク」などが注目されている。また、天生県立自然公園や池ヶ原湿原など北飛騨エリアの森の入込者数も増加傾向にある。

【地域資源の概要】

飛騨市と白川村にまたがる「天生県立自然公園」と三湿原（天生湿原、池ヶ原湿原、深洞湿原）は岐阜県より全国に通用する観光資源“岐阜の宝もの”に認定されている。

天生県立自然公園には変化に富んだ雄大で懐深い自然が残り、ミズバショウやニッコウキスゲが咲き誇る湿原と、ブナやカツラの大木が林立する原生林がある。

飛騨市内にはそれぞれに特徴ある異なった植生を持つ3つの湿原（天生湿原、池ヶ原湿原、深洞湿原）があり、魅力あるエコツーリズムのフィールドとして回遊することができる。



天生県立自然公園



池ヶ原湿原

(2) アドバイザー派遣申請の背景

1) 地域課題

- ・エコツーリズムの推進を、いかに地域振興に繋げるか。またその効果をどうやって測定するか。
- ・入山者等の、地域での消費額が分からない。闇雲に数の増加を狙うのではなく、業として質の高いエコツーリズムを推進するためにデータ収集の手法、実施が必要。
- ・自然資源の利用と保全をいかに両立するか。貴重な動植物の採集などが行われている事例もあり、保全のシステムの確立が必要となっている。
- ・地域が協働したエコツーリズムの推進体制をいかに確立するか。
今後、北飛驒エリアをカバーしたエコツーリズムの推進体制を作ることが必要である。
アドバイザーによる上記課題への専門的見地からの助言や指導を受け、課題の解決に向けた支援を頂くため今回申請した。

2) これまでの取組

過去4カ年に亘り、飛驒市を中心とした「北飛驒の森」エリアにおける森の保全と利活用の取組を行ってきた。

- ・森の中での携帯トイレ使用ブースの設置・運用
- ・地元バス会社と連携したシャトルバスの運行
- ・宿泊・日帰りツアーの開催
- ・ヨシの除伐と根切りなど湿原の植生回復事業の実施 ほか

(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	◆ 1回目：平成 26 年 10 月 23 日（木）～24 日（金） ◆ 2回目：平成 27 年 1 月 19 日（月）～20 日（火）
場 所	岐阜県飛騨市
ア ド バ イ ザ ー	株式会社ピッキオ 代表取締役 楠部 真也 氏
参 加 者	◆ 1回目：14 名 ◆ 2回目：15 名
スケジュール・方法	◆ 1回目 【1日目】 ・意見交換会：地域の問題の共有、課題の明確化 【2日目】 ・視察：池ヶ原湿原、種倉地区 ・打合せ ◆ 2回目 【1日目】 ・意見交換会：エコツーリズム推進法に基づく全体構想について ・打合せ：全体構想策定にあたっての具体的スケジュールについて

(3) アドバイスの内容

1) 1回目派遣

①意見交換会

参加者から下記の課題・質問があり、楠部氏からのアドバイスがあった。

ア. 体験観光に移行している中で、多様なニーズに合わせた商品が必要。

一過性の商品はできても、腰を据えて事業を行う事業者が現れない。

→なぜ事業者が育たないのか。儲からないからではないか。日本全体の傾向として観光を観光客数で捉えてしまいがち。本当に必要なのは、観光消費額。飛騨市の中でそのデータはあるか。分かるのであれば、その消費額を増やすため目標数値を作ることが必要。

イ. 飛騨市のターゲットとして有望なのはどこか。

→ i. 飛騨エリアに訪れる外国人旅行者は大変多い。特に高山までは、外国人旅行者は来ている。ここに対しての打ち手はあるのか。日本国内の観光市場は、2030 年までに3分の2に減ってしまう。飛騨市の資源は、本物が残っており外国人に魅力あるものがある。

ii. 北飛騨の森は確かに魅力があるが、首都圏近郊にも素晴らしい森はある。軽井沢も東京から呼ぶことは意識していない。むしろ軽井沢に来てくれたお客さんに来てもらえばいいという意識である。飛騨市においてもせっかく高山市までお客さんは来ているので、ここのお客さんと呼んで来ればいい。欧米系の旅行者は、トレッキング需要もあることから、この

ニーズを汲めればうまく飛騨市に来てもらえる可能性がある。そういった取組はできるのでないか。

ウ. 具体的にはどんな方法でこの地域をPRしていけばいいか。

→高山とは観光協会などといかに繋がっていくか、また行政間同士で連携が取れるかどうか。飛騨市とうまく手を組むことで、外国人の満足度を上げることも可能なはずだ。双方にとってプラスになる関係づくりを目指してはどうか。

エ. ブルーシートを広げてギフチョウを獲っている光景を観る。飛騨市河合町はギフチョウの保護地域であるが、その他の地域にも生息しているにも関わらず、保護する仕組みがないことから自由に獲られてしまっている。

→エコツーリズム推進法に基づく全体構想を飛騨市で作成した場合、特定自然観光資源とすれば罰則を設けることができる。全体構想を作成している地域は少ないが、ギフチョウを守りたいというのであれば、この構想を作るのもひとつの手だ。

オ. 全体構想は具体的にどの機関が作成するのか？

→基本的には行政が提出する。環境省、国交省、農水省、文科省が主務官庁として認めることで、地域が全体構想の認定地域になる。

このほか、下記の意見や課題が参加者より挙げられた。

カ. 天生県立自然公園について

・天生県立自然公園の現在の一番の問題は、獣類による食害。特にイノシシによる食害が深刻。ミズバショウを掘ってしまう。現在は、保護する区域を物理的に囲う方向で考えている。

キ. 深洞湿原について

・以前、深洞湿原について自然資源の保全の仕組みを地元に提案したところ、地元は現状維持を望んだと聞いている。その森がお金を生める場所であると分かってくれば、関わってくれる人も増えてくるのではないかと。
・ツアーを組み、実績をつくることで地元の意識が変わると並行して保全の取組について話し合いをしていく必要があるのではないかと。
・地元が動かなければ、補助金をつぎ込んでも、意味がない。
・取組自体を評価してもらえることが、結果的にこの地域の評価につながる。

②視察

飛騨市の観光資源を講師に観て頂くため、宮川町の種蔵地区および池ヶ原湿原を地元ガイド（飛騨市・白川郷自然案内人会）と共に、周っていただいた。

2) 2回目派遣

①全体構想策定から国に提出するまでに要する期間は？

→地域より異なる。ある問題に関して議論がある場合には、それ相応の時間を要

する。

②ルール（規制）も全体構想に入るのか？

→ルールも全体構想に入る。シンプルに作ることも、時間を掛けて厳しく作ることも可能。そのルールの中にギフチョウを入れることで、この地域では何を大事にしているかをアピールできるのではないかな。

ギフチョウを特定自然観光資源に入れることで、チョウの捕獲者にこの地域では獲りづらいという印象を与えることができる。

③エリアの選定にあたって、考慮すべき点は？

→ガイドツアーの実施にあたって、町外のエリアも入る場合は、そのエリアも含めて全体構想を作るケースもある。飛騨市の実情に合わせて、高山市や白川村の一部を入れるということも考えられる。

④作業部会の形成の起点をどこに作ればいいのか。飛騨市全域で議論することになると、集めるべき参加者の数が相当数になるのではないかな？

→やり方として、ある町は部会を作る前は当初、5名～6名で議論を始めた。その後お宿が入り、対象エリアに国有林が入った時点で森林管理署が入った。部会参加者の集め方については、その町、地域に応じた形で考えて作ればいい。

このほか、下記の意見や課題が参加者より挙げられた。

⑤全体構想策定にあたって、対象となるエリアについて

- ・白川村も飛騨市と自然資源の保全や観光について問題点が一致するところが多い。同じエリアとして括れれば周遊観光としてはいいのではないかな。
- ・まずは飛騨市をエリアとして考えて、その中で山之村や深洞湿原なども含めて十分な議論をすべき。自然環境を保全・保護しながら観光を進めていくという看板の中で、ギフチョウはそのシンボルとして捉えていけばいいのではないかな。

⑥その他

- ・天生峠に欧米系の外国人が自転車を押して来ている。従来型の観光の捉え方が通じない時代が来ている。いままでやってきた観光施策について整理する時期に差し掛かっているように感じる。
- ・今、欠けているのは自然資源をいかに活かして取り組んでいくのか、高山にきた外国人をいかに取り込んでいくか、その方策の共有ができてない。これから進むべくデザインをつくるにあたって、うまく全体構想を使っていければいい。
- ・楠部氏には全体構想の策定にあたって、是非関わっていただきたい。この地域を知っていること、そして第三者の視点が必要である。

(4) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

①エコツーリズム、又は、地域資源について理解が得られた

飛騨地域が持つ具体的な可能性についてイメージが湧いた。特に、外国人旅行者から評価される可能性が高い地域であること、またそれらの人々にトレッキングの需要もあり、森まで足を延ばす可能性があること。

②今まで課題としていたことがより明確になった

ギフチョウなどの希少な動植物をどうやって護っていくか。地域の中で保全の仕組みをいかに構築するか。

③今までの課題に対して取組方が分かった

エコツーリズム推進法に基づく全体構想を作成、認定されることにより、自然の利活用と保全の仕組みを作れる

④エコツーリズム、又は、地域資源について理解が得られた

飛騨地域が持つ具体的な可能性についてイメージが湧いた。特に、外国人旅行者から評価される可能性が高い地域であること、またそれらの人々にトレッキングの需要もあり、森まで足を延ばす可能性があること。

⑤今まで課題としていたことがより明確になった

ギフチョウなどの希少な動植物をどうやって護っていくか。地域の中で保全の仕組みをいかに構築するか。

⑥今までの課題に対して取組方が分かった

エコツーリズム推進法に基づく全体構想を作成、認定されることにより、自然の利活用と保全の仕組みを作れる

2) 今後期待される効果

- ・今回のアドバイスをきっかけとして、より森林資源の利活用についての議論が活発に行われることが期待できる。
- ・希少な動植物を保護する制度・体制が不十分であることが明確となり、具体的な取組に向けて動き出す機運が生まれただけでなく、講師のアドバイスによりその方策が分かった。
- ・エコツーリズム推進法に基づく全体構想を作成、認定に向けた取組が、今後具体的に動いていくことが期待できる。

3) 今後の取組

上述の課題・問題点の解決、そして将来構想の構築に向けて、エコツーリズム推進法に基づく全体構想の策定とそれに伴う実際のアクションの実施。

(6) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

「エコツーリズム推進法に基づく全体構想」策定市町村の実例

特に講師より、群馬県みなかみ町の事例についてご教授頂き、大変参考になった。

<http://www.env.go.jp/nature/ecotourism/try-ecotourism/index.html>

- ・東京都小笠原村の事例を基にお教え頂いた、マーケティング調査の重要性。
- ・エコツーリズム全体構想策定の有用性、またそれに伴う具体的活動について。

2) その他感想

外部有識者に入って頂くことで、いままで明確になっていなかったことが浮き彫りとなり、また具体的な今後の方策についてアドバイス頂けた

【記録写真】



種蔵地区の様子



池ヶ原湿原視察の様子



話し合いの様子

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

株式会社ピッキオ 楠部 真也 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

岐阜県飛騨市は岐阜県北部に位置する山間の町です。観光地として有名な飛騨高山に隣接し、明治の頃の古い街並みや段々畑など日本の里山風景を各所に残している地域です。里山型のエコツアーは市内各地で展開されており、ツアー参加者も増えている状況です。

②課題

飛騨市の取組の課題は、集客であろうと思われます。ガイド業を生業とできるほどの集客はいまだありません。また、ギフチョウなどの自然資源の保護についても課題がある状況です。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

古川の街並み、種蔵の里山風景、池ヶ原湿原など

②上記地域資源に魅力を感じた理由

古くから残されている古川の街並みには今も住民が生活しており、観光地化されたものではありません。本物志向の観光客にとっては非常に魅力的に映ります。また、種蔵の里山風景や池ヶ原湿原もツアーに組み込むことで魅力を向上させることができると考えられます。

3) アドバイス（講義等）の概要

飛騨市は観光協会なども含めてエコツーリズムに取り組んできており、地域協議会を作る下地はできていました。地域の課題として観光消費の増大、市としての観光の大きな方針の策定、自然資源の保護というものがありましたので；

①他地域との連携強化

②全体構想の策定

の2点を中心にアドバイスとして伝えました。

- ①飛騨市は近隣にも大きな魅力を持った地域が存在します。まず、海外観光客が非常に多く集まってきている高山市（年間入込約 400 万人）そして世界文化遺産として認知度の高い白川郷（年間入込約 120 万人）です。現在、飛騨市は白川村とは連携することを始めていますが、高山市とはまだという状況です。飛騨市には滞在の魅力となるような資源が豊富にあり、高山や白川の課題である“滞在日数を増やし、観光消費を増大させる”という点には貢献できますので、集客が必要な飛騨市と良い意味で連携ができると考えられますので、色々な障壁

があるのは理解しますが、何とか前に進めることができればと考えます。

- ②飛騨市周辺ではギフチョウの乱獲が問題となっているとのことです。これを何とかするために、全体構想を用い、ギフチョウを特定自然観光資源とすることによってしっかりと保護できないかという検討を進めています。また、飛騨市の観光政策の基盤をしっかりとするという意味でも全体構想への取組は効果があるのではないかと思います。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

飛騨市は、エコツーリズム全体構想に取り組む予定でいます。

②全体構想への意向について

積極的な意向があり、2015年度から取り組むことになろうかと思われま

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

地域内の理解が必要と思われま

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

今回は2回訪問させていただきました。飛騨市には典型的な里山風景が各所に残り、世界文化遺産の白川郷、多くの観光客が訪れる飛騨高山があり、資源面、観光面からも有望と言えます。資源、観光の両面を揃えられる地域はあまり多くありません。飛騨市や集落単独ではなく、なるべく広く見ることで、Win Win の関係を構築し、少しでも観光消費が増え、貴重な自然資源が保護できるような仕組みを作っただけであればと思います。ありがとうございました。

3-13. 恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク推進協議会 (福井県勝山市)

(1) 地域の概要

【人口】

24,887人(平成26年10月31日現在)

【地勢】

勝山市は、福井県の北東部に位置し、県都・福井市から東の方向約28kmに位置する。福井市、大野市、坂井市、永平寺町、石川県に隣接している。周囲は1,000m級の火山性の山々に囲まれ、中心部は県下最大河川である九頭竜川が貫流する。市街地は九頭竜川の流れと隆起により形成された河岸段丘上に位置している。

【面積】

253.68 km²

【気候、自然】

日本海側気候に分類され、山沿いの盆地という地形から夏は比較的高温・多湿となり、秋から冬にかけては降水量が多く、特に冬は寒冷で降雪のため日照時間も少ない。特に山間部は豪雪地帯である。その豪雪地帯に属し、湿潤な環境に恵まれているため、多くの動植物が生息している。このような生物多様性は、ジオパーク(勝山市)内の多様な地形・地質などから生まれたものであり、四季に応じて様々な動植物や風景を楽しむことができる。

【歴史】

本市には、約1万5千年前から人々が住んでいたことが市内に点在する遺跡から出土した遺物から明らかになっている。717年、泰澄により平泉寺が開かれ、白山信仰が盛んになるとともに白山信仰の中核寺院である平泉寺が勢力を増す。しかし、戦国時代1574年、平泉寺は一向一揆衆の襲撃により全山消滅する。江戸時代に入り、河岸段丘上(現在の中心市街地)に城下町(勝山の現在の基盤)が形成された。明治時代に入り、絹織物が盛んになり繊維産業の基盤を築き現在に至る。1989年、恐竜化石発掘調査と平泉寺発掘調査の二つの発掘調査研究が始まる。

【観光】

勝山市には年間約170万人の人たちが訪れている。観光施設の中心は福井県立恐竜博物館であり、年間70万人の誘客数を誇る。その他、スキージャム勝山や白山旧境内などの観光施設が点在している。また、加越山地の山々の登山や九頭竜川の鮎釣りなど多くの人たちが訪れている。ただし、それらの観光資源や自然は有機的に結びついていない。

【地域資源の概要】

勝山市の地域資源は、地球活動の痕跡や豊かな自然環境、そして勝山の人たちが築き営んできた生活や歴史文化と多岐に揃っている。大きく言うと、恐竜が生きていた時代から恐竜化石が発見されるまでの間に形成されてきた地球活動の遺産や自然遺産、そして、それら風土による独自の歴史文化遺産がエリア内に点在している。

- ・ジオ多様性 (Geodiversity) : 地球の営みにより形成された地形・地質遺産
化石、露頭、山や川、滝、風景などの地形・地質の多様性
- ・生物多様性 (Biodiversity) : 勝山の地形・地質により形成された豊かな生態系
植物群落、湿原、動植物、アカトンボ、希少種などの生物多様性
- ・歴史文化の多様性 (Culturaldiversity) : 風土により形成される独自の歴史・
文化

歴史的建造物、無形文化財、祭などの歴史文化の多様性（独自性）

これらの遺産は、当エリアのエコミュージアム、ジオパーク、BiosphereRwserve（ユネスコエコパーク）の構成遺産となり重複して活用されている。

(2) アドバイザー派遣申請の背景・地域の課題

1) 派遣申請の背景

福井県勝山市は、市内全域がジオパークのエリアとされており、またその一部が白山国立公園、白山BRに指定されている。当地域は、エリア内でそれらのジオパークの取組を同時に行っている地域であるが、今後、豊かな自然を活用した勝山でエコツーリズムの概念を取り入れ一体的なニューツーリズムを目指す必要があった。

2) 地域の課題

地域では、ジオパーク、エコミュージアム、BRが共通した地域資源を活用しながら取組を行なっている。市内には多くの自然遺産やそれらにより醸成された地域資源が点在しているが、一体的に活用されておらず、考え方を同じくするエコツーリズムやジオツーリズムに活かされていない。また、それらを企画運営する形態についてもあまり進んでいないのが現状で、エコツーリズムやジオツーリズムの本来の意味を認識している行政職員や地域住民が少なく、地域に責任を持ったツーリズムの確立が望まれている。

今回のエコツーリズム推進アドバイザー派遣事業により、地域の自然を対象にしたエコツーリズム、ジオツーリズム推進にあたって、エリアを決めての地域住民・グループ、行政の意識の高揚や役割を明確にした上で、持続可能なエコツーリズム、ジオツーリズムを推進するためのプラットフォームもしくはモデルの完成を目指す必要がある。また、エコツーリズムの資源となる生物多様性やジオツーリズムの資

源となるジオ多様性を地域の多様な主体の連携により保全する活動を活性化させる必要がある。

(3) アドバイザー派遣の概要

日	時	平成 26 年 11 月 10 日（月）～平成 26 年 11 月 12 日（水）
場	所	福井県勝山市（恐竜溪谷ふくい勝山ジオパーク／白山 BR エリア） 勝山市教育会館、福井県立恐竜博物館、かつやま恐竜の森管理事務所、のむき風の郷、北谷町谷集落、小原集落、大矢谷白山神社、池ヶ原湿原、白山平泉寺旧境内ほか
アドバイザー		環境映像ディレクター・プロデューサー 鈴木順一朗 氏
参加者		17 名
スケジュール・方法		<p>【1日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講義、意見交換、視察、ヒアリング <p>【2日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視察、ヒアリング (のむき風の郷事務所、えごま油加工場、北谷町谷集落、北谷町小原集落) <p>【3日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視察、ヒアリング (大矢谷白山神社の巨大岩塊、池ヶ原湿原、白山平泉寺旧境内ほか) ・全体会議 (エコツーリズム研修会、対応者との意見交換会、具体的な助言の確認)

(4) アドバイスの内容

1) エコツーリズムの概念について講義

エコツーリズムの考え方

理想的なエコツーリズム推進体制（持続可能な体制）について

効果的な広報戦略について

（助言）

受け手にとってエコミュージアム、ジオパーク、エコパークは関係がない、線を引かないでやれることは一緒にやること。全ては同じ環境の上で行われている。

ツーリズムの中でヒット商品をつくること。そのためには体系的にバランスよく考えてみる必要がある。

地域の人が当たり前と思っていることの中に宝が眠っている。当たり前が素晴らしい。

2) 視察及び助言

①かつやま恐竜の森

ア. 視察等の内容

- ・かつやま恐竜の森（里山、都市公園）の概要説明
- ・NPO 法人恐竜のまち勝山応援隊の活動の概要説明
- ・ジオパークの拠点施設としての今後の取組についての説明

イ. 助言

- ・様々なメニューの中から、「恐竜」が入口で出口は「自然」といった具合に、様々な体験から勝山はいいところだという印象を与えて欲しい。
- ・そのためには恐竜と現代（自然）をつなげるコンセプトが必要。
- ・ビジターセンターのネーミング、キャッチフレーズが重要。
- ・ビジターセンター内にコンシェルジュ機能を持たせるとよい。特別意識（特別な案内）を感じてもらえる。そのためには勝山市全体のことを知らないといけない。

②のむき風の郷

ア. 視察等の内容

- ・野向町まちづくり推進協議会の事業概要の説明
- ・えごま栽培からえごま油等の販売まで一貫する、のむき風の郷の事業概要説明
- ・えごま油搾油工場視察

イ. 助言

- ・地域に来た人たちにえごまの産地ということが理解できる仕組みを取り入れること。
- ・当たり前のことをしっかり説明すること。何故、えごまがここで栽培されているのか。
- ・えごまの圃場を守る活動を行うために、鳥（ヒワ）害を自然的な角度から学び、高齢者の活用など地域住民の参加意識を受け付けてはどうか。

③北谷町谷区

ア. 視察等の内容

- ・ケヤキ群生、不動滝、湧水、ブナ林（遠望）、フットパスコースの視察
- ・谷区が受け入れをしているエコツアーや自然観察会、はやし込まつり等の説明
- ・北谷活性化・再生に向けた協議会が催行する各種ツアーの説明

イ. 助言

- ・谷区は様々な資源があるが何をメインテーマにするか検討する必要がある。
- ・資源が狭いエリアに集約されていて、コンパクトでよい環境である。その環境において自然系のガイドを養成する場所として活用、活動してはどうか。
- ・山を知る世代がいなくなっている、山の知恵、ルールを学ぶことは価値がある。

④北谷町小原区

ア. 視察等の内容

- ・閉鎖されている小原集落～赤兎山／大長山登山道入り口の間の風景や資源を視察。

イ. 助言

- ・どういう位置関係の中で小原集落があるのか見させてもらった。豊かでダイナミックな自然、歴史文化といった地域資源が豊富なことに驚いた。
- ・現在行っている古民家を拠点としたエコツアー等に自信を持って更に伸ばしてもらいたい。

⑤平泉寺町大矢谷白山神社ほか

ア. 視察等の内容

- ・大矢谷白山神社の巨大岩塊、池ヶ原湿原、赤尾大堤等の経ヶ岳の山体崩壊に伴う岩屑なだれで形成された地形等を視察
- ・白山平泉寺旧境内の視察

イ. 助言

- ・湿原が寂しすぎるため、貴重な湿地などを見せられる工夫を行ってはどうか。
- ・木道の再整備必要、テラスの設置を行ってはどうか。
- ・白山平泉寺旧境内で偶然ボランティアガイドと話ができた。ちゃんと適正なガイド料金をもらうような仕組みを確立してもらいたい。ボランティアガイドは責任がなく、長続きしない。

3) エコツーリズムの概念について講義、意見交換（全体会議）

- ・エコツーリズムの考え方
- ・理想的なエコツーリズム推進体制（持続可能な体制）について
- ・効果的な広報戦略について

4) 勝山を視察してのアドバイザーの印象及びそれに対する助言

- ・地域の宝の整理、保全を行う必要を感じた。
- ・様々な要素がフィールド上で複雑に絡んでいるという印象。
- ・ターゲットと目標を明確にして、そのために何をやるのかを考える必要がある。
- ・単なる観光か環境保全型の観光のどちらを選択するのか。両立か。
- ・勝山の売りはなになのか、わからない。恐竜か、自然か、歴史文化か整理すべき。（市民と行政と一緒に考えていく必要があると考えられる。）
- ・勝山型のツーリズムの中にエコツーリズムの考え方を落とし込めばよい。
- ・ジオツーリズムに関して、ジオパークの専門書、ガイドブックを作成してはどうか。

あくまでも入口は恐竜、恐竜化石で出口は自然に抜けるもの。

5) 参加者からの意見や質問

- ・助言の中で地域資源やツアーのシンプルさを求められているが絞ることが難しい。行政といろいろと協働しているが、予算等も集中できていないように感じられる。
→行政の縦割りの弊害。幸い目標化されていないので可能性を感じる。
- ・エコツーリズムの考えに基づき推進の土台をつくるのは行政の役割ではないか。
→市民が気付き声を上げるべきである。行政主導になっている理由は、多くの団体が行政にぶら下がっているからである。官民の両方が自立していく仕組みづくり必要。
- ・勝山の魅力の中で、自然豊かなところと紹介するがその豊かな部分が見つからない。何を指し示すものか含めて。
→もっと地域の様々な人たちと勝山について考えてみる必要がある。市民で勝山の魅力って何かを考える必要がある。当たり前なのが当たり前でない。

(5) アドバイザー派遣の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

地域の自然を保全し、活用していくエコツーリズムの考え方が理解してもらえた。地域が目標を持って、自然を保全、活用しながら様々なターゲットに対して、何を意識させるのか、知ってもらうのか、感じてもらうのか、何を伝えたいのかを考えながら活動をしていく意識が芽生えたものと考えられる。

地域では当たり前になっているものの価値を磨き伝えるという意識付けができた。

2) 今後の期待される効果

- ・様々な団体の連携強化、情報共有。
- ・自然というフィールド上の地域資源の整理、活用。

3) 今後の取組

エコツーリズムの考えのもと、地域資源を整理し、様々な団体の連携や協力による「勝山型ツーリズム」の確立に向けた取組の検討をしたい。

勝山の「魅力」や「売り」といったもの、言い換えれば「地域アイデンティティ」を形成するためのジオパーク活動を推進したい。

(6) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

1) 参考となった事項

- ・今の時代に一致したエコツーリズムの考え方
- ・エコツーリズムの考え方を取り入れた理想的な推進体制の考え方
- ・効果的な広報戦略
- ・地域内の連携と組織の再構築について

2) その他感想（参加者から）

- ・ガイドの質の向上のため研鑽を重ねなければと思った。
- ・再度、団体の資源のカテゴリーを仕分け、団体側に足りないことを再考する良いきっかけとなった。
- ・勝山市全体のツーリズムが連携できないことが、もどかしく感じた。
- ・エコツーリズムの概念について、多少ながら理解できた。また、これまでと違った視点での意見を聞くことができ、今後の参考になった。
- ・一つのことだけに拘って活動をやればそれでよいのか疑問が残った。
- ・このような機会を頂き、エコツーリズムについて改めて整理して考えることができ、参考になった。
- ・関係者との研修・忌憚のない意見交換が改めて大切であることを痛感した。要するに意思疎通が大切。
- ・エコツーリズムなどが勝山の現状と合っている取組なのか疑問が残った。

【記録写真】



写真 1 : 行政職員を対象とした研修会



写真 2 : 公園管理事務所でのヒアリング



写真 3 : 不動滝の視察



写真 4 : 池ヶ原湿原の視察



写真 5 : のむき風の郷でのヒアリング



写真 6 最終日_全体会議

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

環境映像ディレクター・プロデューサー 鈴木順一郎 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

現在、勝山市では、「ジオパークとジオツーリズムへの取組」「エコミュージアムとエコツアーへの取組」「ユネスコエコパークへの取組」について、それぞれ取組が行われている。一部が白山国立公園に指定されていることもあり、壮大な自然美と恐竜の化石が多く出土する多様で遺産価値の高い地層は、大変魅力的な地域である。

②課題

「ジオパークとジオツーリズムへの取組」「エコミュージアムとエコツアーへの取組」「ユネスコエコパークへの取組」地域が同地域で重複しているところがあり、どれが勝山市の「魅力」であるのかわかりづらい。そのために、今回、エコツーリズムの考え方を導入し、3つの取組を一本化あるいは整理できないかというのが課題であった。また、「持続可能な開発のための教育（ESD）」への取組も積極的に行われている。これらを総合的に整理して効果的な「勝山市の魅力」を見出さなければならない。

また、勝山市には福井県の県立恐竜博物館があり、年間70万人の人々が訪れる。このイメージが大きすぎ、勝山市といえば「恐竜」というネーミング性が、本来の勝山市の魅力をわかりづらくしてしまっている。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

特に魅力を感じるのは、壮大な自然資源、自然遺産である。白山系からつながり勝山市に至る森と水は、古くから自然と人間の共生の形を織り成しており、まさに日本の里山の象徴ともいえる生活が今なお残っている。さらにその中に身を投じてみると、生物の多さ、森林の豊かさ、清らかな河川との共存・利用などが実感できる。また、歴史の古さと宗教観も生活の中に色濃く残っている。

②上記地域資源に魅力を感じた理由

ここに暮らす人々にとっては「ごくごくあたり前の自然」が、外部から来たものにとっては驚かされるほど豊かな自然。この部分に大変魅力を感じた。「あたり前」であるからわからないのも当然である。「あたり前」であるから、まだまだ探せば沢山の「宝」が見つかるはずである。自然を利用した人々の暮らしの知恵の数々も魅力である。まだまだこれからというのが勝山市の魅力である。しかし、やはり勝山市も少子高齢化の波が押し寄せ、限界集落といわれる集落は衰退していく方向にある。こうした集落を甦らせようとする自然保護団体等の活動も魅力の一

つである。

3) アドバイス（講義等）の概要

①選定地域に具体的アドバイスや事例紹介

まず、行政の方々に対しては、エコツーリズムが、こうした豊かな自然地域において、すべての基礎（土台）に成り得ることを解説させていただき、その上で様々なツーリズムを展開できる可能性をお伝えした。具体的にはジオツアーであっても、グリーンツアーであっても（エコツアーは言うまでもなく）、さらにESDであっても、すべての土台にエコツーリズムの考え方が共通して存在し導入することが可能であることをお伝えし、土台の考え方にエコツーリズムの考え方を取り入れることで一本化できる可能性を解説。それを行うために現在縦割りにバラバラに展開される各ツーリズムや自然遺産要素を、もう一度整理し、打ち出し方を考えるべきであることを強調した。

これは私の私的な感想であるが、どうもいつもカタカナ英語である〇〇ツーリズムや〇〇パークといった言葉や考え方に惑わされているように思える。そういった言葉を使わなくとも、日本の良き自然と歴史との共存・共生の足跡は、名前をあえてつけなくとも、定義をあえてつけなくとも「魅力は魅力」。「宝は宝」なのではないだろうか。

そういった意味からも、今回の派遣では「勝山ツーリズム」をここでもう一度考えていただきたいことを強調した。何がと言われればすぐに答えが出ない、逆に、魅力が平均的にありすぎるから出ないという印象を伝えた。

また効果的な広報戦略の考え方と具体的な計画の立て方もお伝えした。ポイントは、欲張りすぎず、ターゲットを明確化して、まずは「一つのことを強く広報」することが重要である。これが勝山市の「魅力」再発見にもつながる。

②個別アドバイス

ア. NPO 法人恐竜のまち勝山応援隊に対して

年間70万人の恐竜博物館への来場者をどのように掴むかが鍵である。そのために「恐竜」というイメージで引き寄せ、帰る頃には勝山市の自然や人の良さを伝える必要性を伝えた。

入り口は「恐竜」で、出口は「勝山市の魅力」である。これによりリピーターを増やすことができるという可能性を感じた。

イ. のむき風の郷に対して

この地にはかつてエゴマが多く栽培されていた。その歴史的な背景などが伝わっていないのでこうした掘り起こしと意味づけをすることによって、この地の「エゴマ」の付加価値が向上することをお伝えした。

ウ. 北谷町谷区

勝山市の中でも特に奥地とされる山岳地帯である。その谷間の狭い平地エリアに昔ながらの人々の生活が息づいている。コンパクトにすべてがまとめられているこれこそ優良なエコミュージアムである。森のブナ林から滝の下までがわずかな時間で体験できる。この地形を活かし、自然ガイドの研修所を作ってみてはいかがだろうかという提案をさせていただいた。この地に住む人々そのものが自然ガイドの知識の宝庫だからである。

エ. 北谷町小原区

ここではすでに小原の集落を残すべく様々な活動と体験が行われている。国立公園内ということもあり自然は圧巻である。生産性・持続性を確保できる活動の必要性を伝えた。

オ. 巨大岩塊、池ヶ原湿原、経ヶ岳の崩壊に伴う岩屑なだれの地形

特に湿原については、惜しい素材だと感じた。木道が施されているのだが、中に入ってしまうとヨシ原の方が人よりも背が高く何も見えない。可能ならば木道を高くし、湿原の中央にテラスを作り、湿原の魅力を満喫できるようにしてはどうだろうかアドバイスさせていただいた。こうなればガイドを仕立ててエコツアーも可能になる。湿原の自然を守ることもできる。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

現在は、整理すべき時期であり、全体構想以前の問題である。

②全体構想への意向について

勝山市の現在抱える課題を整理することにより、全体構想に勝山市の方向性が合致すれば可能性はある。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

まずは整理することである。ターゲットと魅力を絞り込むことが必要。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

冒頭で記述したように、魅力がありすぎるのが勝山市のデメリットである。他に魅力がなければよく見えてくるものも、自然景観とその内容が濃すぎてどれが魅力かわからない。それが勝山市である。年間70万人も同市を人々が訪れる（県立恐竜博物館）わけなので、その人々をどのように足止めさせるかが今後の勝山市のツーリズムに大きな影響を及ぼすことになる。勝山市の今後に大きく期待したい。「食」と「宿」が圧倒的に少ないことから勝山の「食」で人々をひきつけることができればと期待する。

3-14. いけだ農村観光協会（福井県今立郡池田町）

(1) 地域の概要

【人口】

2,925人（平成26年9月1日現在）

【地勢】

東尋坊がある九頭竜川水系足羽川の水源地域で、福井県東南部に位置し、岐阜県に接しています。1000m級の山々に囲まれた盆地地形の「中山間地域」で、過疎地域・特定農村村地域・豪雪地域などの「条件不利地域」に指定されています。福井市・越前市などの主要都市から約30km、車で約40分の場所にあります。

【面積】

194.72km²（うち、91.7%は森林。）

【気候、自然】

日本海側気候で、降雨量は冬に集中します。また、山間地であるため、昼夜の日較差が大きく農産物の栽培には適していると言われていました。

緑豊かで自然の美しい、農村風景が残っています。なかでも、池田町を代表するのが、21世紀に残したい自然100撰の「冠山」、福井県で唯一日本の滝100撰に選ばれている「龍双ヶ滝」があります。また、池田町の総社である「須波阿須疑神社」には御神木として、樹齢1200年以上と言われる大杉があります。

【歴史】

池田町の水海地区には、780年以上前から受け継がれている「水海の田楽能舞」が、国の重要無形民俗文化財に指定されています。また、水海集落以外にも、能面が受け継がれており、町として「能舞」と深く関わってきました。

更に、古墳時代の遺跡もあり、「伯牙弹琴鏡」という鏡が発見された「王神の森」は、継体天皇の子供アトリ王が住んでいたという言い伝えがあります。

【観光・地域資源の概要】

“あたりまえの暮らしが舞台”とし、「自然資源」「農村の営み資源」「風景資源」「文化資源」「食資源」を生かした観光が楽しめます。中でも、「かずら橋」や、アドベンチャーボート（ラフティング）など、自然を満喫できる体験は、大人気です。また、地元からも支持が高い“美人の湯”と言われる温泉や、滞在型農村体験ワークステイ、四季を通した限定人数の「まちツアー」も人気です。

(2) アドバイザー派遣申請の背景

1) 申請の背景

池田町は、これまで地域最大の自然である豊かな自然と、そこに住む住民、そしてその土地で培ってきた食の文化などを生かした「地域性のある」観光に乏しかった。

昨年 2013 年より、「まちツアー」と題して、地元ガイドによる四季折々の魅力を共有するエコツアーを実施し始めた。しかし、お客様の満足度を高めるガイドの質向上と、今後長期的な視点で、エコツアーを“生業”として成り立たせるための組織を築くという課題がある。

2) これまでの取組

- ・ 四季を通したまちツアー（エコツアー）の実施（全 13 回）
- ・ ガイド組織結成に向けた、ガイドメンバーとの合意結成
- ・ まちツアー実施に向けた行政・観光施設との協力体制構築

(3) アドバイザー派遣の概要

日	時	◆1回目：平成 26 年 10 月 23 日（木）～24 日（金） ◆2回目：平成 27 年 01 月 19 日（月）～20 日（火）
場	所	福井県今立郡池田町
アドバイザー		株式会社ピッキオ 代表取締役 楠部 真也 氏（1 回目、2 回目） 特定非営利活動法人日本エコツーリズム協会 理事 山田 桂一郎 氏（1 回目）
参加者		◆ 1 回目：14 名 ◆ 2 回目：13 名
スケジュール・方法		◆ 1 回目 【1 日目】 ・「選ばれる地域とは？」：講師 山田桂一郎氏 【2 日目】 ・「エコツアーとは？ガイドとは？」：講師 楠部真也氏 ・「エコツーリズム実践の事例（トークセッション形式）」：講師 楠部氏/山田氏 ◆ 2 回目 ・「エコツアーとは」（前回の振り返り） ・講義：「ガイドプログラムの作り方・売り方」 ・ワークショップ：池田町を舞台にしたツアープログラムをつくってみよう！ ・各自のツアー発表&講師からのフィードバック

(4) アドバイスの内容

1) 1回目派遣

①選ばれ続ける地域とは？

- ・地域の魅力を最大に引き出せるのは、ガイドしかない。他の地域と比べ「勝ち残る」のではなく、「価値のこる」ものを自分たちで考え、見つけ、お客様に語る必要がある。
- ・まずは、町内の認知をあげることが必要。地域に愛されるリアリティがあり、更にまちの住民一人一人が認識した上で、町のセールスマンとなり、お客様へのおもてなしを行うことが必要。
- ・住んでよし、訪れてよし。自分たちが満足し、幸せでない限り、人はそこに魅力を持ってやっけてこない。お客様に対し、私の町は、「何もない」「当たり前」の言葉は御法度である。謙遜するのではなく、自ら誇りを持ちお客様に伝えることが大事。
- ・利益を出すツアー、ガイド組織を築いていかなければ、若い人はついてこない。ボランティアでは、自己満足に終わり、継続性が低いだけでなく、その地域の評価を下げてしまうということが起こりかねない。
- ・お客様は、遠ければ遠いほどお金を落とす。定住人口 1 人減少分は、外国者旅行者 7 人分/国内旅行者（宿泊）24 人分/国内旅行者（日帰り）79 人分。さて、池田町はどの旅行者を選ぶか？

②エコツアーとは？/エコツーリズムの実践の事例（トークセッション）

- ・楠部氏の経営している「ピッキオ」（長野県軽井沢）の事業・経営についての説明。顧客満足度を上げられる着地型ツアーを追求し、リピーターを増やすことを目標にしている。“参加者の満足度を上げる”ために、少人数・高単価のツアーを維持している。
- ・「保全の仕組み」＋「エンターテイメント」＋「ビジネス」。ただの保全だけでなく、「ガイド」によって、楽しませるエンターテイメント的な要素もあり、かつビジネスとして継続できる形をつくるのが、理想。組織を立ち上げる上で、この3点を踏まえた長期的なプランが必要となってくる。
- ・消費者の心理を理解するようにする。お客様が「どのような情報を求めているのか」、状況によっての判断が必要となってくる。情報が多いからよいのではない。聞き上手になることも大事。
- ・エコツーリズムを推進していくにあたり、「行政」「研究者」「地域住民」など多くのステークホルダーがある。それらの情報・想いなどを全て持ち合わせて、代表としてお客様に伝える架橋となるのが、ガイドである。そういった意味で、ガイドというのはエコツーリズムにおいて大きな役割を果たす。
- ・人材育成は、大切。色々なことができる人材育てることに時間をかける。

「ピッキオ」では、繁忙期の夏休みなどを利用し、学生のインターンを募集している。人材育成だけでなく、コスト削減にもつながっている。

- ・池田町の将来の人口推移を見る。43年後には、総人口がゼロになるという推定統計。今後、観光という手段を使って、どういった価値を見出していくのか、真剣に考える必要がある。
- ・広島県安芸太田町の取組（インバウンドの成功例）をビデオにて、紹介。小さな町でも、打ち出し方や見方・視点に変化を持つことで、人や金は集まる。

2) 二回目派遣

① ツアープログラムの作り方

ア. まず、「お客様をさぐる」

- i. 入り込み客数：宿泊・日帰りの増減
- ii. 季節変動：繁忙期と閑散期
- iii. 入り込み客数：個人・家族・夫婦・学校
- iv. 観光客の流れ：どこに立ち寄り、どこを通っているか。

(例) 軽井沢では、7月に学校(団体)が多く、繁忙期の夏休みは家族、8月25日以上は個人や夫婦が多くを占める。観光客の流れとして、90%はアウトレットへ行くため、その施設を運営する「プリンスホテル」と提携し、ツアー商品の販売を行うことを決定した。また、滞在時間を考えツアープログラム実施の平均時間は2～3時間に設定している。(ターゲット層を家族にした場合、家族内それぞれの軽井沢滞在の時間の使い方の需要がバラバラなため、1日ツアーだと、一気に売れなくなることがわかった。逆に、北海道では自然系ツアーを望んで来るお客様が多いため、1日ツアーのラインアップを多い。これらからも、「地域性」がある。それゆえに、まずは自分たちの地域性を知る必要がある。)

イ. プログラムの企画

- i. プログラムのチーム編成(人選・人数)：ピッキオで、料理好きな男女が考えたキッズ向けの「アウトドアクッキングツアー」は、都会の男の子に売れなかった。様坂な視点を持てるメンバーがプログラム企画に必要。
- ii. ターゲット・時期の設定：お客様を絞る。例：夏/ファミリー・冬/シニア
- iii. 素材探し：地域性のある素材は重要。専門性から、面白さを引き出す。ガイドの技術として、エンターテイメントを加えることは必須。
(例) 地元には“あたりまえ”の地域性ある動物が素材となり、海外からも高い支持を得ているものとして、バードウォッチング(北海道)・サル(長野)・シカ(奈良)などが挙げられる。
- iv. ツアー概要の作成：タイトル・日程・価格・定員・対象・予約締切日・イベ

ント内容・時間割

(例) ピッキオでは、夏休みの軽井沢客に対して「あなたも一日調査員」と題したカモシカが見られるツアーを企画・販売。実際に参加した顧客満足度はよかったものの、タイトルの失敗により、売れる商品にならなかった。また、その他タイトルの失敗として、避暑地” に来る客のニーズに合わず夏休みに「わくわく焚き火体験」というツアーが挙げられる。

・開始時間について、ターゲットや地域性によって、お客様に合わせることを重視すべきである。(軽井沢の場合、宿泊者のチェックアウトが比較的遅いため、朝早くからのツアーは、売れない。)

・プログラムの運営表について、「シナリオ」と位置づける。プログラムのシナリオは、映画や芝居の台本に近く、こうした台本があってこそアドリブが生きてくると考える。

・価格について、①採算性②市場価格③戦略価格の3つに分けられる。大事なものは、利益であり、ツアーの安売りはあってはならない。安すぎると、喜ばれるのではなく軽蔑される可能性がある。(日本のドルフィンスイムツアーは安すぎて、海外客から「日本人はイルカを殺したりする為、大切に思っていないから安い」と考えられてしまうケースがある。)

また、「人数」に囚われてはいけない。例として、白川郷は120万人観光客があり1人あたりの消費額は2千円。(総額24億円)小笠原諸島は2万人観光客があり1人あたりの消費額は10万円。(総額20億円)観光客の入り込み数だけ見ると圧倒的に白川郷が良しとされるが、消費額を見ると差がないことがわかる。人がただ多く来ればよいのか……。判断をする「基準」は、どこにあるのか、考えるべきである。

・これから3割国内観光人口は減少する。これからは、これまで以上に「リピーター」を狙う必要性がある。

ウ. ツアーの振り返り

i. **ツアーの反省点を挙げる**：運営上の問題はなかったか？次回に改善できる点はどこか？失敗の理由は何か？を考えることが大事。

ii. **失敗の蓄積**：失敗した分だけ、成功の確率はあがる。反省を生かし、新しいプログラムを立案することが大事。

エ. ツアー商品の販売

(例) 軽井沢では、ツアーの実施時間によって異なる。国内旅行会社の使用者は、現在1割。売る場所について、念入りにマーケティング戦略を立てる必要がある。

オ. 質疑応答

i. **リピーターに対する対応は？**

⇒メールマガジンや、DMといった継続的な情報発信を行う。割引制度はないが、

「兄弟割引」などの工夫はしている。

ii. 海外からのお客様に対する対応は？

⇒決して、流暢な英語が話せなくても問題ない。(アンケートからも、相手もそれを求めているということがわかった。) サインボードで説明できるような準備をするなどの工夫はしている。

iii. ガイドの技術によって、ツアーの満足度などが大きく左右されるのではないか？

⇒ツアーによる。動物などが関わるツアーは、ガイドよりもツアー対象物である動物がお客様の気を多く惹く。逆に、ガイドの技量が大きく影響するツアーもある。ガイドとお客様の相性もあるため、各ツアーのターゲットが何を求めているのか、ニーズを把握し、コミュニケーションをとることが大切になってくる。

②ワークショップ内容

ア. 2チームにわけて、ツアー企画&発表

i. Aチーム

【ターゲット：家族 時期：繁忙期の夏休み 素材：池田の涼しく綺麗な川】

タイトル：「足羽川上流でワクワク！川遊び」

日程：9:30～11:30（夏休み限定・7月下旬～8月末まで、毎日開催）

集合場所：志津原キャンプ場

参加費：大人 2000 円 子供（幼・小学生）1000 円※幼児は、保護者付き添い。

定員：5組（1組から参加可能。）

予約締切：当日予約可能

ツアー内容：小学生以上のお子様を持つ家族が対象。

足羽川上流において、親子で川遊びを行う。笹舟や石拾い、川の生物の観察を行う。集めた流木を使って飯盒炊飯、川沿いで軽食ピクニックをする。リピーター向けに、週ごとに飯盒炊飯のメニューを変える。

ii. Bチーム

【ターゲット：アドベンチャーボート利用の県外（名古屋・大阪）の家族連れ

時期：繁忙期の夏休み 素材：池田の有機栽培された野菜と畑】

タイトル：ゴクゴク！収穫体験～生ジュースづくり～

日程：午後2回（13:00～14:30/16:00～17:30・8月1日～8月25日 毎日開催）

集合場所：能面美術館

参加費：大人 2000 円 幼児・子供 1500 円（収穫体験・フレッシュジュース代・お土産付）

定員：5組（1組から参加可能。）

予約締切：当日予約可能

ツアー内容：アドベンチャーボート後に温泉に入ったお客様がターゲット。志津原エリアの畑にて、夏の旬な野菜を自分たちで収穫し、採りたての野菜などで自分の好きなブレンドで、「フレッシュジュース」を作る。その際、池田町の有機栽培を通したまち育ての“こだわり”を伝えることで、池田町全体の取組の魅力を知ってもらう。

(5) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

①エコツーリズムについて、理解が得られた

- ・今まで曖昧な解釈をしていた参加者が多くいたが、エコツアーにおける、ガイドの役割への認識が高くなった。
- ・第二回目では、地元が「あたりまえ」と考えていた地域資源が、企画・売り方でとても魅力的な商品（エコツアー）になることが理解できた。

②今まで課題としていたことがより明確になった。

- ・ガイドが大きな役割を果たし、まちの印象を決定づけるという点で、現状満足ではなく、いかにお客様にリピートして頂くか、いかにより満足して頂くか、明確になった。

③今までの課題に対して取組方が分かった。

- ・「ガイドはガイド」、「企画は、観光協会」と今まで役割を分担していた為、ツアー企画まで関心が低かったが、実践的に「ツアーの企画・売り方」を学んだことで、ガイドがよりツアーについて“自分事”として捉える自主性が芽生えるステップとなり、共にツアー企画をする必要性を感じることができた。）

④その他

- ・長期的なプラン・ビジョンの必要性。同じベクトルで向かっていく、合意結成の必要性。

2) 今後期待される効果

- ・地元ガイドメンバーの組織化・体制づくり
- ・地元ガイドの意識・参加意欲・自主性の向上
- ・他地域のエコツアーへの自主参加・視察
- ・行政との連携・情報共有

3) 今後の取組

- ・現在取り組んでいる年間のツアープログラム「まちツアー」のガイドを、2015年4月より、組織化する。ガイドメンバーとの定期ミーティングを年4回開催

するだけでなく、組織力を高めるため、年間 2 回にわけて外部講師による研修会を行う。

- (ガイド組織結成にあたり、講師のアドバイスを基に、3 年-5 年を目標に、利益が出るツアーの企画・仕組みを考えるワークショップを開く 1 月 27 日開催予定。)
- ・今年度のツアープログラムの振り返りと来年度へのツアー見直し・充実化
 - ・町内への情報公開・情報共有
 - ・ツアーの販売促進のための、ツアーを掲載したパンフレットを作成予定。
自分達で企画したツアーを実際に商品化、実施することで、より強い参加意識・自主性を育てる。
 - ・自分たちのガイディングが他の競合に比べてどうか、強み・弱みも含めて客観的に分析できるよう他地域へ視察に訪れる。
 - ・お客様とのコミュニケーションを密に図り、多種多様なツアーを企画できる力を付けるため、持続的な講師によるセミナーを開催する。(年 2 回を予定)

(6) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

長野県軽井沢 (ピッキオ)

- ・約 20 名のガイドが食べていけるだけの収益性あるビジネスの展開
- ・学生 (インターン) のガイド養成
- ・顧客満足度の追求
- ・少人数・高単価のツアー企画力・発信力
- ・“稼げる時に稼ぐ” 繁忙期と閑散期のツアー対応

2) その他感想

- ①「儲ける」仕組みをつくる。地域全体でビジョンを共有し、認識を高めていく。

長期的な取組となるが、一歩ずつ確実に進んでいくことが必要である。

また、地元の子供・地元の学生を巻き込んだ取組も、将来のガイド育成・地域振興といった意味では、必要になってくると感じる。

- ②町の魅力を最大に引き出すことができるのは、“人” でしかない。

それを担うガイド業は決して簡単ではないが、それぞれの個性を活かし、「また来たい」と思わせる究極のサービスが提供できる人財育成に力をいれていきたいと、強く感じる。

【記録写真】

《1回目の様子》



1日目の講演会。講師は、山田氏。20代から多くの質問が飛び交う。



2日目の講義。講師は、楠部氏。楠部氏と山田氏によるトークセッション

《2回目の様子》



(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

株式会社ピッキオ 楠部 真也 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

福井県池田町は福井県の東南部に位置した山間の町です。この町では以前から、地産地消を目指した取組を行っており、地域の農産物を観光客に直接販売する仕組みも先駆けと言われているそうです。

エコツーリズムについては胎動期と言え、始まったばかりではありますが、地域のボランティアガイドを中心にこれからツアーを作っていくという状況です。

②課題

前述のとおり池田町のエコツーリズムは始まったばかりであり、人材、プログラム双方において不足している状況です。地元における、エコツーリズムの認知度も高いとは思われませんので、地元において浸透させることも必要かと思われまます。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

今回はセミナーの都合上、地域資源をみることは詳しくはできませんでしたが、里山としての自然観光資源の魅力は充分に感じました。

②上記地域資源に魅力を感じた理由

池田町は農業を中心とした地域振興策をとっており、そのユニークな展開は他地域からも認知されています。里山の魅力を前面に出した滞在型観光の可能性が あるように感じました。

3) アドバイス（講義等）の概要

①第1回派遣

ア. エコツーリズムの概要の説明

イ. ピッキオの活動紹介 : <http://picchio.co.jp/sp/>

ウ. エコツーリズムにおけるガイドの役割

エ. 日本のエコツーリズムの課題

オ. 世界におけるエコツーリズムの実情

カ. 日本のエコツーリズムの将来性 等

②第2回派遣

ア. プログラムを作る前の前提条件

イ. プログラムの企画方法

ウ. プログラム販売のノウハウ

エ. 広報と広告宣伝の違い

オ. 模擬プログラムの作成のワークショップ

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

現在の池田町は、エコツーリズムに取り組むかどうか、検討段階にあると思われます。従って現状はまだ取り組む状況には至っておりません。

②全体構想への意向について

前述のとおり、まだ検討段階ですので、積極的な意向であるとは言えないと思われま

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

エコツーリズムが池田町の地域振興に貢献できるということが実証できれば、全体構想の方向に進むであろうと思われま

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

今回は二回に渡っての訪問であったものの、時間の制約があったため満足に見ることができませんでしたが、池田町がある北陸地域は日本の伝統文化も色濃く残り、且つ暮らしにかかわる自然も豊富にある地域だと思います。

その中で池田町は農業においてユニークな取組を行って地域活性化につなげていきますので、観光の面でも同様の取組ができる可能性があると考えま

色々と試行錯誤を繰り返しながら、まずは交流人口を増やすということを目標に頑張っていたいただければと思いま

特定非営利活動法人日本エコツーリズム協会 理事 山田 桂一郎 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

福井県池田町には、通年で楽しむことが出来るレジャー施設（志津原キャンプ場、新保ファミリースキー場）や観光スポット（かずら橋、日本の滝百選の龍双ヶ滝等）、寺社仏閣、伝統文化と文化財等（須波阿須疑神社、能面美術館、水海の田楽・能舞）等、小さなまちに様々な資源や素材があるにも関わらずそれらを活かした取組が進んでいない。

近年、グリーンツーリズムを進めてきた中で、農業体験プログラムやツアー、滞在型農村体験ワークステイ、四季を楽しむ人数限定のまちツアー等を「いけだ農村観光協会」が中心となり推進している。

②課題

着地型観光の商品として力を入れている「まちツアー（地元ガイドによる四季折々の魅力を共有するエコツアー）」を実施しているがお客様の高い満足度を得ることが出来ず、リピーターも増えていない。エコツアーの内容の魅力や質を高めると共にエコツアーガイドの質的向上が必要である。また、地域資源の活用だけでなく、保護や保全に対する意識を高め、自らが資源やフィールドを維持管理することを実践してもらいたい。

そして、エコツアーをビジネスとして成立させるためのしくみと組織の構築が出来ないまま事業化を進めていることで問題が生じている。町内での連携の強化、人材育成、マーケティング推進、多様な商品化等、まちの産業の柱とするためには多くの課題がある。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

多様な資源を持つ地域ですが、特定資源の善し悪しではなく、それらの資源をエコツアーとして商品化することでお客様を楽しませようとしている地域の人たちに魅力を感じた。

②上記地域資源に魅力を感じた理由

いけだ農村観光協会が実施している四季を感じる限定ツアー（里山ウォーキングツアー、炭焼き体験ツアー、オーガニック酵素づくりツアー、川遊びエコツアー、ロマン紀行ツアー等）はどれも地域の思い入れやこだわりがエコツアーという商品・サービス化としてカタチになっているところが素晴らしいと感じた（但し、マーケティングの4Pと4Cのマッチングという意味ではお客様のウォンツ・ニーズに対応出来てないところがある。また、個々のツアーだけでなく、全てのエコツアーに地域からの共通したメッセージとして、池田町としてのコンセプト

を明確にしてもらいたい。

3) アドバイス（講義等）の概要

講義は「選ばれ続ける地域とは？」と題して、地域や経済等の全体を俯瞰するマクロ的な視点とエコツアーというニッチ市場に対して商品・サービスを提供するためのマクロな顧客視点を意識した内容とした。

- ①エコツーリズムに取り組むのは何のためか？
- ②池田町の過去と将来予想（人口問題等）
- ③まちが存続するために必要なこと
- ④観光産業という外貨獲得の必要性
- ⑤エコツアー市場の現状と有望性
- ⑥お客様の価値。ウォンツとニーズ。
- ⑦STP と CRM
- ⑧品化・サービス化。そして、リピートさせるための CS と ES 推進。
- ⑨マーケティングの必要性
- ⑩人材育成・ガイドの質的向上
- ⑪地域と事業が「自立・持続」するためのしくみと組織
- ⑫町内外との連携・連動

エコツーリズム推進だけでなく、今後の地域全体の理念（ヴィジョン、バリュー、ミッション）と戦略、戦術、事業化へと繋げて実践することの重要性を強調したアドバイスになった。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

池田町内では、エコツーリズムそのものへの理解がまだそれほど進んでいない。全体構想を意識するかなり手前の段階である。

②全体構想への意向について

エコツーリズムに対して深く理解をしている一部の住民や事業者の方々は全体構想まで進めたい意向があるのは確認出来た。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

まちの持続可能な社会と将来、住民の真の豊かさや幸せのために、エコツーリズム推進という手段が有効であることを意識、理解するための啓蒙活動が必要であると感じた。また、エコツーリズムの活動を本格的に取り組もうとする住民、事業者の方々を支援するために「いけだ農村観光協会」の事業の整理と体制強化も必要である。

特に、役場がエコツーリズム以外の事業に手を取られて忙殺されている現状を考慮すると、多方面に展開している政策、施策、事業の方向性を集約し、整理するためにも、エコツーリズム推進全体構想を基本に据えた計画を持つことも一つの案であることを提案したい。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

池田町だけの問題ではないが、多くの自治体が単年度の補助金事業等に取り組んだとしても、その後も動き続けるエンジンとなるような活動になることは稀で、ほとんどの場合、事業そのものが目的化してしまっている。特に毎年様々な補助事業を展開すればするほど多くの有識者や学者、コンサルが介入することで住民の混乱を招き、事業に取り組んだとしても将来に繋がる成果や結果が出ないことでやればやるほど住民が疲弊疲労している。

エコツーリズムも手段の一つではあるが、地域が持つ本質的で本来的な価値を残し、将来世代へ継承すると共に自立と持続した収益事業として産業化を実現出来る重要で有効な方法であることは私が住むスイス・ツェルマットを始め、世界中にロールモデルとして事例はたくさん存在する。しかし、自然環境の保護や観光による外貨獲得等のためだけにエコツーリズムに取り組むのではなく、住民自らが真の豊かさと幸せを実感出来る理想のまちを目指し、実現していく為にエコツーリズムに取り組んで頂きたいと願っている。

エコツーリズムの目指す地域とは、住民もお客様も関わった人たち全てが幸せを感じる「感幸地」であるべきだと思う。だからこそ、それぞれの地域のあり方を良く考えた上でエコツーリズムを推進して頂きたい。

3-15. 宇陀夢創の里（奈良県宇陀市）

(1) 地域の概要

【人口】

33,113 人

【地勢】

本市は、奈良県の北東部に位置し、北は奈良市、山添村、西は桜井市、南は吉野町、東吉野村、東は曾爾村、三重県名張市に接しています。本市の総面積は247.62km²で、県全体の6.7%を占めています。近鉄大阪線によって、京都・大阪方面や名古屋・伊勢方面と結ばれており、また、大阪方面から本市への自動車によるアクセスは、名阪国道針インターチェンジと大阪・松原ジャンクション（西名阪自動車道）とが約1時間で結ばれる距離にあります。

【面積】

247.62 km²

【気候、自然】

本市の気候は、内陸性気候であり、冬は季節風の影響を強く受けるため、寒さが厳しい一方で、夏は冷涼となっています。降水日数も多く、年間降水量は約1,500mmとなっています。平成24年は気温：平均12.7℃、最高34.0℃、最低-8.4℃、降水量1619.5mm、日照時間1697.2時間

【歴史】

この地域は、「古事記」「日本書紀」等の歴史書のなかに記載がみられ、また「万葉集」では柿本人麻呂の「かぎろひ」の歌等にも詠まれており、これらのことから古代における王朝との関わりをうかがうことができます。平安時代以降、この地域は荘園として興福寺の支配下にありました。南北朝時代から戦国時代にかけては、伊勢国司北畠氏の勢力を次第に受けるようになりましたが、その後江戸時代には宇陀松山藩として織田氏4代の統治の後、幕府の直轄地となりました。

この地域は大和と伊賀・伊勢を結ぶ東西の交通の要衝であり、室町時代に始まり江戸時代に盛んになった庶民のお伊勢参りのルートにあたり、宿場町として繁栄しました。維新後、明治元年に奈良県（明治元年～2年の一時期は奈良府）となりますが、明治9年に奈良県は堺県と合併、さらに明治14年には大阪府に併合されます。明治20年に晴れて大阪府から独立し再び奈良県が設置され、この地域は宇陀郡に属することとなりました。

明治22年の町村制の施行により、宇陀郡は1町11村から構成されることとなりました。

その後の各町村の沿革については、以下のとおりです。

旧大宇陀町は、昭和 17 年に松山町・神戸村・政始村・吉野郡上竜門村が合併して誕生しました。旧菟田野町は、昭和 31 年に宇太町（昭和 10 年に宇太村が町制を施行）と宇賀志村の合併で誕生しました。旧榛原町は、昭和 29 年に榛原町（明治 26 年に榛原村が町制を施行）に伊那佐村、さらに昭和 30 年に内牧村の編入合併、昭和 44 年 4 月に桜井市の柳・角柄を編入して誕生しました。旧室生村は、昭和 30 年に室生村・三本松村・山辺郡東里村が合併して誕生しました。

平成 17 年：2005 大宇陀町、菟田野町、榛原町、室生村の合併協定調印。

平成 18 年：2006 1 月 1 日に合併により「宇陀市」が誕生。

【観光】

枝垂れ桜（大野寺、西光寺の城之山桜）、 スズラン（向渕）、紅葉（室生寺）
 しやくなげ（室生寺、弁財天石楠花の丘）、ササユリ（深野）

<http://www.city.uda.nara.jp/kankou/index.html>



<http://www.city.uda.nara.jp/shoukoukankou/kankou/kankou/map/murou-jimusho.html>

<http://www.city.uda.nara.jp/shoukoukankou/kankou/kankou/map/spot.html>

【地域資源の概要】 指定文化財 55（国）、38（県）、19（市）

<http://www.city.uda.nara.jp/bunkazai/kyouiku/bunka/bunkazai/ichiran.html>

(2) アドバイザー派遣申請の背景

1) 地域課題

宇陀市室生区大野地区では過疎化が進み、休耕地が増加しており、大野地区及び周辺地域の自然環境保護と里山を再生、保全することが喫緊の課題となっている。

2) これまでの取組

地域振興・まちづくりのために、休耕地を活用した農薬や機械に頼らない野菜作

り、稲作等を進めてきた。さらに、旧保育所を活用して、文化講座、配食サービスなどの活動を拡大してきた。

しかしながら、活動は個々人の奉仕に頼っているために事業継続が危うく、都会の人々にこの周辺地域の自然、文化（里山）を知ってもらい、訪れてもらうことが重要でエコツアーの企画方法及び集客方法等の能力を身につけて、持続可能な事業とすることが課題となっている。

(3) アドバイザー派遣の概要

日	時	平成 26 年 12 月 15 日（月）～平成 26 年 12 月 17 日（水）				
場	所	奈良県宇陀市（室生地区） 夢創の里、大野寺、向湊地区、龍穴神社、室生寺、室生山上公園芸術の森、深野地区				
ア	ド	バ	イ	ザ	ー	観光・地域づくりコンサルタント 緒川 孝弘 氏
参	加	者	合計 15 名			
スケジュール・方法	<p>【1 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・概要説明及び現地視察：室生地区、深野地区、向湊地区、夢創の里・大野寺（大野地区）、すずらんの群落（向湊地区）、龍穴神社・室生寺（室生地区）、室生山上公園芸術の森（室生地区） <p>【2 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・概要説明及び現地視察：室生、深野、向湊地区、ささゆり保護地区（深野地区） ・基礎講座及び意見交換： 「室生を未来に伝える 新しい観光による地域振興 エコツーリズムの可能性」 <p>【3 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップ：「エコツアーづくりの基本的な考え方」 ・実地講習と 3 日間のまとめ 					

(4) アドバイスの内容

1) 現地視察

現地に案内し、その地の観光資源（景観、自然、動植物、歴史、芸術等）に関して説明した。「その地が持つ価値を見逃さず、様々な角度から再評価して明確にすることが必要である」とアドバイスを受けた。詳細はまとめに記載する。

2) 基礎講座及び意見交換

①エコツーリズム推進法に基づく「エコツーリズム推進全体構想」認定後に実施可能な項目とエコツーリズム推進マニュアルについて説明を受けた。

参考：

<http://www.env.go.jp/nature/ecotourism/try-ecotourism/env/5policy/manual>

.html

②エコツアーを体験すること エコツアーの調査

・グッドエコツアー <http://www.ecotourism.gr.jp/index.php/get>

・エコツアー総覧 <http://ecotourism.jp/>

③エコツーリズムの目的を明確にすることの重要性と目的を明確にするための視点 “エコツーリズムの3要素”から明確にする方法。

④お客様満足⇔「お客様にとって室生は何か?」「お客様が室生に何を求めているか」 を知るための調査項目、検討項目。

⑤「地域の宝」は何か?宝探しの方法、及び「お客様の楽しみ」を特定する方法。

⑥エコツアーづくりで最初に考える二つのポイント

ア. お客様に伝とえたいこと (地域の宝)

イ. お客様に楽しんでもらいたいこと。

3) ワークショップ うだ夢創の里 研修室・農園

①エコツアーの企画作成、基本的な考え方

「エコツアー チェックリスト」を参照しながら「室生エコツアー開発シート」の作成及び意見交換し、以下の具体的なアドバイスを受けた。

- ・最初に「お客様に伝えたいこと」「主なお客様」「お客様が楽しめること」を明確にすることが重要である。
- ・他のエコツアーとの競合など商品化に向けての課題の抽出し解決すること。
- ・料金設定はツアーの価値を評価して設定すること。

②実地講習 場所：うだ夢創の里の農園

現在実施している「稲作体験ツアー」を実施した後アドバイスを受けた。

- ・ツアーの最初と最後に本日の全体内容、行程を説明することの重要性。
- ・安全確保、トイレの状況、自然保護などの注意事項を確実に伝える重要性。
- ・参加者全員に平等に対応できることを確実にすること。

③「お宝マップ」「フェノロジーカレンダー (季節暦)」の作成。

4) まとめ

① 宇陀市室生地区には自然、歴史、活動団体・リーダー等は魅力的であり、エコツアーの素材は十分揃っている。また、エコツアーガイドも必要な説明等重要な項目は概ね実施できている。

②室生のエコツアーの魅力、内容を確実に効果的に伝達し、集客できるように発信方法を工夫すること。例えば、

- ・パンフレットは情報が多岐にわたり過ぎて手にとった人が自分のこととして考えることが難しい。会員向けと外部発信向け、ツアー毎の情報発信等目的別に

する。

- ・募集チラシ等は対象を絞ること。(ささゆり観察等はわかりやすい。)

③エコツアー企画の注意点

- ・参加者の目線で企画して評価する。評価は、作成した企画案を家族、知人などに評価してもらう。また、他団体が開催しているエコツアーに参加して比較する。
- ・テーマを絞る。稲作体験では農作業、炊飯等“米：コメ”を常に関係させる。
- ・対象者を絞る。参加するためのハードルを下げるための工夫、例えば、サブテーマを設定するなどが必要。
- ・山上公園では隠された宝を発見する楽しみなどがあり、ツアーの魅力を高められる。他にも隠された宝があるか調査すると良い。
- ・室生地区全体の活性化は最終目的として、「夢創の里」はそれを達成するために最初は、先頭に行くこと（トップランナーとなる）が良い。
- ・「夢創の里」がツアー参加者と地元をつなぐコーディネーター役を担うことも選択肢の一つ。
- ・企画は予想外に受けたり受けなかったりするので試行錯誤し、「意外な成功」を大切にすること。
- ・東海自然歩道、室生古道、パワースポット等についても魅力あるツアーが企画できる可能性がある。宝を探すこと。

アドバイス（現地視察、講義、WS：ワークショップ）の様子		
現地視察 大野寺 	現地視察 向淵地区 	現地視察 山上公園芸術の森 
基礎講義 夢創の里 	WS 夢創の里 	実地講習 夢創の里 

(5) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

- ①エコツーリズム、及び地域資源について理解が得られた。
 - ・すずらんの群落の向淵地区、ささゆり保存の深野地区の地域の活動・活動団体の魅力を認識できた。今後の活動への意欲が上がった。
- ②今まで課題としていたことがより明確になった
 - ・地域の魅力及びエコツアー企画の基本の理解不足。
- ③今までの課題に対して取組方が分かった
 - ・エコツアー企画の方法：テーマ・対象者の絞込み。価格設定。
- ④今までとは別の課題が明らかになった
 - ・室生の魅力を充分理解できていない。
- ⑤その他
 - ・室生全体の地区間の相互理解が進んだ。

2) 今後期待される効果

- ・各地区の宝＝魅力を再発見することができたので良いところは自信を持って推進できる。一方、気づいていなかった宝＝魅力を生かしたエコツアーの企画ができる。
- ・宇陀市全体でのエコツーリズムの取組に貢献できる。

3) 今後の取組

- ・室生の「お宝マップ」及び「フェノロジーカレンダー＝季節暦」を作成して室生の魅力を明確にする。
- ・来年度開催する「エコツーリズム」を作成した「お宝マップ」及び「フェノロジーカレンダー＝季節暦」から企画して実行する。

(6) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参考となった事項

他団体のエコツアーに関する下記活動

- ・エコツアー総覧 <http://ecotourism.jp/>
- ・高島市 季節暦
<http://www.takashima-kanko.jp/event/tour.html>
- ・南アルプス生態邑 <http://www.hayakawa-eco.com/>
- ・ささゆり観察会と里山散策
<http://savejapan-pj.net/sj2014/nara/event/post.html>

2) その他感想

- ・日本全体の人口減少について及び、それが生活、エコツーリズムに及ぼす影響に関して認識できた。
- ・お客様目線の大切さを痛感しました。
- ・エコツアーの価格設定。
- ・エコツアー募集チラシ作成。

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

観光・地域づくりコンサルタント 緒川 孝弘 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

奈良県宇陀市室生地域では、「エコツーリズム」としての取組は未着手ではあるが、廃止された保育園を改装した拠点を中心に 2011 年に活動を開始した団体「うだ夢創の里」（以下「夢創の里」と略）では、自然観察会や耕作放棄地での農業体験など、地域の自然を活用した体験・交流事業を実施している。

また宇陀地域では、他にも向洲地区ではスズランの群生地 of 保全活動、深野地区では、ササユリの群生地の保全活動を実施するグループがそれぞれあり、後者では、都市住民を中心としたササユリ鑑賞会をはじめとして、炭焼きや伝統行事の体験など、都市との交流活動を行っている。

②課題

地域では「エコツーリズム」という言葉を初めて聞いた人がほとんどで、エコツーリズムへの取組は、このアドバイザー派遣事業が端緒となる。

室生地域での今後のエコツーリズム推進の中心となる夢創の里では、農業体験や各種のイベントなどの様々な交流事業だけでなく、地元向けの配食、手作りのパンの製造・販売、ランチの提供、ミシンや英語などの教室など、様々な事業を手掛けており、少ない人員で多忙を極めていた印象があった。

前述の各グループの中心メンバーは、大変意欲的で熱意があるため、エコツーリズム推進の当面のスタートアップでは十分であると思われるが、60 代以上の方が多いため、いずれは、地域の歴史や文化に詳しい後継者が必要となってくる。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①うだ夢創の里

夢創の里の拠点は、保育園を改装し、レストランやパンの販売、各種教室や展示イベントができるスペースがあるだけでなく、直径 1m50cm の大きなピザも焼ける石窯がある。また耕作放棄地を利用して、米や野菜などをつくる農業体験ができる田畑もある。

これらが、近鉄室生口大野駅から徒歩 10 分の距離にある立地は、非常に魅力的である。自家用車がなくても、鉄道で大阪から 1 時間前後で来ることができるため、都会の人が気軽に農業体験ができる貴重な場所である。

また、電気やガソリンを使わない手動で木製の草刈機や唐箕（脱穀した穀物を精選する農具）など、貴重な農具を保有していたり、無農薬での農業に取り組んでいたり、エコに関心がある層が魅力を感じる場となっている。

②室生山上公園芸術の森

「室生山上公園芸術の森」は、面積 約8ha にも及ぶ広大な野外美術館である。世界的に著名な芸術家であるダニ・カラヴァン氏が、公園内の個々の作品から、公園全体に至るまで設計して製作しており、公園全体が一つの作品であるとも言える。公園全体及び個々の作品は、地域の自然や文化のコンテクストを踏まえて、芸術家による緻密な計算がなされており、四季折々及び日々の昼夜の自然の移り変わりによって、様々な表情を鑑賞することができる。

この公園は、野外美術館として世界的にも非常に高いレベルにあると思われる。派手な広報・宣伝は行っていないが、若い人を中心にこの公園への評価がSNS等で広まっており、外国人の来訪も見られる。

一般の人には、現代アートはなかなか理解が難しいが、この山上公園は、四季折々の自然が美しい公園としても楽しめる。さらには、所長の曾良氏と夢創の里の西田氏が、この公園や各作品について、その意味や鑑賞方法などについて、詳しく面白く解説することができるため、ガイドツアーを実施すれば、現代アートの愛好者だけでなく、一般の人にも、十分楽しめる場所となる。

③室生寺

「女人高野」として知られる室生寺は、多くの仏像や五重塔などの建造物が、国宝や国の重要文化財に指定されており、古くから現代に至るまで多くの参詣者が訪れるが、そうした建造物や仏像は、文化財的価値を知らない一般の人の目で見ても、芸術的価値を感じる美しさを有している。

この室生寺と山上公園をともに巡ることで、新旧のアートを鑑賞できることは、室生の魅力となり得る。

④妙吉祥龍穴

龍神が住むと言われる妙吉祥龍穴は、パワースポットとしても知られ、若い世代にも魅力ある場所となっている。パワースポットを訪れる人たちは、自然の力に対する畏敬の念がある人たちでもあり、自然の驚異について科学的に解説するエコツアーにも関心を示すことが期待できる。他にも室生地域には、池や湖、名水など、水にまつわるスポットが沢山あり、それらをつなぐ中心的かつ象徴的な場所となり得る。

⑤竜王ヶ淵

あまり大きくはない池ではあるが、静かな水面に周囲の景色が映えて、美しい景色を絶えず演出する場所である。周囲には、地元の方々の尽力により、遊歩道も整備され、ゆったりとした時間を過ごすのに適している。

⑥深野集落

地元の活動組織「深野〇〇会」を中心に、ササユリの保全に留まらず、集落の農村景観の保全や、「千本杵」などの伝統行事の継承に取り組むと同時に、それら

を活かした都市住民との交流も行っており、これら地元の自然や文化を素材としたエコツアーを実施する素地ができていると言える。

⑦東海自然歩道、室生古道、その他ウォーキングコース

今回は視察することはできなかったが、上記の資源なども巡りながら、芸術、水、パワースポットなどをテーマとしたウォーキング・ガイドツアーも、魅力的なものとなり得る。

3) アドバイス（講義等）の概要

①講演・意見交換会

講演・意見交換会では、日本や世界のエコツアーの事例を紹介しながら、「エコツーリズムとは何か」を説明した。そして、エコツアーを提供するためには、まず自らがエコツーリズムを体験することが必要であるため、関西周辺でのエコツアーに参加してみることを提案した。

また、エコツーリズムは三要素（観光、環境保全、地域振興）からなり、いずれも欠くことができないことを強調するとともに、エコツーリズムのノウハウから入るのではなく、エコツーリズムの目的と目標をしっかりと地域自らが設定して共有することの重要性を説いた。その際には、日本全体と室生地域の人口推計のグラフを提示し、今後も避けられない人口減少傾向の中、エコツーリズムに過大な期待をするのではなく、実現可能な目的を設定する必要性を説明した。さらに意見交換をしながら、参加者各自が、エコツーリズムを行う目的を考えてみるきっかけをつくった。

エコツアーづくりの考え方としては、地域が自分たちの都合で提供したいものを提供するのではなく、お客様が誰かを考え、そのお客様のニーズを考える“お客様目線”への発想の転換が必要であることを示した。また、具体的に室生地域の地理的な誘客環境（誘致圏・競合圏）を示した。

エコツアーガイドは、「地域の宝」を「お客様」が知って、楽しめるように、解釈し、演出し、加工して、つなぐ役割であることを示した。また、エコツアーづくりの重要な二つのポイントとして、「お客様に伝えたいことは何か?」「お客様に楽しんでもらいたいことは何か?」を挙げ、そこから派生する各種のポイントを示した。

②ワークショップ

エコツアーの素材となる地域の宝を掘り起し、地域で共有するための道具として、お宝マップとフェノロジーカレンダー（季節暦）をつくる作業を、一とおりにやってみた。参加者には、地図に落としてみて初めて気付く地理的關係や地形などもあったようだ。また、今後、さらに地元のお年寄りなどに、加筆してもらえることが沢山ありそうなので、継続して作成していくこととなった。

③エコツアー実施講習

既に夢創の里で提供している田植え体験のプログラムを、実際の形でやってもらうことで、エコツアーとして必要な細かなポイントをアドバイスし、質が高いエコツアーづくりに向けての方向性を実感して把握して頂いた。

④その他、視察・ヒアリング等を通じて

ア. トップランナーづくり

- ・特定の地域や場所だけではなく「室生地域全体を巡れるようにしたい」「室生地域全体が活性化するようにしたい」という意見が、複数の方々から寄せられたが、いきなり広い範囲の地域全体を巡れるようにするのは難しく、全体を一度に活性化するのも難しい。
- ・地域全体を対象とするのは、最終的な目標としては考えるべきだが、まずは、室生のトップランナーとなるエコツアーをつくり、一つでも成功例をつくるのがポイントである。一つ成功すれば、それに倣ったり学んだりすることができるし、後に続こうという動きが自然と出て来る。そうしたことを積み重ねれば、自然と地域全体が浮上していく。

イ. 有料のエコツアーを

- ・「自分だけがガイドして儲けたくはない」という意見もあったが、これも同様に、まずお金を稼げるツアーを一つでもつくるのがポイントとなる。ボランティアツアーとして人を集めてしまうと、他の人は有料でツアーを実施できなくなるし、無料では長続きしない。後継者も出て来にくくなる。ガイド料を受け取りたくない場合は、夢創の里など活動団体の運営資金として預ける方法もある。地域にできるだけお金を落とし、地域の自然や文化を守る人が生活していけるようにすることが、エコツーリズムの目的の一つであるならば、エコツアーは有料とすべきである。

ウ. お客様目線になるためには

エコツアーに参加もせずに、エコツアーをつくることはできない。お客様目線になるためには、まず自分が他地域でのエコツアーに自腹で参加してみて、実際にお客様として楽しんだり、不満を感じたりすることが必要である。それでも、自分と違う世代や違う地域のお客様の気持ちになれないこともある。その場合は、自分の家族や友人・知人などで、都会に住む人に、室生でのエコツアーの企画を見てもらい、意見を聞くと良い。そうやってお客様の気持ちになり、お客様の目線を身に着けることで、ツアーのテーマや内容、チラシの作り方などの情報発信のポイントも、自然と分かって来る。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

エコツーリズムに取組始めたばかりであり、「全体構想」については、実感を持って必要性の有無を判断することは難しいと思われた。法的根拠に基づく地域資源の保護措置や立ち入り制限が、喫緊に必要な場所は、現段階では特に思い当たらないようである。環境省を通じた広報や特定事業者によるツアー参加者の送迎についても、まだエコツアー商品の開発も行っていない現段階では、すぐに必要な状況にはないと思われる。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

室生地域は、従来からの有名な観光資源である室生寺だけでなく、前述のように室生山上公園芸術の森をはじめとした魅力的な資源がいくつもあるが、まだ十分に活かしきれていない。逆に言えば、それらの魅力的な資源を、本来、楽しんでもくれるはずのお客様のところに十分に届けられていない。これは地域にとっても、まだ見ぬお客様にとっても、非常にもったいない。

夢創の里のスタッフ、向淵地区や深野地区の活動グループの皆さんをはじめ、多くの熱意と意欲を持った地域の皆さんが、日々、数多くの活動を熱心にされており、今までは地域の自然や文化を守り育てるところを主眼とされていたと思うが、今後、その輪をさらに広げ、担い手を増やしていくためには、そうした資源を守りながらも、活用し、他地域のお客様にも楽しんでもらうことが必要になるとと思われる。

そのために、効果的に地域とお客様をつなぐのが、エコツーリズムという道具である。3日間、何度も強調したことだが、何が伝えたいテーマで、どういうお客様を対象（ターゲット）にし、お客様に何を楽しんでもらいたいのかを明確にすれば、素晴らしいエコツアーが沢山できる。

ただし最初は、大きな負担がかからないように、必ずしもエコツアーの新規開発を急ぐ必要はない。無理のない範囲で、まずは既存の体験プログラムを少しずつエコツアー化したり、夢創の里以外の地域のグループや人材の魅力の引き出し役となったりするなどして、少しずつ実践を積むこともできる。

エコツーリズムに必要な、地域の宝や熱意ある人材は、既に十分にそろっているため、エコツーリズムの方法を身に着けていけば、室生地域のエコツーリズムの成功は、ほぼ確実であると感じた。

3-16. 徳島県那賀町（徳島県那賀郡那賀町）

(1) 地域の概要

【人口】

総人口：9,410人（男性：4,459人・女性：4,951人）

世帯数：4,044世帯 ※2014年12月末

【地勢】【面積】

平成17年3月1日、鷲敷町・相生町・上那賀町・木沢村・木頭村の丹生谷5町村が合併して誕生した那賀町は、徳島県の南東部に位置し、東は阿南市、西は高知県、南は海部郡、北は勝浦郡、神山町、美馬市、三好市に隣接しています。町域面積は694.86km²であり、県の総面積の約17%を占めています。

地域の北西部には四国山地、南部には海部山脈等を配しており、標高1,000m以上の山々に囲まれ、可住地面積はわずかに5.0%の中山間地域です。地域内には那賀川及び坂州木頭川が流れ、両河川は上那賀地区内で合流して地域のほぼ中央を西から東に貫流し、太平洋に注いでいます。

【気候、自然】

那賀町の気候は、太平洋気候帯に属し、地形的特性から、日本でも有数の多雨地域です。山間地であるため、沿岸部に比べると気温の変動が大きく、複雑な気象特性を持っています。また、年間を通じて昼夜の寒暖差が大きく、内陸性の特を示しています。

春は、周期的に天気が変わり、低気圧が近くを通過すると大雨や強風が吹きます。上空に冬の寒気が戻ってくると、雷やひょうが発生しやすく、災害が発生することもあります。

夏は、熱帯低気圧や台風の影響が大きく、梅雨の長雨、早い時期の台風の影響による強風と大雨、発達した積乱雲による集中豪雨、雷、ひょう等風水害の発生しやすい状況になります。

秋は、台風の上陸と秋の長雨の影響から、風水害の発生が非常に多く、特に近年は台風が連続して上陸する等、大雨による災害の発生が増加傾向にあります。

冬は、山間地のため徳島県内でも積雪が多く、雪への備えが必要になります。気温の低下から、水道管の凍結や路面の凍結等が発生し、生活が乱れることもあります。

また、降水量は、剣山山脈の南側に位置するため、本町は県内で最も降水量の多い地域となっています。

【歴史】

丹生谷地方（那賀町）は、縄文時代の遺跡が発掘されるなど、古くから人が住

んでいた地域です。古代では丹生（水銀）の生産を行っていた記録があり、近代～現在までは主に林業が主産業で栄えていました。紙漉き場や農村舞台、古代織である太布織などの伝統的な文化も数多く残されています。

那賀町は、平成 17 年 3 月 1 日に旧丹生谷 5 町村（鷺敷町・相生町・上那賀町・木沢村・木頭村）が合併して誕生しました。

【観光】

町内の目立った観光名所は四国お遍路・第 21 番札所 太龍寺への参拝用「太龍寺ロープウェイ」（利用者年間約 13 万人）しか無く、しかも利用者は隣接する阿南市にある第 22 番札所平等寺に移動してしまいます。

今後は通過型観光から、那賀町の自然環境・歴史・文化等の地域資源を活用した滞在型・体験型観光へ変化させることが大きな地域課題になっています。

【地域資源の概要】

那賀町は良い意味でも悪い意味でも「山間部の田舎」であり、豊かな自然・棚田や山間地の農村風景、自然と向き合う生活文化が残っています。農産物では、木頭地区で栽培されている「木頭柚子」や相生地区で栽培・特殊な技法で生産されている「相生晩茶」が有名であり、かつての主産業であった森林資源にも恵まれています。また、町内には古くから残る農村舞台複数個所では、人形浄瑠璃の公演が行われおり、その他にも紙漉き場や古代織である太布織の保存会活動、吹き筒花火の保存会活動など、歴史・文化面でも地域資源が数多く残されています。

(2) アドバイザー派遣申請の背景

1) 背景

町村合併前の、鷺敷町・相生町・上那賀町・木沢村・木頭村の丹生谷（にゅうだに）5 町村は、地理的・歴史的、また産業・文化面においても古くからの結びつきがあり、行政運営においても一部事務組合で丹生谷地域全体の課題やまちづくりに共に取り組んできました。一方、過疎化や少子高齢化が進み、さらには地方分権の推進や地方交付税の削減による財政困難等、多種多様な行政課題に対応するため、平成 17 年 3 月 1 日、5 町村の合併により「那賀町」が誕生しました。合併当時 11,893 人いた人口も現在では約 9,500 人まで減少し、20 年後には人口が約半分になると試算されています。このままでは、限界集落が増え続け、山林や田畑は荒廃し、ふるさとの風景が消えてしまいます。

那賀町内には、目立った観光名所は四国お遍路・第 21 番札所 太龍寺への参拝用「太龍寺ロープウェイ」（利用者年間約 10 万人）しか無く、しかも利用者は隣接する阿南市にある第 22 番札所平等寺に移動してしまいます。しかし、那賀町は良い意味でも悪い意味でも「山間部の田舎」であり、豊かな自然・棚田や山間地の農村風

景、自然と向き合う生活文化が残っています。また、町内には古くから残る農村舞台も複数箇所があり、人形浄瑠璃の公演が行われるなど、歴史・文化面でも地域資源が数多く残されています。

今後、通過型観光から、那賀町の自然環境・歴史・文化等の地域資源を活用した滞在型・体験型観光へ変化させ交流人口を増やし、地域に「活気」を取り戻すために、アドバイザーを派遣していただき、取組を推進します。

2) これまでの取組

那賀町は昨年度もアドバイザー派遣を受けて、今年度・4月末に昨年度に開催しました研修会参加者が主体となった「なかなかツーリズム研修会」というグループを発足しました。その後、月に1～2回程度、研究会のメンバーで集まり、那賀町内にある地域資源の整理や発掘作業、講師を招いての研修会や体験型ツーリズムで先行している他地域の取組を視察しに行く、等の活動を行っています。

(3) アドバイザー派遣の概要

日	時	平成 27 年 2 月 12 日 (木) ～14 日 (土)
場	所	徳島県那賀郡那賀町 相生地区
ア	ド	バ
イ	ザ	ー
参	加	者
		公益財団法人日本交通公社 観光調査部長 寺崎 竜雄 氏
		那賀町役場職員、那賀町議会議員、那賀町観光協会、地域住民 合計 23 名
スケジュール・方法		<p>【1日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視察：木沢地区・上那賀地区 ・現在取り組んでいるエコツアーについて説明し助言を頂く <p>【2日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視察：木頭地区 ・特産品の柚子や地域の伝統・生活文化を用いた体験イベント等について、助言を頂く ・研修会 <p>【3日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視察：相生地区、鷺敷地区 ・エコツーリズムに生かせる地域資源、自然環境等について、取組を進展させるためには、何が必要かアドバイス頂く

(4) アドバイスの内容

- ・那賀町内には様々な地域資源があるので、情報発信をしっかりと行うことが大切である。
特に農村舞台等の歴史・文化的なものについては、広く浅くより、その分野に興味を持っている層に絞った形の情報発信をするべき。
- ・着地型観光を事業化するためには、地域振興のための活動を事業として実施することが大事であり、事業としての成功は参加者満足度による。まずは1年間のスケジュールを組んでみて、対象を町内住民等の近いところから初めて、参加してもらい検証を行うと良い。
- ・地域を訪れる人に地域の魅力を体験してもらうには「地域に住んでいる人」との繋ぎ役である「地域を案内するガイド」という存在が重要である。
- ・地域資源を活かした観光商品を地域で開発しても、多くの地域は、どの様に販売するルートを築くのかという課題を抱えている。公益財団法人日本交通公社「観光プログラムの流通・販売に関するアンケート調査」では、観光プログラムの販売ルートの約75%が参加者に直接販売しており、販売や受付・問合せ・情報発信を一括で行えるワンストップの窓口組織を立ち上げることが重要である。

(5) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

地域を訪れる人に地域の魅力を体験し感じてもらうためには「地域を案内するガイド」という存在が大切であることの認識できました。

2) 今後期待される効果

今回の研修会では、地域内でエコツーリズム・着地型観光に取り組むには「人」がとても大切な要素であることを参加者が理解できたので、今後は、さらに主体的に取組に参加することが期待されます。

3) 今後の取組

那賀町での取組を進めていくために、地域内コーディネーターや受付・問合せ・情報発信を一括で行えるワンストップの窓口組織機能を持つ推進組織を出来るだけ早い時期に設立します。

(6) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

全国各地の自然ガイドの事例や東日本大震災被災地における復興を目的としたツアーリズムへの住民参加の事例から、関係者のみで何とか取組をしようとせず地域の方たちに地域の案内人になってもらったりといった様に上手く連携して地域を取り込みながら取組を進めることが成功の要素になる。

2) その他感想

前年度のアドバイザー派遣事業が地域住民の方々にとても好評であったため、今年度も熱心な地域住民の方々が参加をされ、また新たに参加された方もおり、地域内でのエコツアーリズム・着地型観光の取組に対する理解が広がっているのを実感できました。

今後、「地域で何をすれば良いのか？」が具体的に共有できたことから、次の段階に進む準備が整ったように思います。

【記録写真】



四季美谷温泉・平井支配人より木沢地区の取



相生地区・研修会の様子①



若手林業家集団「山武者」との交流会



相生地区・研修会の様子②

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

公益財団法人日本交通公社 観光調査部長 寺崎 竜雄 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

- ・都市農山村交流の進展、過疎対策、Jターン者の増大という地域課題の中において、地域固有の資源を活用した体験観光のメニューづくりに取り組んでいる。地元行政所属の地域コーディネーターが存在し、彼を中心に地域の魅力探し、人的ネットワークの拡充に取り組んでいる。
- ・エコツーリズムへの取組は、まだ初期段階で、協働の体制や、地域としての方向性は模索途中。

②課題

- ・地元行政のエコツーリズムへの関心が薄く、前述のコーディネーターを支援する枠組みが弱い。このコーディネーターの地域内の協働を促進する能力は高く、今後のエコツーリズムの推進に欠かせない人物であることは明らか。しかしながら、行政職員としての任期がせまっております、彼をこの先、地域の中でどのように位置づけていくかが極めて重要な課題。
- ・魅力的な地域素材が地域内に点在している。エコツアー商品としてこれらをどのようにつないでいくか、町域が広大であることもあり、難しい課題。
- ・市場と地域をつなぐ販売力が乏しい。コーディネーターとの話の中で、市場側の旅行会社に頼ろうという意識が比較的強いこと気がかり。まずは、地域内でのとりまとめと、販売の仕組みを整えることが重要。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

他地域との比較において当地域に特徴的であり、エコツーリズムの素材としてもっとも誘客力が大きいと考えられるものは「農村舞台と人形浄瑠璃」である。町域内に点在するこの素材は、地域全体のイメージのシンボルにもなりうるし、プロモート次第では、広域からの誘客力ももちうる。

加えて、四季美谷温泉で味わうジビエ料理も、競争力が高い素材。ここを拠点とした自然体験との組み合わせた滞在プログラムの作り込みに期待。

この他にも、「田舎暮らし」のための素材や環境、木頭ゆずなどを活用したグリーンツーリズム的な体験や、林業をからめたアクティビティ、など体験観光の素材には事欠かない。

②上記地域資源に魅力を感じた理由

そもそも、エコツーリズムで活用できそうな素材は豊富なので、これをどのように味付け、盛り合わせ、メニューに掲載するか次第。とはいうものの、他地域

にない当地ならではの歴史や生活文化に培われたものという観点から、先の2つの素材が、他より群を抜いている。

3) アドバイス（講義等）の概要

総合的な話の中で、適宜事例を紹介したが、文脈の中でその取組の一部を紹介したに過ぎないので、あえて記載すべき事例はない。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

- ①全体構想への取組状況について
取組状況はまだスタート前。
- ②全体構想への意向について
今後の取組への意向は感じられなかった。
- ③全体構想認定に向けて、今後必要なこと
町内関係者への理解促進。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

- ・町域が広く、資源が点在する。これら資源の多くは都市部生活者から見ると、魅力的。先述のとおり、これらをどのように仕込んでいくかが、コーディネーターの腕の見せ所だろう。
- ・町域全体をいちどきにまとめることにはとらわれず、各地区単位で協働者を募り、小さなプログラム作りにあたってもらおう。ときどき、町民を対象としてこの小さなプログラムへのモニター参加を促し、プログラムの商品力の向上と、町民への理解促進をはかるとよい。
- ・四季美谷温泉を拠点としたプログラムは、さらに磨きをかけて、商品力の向上を図り、価格も検討する。ここが町内の最奥部でもあるから、ここを訪れる来訪者が増大することによって、地域全体の賑わい創出にも貢献するはず。それを刈り入れるためにも、途中の沿道の土産店などの工夫は必要。
- ・地区単位に造成したプログラムの販売は、地区単位でも行うが、これらを統合した町全体の販売窓口、外部関係者との結節点が集約された機能としてあることが望ましい。この販売力をテコにして、協働の求心力とすると良い。

3-17. 一般社団法人庄原市観光協会（広島県庄原市）

(1) 地域の概要

1) 庄原市の概要

【人口】

38,501人（H26.8.末）

【地勢】

標高 150m~200m の盆地をはじめ、全般に緩やかな起伏状の大地を形成しているが、北部の県境周辺部は 1,000m 級の山々に囲まれ、急峻で狭い地形となっている。また、市域の大部分は林野及び農地となっており、宅地などの利用は、おおむね河川に沿った盆地や流域に帯状に広がる平坦地に限定されている。本市を流れる主要河川は、西城川・比和川・神之瀬川・田総川などの「江の川水系」と、成羽川（東城川）・帝釈川など、「高梁川水系」の河川である。東西約 53km、南北約 42km のおおむね四角形である。

【面積】

1,246.60h m²（広島県の約 14%、全国自治体の中で 11 番目、関西以西では最大の広さ。但し山林が 84.2%）

【気候、自然】

三次盆地の北端に位置し盆地特有の気候で夏熱く、冬寒い。標高が 150m~1299m 有、全般として積雪量多い。（スキー場 4 有）

標高が高く雑菌が繁殖しにくいいため巨木、が多く成育している。

【歴史】

神話時代の古事記に関する口伝、伝承物多数有。弥生時代の四隅突出型弥生墳丘墓は出雲文化圏として特筆すべきものである。出雲と吉備の中間点
奈良時代は税金として鉄製品を朝廷に納めていた記述あり。

平安時代以降は地頭 山内首藤家の支配を中心に江戸時代までつづく。

福島正則そして浅野藩の支配で幕末までつづく。（城関係、有名寺院無）

【観光】

自然を利用したものが多く帝釈峡をはじめ東城町と高野町のリンゴ園、吾妻山ロッジと休暇村帝釈峡、ひろしま県民の森、かさべるで、神龍湖畔の錦彩館などの宿泊施設。お祭りとしては「早駆け馬神事」「東城おとおり」「大山牛供養田植」「比和牛供養田植」などが有名。

温泉が 9 カ所有。スキー場は 4 カ所有。軽登山の出来る 1200m 級の比婆山連山有。国、県、市の指定天然記念物多数有。古事記伝承の地。

(2) アドバイザー派遣申請の背景

1) 派遣申請の背景

庄原市は 2013 年度、庄原市観光振興計画

(<http://www.city.shobara.hiroshima.jp/sightseeing/sightseeing/post-107.html>)

を策定し、そのコンセプトを「さとやま遊びで感動を生む観光地域づくり」設定しています。市内には比婆道後帝釈国定公園などの素材があるが、活かしきれていないのが現状です。計画を推進するにあたり、当観光協会としてエコツーリズム推進は不可欠と考えています。

現在、ボランティアガイド組織はあるが、高齢化および後継者不足により人材育成が必要になっています。また、庄原市内の横の連携が、乏しく来訪者および旅行会社のワンストップ窓口機能が必要と感じています。

当観光協会としては、各種体験プログラム（農業体験など）を実施しているが、広報展開で課題があり、人気プログラムと不催行プログラムの差があります。不催行プログラムを新たなエッセンスを加えコーディネートできればと考えており、広報展開のアドバイスも頂ければと申請をしました。

(3) アドバイザー派遣の概要

日	時	平成 27 年 1 月 21 日（水）～23 日（金）				
場	所	広島県庄原市				
ア	ド	バ	イ	ザ	ー	株式会社ツーリズムワールド代表取締役 高梨 洋一郎 氏
参	加	者	合計 38 名			
スケジュール・方法		【1 日目】 ・視察：国営備北丘陵公園、オープンガーデン 【2 日目】 ・視察：口和郷土資料館、比和科学博物館、大鬼谷キャンプ場、乳下がりイチョウ、熊野の大トチ、熊野神社の広島県下第一の杉、スキー場、比婆山登山の状況説明、おとおり、散歩ギャラリー、砂鉄生産、リンゴ、3 本桜説明。帝釈峡白雲堂、雄橋 神龍湖 帝釈峡山荘、コナラ、日本ピラミッド説明 【3 日目】 ・講演「エコツーリズムの考え方と手法」 ・講演「庄原の観光の現状と課題」				

(4) アドバイスの内容

1) 視察、助言等

①国営備北丘陵公園

鉄工房、竹工房、花畑、さとやま屋敷、等を視察していただき、体験型、滞在型の観光地づくりの重要性と、一つでも多くの体験を作ると良いというアドバイスいただきました。そして「庄原の地に国営のこのような素晴らしい公園があることを知らなかった」「日本中に宣伝すれば大きな観光資源となる」と宣伝の重要性をアドバイスいただきました。

②オープンガーデン（貝崎庭 三村庭）

参加の庭が一般家庭の庭で、日本庭園、イギリス風、フランス風、ドイツ風メルヘンチックなど 30 庭あると説明したところ、ガイドの必要性についてアドバイスを受けました。

「ガイドが説明すると感動が 3 倍になる、」「そしてガイドは一方向的に説明するだけでなくインタープリターと呼ばれる物の背景まで語れるようでないといけない。」

エコツーリズムと合致する物としては最高のものが庄原にはあるということでした。

③口和郷土資料館

日本で初めてのCDプレーヤーや世界で数店しか実在しないテレビ、ステレオ、ラジオ等の弱電気が全て可動し、お客さんに実働状態をお見せできるという凄さに感銘をいただき、阿部館長の「まだまだ地域住民の参加が少ない」という言葉に対し、高梨先生は地域住民の参加をうながす施策を市をあげて 検討する必要性についてアドバイス下さいました。

④熊野神社と古事記伝説、そしてブナ林

日本最古の物語 古事記伝説・県史跡比婆山伝説地・国の天然記念物ブナの純林・広島県で一番大きい熊野の大杉等を視察いただき、地元ガイドの高齢化を見て先生はガイド育成とガイド制度作りについて「優れたガイドコンサルタント、教育セミナー」等利用した方が良いとアドバイスをくださいました。

⑤帝釈峡

東城町の帝釈峡では世界 3 大天然橋の一つ「雄橋」新しい観光目玉「水陸両用車」等を視察していただきました。トイレが無いことは致命的。外国人観光客にうけそう。

2) 講義

①高梨先生自己紹介

②エコツーリズムとの出会いとエコツーリズムとは

エコツーリズムの概念, 自然Nature・持続Sustainable・生態系Ecologicallyについて

ダーウインの島を救ったエコツーリズム「ガラパゴスの例」ガラパゴスの鳥はにげない。

ライオン 1 頭の値段紹介、死んだライオンは 1325 ドル動物園のらいおんは 8500 ドル自然で見るライオンは 515000 ドルの経済効果がある。

環境専門家の出会いとエコツーリズム推進協議会の設立の概要。

③何故いまエコツーリズムなのか？

マストツーリズム型観光の限界について

持続型社会の到来（環境と観光の共存）について

④庄原観光の現状と課題について

庄原市観光計画は素晴らしい良くてできている。

オープンガーデン、国営備北丘陵公園、比婆山、帝釈峡、等のガイド組織の充実と後継者育成施策について。

交流型、滞在型観光地作りの必要性について。

庄原観光実施計画への期待（PONAからの脱却）

従来型観光（周遊型団体旅行）から交流体験型観光へ

⑤質疑応答

男性「庄原市がどこにあるかご存じでしたか」

先生「知らなかったこれから好きになります」

男性「外国人が来る観光地は次々とやって来ると聞きましたが何故でしょう」

先生「おもてなしの好印象が口コミにつながっているからではないでしょうか」

(4) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

①エコツーリズム、又は、地域資源について理解が得られた

ライオンの値段の話から庄原市の観光は自然だけが売り物で他はあまり売り物がないと思っていたが、自然こそが大きな付加価値を生み出すお宝だと気付かされエコツーリズムを浸透させなければいけないという機運がわいた。

②今まで課題としていたことがより明確になった

子供に対する自然教育の重要性：子供に自然体験させると情緒が安定し人の痛みが良く分かる人間になるとのアドバイスにより、自然豊かな庄原市としてはできるだけ多くの自然体験を組み込みエコツーリズムを実践すれば人の心も豊かにし

合わせて実益もあることがわかった。

③今までの課題に対して取組方が分かった

ガイドの後継者問題：今までは一つの観光資源の近くの人だけがエキスパート的に説明ガイドをしていたが、そうではなく多方面からガイドを募り、窓口を観光協会を取り仕切り、養成講座なども開催したほうが良いとのアドバイスをうけ早速庄原市観光協会に窓口を設置した。

④今までとは別の課題が明らかになった

庄原市をご存じない人がまだまだ日本にも世界にも多いことを知った

2) 今後期待される効果

- ・積極的エコツーリズムの実践による観光発展。
- ・ガイドだけでなくインタープリターと呼ばれるエキスパートの育成後の活躍

3) 今後の取組

- ・インタープリターの育成
- ・今回の派遣では、エコツーリズムとは何かについて、概要をアドバイスしていただいた。今後は、実際の取組の中で、効果的な宣伝、魅力的なプログラム作りやガイド組織について考えていきたい。

(6) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

高梨先生のお話から、

- ・ガイドとインタープリターの違い
- ・子供に対する自然教育の重要性

2) その他感想

高梨先生のお人柄は万人に受け入れられエコツーリズムも理解しやすいとおもいました。

【記録写真】



国営備北丘陵公園 視察



口和資料館にて館長の説明を受ける
高梨先生



世界三大天然峡 帝釈峡



楽笑座にて講義

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

株式会社ツーリズムワールド代表取締役 高梨 洋一郎 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

庄原市は広島県北東部の山岳地域に位置する人口 4 万人弱の典型的な中山間都市である。農林業や製造業の長期的な衰退を背景に人口減に歯止めがかからないことから、2005 年周囲の 6 町を併合する形で新・庄原市として新たな地域づくりに取組始めている。観光面では、中国地方を代表する景勝の地のひとつである帝釈峡に加え、2012 年にグランド・オープンしたリゾート型公園（都市公園）国営備北丘陵公園やスキーリゾートでもある県民の森など豊かな自然環境と東西南北に延びる交通の要所という地の利に恵まれていることから、近年県内でも漸減傾向に歯止めがかかっている。しかしその大半は日帰りや短時間来訪客で宿泊客は伸びず、かつ新庄原市全域への波及効果は殆ど見られていない。このようなことから、庄原市は豊かな自然環境と古事記伝説をも有する歴史や伝統文化を活用した里山型観光の本格的な推進を図るため官民一体となつての庄原観光協会を設立すると共に、「さとやま遊びで感動を生む観光地域づくり」を基本コンセプトにした 5 カ年の「庄原観光振興計画」（平成 26 年度～30 年度）を策定、その第一歩を踏み出している。

②課題

しかし、近畿以西最大の広大な面積に点在する自然資源や文化・歴史資源を「さとやま型観光資源」として活用するためには、体験型・交流型を柱に全域の観光資源候補をあらためて問い直し、将来的な保全策も含めて整理し、その活かしたかを考え、マーケティングに結びつける仕組みづくりが不可欠である。その有効な手法として地域資源の宝探しからはじまるエコツーリズムは、庄原里山観光の主軸になると考えられる。すでに平成 30 年度を最終年とする「庄原観光振興計画」は、「さとやまの特色を生かした観光地域づくり」を目標に、①豊かな自然と歴史を生かした山遊びの充実②花と緑のまちづくりの推進③食材の宝庫を生かした観光地域づくり④ほんもの体験メニューの充実と教育旅行誘致⑤さとやま文化を生かした外国人旅行者の誘致を挙げ、その施策として「観光情報発信の強化と観光客の周遊促進」およびプロデュース機能の強化と関係者の連携や観光人材の育成などを柱とする「推進体制」策を掲げている。これらの諸方策はすべて里山型エコツーリズムの推進策に重なるところであり、振興計画に基づく「実施計画づくり」とその具体的な取組がそのまま、庄原観光の課題でもあると考えられる。帝釈峡や国営備北丘陵公園といった一部を除き目立った観光資源のない庄原市にとって豊かな自然資源を活かしたエコツーリズムへの取組は、庄原観光の新たな創出であり、「エコツーリズム推進法に基づく全体構想」まで進められれば、中国地

方を代表する「里山型観光」の代表となる可能性もある。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①国営備北丘陵公園

1995年の着工以来2012年のグランドオープンまで17年をかけて造営されてきた「丘陵公園」は中国地方唯一の国営公園であり、年間40万人の入場者を数えるリゾート公園。春から秋のフラワー観賞、冬場のイルミネーション観光、音楽祭などの一般観光のほか、郷土の文化を伝える体験プログラムなど交流型観光の拠点ともなっている。

②帝釈峡

18kmに及ぶ石灰岩の奇岩・帝釈峡は庄原の地質学的な興味をそそる。

③スキー場と温泉群

スキー場と温泉地は周囲の自然環境をフィールドにしたエコツアーの適地。

④古事記の里（熊野神社と巨木群）

古事記の里に林立する杉の老木群と国の指定天然記念物である大トチ、熊野の古事記伝説は、整備されれば庄原の自然・歴史・文化遺産の象徴となる。

⑤オープン・ガーデン

四季折々の草花を一般に開放して楽しませてくれるオープンガーデンは丘陵公園の花園と共に庄原里山観光の代表であると共に、交流型観光を推進する庄原ホスピタリティの象徴的な存在ともなっている。

⑥口和郷土博物館

口和地域の民具を収集して展示してる郷土資料館は、大手メーカーの技師として海外等で活躍した館長がUターンして明治時代まで遡る電気通信機器を再生して楽しませてくれる異色の資料館。メディアに多く取り上げられ、古い映画鑑賞を楽しみ交流するなど地域の人達を中心とする交流サロンともなっており、庄原の新たな魅力ともなっている。このほか、庄原にはブリキ缶型エコストーブで脚光を浴び始めた異色の名人がいるなど、里山の魅力を発信し続ける未発掘の達人群がいる。

⑦里山の佇まいと文化

山間の田畑を段々状に整地してその上に1軒一軒の民家が武家屋敷のようにどっしりと建つ田園風景は、かつての里山の豊かさを感じさせる庄原の象徴的な佇まいでもある。伝統的な生活見学や古民家に泊まる生活体験の場として活用できる可能性を感じさせる。

3) アドバイス（講義等）の概要

すでに「庄原ふるさと体験」の名称で里山体験型観光をスタートさせている庄原

の課題は、その動きを新・庄原市全体に広げ、新たな自然・文化資源の活用と保全に結びつけて行くことが基本的な課題になる。その観点から、「庄原エコツーリズムが目指すもの——交流・滞在型観光地づくりへの挑戦」のタイトルで、①エコツーリズムの基本的な概念と仕組み②宝探しやフェノロジーによるエコツーリズムの資源発掘と整理③庄原エコツーリズムの手法、を内容とするプレゼンテーションを実施した。関係者が一堂に会してエコツーリズムを勉強するのは初めての機会であることから、環境保全型の里山観光が庄原の目指すべき新たな観光地づくりに繋がる認識の共有とコンセンサスづくりが最初のステップになると判断、地域の身近な自然・文化資源の見直しを官民一体となって始めること（勉強会や研究会の開催など）をまず提案した。その上に立って中国地域における里山エコツーリズムづくりを目指し、将来の「エコツーリズム推進全体構想」へ繋げることを期待して、参加者との意見交換を行い、認識の深堀を行った。庄原市は広大な面積を有し山岳地域から田園地帯まで自然は豊かで多様である。また出雲神話の一面を形成する地域だけに歴史も古くまだ十分に検証されていない歴史文化資源も多い。そのため豊富な自然・文化資源を整理して、それを新たな観光資源として活用、マーケティングに結びつけてゆくには、「住んでよし訪れてよし」の観光業界のみにとどまらない地域ぐるみの戦略的な取組とその基本的な理念の共有が必要になると思われる。市民グループの代表者からは、かつて旧庄原市時代に観光資源探しを行い、その一端を実現して今日に至っているが、アイディアの多くは継続的な取組がなく頓挫した報告と、今回はその教訓を生かし持続可能な取組に繋げて行きたいとの意見が出されると共に、市会議員の代表者からはその具体化の必要性が提案された。

宝探しや里山型エコツーリズムの参考事例として主に次の3例を取り上げた。

- ・埼玉県飯能市のエコツーリズム (<http://hanno-eco.com/>)
- ・岩手県二戸市 (<http://www.city.ninohe.lg.jp/forms/top/top.aspx>)
- ・岩手県二戸市観光協会 (<http://ninohe-kanko.com/>)
- ・鳥羽エコツーリズム (<http://www.city.toba.mie.jp/kanko/eco/>)

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

エコツーリズムの視点から新たな観光地づくりを目指すという初期の段階にあると考えられ、全体構想作成の必要性については、まだ全く未検討の段階である。

②全体構想への意向について

観光資源としてさらに活用できる自然・文化資源の発掘や発信とマーケティングの展開及びそのためのエコツーリズムを担う人材の育成（インタープリターやコーディネーター）が先決であるとの段階にあり、エコツーリズム推進法の精神を見つめた全体構想作成への意向はまだ未定。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

まずはエコツーリズムを推進するコアづくりをスタートさせることが大前提。観光業者以外の諸団体や関係者も含めたステークホルダーを含め中核となるのは一般社団法人の庄原市観光協会になると思われるが、庄原市長の主導のもとに「推進組織」をまず立上げ、エコツーリズムによる庄原里山観光推進のための具体的な取組を開始する必要がある。「庄原市観光振興計画」の実現を図り、その観光資源となる自然文化資源の保護・保全策が併せて検討されれば、その延長線上に全体構想設定の必要性とメリットが自ずと見えてくることになると考えられる。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

庄原市はすでに里山型観光の推進を柱とする「庄原市観光振興計画」を策定、商工課が実施部隊である一般社団法人庄原市観光協会と一体となって、その具体的な推進に乗り出している。今回、「エコツーリズム・アドバイザー派遣事業」に手を挙げたのも、その実施にあたっての初動プロジェクトである。

原爆関連観光で圧倒的な吸引力をもつ広島市や世界遺産の厳島神社をもつ廿日市市宮島、そして福山市や尾道市といった全国的にも有名な諸都市に比べ、庄原市の知名度は西日本はもとより中国地方でも残念ながら恐ろしく低い。中国横断道路や瀬戸内海と日本海側を繋ぐ交通の要所にありながら、庄原市は広島、岡山、島根の県境に位置する北東広島の山間部に位置する地味な地方都市で、観光では全国レベルの観光スポットである帝釈峡のほか、中国地方の公園リゾートとして近年人気を集め始めた国営備北丘陵公園地以外目立ったポイントがない、自然だけが豊かな中間山地のひとつだ、という印象が一般的である。

神奈川県半分という広大な面積と人口僅か4万人弱という庄原市の主な観光スポットを回って感じることは、山岳地帯から田園地域に至る多様で豊かな自然と、逆に言えば観光スポット間の距離が離れすぎていてなかなか効率的な周遊型観光は組みにくいという印象だった。その分、フラワーガーデンめぐりや巨樹巨木観察、古民家や伝説の里探訪などのテーマを設定しての観光であれば、ゆったりと交流や体験を楽しみながら庄原の自然の恵みと人情に触れるいわば里山観光の宝庫になる可能性が高いという印象をもった。

市民有志によるオープンガーデンや郷土資料館の活用などその萌芽は既に見えているが、さらには石油缶を活用したエコストーブで全国的な注目を集め始めているバイオマス活用の先進地としての新たな里山観光の可能性も大きい。

そういった動きを補完するためにも、庄原の自然文化資源をマーケティングの観点から焦点を絞って深堀し、中国地域における「里山観光」のモデルとしてのブランド・イメージを創り出すことが、庄原観光の目指す道であるとの印象を深くした。

3-18. グランドワーク大山蒜山（鳥取県西伯郡大山町）

(1) 地域の概要

【人口】

約 25 万人（鳥取県西部および岡山県北部の一部）、人口は米子市（人口は約 15 万人）とその周辺地域に集中し、一部、中国山地の里山地帯にも集落が散在している。

【地勢】

100 万年以上前から噴火の歴史をもつ大山火山群とその裾野からなる地域であり、北に日本海と弓浜半島、島根半島の海の地形、南に中国山地の山々が連なる。

【面積】

約 1,500km²

【気候、自然】

西日本地域であり、気候は比較的温暖であるが、日本海に面した地域であり、冬の季節風により、西日本にあって雪の多い地域である。

大山を中心に自然はよく保全されているが、中国山地はかつての「たたら製鉄」により、古くから人の手が入った里山地帯となっており、静かな山里の自然が残されている。

一方、国立公園に指定された大山には西日本最大級のブナ林が広がり、原生自然的な環境も残されているほか、その山麓には中国山地と同じく、静かな山里の風景が広がっている。

【歴史】

古くから農耕や「たたら製鉄」で栄えた地域である。また、中国大陸に近い西日本地域であり、比較的日本史などに記された歴史は古く、古墳などの歴史的遺産も多い。出雲神話の舞台の一部である。

【観光】

観光資源に恵まれているが、交通の便や知名度などにより、大山隠岐国立公園を中心に年間約 400 万人が訪れている。

【地域資源の概要】

日本百名山である秀峰大山とその自然と景観、西日本最大級のブナ林、中国山地に広がる里山の自然と風景、美保湾・中海・弓浜半島などの海岸の地形と風景、日本海の高産物、皆生温泉などの温泉地、複数の自然歴史遺産など。

(2) アドバイザー派遣申請の背景

1) 派遣申請の背景

大山を中心とした鳥取県西部地域とその隣接地域では、数年前より豊かな自然環境を活かしたエコツーリズム事業を推進しているが、未だ魅力的なエコツアー企画や商品が完成しておらず、事業が経営軌道に乗っていない状況である。

大山は、国立公園に指定されるなど優れた自然と景観が自慢の名峰で、その山麓や周辺域には、大山集落や皆生温泉の宿泊基地があるが、大山集落はスキー人気の低迷、皆生温泉は団体旅行を対象とした施設の大型化による弊害によって、苦しい経営に陥っているところも多く、その現状を打開する手段としてエコツーリズムやスポーツ観光、健康ツーリズムに望みをつないでいる。

その一方、大山の南側から中国山地にかけて広がる農山村地域では、過疎高齢化が進み、残された自然や歴史遺産、生活文化を資源に、交流人口の増加を目指して、日野郡いきいきツーリズムネットワークなどを組織し、農村体験型観光を進めようと努力している。

このような背景から、大山を含む鳥取県西部では2013年秋にエコツーリズム国際大会が開催され、エコツーリズム事業に係わる人材の育成とともに、魅力的なエコツアーの商品企画の開発を進めている。

ここ大山地域では、主峰大山をはじめ、烏ヶ山、蒜山三座などの山々の眺望・景観、火山地形、ブナ林・ミズナラ林、湿原・草原、里山雑木林などの植生、オオサンショウウオなどの天然記念物、自然生態系、牧場や山里などの里山・農村景観、大山寺・大神山神社、大山道、宿坊など自然文化遺産、神話・伝説など大自然を背景とした物語りが存在しており、これらを資源としたエコツアー企画や自然学校(自然体験型環境教育)事業を進めている。

そのような活動の中で着目したのが、名峰としての大山の自然や景観の魅力であり、昨年度は、大山と同じく美しい巨大火山峰を地域のシンボルやランドマーク、ふるさとの山(富士)として有する名峰地域で景観保全やエコツーリズム、自然学校事業に取り組む組織・団体を大山地域に招いて、「名峰景観ツーリズム・シンポジウム大山」を開催し、活動連携を進めるとともに、名峰地域から本格的にエコツーリズム事業や教育旅行事業に取り組んでいる NPO 法人浅間山麓国際自然学校の橋詰元良理事長、NPO 法人富士山エコネットの三木廣理事長を講師(エコツーリズム推進アドバイザー)にエコツーリズムセミナーを開催し、ロングトレイル事業やエコツアー型教育旅行事業に取り組むようになっている。

(3) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 27 年 1 月 28 日 (水) ～29 日 (木)
場 所	鳥取県米子市・伯耆町、弓浜半島、皆生温泉、伯耆町日光地区
ア ド バ イ ザ ー	鹿児島大学 名誉教授 大木 公彦 氏
参 加 者	グランドワーク大山蒜山、大山ツアーデスク等エコツーリズム推進団体関係者、地元自治体（米子市、江府市、伯耆町、大山町、真庭市等）関係者、NPO 等関係者 合計 38 名
スケジュール・方法	<p>【1 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報共有、地域課題の把握 ・『大山圏域 森と里と海を結ぶ自然活動交流会』 基調講演「山と海を結びつけた名峰エコツーリズム」（大木先生） ・交流会：意見、助言指導 ・エコツーリズムに取り組む団体等の集まる会合にて、助言指導 <p>【2 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大山山麓（伯耆町日光地区）にて情報収集 ・『大山山麓・名峰景観フォーラム』 講演「日本の名峰（火山）の景観的な魅力」（大木先生） ・観光資源としての火山の魅力等、大山地域で取り組む地学、地理を活かした名峰ツーリズムについて助言指導

(4) アドバイスの内容

1) 「大山圏域 森と里と海を結ぶ自然体験活動交流会」での講演内容

霊峰と呼ばれる大山は山岳宗教の聖地であり、山腹には西日本最大級の面積のブナ林が広がり、大山寺、大神山神社を中心に多くの自然文化遺産が残るほか、大山寺地区はスキーの基地として多くの宿泊施設が存在している。

また、大山の山麓には古くから人の営みにより守られた里山地帯が広がり静かな山里の環境が残り、山の幸にも恵まれている。

大山の裾野は日本海の海底まで続き、「海に近い名峰」として知られており、大山が裾野を洗う美保湾は、弓ヶ浜半島と島根半島(美保の関半島)に囲まれた漁場で、境港の他、御厨や日吉津の漁港などの小規模な漁港もみられ、漁火猟などによる海の幸に恵まれた海域であるほか、宿泊保養基地である皆生温泉が日野川に近い弓ヶ浜の海岸にみられる。

このように、大山は豊かな森と海の自然に育まれた森の幸、海の幸にも恵まれた山で、火山噴火によって形成されたその山容は美しく伯耆富士と呼ばれる名峰であり、海から、里から、街からも日々、その秀麗な姿を望むことができる「海に近い

名峰」ではあるが、これまで、森と里と海を結びつけたエコツアープログラムは少なく、森と里と海の環境をあわせもつ大山圏域の絶好のロケーションが観光やツーリズムにおいて十分に活かされてきていない。

「大山圏域 森と里と海を結ぶ自然体験活動交流会」では、最初にエコツアーリズムの出発点として、大山という名峰がこの地に存在する歴史・生い立ちを知ることの大事さについて話しを聞くことができた。

2) 「大山山麓・名峰景観フォーラム」での講演内容

火山国の日本には、富士山をはじめ、羊蹄山、岩手山、鳥海山、男体山、御岳山、浅間山、岩木山、開聞岳などの美しい火山峰が多く見られ、これらの名峰は信仰の山、「ふるさとの山」として、古来より多くの人たちに崇められており、近くには、秘湯・名湯や滝、溪谷、清流、湖沼、牧場などの景観資源も数多く見られ、その山麓には山に関係する自然歴史遺産や、自然と共生する生活文化も多く残されている。そして何よりも麓の農村から眺める雄大で美しい名峰の景観は、日本を代表する心の風景である。

大山は、中国地方の最高峰(海拔 1,729m)にして、烏ヶ山、皆ヶ山、蒜山三座と連なる火山群を形成する主峰である。弥山とも呼ばれる大山主峰は、成層火山の上部に巨大な溶岩ドームが噴出した火山峰でもある。

1月29日の景観フォーラムでは、大山の美しい山容や麓の風景に着目し、文化的景観や火山地形、植生に詳しい学識経験者などを招いて、全国での景観保全の活動事例を学ぶとともに、大山の景観や眺望の保全と活用について意見交流をはかるものであり、大木公彦さんには、エコツアーリズム推進アドバイザーと同時に火山学者として、火山としての桜島の魅力や火山の地学や景観を活かしたジオパークの活動について紹介を受け、大山蒜山地域での活動について、その課題なども意見をいただき、木曾御岳や桜島での火山災害を事例に助言指導を受けた。

大木先生、中越先生(広島大学大学院教授)、橋詰氏(NPO 法人浅間山麓国際自然学校理事長)、牧野氏(NPO 法人しりべつリバーネット理事長)と一緒に、伯耆町日光地区を案内し、「グランドワーク大山蒜山」が進めようとしている「大山山麓こども自然学校事業」の現地紹介を行った。日本の原風景が残されている日光地区の集落のたたずまいや、自然体験学習の拠点に予定されている廃校となった木造校舎や茅葺き民家、地区の公民館などを案内し、大山山麓の山里を子ども達の自然体験学習活動の場として活用することに賛同を受け、大木先生からは「実現に向けて頑張っていたきたい」との応援の言葉も得ることができた。

「大山山麓・名峰景観フォーラム」では、大木先生、中越先生、橋詰氏、牧野氏を交え、「日本の名峰(火山)の景観的な魅力」と題して講演し、意見交換を行うことができた。

(5) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

①エコツーリズム、又は、地域資源について理解が得られた

過去、100 万年間の火山活動の産物として美しい山体と広大な裾野が出現したこと、ミネラルを豊富に含んだ水と、それによって育まれた森や田畑が美しい景観を作り出していること、その大地の恵みを人が受けていること、さらには養分を含む地下水が裾野を形作る火山性の堆積物中を流れ、海に注ぐことによって魚介類が多様で豊かであることを述べ、自然のすべてがつながっており、エコツーリズムを考える上で、自然を多角的に捉えることが重要。

②今まで課題としていたことがより明確になった

大山の山体、裾野、海を活かすエコツーリズムを考える上で、その地域全体をミュージアムと捉え、地域にある自然・歴史・文化・産業に関する資源を調べることが最初のステップとして重要である。

③今までの課題に対して取組方が分かった

大山から日本海（美保湾）に至る自然と人のミュージアムを活用したエコツーリズムの取組が、観光だけでなく教育（防災）や研究に活かされること、そのためには多くの団体が連携し、後継者（若者）を育成することが大事。

④今までとは別の課題が明らかになった

大山は完新世（約 1 万 2 千年前以降）に活動記録がないことから活火山に含められていないが、過去 100 万年間にわたって大きな噴火を繰り返したおかげで美しい山に成長し、謎の多い魅力的な山であり、ジオパークのフィールドとしても魅力的である。

⑤その他

大山の景観はどの角度から見ても素晴らしいが、海岸地域さらには沖合から船で眺めることによってその魅力が倍増し、山岳・山麓・海と人とのかかわりを多くの人に伝えることが可能になり、さらに環境教育や防災教育プログラムに寄与することができる。

2) 今後期待される効果

大山は、1,729 メートルの海拔高度を持つ中国地方における最高峰であり、過去 100 万年もの長い期間にわたる火山活動を経て成長した美しい火山で、その裾野は広く、日本海に達している。火山砕屑物からなる山麓は豊かな地下水系によって森や田畑が広がり、その水が海の豊かな生態系を育てている。大山は伯耆富士と呼ばれるように独立した山体で、山岳地帯から山麓、海まで近く、一望することができることから、山と海のつながりを学ぶことのできる日本でも数少ない場所のひとつである。この素晴らしい地域をエコツーリズムを活かすために、この地域の自然・

歴史・文化・産業に関する情報をさらに収集し、それらを結びつけてストーリーを紡ぎだす。

3) 今後の取組

日本海に至る大山の山岳とその裾野をエコミュージアムとして捉え、エコツーリズムに活用する取組に着手する。そのためのネットワークづくりを自然学校の関係を活かして進める。

(6) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

鹿児島県の「NPO まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会が行った、身近だけど隠れている資源の発掘事業「世間遺産」

鹿児島商工会議所の「鹿児島観光・文化検定公式テキストブック かごしま検定」

2) その他感想

マグマが上昇して火山体を作るには、それなりの理由があることを地球規模で理解することが重要で、そのことが名峰の存在を理解すること、さらには火山の噴火予測や防災につながる。・・・エコツーリズムの情報を活かすことで地域防災にもつながる。

【記録写真】



大木先生講演



フォーラムの様子



フォーラム参加者

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

鹿児島大学 名誉教授 大木 公彦 氏

1) 地域における取組の現状と課題

エコツーリズムの観点から、この名峰の景観と自然を保全するための様々な取組が、「グランドワーク大山蒜山」や「大山道ロングトレイル協議会」などを中心に行われています。大山道ロングトレイルなどのツアープログラムは魅力的です。しかし、観光案内書・パンフレットなどからもわかるように登山客や観光客の多い大山の山岳地帯が注目されがちで、かつて火山活動を繰り返してきた大山の成り立ち、火山活動に伴う山麓堆積物と人とのかかわり、日本海へ達する山麓堆積物が係る沿岸海域の生態系と人とのかかわりを結びつけたエコツアープログラムが少なく、大山とその山麓から海へ至る素晴らしい自然・生活環境が観光やツーリズムに十分に活かされていないように感じられます。そのためには地域の貴重な資源の掘り起こしが重要で、地域住民自らが能動的に地域の資源を掘り起こすことのできるシステムの構築が必要だと感じています。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

大山は、縄文時代以降に噴火の記録がないため、その美しい山体が過去 100 万年という長い時間をかけ、火山活動によってできあがったことを、地元でも知らない人がいると聞きました。100 万年という長い時間をかけて成長した山であるからこそ、山自体の美しさ、その広大な裾野の美しさは日本の火山の中でも卓越していると思います。さらにその裾野が日本海にまで達し、ミネラルを多く含む地下水が、山麓の農業だけでなく沿岸海域の漁業を豊かにしていることも魅力です。大山を海までつなぐことで、大地の営みを学ぶことのできる模範的なエコツーリズムのプログラムを構築することのできる、魅力的な地域資源を持つエリアであると感じました。

3) アドバイス（講義等）の概要

1月28日の午後に、米子市にある鳥取県西部総合事務所で開催された「大山圏域 森と里と海を結ぶ自然体験活動交流会」では、「山と海を結びつけた名峰エコツーリズム」と題して講演し、意見交換をさせていただきました。最初にエコツーリズムの出発点として、大山という名峰がこの地に存在する歴史・生い立ちを知ることの大事さについて述べさせていただきました。過去、100 万年間の火山活動の産物として美しい山体と広大な裾野が出現したこと、ミネラルを豊富に含んだ水と、それによって育まれた森や田畑が美しい景観を作り出していること、その大地の恵みを人がいただいていること、さらには養分を含む地下水が裾野を形作る火山性の堆積物中を流れ、海に注ぐことによって魚介類が多様で豊かであることを述べ、自

然のすべてがつながっており、エコツーリズムを考える上で、自然を多角的に捉えることの重要性をお話しさせていただきました。後半は、大山の山体、裾野、海を活かすエコツーリズムを考える上で、その地域全体をミュージアムと捉え、地域にある自然・歴史・文化・産業に関する資源を調べるのが最初のステップとして重要であることを、鹿児島大学総合研究博物館が取り組んできた「フィールド・ミュージアムの構築」(<http://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/>)を例としてお話しさせていただきました。鹿児島をまるごと博物館として捉え、住民が主体的に行動して地域資源の発掘を行い、地方自治体・公立学校・NPO・企業と連携・支援を受けながら、地域資源の意味付けを研究者に行ってもらうまでの流れを、多くの事例を挙げて説明しました。最後に、大山から日本海（美保湾）に至る自然と人のミュージアムを活用したエコツーリズムの取組が、観光だけでなく教育（防災）や研究に活かされること、そのためには多くの団体が連携し、後継者（若者）を育成することの大事さをお話しさせていただきました。

1月29日の午前中、「グランドワーク大山麓山」の徳永氏が進めようとしている「大山山麓こども自然学校事業」の現地視察を行いました。日本の原風景が残されている日光地区の集落のたたずまいに感動し、自然体験学習の拠点に予定されている廃校となった木造校舎や茅葺き民家、地区の公民館などを見学して、大山山麓の山里を子ども達の自然体験学習活動の場として活用することに賛同し、実現に向けて頑張っていたきたいとお伝えしました。

午後に伯耆町溝口支所で開催された「大山山麓・名峰景観フォーラム」では、「日本の名峰（火山）の景観的な魅力」と題して講演し、意見交換をさせていただきました。日本の場合、名峰の多くが火山で、大山は完新世（約1万2千年前以降）に活動記録がないことから活火山に含められていませんが、過去100万年間にわたって大きな噴火を繰り返したおかげで美しい山に成長し、謎の多い魅力的な山になったことをお伝えしました。その上で、マグマが上昇して火山体を作るには、それなりの理由があることを地球規模で理解することが重要で、そのことが名峰の存在を理解すること、さらには火山の噴火予測や防災につながることを説明いたしました。もちろん名峰には火山以外の地殻変動で隆起してできる山もあり、それぞれの名峰の成り立ちや他の名峰にない魅力を知ることが名峰をエコツーリズムに活かすことになることも説明させていただきました。このことに関連して、桜島・錦江湾ジオパークを例に、名峰をエコ（ジオ）ツーリズムに活かす取組として、桜島を中心に、様々な角度（分野）から桜島と錦江湾を結びつけ、観光客の知的好奇心にこたえるための工夫をしたことを紹介しました。その中でフェリーや観光船、漁船を使って海から桜島や始良カルデラを探索するクルージングが好評であったことを紹介しました。大山の景観はどの角度から見ても素晴らしいのですが、海岸地域さらには沖合から船で眺めることによってその魅力が倍増し、山岳・山麓・海と人とのかかわ

りを多くの人に伝えることが可能になり、さらに環境教育や防災教育プログラムに寄与することができると思います。最後に、エコツーリズムの根底に、人は大地に活かされているという考え方が必要で、まずは地域に住む人々が自らの地域を知って、愛し、すべての人がガイドとなって、地域の素晴らしさを観光客に熱く語ることが理想だと申し上げました。もちろん簡単なことではないでしょうが、鹿児島商工会議所の「鹿児島観光・文化検定公式テキストブック かごしま検定」を例に挙げて、主役の市民を中心に自治体・企業・教育界が連携して臨み、スピードは遅いかもかもしれませんが、理想に一歩でも近づくことが大事であること、加えて地域の未来を担う若者の育成がもっとも重要であることを述べさせていただきました。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

「グランドワーク大山蒜山」の徳永氏を代表として、これまでに様々なエコツーリズムの取組を行っていますが、現時点で全体構想を組織するまでには至っていないようです。徳永氏は、全体構想認定に向けて前向きに取組たい意向のようですが、そのためには、大山、その山麓および沿岸地域を含めたエコツーリズムのネットワークを発展させ、認定に向けて準備を進める必要があると思います。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

大山は、1,729メートルの海拔高度を持つ中国地方における最高峰です。過去100万年もの長い期間にわたる火山活動を経て成長した美しい火山で、その裾野は広く、日本海に達しています。火山砕屑物からなる山麓は豊かな地下水系によって森や田畑が広がり、その水が海の豊かな生態系を育てています。大山は伯耆富士と呼ばれるように独立した山体で、山岳地帯から山麓、海まで近く、一望することができます。山と海のつながりを学ぶことのできる日本でも数少ない場所のひとつだと思います。この素晴らしい地域をエコツーリズムに活かすために、この地域の自然・歴史・文化・産業に関する情報をさらに収集し、それらを結びつけてストーリーを紡ぎだすことを心より望んでおります。

講演では十分にお話しできませんでしたが、日本海に至る大山の山岳とその裾野をエコミュージアムとして捉え、エコツーリズムに活用する取組について、鹿児島の「NPO まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会：<http://www.tankennokai.com/>」が行った、身近だけど隠れている資源の発掘事業「世間遺産」はとてもユニークで参考になると思います。また、近くの島根大学や広島大学にある大学ミュージアムとの連携を是非お考え下さい。

3-19. 宮崎県高鍋町（宮崎県児湯郡高鍋町）

(1) 地域の概要

【人口】

21,559 人

【地勢】

九州の東側、宮崎県中央部海岸沿いに位置。宮崎平野の北部にあたり、町内全域が沖積平野および洪積台地で、中央部を一級河川小丸川と宮田川が流れ、周囲三方を台地に囲まれている。海岸部は遠浅の砂浜となっており、アカウミガメ産卵地や天然牡蠣産地、環境省の選定する「快」水浴場 100 選の高鍋海水浴場を有している。町域は東西 10 km 南北 6 km、面積 43.92 k m²で宮崎県内の自治体としては最も面積が小さい。

【面積】

43.92 km²

【気候、自然】

平均気温 17.4℃、降水量 2,373 mm、日照時間 2,178 時間
蚊口浜、小丸川、宮田川、高鍋湿原

【歴史】

江戸時代に秋月氏の治める高鍋藩の城下町として栄え、全寮制の藩校・明倫堂で人材育成に力を注いだ教育の藩であった。古くは「財部」と呼び、江戸時代に「高鍋」と改称された。藩校・明倫堂の創設者の 7 代藩主種茂は、米沢藩主上杉鷹山の実兄であり、藩校・明倫堂からは数々の偉人が輩出した。

【観光】

蚊口浜サーフィン場、高鍋大師、高鍋湿原、高鍋温泉、四季彩のむら、高鍋藩家老屋敷、日本一のひまわり畑、舞鶴公園、持田古墳群

【地域資源の概要】

高鍋町蚊口浜サーフィン場には、年間を通じて全国各地からサーファーが集まる。

最近では、全国初の 65 歳以上の高齢者を対象にした“シニアサーフィン教室”も開催され、若者からシニア世代まで安心して楽しめるサーフスポットである。6メートルを超える石仏が林立している高鍋大師は、隣接する持田古墳群と共に宮崎県観光遺産に登録され、現在、高鍋観光協会が中心となり、石像郡の周囲を花木で彩る花守山整備を進めている。

高鍋町の西部、海拔 60m の高台に位置する高鍋湿原は、カザグルマやサギソウなど、四季を通じて 400 種類以上の植物が自生しており、日本最小のハッチョウトンボをはじめとする貴重な昆虫も生息している。

高鍋湿原の周辺には、昭和 30 年代の懐かしい農村風景が残る“四季彩のむら”、“高鍋温泉めいりんの湯”が隣接し、魅力あるゾーンとなっている。

蚊口浜で獲れる天然牡蠣は、小粒だけど天然ならではの濃厚な味が絶品。また、“百年の孤独”や“中々”をはじめとする全国的に人気の高い焼酎も醸造されている。

温暖な気候に恵まれ、農産物も豊富。中でも冬・春キャベツは九州でトップクラスの生産量を誇り、8月上旬から中旬はキャベツの生産が盛んな染ヶ岡の台地が一面のひまわり畑になる。

(2) アドバイザー派遣申請の背景

現在、蚊口浜や高鍋大師、四季彩のむら、高鍋湿原、高鍋温泉等の地域資源を活用し、町内の様々な団体が地域活動を行っている。しかし、全体的な観光戦略が無く、各々が連携せずに活動しているため、地域内での一体感が図られず、全体最適が図られていない。

(3) アドバイザー派遣の概要

日	時	平成 27 年 2 月 19 日（木）～20 日（金）
場	所	宮崎県高鍋町 四季彩のむら、高鍋温泉、高鍋湿原、蚊口浜サーフィン場、持田古墳群、高鍋大師、染ヶ岡台地
アドバイザー		株式会社 J T B 旅行事業本部観光戦略部長 加藤 誠 氏
参加者		合計 8 名
スケジュール・方法		【1 日目】 ・視察：蚊口浜カキ小屋、蚊口浜シニアサーフィン教室、持田古墳群、高鍋大師、染ヶ岡台地、黒木本店 【2 日目】 ・視察：四季彩のむら、高鍋湿原、高鍋温泉、舞鶴公園 ・講演・意見交換会

(4) アドバイスの内容

1) 現地視察

- (蚊口浜カキ小屋、蚊口浜シニアサーフィン教室、持田古墳群、高鍋大師、染ヶ岡台地、黒木本店、四季彩のむら、高鍋湿原、高鍋温泉、舞鶴公園)
- ・蚊口浜の天然カキはこれまで食べた中で最小。小粒だが身が締まっており、食感もジューシで貴重な食の地域資源。
 - ・シニアサーフィン教室は、70歳前後のシニア層が安全に楽しむ事ができるため、県外からのシニア層にも十分PR効果がある。現在、首都圏においてもシニアサーファーが増えており、これから大いに期待できる。
 - ・持田古墳群は、日常の田園風景の中に存在しているため、景観として珍しい。
 - ・高鍋大師は大小様々なユニークな石仏があり、観光資源として貴重。
 - ・“百年の孤独”をはじめとする黒木本店の焼酎は、ネーミングもとてもユニークで天然カキと組み合わせると、素晴らしい食の地域資源として活用できる。
 - ・四季彩のむらの“田んぼアート”は、東北地方などでも行われており、継続していく事で観光資源として育てていける。
 - ・高鍋温泉は、平日にも関わらず入湯客が多く、経営不振であると感じられない。現状分析をしっかりと行い、料金設定等も見直し、経営改善を図って欲しい。
 - ・高鍋湿原は、自然の魅力溢れる素晴らしい癒しの空間である。

2) 講演&意見交換会

①講演（観光地域づくりとエコツーリズム）

- ・これからの観光は「観光地」ではなく、「生活地」を求めている。地元がやっていることに観光客が参加。
- ・自分達の地域に誇りを持ち、“住んでよし 訪れてよし”の地域づくりを行う。
- ・持続可能な観光まちづくりを進めるためには行政、地域住民、観光協会、専門家、観光客等の連携が必要。
- ・地域の宝を持ち寄り、町が一枚岩となって取り組む。
- ・フェノロジーカレンダーを活用し、地域分析を行う。
- ・弱みではなく、強みを伸ばす取組を進める。
- ・最初は、観光客ではなく、地元住民をターゲットにする。
- ・地域ならではの観光商品を組み合わせる。ないものではなく、あるものを組み合わせる。
- ・組み合わせと観光ターゲットを明確にする。
- ・「言いたいことを言う」のではなく、考えながら情報を出し、マスメディアを「言いたくさせる」
- ・高鍋町の豊かな自然を活用して、“高鍋シニア大学”構想を描き、その中で観光

戦略を練っていく方法が望ましい。

②意見交換会

- ・町内の観光地を開発する場合に、これまでは定点的に考えていたが、講演を聴かせていただき、町全体から考えることが大切であることに気付いた。
- ・現在、求められている観光は自分達の想像していたものと異なっている。地元目線で観光を考えなくてはならないと痛感した。
- ・地元の繋がりが大切であると感じた。これからしっかりと繋がりを築いていきたい。

【記録写真】



シニアサーフィン視察



高鍋大師視察



高鍋湿原視察



意見交換会

(5) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

- ①エコツーリズム、又は、地域資源について理解が得られた
 - ・地域にエコツーリズムの資源がたくさんある事に気づいた。
- ②今まで課題としていたことがより明確になった
 - ・課題である連携が観光を推進する上で不可欠だと理解できた。
- ③今までの課題に対して取組方が分かった
 - ・フェノロジーカレンダーを作り、地域での連携を図る。
- ④今までとは別の課題が明らかになった
 - ・外向けの観光ばかりに捉われずに、まずは地元住民を喜ばせる。

2) 今後期待される効果

地域内での連携によるエコツーリズムの推進。

3) 今後の取組

行政、観光協会、商工会議所、専門家等が連携して、観光戦略を練り、エコツーリズム推進の基盤を作る。

(6) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

2日間にわたる加藤様の現地視察、講演及び意見交換会を通して、たくさんの学びと気づきをいただいた。現在の観光に求められているものが“観光地”ではなく、“生活地”である事に驚きを感じたと共に、当町にも十分可能性がある事を感じた。現在の課題である地域での連携が、今後のエコツーリズムを推進していく上で不可欠であるため、まずは連携作りを強化していきたい。

2) その他他感想

貴重なアドバイスをたくさん戴き、有意義な2日間だった。今回の事業で学んだ事を活かし、地域でしっかりと関係を図り、当町ならではのオンリーワンなエコツーリズムを推進していきたい。

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

株式会社 JTB 旅行事業本部観光戦略部長 加藤 誠 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

平成 22 年 3 月に策定した高鍋町総合計画第五次基本構想において、『住民参画による快適で美しいまち「たかなべ」～子どもがにぎわうまちづくり～』を将来像として定め、自然、文化、観光、生産資源、社交業・飲食業など、豊富な地域資源を活かした「観光交流のまち」を目指している。観光客入込客数は口蹄疫の影響で一時期減少したものの、年間 58 万人程度と横ばい傾向でありながら、一定の水準を保っている。

最近の取組としては、主要観光スポットである高鍋大師のある花守山周辺の整備、シニア層をターゲットとしたサーフィンの推進、牡蠣小屋イベント、田んぼアートへの取組、婚活イベント、ノルディックウォーキング、マラニックなど様々な観光に対する新しい取組を進めている。

そのような流れの中で、高鍋町観光協会を平成 23 年に NPO 法人化。平成 26 年には観光協会、観光事業者等の懇談会の結果に基づき、観光振興基本計画を策定した。

②課題

策定したばかりの観光振興基本計画の具現化と、観光関係者の意識、方向性の共有が必要である。個々の観光資源に関しても、現状は単体としての取組が中心であり、資源相互の連携が図れていない。

ハード面としては観光資源の連携に不可欠な 2 次交通の未整備、主要観光スポットの駐車場の少なさ、玄関口である JR 高鍋駅前の未整備なども大きな課題であろう。

今後、東九州自動車道が整備され、宮崎～大分～北九州がつながり、人流、物流の変化が予想されることに対する取組も必要である。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①蚊口浜のシニアサーフィンスクール

シニア限定で初心者中心という新たな切り口のスクール。南国で解放感溢れる砂浜で、インストラクターが丁寧に指導してくれるのが魅力だ。初心者でも安心して取り組むことができる。健康を気にして、時間、金銭面でゆとりのある団塊の世代などシニア層に訴求していけるのではないかと。

②天然の牡蠣

小ぶりながら身が引き締まっており美味。天然の牡蠣は貴重な資源であり、牡蠣の産地ということだけでは珍しくないが「天然」ということで他地域と差別化

できる。早急なブランド化及び情報発信が望ましい。その他高鍋町及び宮崎県ならではの豊富な食のコンテンツ、数多い飲食店と結びつけることで、食の町としてのブランド作りができるのではないかと。牡蠣小屋のような取組の頻度をより上げてほしい。

③焼酎

黒木本店の数多い全国ブランドの焼酎

④持田古墳群・高鍋大師

畑の中に広がる 85 基の古墳群。市街地を見下ろす花守山には 700 余りの石像が並ぶ。知名度こそ高くないものの、風景として独特のユニークさがある。特に畑の中に数多くの古墳が点在して、住民の日常生活に溶け込んでいる風景は、全国的に見てもきわめて珍しい。「珍百景」などとしての売り出し方もあるのかもしれない。

⑤高鍋湿原

ダムの工事で出来た新しい湿原で、よく整備されており、多くの動植物が生息することから、学びおよびリフレッシュの場としても活用することができる。市街地から数キロの近距離にあるのも、湿原としては珍しく他と差別化できる。徒歩すぐのところに飲食、物販機能も持つ日帰り温泉施設のめいりんの湯もあり、さらなる連携が望まれる。

⑥四季彩のむら

棚田と里山の風景は、日本の原風景、心の故郷ともいえる光景で、珍しくはない風景であるものの、その魅力から最近耕作希望者が何人も出ているという話もある。

⑦高鍋城、舞鶴公園

城の堀に特別設営された場所で食事を楽しむ『高鍋城堀床』の取組は非常に魅力的で他と差別化できる。イベント時限定ではなく、ある程度定期的に実施してもよいのではないかと。

3) アドバイス（講義等）の概要

4つのテーマに沿ってアドバイスを行った。

①エコツーリズムによる観光まちづくり

旅のスタイルは近年変化しており、団体旅行隆盛の時代から個人需要へとシフトして来ている。観光地ではなく個々に合った「生活地」の需要が増えてきているのである。住んでよし、訪れて良しのオンリーワン地域を目指すことが必要である。観光まちづくりの原点は「地域社会」「地域環境」「地域経済」が偏り無く三位一体で進めて行くことであり、そのことが地域全体を活性化する。消費型旅行によって負荷をかけてきた自然環境・文化財・地域社会と共生し、将来にわた

っていつまでも多くの方に楽しんでいただける「サステイナブルツーリズム」の推進が今後の観光における重要なキーワードとなる。持続可能な観光街づくりはエコツーリズム主体者（行政・専門家・観光客・旅行会社）が「環境保全」「資源を生かした観光」「地域振興」を常に意識していなくてはならない。

つまり、日本版のエコツーリズムにおける観光街づくりにおいて、日本古来の伝統的な生活文化や食文化等、地域に密着した生活者のライフスタイルの中で普及啓発を進めなければいけないのである。

②観光街づくりの進め方（実践）

ア. 地域観光マーケティング推進のステップは下記のとおりである。

- i 地域の推進体制の構築
- ii 役割分担の明確化
- iii 地域観光資源の分析と活用法の整理
- iv マーケットの把握と対象マーケットの明確化
- v 効果的な商品化・マーケティング活動の実践

イ. 地域観光マーケティングには問題点もある。

観光関連産業だけではなく、他産業関係者や、地域住民の統一的な推進体制が必要だが、仕組みや組織はあるものの成果が出ないことや、「まち」が一枚岩になっておらず推進リーダーが存在しない等、理想と現実のギャップがある。民間主導で「本気で動ける組織」への意識・体質の改善が急務である。

ウ. 地域の「観光街づくり」体制構築のポイントは下記のとおりである。

- i 観光振興へ向けた機運が高まっているか
- ii 地域のビジョン・目的が明確か
- iii 多様な主体と連携しているか
- iv 熱意に溢れたリーダーがいるか
- v 継続的・持続的な事業展開が可能か
- vi 中期の事業計画に耐えうる予算が確保されているか

エ. 役割分担の明確化も必要。

- ・地域、観光関連組織・団体、市町村、都道府県、国などのステークホルダーがいる中で、観光を通じた地域活性化に向けて、地域の事情に基づいて誰が何をやるのか明確な役割分担をして行くことが重要だ。
- ・本来の地域の魅力を再認識することや、観光客目線での評価、住民視点での見直し等、地域を客観的に見直す事も重要である。マーケティングも重要で、狙うべきターゲットを正しく設定し、強みを延ばすための取組や、効果的なプロモーションの実施をする事を心がけ、心理的変数での設定、地元をターゲットとすることがポイントだ。つまり、地域の生活文化を感じさせ、マーケットニーズに適用し、来訪者目線で効果的なマーケティングの実行が重要である。

③商品戦略

- ・現在の旅行形態は「モノ消費」から「経験消費」へと変わりつつある。つまり主観的な消費行動から生み出される楽しさ、感動、審美性などが重視される消費の形態だ。
- ・経験経済の考え方では娯楽経験、審美経験、教育経験、脱日常経験などは新たな価値観を形成出来る。この4つの経験こそエコツーリズムで提供できる新たなツーリズム形態である。
- ・地域で得られる本物の情報や限られた情報を与えることにより品質や価格などのスペックではなく、「五感に訴える物語」として旅を創造することが出来るようになる。
- ・商品開発のポイントは3つある。

ア. 希少性（この旅行でしか体感できない）

イ. 季節性（今しか見ることが出来ない）

ウ. 地域性（文化・食・その土地ならでは）

つまり、どこでも出来る体験ではなく、そこにしかないもの、そこでしか体験できないものが求められているのである。新たな旅への関心の事例として、「山ガール」「アニメ聖地巡礼」「歴女」など従来の形態とは異なるまったく新しい旅のニーズが生まれている。

④チャンネル戦略

地域観光商品販売に向けては2つのステップが考えられる。

ア. 地域型観光を推進するプラットフォーム組織による情報の一元管理

イ. 旅行会社、運輸事業者と連携した顧客獲得戦略

- ・地域統一的な推進体制と本気で動ける意識の高い組織が必要であることから、プラットフォーム組織の構築が何よりも重要である。プラットフォームとは、地域コーディネーター機能であり、主体として、行政、経済団体、各種組合、民間組織、宿泊施設といった多様な業種業態の企業団体が参加した観光街づくり集団のことである。
- ・観光商品の流通経路も視野に入れておかなければならない。
地域独力で販売するにも限界がある。そこで旅行会社のシステム・ノウハウ、輸送業者の活用が有効である。地域の役割×旅行会社の役割×輸送業者の役割を掛け合わせ、三位一体の協業体制の構築が必要なのである。

⑤プロモーション戦略

いくら素晴らしい商品が出来たとしても来訪者が増え、地域活性化が図れなければ意味がない。知ってもらい、リピーターが増幅して行かなければ街は衰退して行く。そこで必要なのがプロモーションだ。流通する情報は爆発的に増え、且つ情報が「伝わりにくい」世の中にあって「砂漠に看板」にならないために旅行

行動ごとのメディアの使い分け、活用方法が重要である。中でも、メディアへの露出をまずは考えなければいけない。プレスリリースやTV番組、新聞の活用が有効である。但し、言いたいことを発信するのではなく、言いたくさせる内容にすることが最も重要だ。また口コミ発生装置としてソーシャルメディアの活用も考えて行かなければいけない。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

全体構想認定に向けて具体的かつ体系的な動きはまだそれほどないと思われる。行政や観光協会のキーマンが中心となり、個別のワーキンググループ単位での活動から始め、いくつかの実績を踏まえた上で行政・民間一体となって全体構想を作り上げて行く必要がある。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

自然、歴史、食などの多様な観光資源が狭い町の中にコンパクトにまとまっている。観光客に対しての挨拶を欠かさないなど、住民の皆様の人柄のよさが他地域と比べて群を抜いており、ホスピタリティという面でも素晴らしいのではないか。これはソフトという面では最高の強みだ。自然観光資源の多さと質も大事だが最終的には「人」が大事である。高鍋町に行ってみたい、交流したい、住んでみたいと思わせることこそがツーリズムの原点である。

しかし、現在では残念ながら個々の観光資源、取組がそれぞれバラバラになっている印象が強く、点としてそれぞれが存在するが、面、線となっていない。誘客のターゲットも定まっていない。観光に関する予算もほとんどないという。そのため、観光戦略そのものがまだ不十分な印象を受ける。今後、観光におけるストーリー作り、ブランド戦略、情報発信について早急に取り組んでほしい。

例えば、時間と金銭面にゆとりがあり、学習意欲も高いシニア層をターゲットとして、町全体をひとつの仮想大学と見立て、歴史、自然、健康、食などを学ぶコースを作るといった手法はどうか。それによって、それぞれの観光資源を連携させて、ストーリー化、体系化することができる。

また、飲食店が町の規模に対してかなり多く、全国屈指の焼酎の蔵元である黒木本店を擁しながら、そのことがほとんど知られていないのも残念である。訪問時、中心市街地の飲食店、黒木本店が連携してのイベントが開催されていたが、単発で終わらせず、継続的な実施が望ましい。特産品や郷土料理を有効活用しての、「焼酎の町」「食の町」としてのストーリー、ブランド作りおよび情報発信も期待したい。

3-20. 奄美群島広域事務組合（鹿児島県徳之島）

(1) 地域の概要

奄美大島に次ぐ大きな島で、中・古生層や一部火成岩類よりなる基盤岩類がほぼ全域にわたって広く分布し、山岳としては井之川岳（645m）を主峰とする山脈が島の中央を走り、島を東西に両断している。河川の主なものに、秋利神川があり、西海岸に注いでいる。海岸線は単調であるが、沿岸にはリーフが発達している。

総面積は奄美大島の3分の1に過ぎないが、耕地面積は群島中最大で、さとうきびを主体に野菜、畜産（肉用牛）との複合経営の農業が営まれている。さとうきびの生産額は群島総生産額の48.9%を占め、また畜産も群島の44.0%を占めている。

自然は、猛毒で知られているハブや、天然記念物として保護されているアマミノクロウサギ、トクノシマトゲネズミ、オビトカゲモドキ、徳之島の固有種であるハツシマカンアオイ、トクノシマエビネなど、貴重な動植物が多く生息している。

【平成25年度奄美群島の概況より抜粋】

(2) アドバイザー派遣申請の背景

近い将来奄美群島のキラークンテンツとなるエコツーリズム推進を図っている中で、「奄美群島エコツーリズム推進協議会」や「エコツアーガイド連絡協議会」等の組織体制が整いつつあり、奄美群島エコツーリズム推進全体構想の策定が進められている。また、増大が予想される観光客に対応するため、エコツアーガイド育成事業の創設や、観光客の満足度向上及びエコツアーガイドの社会的地位の確立を目的に認定制度の体系化を図る。

一方、エコツーリズムに直接関わるキーパーソンには、エコツーリズムの概念などが共有されているが、地域全体へ共有することが見落とされ、個の経済的利益に偏り、「自然環境保全」「観光振興」「地域振興」のバランスが保てなくなることが懸念される。

事業導入により、地域の思いを形にするという観点からエコツーリズムを捉え、地域全体で共有する。

(3) アドバイザー派遣の概要

日	時	平成 26 年 12 月 27 日 (土)
場	所	鹿児島県徳之島 (天城町役場 4 階会議室 (ゆいの里ホール))
アドバイザー		海津 ゆりえ氏 (文教大学 国際学部 国際観光学科)
参加者		<p><基調講演／パネルディスカッション参加者></p> <p>【総合司会】 奄美群島広域事務組合 主査 竹原 祐樹</p> <p>【基調講演】 文教大学 国際学部 国際観光学科 教授 海津 ゆりえ氏</p> <p>【徳之島エコツアー紹介】 徳之島エコツアーガイド連絡協議会 会長 美延 睦美氏</p> <p>【パネリスト】 文教大学 国際学部 国際観光学科 教授 海津 ゆりえ氏 徳之島エコツーリズム推進協議会 会長 丸野 清氏 NPO 法人徳之島虹の会 事務局長 美延 睦美氏 民泊「幸ちゃん家」女将 竹田 初枝氏 長崎県立大学 経済学部 地域政策学科 教授 西村 千尋氏</p> <p>【聴講者】 徳之島自然保護官事務所、大島支庁徳之島事務所、徳之島町役場、天城町長、天城町役場、伊仙町長、伊仙町役場、徳之島エコツーリズム推進協議会、徳之島エコツアーガイド連絡協議会、徳之島観光連盟、NPO 法人徳之島虹の会、NPO 法人いせ 1・1、文教大学学生、地域住民など 計 80 名程度</p>
スケジュール・方法		<p>わきゃシマから始めよう！エコツーリズム</p> <p>○基調講演『地域が創るエコツーリズム』(30分)</p> <p>○徳之島エコツアー紹介 (15分)</p> <p>○パネルディスカッション『エコツーリズムでシマ興し』(50分)</p> <p>○シマ遊び (120分)</p>

(4) アドバイスの内容

1) 基調講演 ～地域が創るエコツーリズム～

エコツーリズム推進地域の取組状況を知り、いたるところでエコツーリズム推進に向けて頑張っている地域や人がいることを実感する。また、エコツーリズムに関心を持ち、各自がエコツーリズムと何らかの関わりを持っていることに気づき、身近なことから取り組もうという意識を持つ。

海津氏が関わっている日本各地のエコツーリズム推進地域（埼玉県飯能市・沖縄県西表島・東京都小笠原村・福島県裏磐梯等）での事例をタイプ毎（専門知識型・生活文化型・アウトドア型・遊び型）にわかりやすく講演頂いた。中でも参考になった埼玉県飯能市の『白子五人衆』のエコツーリズムの捉えた方について以下に記す。

【エコツーリズムとは...】

- ・ありのままの地域を伝えること
 - 誰もが語り部、ガイドになれる
 - 地域を再認識し誇りをもてる（幸せ！）
 - 来訪者は交流や出会いの喜び（幸せ！）
- ・来訪者に満足していただき、地域のファンになってもらい、また来てもらう。そして定住へ
- ・住む人が地域を選ぶ時代

徳之島の可能性

- 当たり前前の日常にある宝、生活風景の中にある固有の文化、伝えようとする人々の存在も宝（名人）であり、世界自然遺産も「わきゃシマ」の宝である。
- 人が手を使って繋いできた“宝”を現代の人が手を使って後世に繋いでいく『手の文化』として表現できる。シマの中で世代を超え宝探しをすることで、ガイドになるならないは別として地域を伝えていく、文化の力を取り戻すことができる。



親睦のためのお茶「ふり茶」



昔ながらの黒砂糖作り



徳之島の日常「闘牛散歩」

2) 徳之島エコツアー紹介 ～あなたも明日からエコツアーガイド～

壮大な自然、受け継がれる伝統文化、人情豊かな島んちゅ、不思議なエネルギー（元気の素）がエコツーリズムの基本である。身のまわりにちょっと目を向けるとエコツーリズムの素材はたくさんある。要はやる気であって、やり方は簡単。得意なワザを自慢することと、大好きなシマを伝える事。

3) パネルディスカッション ～エコツーリズムで地域興し～

徳之島におけるエコツーリズムの次なる一步を参加者全員で共有し、シマ一体となってエコツーリズムに取り組む契機とする。

①丸野 清氏

➤徳之島エコツーリズムを、島内外への発信するため2テーマを掲げている。

i. 濃縮還（環・歓）元！徳之島～必ず見つかるアナタの探しモノ～奄美群島独り占め！

奄美群島のあらゆる魅力が凝縮されたシマの宝を、地域の環により大切に守るとともに、上手に楽しみながら活かしていくことで、来訪者には歓びを提供し、その利益を地域へ還元することで、次の世代へと引き継いでいく。

ii. 私たち「オトナ」は、シマでの昔の遊び方を伝えます。～アソビはマナビ～

昔の人々は遊びやその準備を通じて自然と触れ合うことで、生きる知恵を得てきたと言え、昔の遊びを見つめなおすことで、自然と密接に関わってきたシマの生活や文化を学ぶことができる。

➤数十年前から始まった奄美ミュージアム構想策定の中で、シマの宝探しをしてきたが、その宝をどう観光と結び付けていくのか、結び付けるのは人なので人材育成が重要だと思う。

②美延 睦美氏

➤2011年に青少年健全育成と自然保護活動を目的に有志らでNPO法人徳之島虹の会を発足させたが、その活動が結果エコツーリズムと繋がっている。シマの事を知ることが人に伝える事に繋がり、それが行動へと繋がる。1人でやるには相当なエネルギーが必要だがシマ全体で取り組むことが重要だと思う。

➤現在は、こちら側からの発信で様々な活動をしているが、逆に皆さんから声を掛けて頂きたい。その活動を企画（下準備）することに大切なものがあり、エコツーリズムの推進力につながると思う。

③竹田 初枝氏

➤体験型の民泊が増えて欲しい。島内に民泊が10軒あれば修学旅行で、1軒5人受け入れたら50人が来島することになる。修学旅行は継続するので島の活性化につながり、次世代につながるのではないかと思う。

➤町有地に図書館を作りたい。子育てを終えた方々から本を頂いており結構な冊数

になっている。その本が子供達を心豊にし、さらには大人も豊になると思う。

④西村 千尋氏

- エコツーリズムは地域づくりであり、地域づくりは人づくりである。
- 人は気づいて、考え方が変わって行動に変えていくことをやっていかなければいけない。ライフステージとしてみれば、幼少期は直接体験学習、学童期は知識・技術を得るための学習、大人は参加行動のための学習となる。その中で、大人が地域の子供達をどう巻き込んでいくのか、学校教育との結びつきや地域の企業とのリンク等の繋がりが大切。

4) 質疑応答

Q. 奄美大島の瀬戸内町ではシーカヤックが定着してきているが、徳之島においても魅力を増すための体験型メニュー（シーカヤック・ロッククライミング等）の可能性は？

A. レースで観光客を呼び込むというよりは、日常からシーカヤックを楽しめる環境づくりが大事。島根県隠岐の島ではダイビングの空いた時間にシーカヤックをやっている。
また、トレッキングやシーカヤックでの癒し効果が実証されているので、ヘルスツーリズムの視点で都会から人を呼び込むことも考えられるのでは。

Q. 島出身の学生が卒論等でシマを学べる環境づくりが必要だと思うが。

A. 奄美出身の学生がゼミを超えて、自主ゼミで奄美研究会を立ち上げ卒論を書いた例もある。卒論は必ず地元でフィールドバックし、地元もデータベース化し、情報を共有・蓄積し提供できるようにしておくことが重要。

Q. 徳之島と言えば選挙戦や闘牛であまり良くないイメージが広がっていると感じるが。

A. それ以外の徳之島の姿が発信されていない事に尽きるのでは。闘牛のイメージよりは牛への愛を感じたので文化面の発信に力を入れてはどうか。また、観光客はいいメディアなので、口コミで人が来るという循環が一番強い。

A. 子供・高齢者、各世代が生き生きとしている“寿の島”であると思う。隣の島と似ているけど違うところを見つけることも大事。

Q. ガイドは100%正確なことを伝えなければならないのか。

A. 客の満足に関しては、ガイドの責任は一部である。知識が正確であることに越したことはないので、一歩踏み出してほしい。また、知らない事もあると思うが、分からないことは分からないと伝え、自己研鑽の場でもあることを認識してほしい。

A. 客の質問に全て答えるのは不可能。客も同じ場所を違うガイドで行ってみて色々感じて欲しい。あまりきっちりしすぎると楽しめないので、まずガイド自身が楽しむことが大事。

Q. 行政としてもエコツーリズムに関わる方々を支援していきたいが、行政の関わりとして参考になる事例があればご教示いただきたい。

A. エコツーリズムについては、環境・歴史・文化等が関係しているので部署横断的な組織が必要。事例として、ある職員に権限を与え、しっかりと所属課の業務をこなしていればエコツーリズムに関して他課との調整役を行って、世界ジオパークに認定されている自治体もある。



シンポジウムフライヤー



基調講演



パネルディスカッション



登壇者全員集合！



まちあるき（手々集落）



まちあるき（阿権集落）



もりあるき（当部林道）

(5) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

① 『ガイド』 にとっての効果

ガイドを始めたばかりの新米ガイドやこれから始めようとする者にとって、他地域の事例を知ることにより、地域の魅力や宝を自ら気づき、語るこそがエコツーリズムだという自信につながった。

② 『地域住民』 にとっての効果

何もないと思っていた“わきやシマ”に、他者がうらやむような宝があったことを知ることができ、自分たちも何らかの関わり合いがあり、何かできることがあるのではないかという意識が高まった。

③ 『観光事業者』 にとっての効果

徳之島において観光に必要な素材には（宿泊・交通・飲食・お土産）があれば十分であったが、世界自然遺産登録を見据え、様々な観光形態があることを知り、全体のコーディネーター的役割を担うことができる人材としてエコツーリズムガイドの必要性を感じている。

④ 『行政』 にとっての効果

他地域の事例を知ることにより、それぞれの地域の特性を理解し、それぞれの

得意分野を活かして、行政はそれらをサポートしていくことが必要だと改めて感じた。また、エコツアーリズムの概念に従うと、行政の中で推進体制は横断的な役割の共通が必要となってくるため、シンポジウムで得た知見は今後の世界自然遺産登録に係る業務の推進体制の構築にとって重要な視点であった。

2) 今後の期待される効果

- ・これまでの取組や、シンポジウムを通して得た知見を踏まえ、エコツアーガイドが自然と人を繋げる役割を担い、学校教育の中においては環境教育の先生として、シマの未来を担う子供達に自然の素晴らしさや関わり方を伝える事が期待される。

- ・島んちゅにとっての日常がエコツアーリズムを推進する上で『宝』となる気づきがあったことで、今後、更なる宝の掘り下げや、昨年度着手したフェノロジー・カレンダーのブラッシュアップと併せ、宝を観光に活かすための一歩にもつながることが期待される。

3) 今後の取組

現在、世界自然遺産登録を見据え増加すると予想される観光客に対応するため、エコツアーガイド人材育成を実施しているが、併せて人と人を繋ぐ地域コーディネーターの更なるスキルアップを検討したい。また、地域住民の機運の醸成はもちろんのことだが、それをバックアップする体制も充実されるよう働きかけたい。加えて、奄美群島エコツアーリズム推進全体構想策定にあたり住民を巻き込んだ形で完成させたい。

(6) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

(参加者からの声)

- ・島の子どもたちが自分の生まれ育った島を誇りに思えるように郷土教育に力を入れていきたいと思う。
- ・普段の生活の中にある宝に気づきみんなで楽しみ、未来に伝えるものだと感じた。
- ・島には多くの宝がねむっている。この宝を探すために地域住民にエコツアーリズムを啓発していく必要があると感じた。

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

文教大学 国際学部 国際観光学科 教授 海津 ゆりえ氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

奄美群島は国立公園の指定および琉球弧世界自然遺産への登録を当面の目標に掲げ、奄美群島エコツーリズム推進協議会を2013年度に設立し、今年度からガイド養成講座を開始している。奄美群島広域事務組合を事務局とし、島間調整を行いながら12市町村で一つの全体構想を準備しているところである。

②課題

奄美群島の地理的特性・自然的特性・文化的特性は多様性にある。このことから群島全体が同じ温度差でエコツーリズムに関わっているわけではなく、理解や捉え方もそれぞれである。外に向けた「ひとつの奄美」としての発信に至っていない。島内での担い手や中間組織の育成も進んでいない。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①奄美群島全般について

離島でありながら群島である奄美群島の魅力は、地理的・自然的多様性と、それに伴う豊かな文化的多様性にある。これらの特徴は過去の歴史や人々の移動等に影響を受けたもので、今もなお薩摩や琉球文化と強いかかわりを持っている。各島々の住民の郷土愛は強く、伝え残された生活文化や言葉を集落単位で掘り起こす博物館活動等も活発である。

②徳之島（アドバイザー派遣地域）

徳之島は3つの町（伊仙町・天城町・徳之島町）から成り、長寿（日本最高齢の泉重千代さん等）と子宝（出生率2を超える）の島をうたうように、温暖で食文化豊かな島である。

ア. 自然：地質的にユニークな特徴を有し、エコツアーの主要資源としてのジオパークという位置づけができる。アマミノクロウサギが生息し保護活動が盛んである。

イ. 文化：手刈のサトウキビから絞った黒砂糖、ジャガイモやサトウキビ等の農地、闘牛と牛を育てる人々、手作りの塩（ましゅ）、伝統家庭食、ふり茶等、「手の文化」が色濃く残る。薩摩や琉球文化が景観にも残り、古い集落の街並みなども残されている。

上記の資源は島民が教えてくれたものである。島民が大切にし、価値を見出し、シマの中で伝え残していきたいと願う資源が多数あることが魅力の源となっている

3) アドバイス（講義等）の概要

徳之島にて12月27日に開催されたシンポジウム『わきゃシマから始めよう！エコツーリズム』にて、『地域が創るエコツーリズム』と題して30分の講演を行い、パネルディスカッションのコーディネートをを行った。シンポジウムは地域住民を対象としたもので、以下の疑問に答えることをミッションとした。

①エコツーリズムって何？

⇒カタカナ語への抵抗や一般の観光との違いを理解してもらうことを目的とした。

②どんなことがエコツーリズムになるの？

⇒何か特別なことをやらされるのではないか、難しいという捉え方を払拭してもらうことを目的とした。

③他地域の事例

⇒知床、西表、屋久島、小笠原などの自然豊かな地域事例、白川郷、飯能、鳥羽、飛騨等里地や里山の事例、軽井沢等リゾート地の事例を紹介した。具体的組織や団体ではなく、イメージを持ってもらうことを主眼にしており、詳細は広域事務組合に尋ねてもらうこととした。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

エコツーリズム推進協議会設立総会を2014年3月28日に開催し、全体構想のドラフトが提案された。第2回協議会総会を2015年3月25日に開催予定である。

②全体構想への意向について

作成予定で準備を進めている。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

ガイド育成事業は進められている。

組織体が大きいため、書類の整備を進めることに労力を要している。今後は、各島内での体制づくりや群島全体としての中間組織の整備が今後の課題であろうと思われる。役割は、対外的なマーケティング、プロモーション、対内的な調査やモニタリングなど、エリアマネジメントである。推進協議会は会議体なので、これらの役割を果たす実行部隊は別途設定が必要である。既存組織からの選定も可能である。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

奄美の島々には、郷土愛豊かで熱い思いを抱えた人々が住んでいる。文化への誇りや、シマの人々の結束等は他地域のどこにもないものを有している。議論が活発であることも美点である。エコツーリズムの推進に当たって重要な要素である。今後は、エコツーリズムを通して何をしたいのか、既存の観光や地域の枠組みの中で、

エコツアーリズムをどこに位置付けて行くのかを確認しながら進めていただけたらと願う。

4. アドバイザー派遣報告会

4-1. 開催概要

アドバイザー派遣事業を通じて行われた取組を多くの方々に共有するため、事業報告会を開催した。本報告会では、アドバイザー派遣を活用して取組を行った2地域、現地に赴いていただいた3名のアドバイザーから、地域の取組や課題、アドバイザー派遣を通じて目指したこと等を報告していただいた。

日 時	平成27年3月2日（月）13時30分～17時30分
会 場	千代田区立日比谷図書文化館 4階 スタジオプラス 〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園1-4
参加費	無料
申し込み	ホームページ、FAX、メールにて申込を受付

【プログラム】

13:30	開会
13:30～13:40	【挨拶（報告会開催にあたって）】 環境省自然環境局総務課自然ふれあい推進室
13:40～14:40	【地域からの報告】 （1）NPO 法人三保の松原・羽衣村 事務局長 遠藤 まゆみ氏 （2）奄美群島広域事務組合 奄美振興課 世界自然遺産推進係 渡辺 貴之氏
14:40～14:50	休憩
14:50～16:20	【アドバイザーからの報告】 （1）株式会社ジェイティービー 旅行事業本部観光戦略部長 加藤 誠氏 派遣地域：宮崎県高鍋町 （2）公益財団法人日本生態系協会 地域計画室長 城戸 基秀氏 派遣地域：神奈川県横浜市 （3）株式会社 ピッキオ マーケティングディレクター 取締役 楠部 真也氏 派遣地域：北海道別海町・岐阜県飛騨市・福井県池田町休憩
16:20～16:40	休憩
16:40～17:30	【ディスカッション】 《モデレーター》文教大学 国際学部国際観光学科 教授 海津 ゆりえ氏 派遣地域：鹿児島県徳之島・群馬県前橋市
17:30	閉会

（司会進行 アオイ環境株式会社）

4-2. 議事概要

(1) 開会の挨拶

環境省 自然環境局 総務課 自然ふれあい推進室 室長：中尾 文子 氏

- ・アドバイザー派遣事業は、地域の課題に基づき、アドバイザーによりアドバイスを頂くようにしている。本年度は、派遣をきっかけに、地域の仕組みを整えることや国の認定まで取得しようという地域があり、派遣事業は、北海道から奄美群島と広範囲な地域で取組んで頂いた。
- ・本日は、2つの地域と3人のアドバイザーの方より地域についての報告を行うとともに、皆様の質問に基づきパネルディスカッションを行う。皆様から意見を頂き、実りある報告会にしたいと考えている。



(2) 地域からの報告①：静岡県静岡市の取組

NPO 法人三保の松原・羽衣村 事務局長：遠藤 まゆみ氏

1) 静岡市の現況について

- ・世界遺産文化登録の登録時の問題として、テトラブロック、松枯れが発生していた。テトラブロックについては静岡市が、松枯れについては静岡県と静岡市のジョイントで取り組んでいる。
- ・世界遺産文化の登録後の課題は、7点あった。①車両や観光客の増大の課題は、海上ルートの活用及び三保チャリを展開している。②三保の環境問題は、松林をきれいにする必要があった。NPO（ボランティア）ではゴミ収集をしていたが、静岡市の方針で収集したゴミは自分たちで処分するようにとの指示のもと有料で処理をしていた。しかし、青年よりゴミをペレットにすれば良いのではないかと提案を頂いた。③文化芸術の問題は、シンポジウムや講演会を行いながら、三保の松原を文化村として展開できると良いと考えている。④観光資産が生かし切れていない課題もある。地図の上に様々な観光資源があるが、なかなかつなげていない。コミュニティバス等で観光地をつなげていきたい。⑤三保は観光地であるが、工業地帯やプラントがあり、世界文化遺産の雰囲気がない。⑥清水港と三保の松原が一体となることを考えていく必要がある。⑦三保の松原に対する住民の共通認識が欠如している。三保半島の



特殊性として、工業地帯、産業、物流等、様々なものが混在している。

2) エコツーリズム推進アドバイザー派遣について

- ・ 来訪者を受け入れる体制の核づくりが必要というアドバイスを踏まえ、羽衣ルネッサンス構想を生み出した。第八の問題として、海外の観光客が非常に増えた。工業地帯と一体化している中で、三保の雰囲気作りをしていく必要がある。松林について、松はやめた方が良いのではないかと、という意見も頂いている。羽衣ルネッサンス構想を展開していくなかで、ムーブメントが重要であると考えている。企業や自然環境は、相反することもあるが、日本の財産については維持しながら、自然遺産をどのように展開をしていくのか道を切り開いていきたい。天女が安心して戻って来られる、三保の松原を展開していきたい。

(3) 地域からの報告②：鹿児島県徳之島の取組

奄美群島広域事務組合 奄美振興課 世界自然遺産推進係：渡辺 貴之氏

1) 奄美群島の概況について

奄美群島は有人 8 島、12 万人で構成されている。平成 15 年頃より島全体を博物館として捉え、奄美群島全体の奄美群島エコツーリズム推進協議会を設置した。奄美群島キャンプを開催し、自然環境を勉強する場を作った。エコツーリズム推進体制については、各島の作業部会で進めている。



2) エコツーリズム推進アドバイザー派遣について

- ・ 奄美群島の課題として、地域全体で理念の共通認識を持つことができていなかった。そこで、アドバイザー派遣業務を活用し、地域全体でエコツーリズムを考えているシンポジウムを開催した。エコツーリズムのシンポジウムの目的は、身近なことから取り組む意識を持ってほしいことを伝えた。
- ・ 奄美群島において、愛の三角形という考え方がある。愛の三角形についてはかなり理解が深まってきた。エコツーリズム推進アドバイザーとして、日常の当り前のことが宝、伝えることも宝である。そこで名人のリストアップを行った。そして長寿の方が飲んでいた泉や石垣といった様々なことが宝であることを認識し、地域の宝を気づくことによって自信につながった。地域住民からは、他社がうらやむような宝があったことを知る機会になった。観光事業者からは、様々な観光形態があることを知った。
- ・ 全体構想の作成状況については、ワークショップ形式で実施している。みんなが

意見を出しやすいように工夫をしている。各島で、エコツーリズム宣言を実施している。島によって言葉が異なってくるが、心は一つにして取組を進めていきたい。

(4) アドバイザーからの報告①：宮崎県高鍋町

株式会社ジェイティービー旅行事業本部 観光戦略部長：加藤 誠 氏

1) エコツーリズム推進アドバイザーを呼んだ目的

- ・高鍋町では、5年間前に第5次基本構造を策定し、観光への取組を施策として含めた。現在、年間58万人の観光客が高鍋町に訪れている。高鍋町では観光振興計画が策定され、この度アドバイザーとして訪問した。高鍋町の課題は、観光振興計画の具現化ができていない点、観光関係者や地域との連携がとられていない点があった。ハード面では、二次交通が整備されていない状況であった。お客様をどのように楽しませるかといった点が取り組まれている状況であった。観光は、交通インフラがないとお客様に足を運んでもらうのが厳しいが、高鍋町には東九州自動車道があるので、今後、観光を展開する可能性は高い。しかし、何も取組まなければ、東九州自動車道のただの通過点となる。
- ・高鍋町は温暖な気候を利用して、シニアサーフィンを行っている。プロサーファーがたまたま高鍋町の温暖な気候と一年間のサーフィンが出来ることに気に入り、移住したことがきっかけで、地域でシニアサーフィンが展開している。これは、ターゲットを絞るという観点からは素晴らしい取組である。高鍋町の自然を活用したスポーツを展開し、シニアサーフィンにはプロサーファーが必ずついているので、安全も担保されている。このシニアサーフィンは、スポーツヘルスツーリズムに展開できる。
- ・天然の牡蠣が採れるが、多くは取れない。だからこそ、高鍋町の牡蠣を、希少価値、ここでしか食べられない、あなたしか食べられないという手法で展開も可能である。また高鍋町は田んぼアートも仕掛けている。地域資源が高鍋町には多くある。
- ・地域資源として「歴史」の視点は忘れてはいけない。高鍋は城下町であった。明林堂という藩校を作り、勉学を勤しむ地域であり、アーティストが移住している地域である。人的資源が高鍋町にはある。



2) エコツーリズム推進アドバイザー派遣について

- ・観光振興計画は昨年できたばかりであるが、高鍋町には仕組みづくりが重要であ

ることを伝えた。定住人口が一人減ったら旅行者10名を充てるということを頭に入れて行動することが重要である。地域における観光まちづくりのキーワードとして、「住んでよし 訪れてよしの地域づくり」をすることが重要であり、基本的な考え方であることを伝えた。地域によっては、観光が増えることにより、ゴミ・し尿等が増えるというネガティブな側面もでてくることについても伝えた。

- ・サステナブルツーリズムの推進が今後の展開に必要であることを伝えた。消費型観光から環境共生型観光へ展開をしていくことが重要である。エコツーリズムを進めるためには、地域の古来の伝統、ライフスタイル、文化を理解し磨きをかけて頂くことがこれから重要である。
- ・地域観光マーケティングの推進には、ステップがあることを伝えた。推進体制の構築、役割分担を明確にする、地域の観光資源の分析と活用方法の整理、マーケットの把握と対象マーケットの明確化、効果的な商品化、マーケティング活動の実行があることを伝えた。
- ・高鍋町には情熱を持ったリーダーがまだ存在しないので、リーダー的な存在が必要である。そして地域ならではの文化、資源等を伝えていくことが重要であり、ライフスタイルに合わせていくことを伝えた。
- ・資源をストーリーとして伝えられるコンテンツ展開が必要である。五感で感じる体験が重要。体験する、交流する、学ぶを付け加えると良い。そして旅には5つの力があるので、是非参考として頂きたい。
- ・高鍋町に期待することとして、自然・歴史・食やコンパクトなマチが特徴である。そして高鍋町の方は、全員挨拶をすることが自然となり、ホスピタリティが高い街であった。ひとが人を大切に思えるかは、観光振興のソフト面には重要である。海、シニアサーフィンスクール等があるので、「仮想的なシニア高鍋学校」を展開することを伝えた。具体的には、高鍋町の体育学部、食を中心とした食の部、酒学部を展開し、Iターンとして高鍋を選ばれるようにすれば良いのではないかと提案してきた。

(5) アドバイザーからの報告②：神奈川県横浜市

公益財団法人日本生態系協会 地域計画室長：城戸 基秀 氏

1) エコツーリズム推進アドバイザーを呼んだ目的

- ・今回の派遣先からの要望として、「ハイキングコースの利用ルール策定の支援」の依頼を受けた。横浜市では、平成24年につながるの森構想が策定された。生き物の多様性を楽しむことと自然を楽しむに基づき、11個の取組項目があり、そのなかに横浜のつながりの森エコツーリズムの推進が施策として展開



している。ルール作りの背景として、土地属性の異なる場所、環境負荷の高い利用増加、団体の意見調整の必要があった。

2) エコツーリズム推進アドバイザー派遣について

- ・2日間かけて、現場確認を行った。場所の特徴として、近くに団地や住宅地が広がっており、都市の人が集まりやすいという立地であった。現場確認後、講演・意見交換を実施し、講演では、エコツーリズムとルールについて話をさせて頂いた。アドバイスとして、現場を歩いてすべて看板を撮ったが、様々な看板があり、まずは看板のルールを整理することを伝えた。ハイキングコースは様々な方が管理をしているので共通のマニュアルを作成し、都度更新を図り情報について共有を図ることが重要であることを伝えた。
- ・「つながりの森」に関するエコツーリズムの実施方法や目標などを検討する必要性について感じたと意見を頂いた。そして、都市近郊における魅力的なエコツーリズムの展開に期待したい。まずはルールを作ることが、全体構想への展開につながると考える。

(6) アドバイザーからの報告③：

北海道別海町・岐阜県飛騨市・福井県池田町

株式会社 ピッキオ マーケティングディレクター：楠部 真也 氏

1) 別海町のエコツーリズム推進アドバイザー派遣について

別海町は圧倒的な自然資源があった。オジロワシ、ゴマフアザラシ等の動物を観察が可能な地域であり、自然の動物園であった。外国の方も別海町に訪来している。そして打瀬船、竪穴式住居跡などもあり文化的資源がある。野付半島の課題として、観光面での認知度不足や別海町の観光業が近隣地域と比べて規模が小さく、ガイド業が成り立ちにくくなっている。野付半



島への提案として、地元の宿泊事業者との協力体制の構築、別海町外の大型旅館などとの協力体制の構築、認知度向上のための広報戦略（すでにBBCがエゾジカを撮影として撮っている）、町としての観光基本政策を定めるための全体の構想の作成が必要である。そして、どのような方をターゲットにするのか、検討することにも提案した。

2) 池田町のエコツーリズム推進アドバイザー派遣について

池田町は、エコツーリズムを始めようとしている初期段階（検討段階）である。有機栽培、直売の先進地として知られ、他地域から視察も多い。課題としては、観光産業は町内に少ないことが課題だが、自然資源としては里山地域である。池田町では、エコツーリズムの基礎となるセミナーを2回実施し、様々な方法を模索し、交流人口を増加させる仕組みを探していく。

3) 飛騨市のエコツーリズム推進アドバイザー派遣について

飛騨市は、観光地、飛騨高山、白川郷などに隣接している里地である。飛騨市には農村風景、明治時代の町並み、湿原が残っている魅力的な地域である。さらに評価の高い宿やガイド事業を営むものもいる。ただし、課題として、隣接している高山市との協力体制が作りづらく、観光客が流れてこないが、飛騨のロコミは非常に良い。そして観光のビジョンが明確でなく、観光誘致策が散発的になり、一貫性でない部分がある。課題の解決として、他市町村との連携やエコツーリズム全体構想の作成をすると良いと提案。全体構想を策定し飛騨市の取組の方向性を明確にすることにより、長期的な戦略を築いていくことに展開する。

(7) パネルディスカッション

●モデレーター

文教大学 国際学部国際観光学科 教授 海津 ゆりえ氏

●パネリスト

- ・静岡県静岡市 NPO 法人三保の松原・羽衣村 事務局長 遠藤 まゆみ氏
- ・鹿児島県徳之島 奄美群島広域事務組合奄美振興課世界自然遺産推進係 渡辺 貴之氏
- ・株式会社ジェイティービー 旅行事業本部観光戦略部長 加藤 誠氏
- ・公益財団法人日本生態系協会 地域計画室長 城戸 基秀氏
- ・株式会社 ピッキオ マーケティングディレクター 取締役 楠部 真也氏
- ・環境省自然環境局総務課自然ふれあい推進室長 中尾 文子氏



①団体組織、自治体組織を結びつけることについて教えてほしい。

遠藤氏

静岡市は縦割りがあり、行政単位の会議だと本音がでてこない。NPO が開催する会議だと、なごむ。エコツーリズムという共通の認識と時間をかけていくことが必要であると考え。そして踏み込んで討議することにより本当の意見交換へ展開する。4時間程度、会議を実施し、かなり有意義な話できた。

楠部氏

Win-Win の関係の要素をどの程度作っていくのが重要である。誰から見て分かるようなメリットを見せていくと良い。

②ガイドやリーダーの育成について、行政が行うことはあるか。

加藤氏

エコツーリズム推進法において、地域にガイドは必要である。リーダー養成については、当該自治体において、リーダーが存在していないならば地域の首長がリーダーとなればよい。リーダー養成、ガイド育成には予算が必要である。ベクトルを合わせていくためにも、首長の意見は重要であり、観光振興を行っていく意識が重要である。大分の湯布院、全国の温泉地で3番から下に落ちたことはないがここまで40年かかっている。住民、行政等が一体となって進めていくためにも首長が覚悟を決めて推進し、予算をつけ、専門機関が参加していく。観光振興に重要なのは、ばかもの（地域を愛している）、よそもの（観光のプロ等）、わかもの（まちづくりに若者を参加させる）である。

渡辺氏

奄美群島では事務組合で予算を取得している。従来までの人たちと連携し、進めている。ガイドをまとめるのは、苦勞もある。

③受益者負担といった地域にお金を落とすしていく仕組みについて、どのようなことが考えられるのか。

加藤氏

住民が地域を保護し、どれくらいの人々の来訪数が良いのか、自ら学ぶことが重要である。保護もでき地元が潤うのかについて定量的に考えていく必要がある。阿寒湖では入湯税を250円と高くして税収増が見込まれている。議会も含めて地域がベクトルをどこにあわせるのか検討すると良い。

ニセコでは財源が厳しいという実状である。外国人が行政マンとして働いている。2015年度、2016年度から入島税とリフトにお金を取る予定である。定量的に地域が考え、身の丈のお金をもらっていくことが必要である。

中尾氏

新しい法律に、地域自然資産法がある。地方自治体による地域の自然を利用しながら、税をかけるという法律である。法律に基づき基本方針が明らかになるので、自治体では実施し易くなると思う。徴収の目的を明確にし、何に使うのかを明確にするのが重要であると考えている。支払う方も納得することが重要であり、地域も納得して使う仕組みが必要である。

城戸氏

まだ実現はしていないが飯能市では基金を作ろうとしている。環境に配慮しているということのアピールにもつながる。団体がお金を受け取り、市や基金に回す。環境に役立つという別の方法で進められるというメリットかと考えている。

中尾氏

エコツーリズム推進法の基本方針においても、事務経費については徴収できる仕組みとなっている。全体構想を作成していく中で、いくら徴収できるのか、仕組みにすることも可能である。

④地域でモニタリングをしっかりと取り組んでいる事例、地域で自然観察を行っている事例を教えてください。

城戸氏

モニタリングは重要であり、全体構想にも盛り込むことになっている。1、専門的な調査をする方法がある。例えばサンゴ礁の調査を行うなど。2、ツアーの時に気づいたことをチェックする方法がある。里山里地タイプでは、専門的なモニタリングよりもツアーの時に気づいたことをチェックしていく方法が良いだろう。

横須賀市のモニタリングでは、「おもしろ自然リスト」を作成し、ツアーの時に、喜んでくれた内容についてチェックしていくことを検討したことがある。

自然観察を行っている方との連携については、やはり難しいと思う。一番良いのは自然観察を行っている方にツアーに参加してもらえると良い。例えば、ムササビ観察ツアーができる場所では、ムササビの観察をしている方のツアーと他の団体のムササビツアーがあり、モニタリングをしている人、していない人の間で軋轢が生まれる場合がある。

環境省の「モニタリングサイト1000」というものがあるのでうまく活用する方法もある。

楠部氏

ムササビウォッチングという売りのツアーを行っており、これは10年位モニタリングしている。日々ガイドによって、ムササビが巣から出る時間や何を食べていたかという情報を記録している。そして、その情報をガイド自身が共有する仕組みを「野鳥の森」ではつくっている。また、カヤックやカヌーのツアーを行っている地

域では協議会にて情報を吸い上げて共有している地域もある。

大学と一緒に研究する方法がある。大学もフィールドを探しているので、一緒にモニタリングを進めるのも一つの方法。

⑤平日に連泊してくれるリピーター顧客を獲得する有効な手段を教えてください。

加藤氏

お客様が、旅行先を決めて、旅行先で楽しみ、帰ってくるという購買行動がある中で、その地域に行ってお客様が地域から「よく来てくれた」と尊敬されたと感じた時にもう一度行きたくなるという調査結果がある。お客さまが地域と接する機会にまち全体でおもてなしをする文化があるとリピーターに繋がると思う。

今回派遣で訪問した高鍋市では、群馬県に住んでいた歯科医の方が移住している。この方は一度高鍋市を訪ねて、プロサーファーが開催するシニア講習に参加して素晴らしいと感じて、群馬県の歯科医を閉業し、高鍋市に住んで、根付いて、歯科医を開業し、地域貢献しながら暮らしている。地域ぐるみのおもてなしによる成功事例と考えている。

⑥来訪者と地域の人たちをつなぐコンシェルジュのような役割をつくる予定はあるか教えてください。

渡辺氏

平成 24 年度に全島をまとめる奄美群島観光物産協会をつくり、群島全体でのアピールをしている。ここを通して来訪者と地域の人を繋いで行っている。

奄美博覧会という冊子でもアピールを行っている。

⑦エコツーリズム推進全体構想の地域を増やすにはどのようにしたらよいか。

楠部氏

一番は、認定を受けるメリットがあることが重要になる。メリットの一つは、ガイドの送迎は基本的には認められてはいないが、全体構想の認定を受けると国交省からガイドによる送迎が認められること。また、長期的な観光戦略を作り出すことによって、ぶれない地域の観光づくりが期待できる。

渡辺氏

奄美群島では、全体構想を作る前に、10 年先 20 年先を検討した「奄美群島成長戦略ビジョン」を策定した。その過程が群島一体となって取組む推進力につながると考える。これからは行政が作成したものを、全体構想を通して地元の人たちが作り、地元の人たちが展開させていくものにして欲しいと考えている。

⑧最後に一言ずつコメントをいただきたい。

渡辺氏

行政の立場としてエコツーリズムに取り組むことで地域の人たちが応えてくれるということ感じながら活動してきた。誠意あるコミュニケーションを地域の人たちと続けることで群島一体となった取組を続けていきたい。

遠藤氏

この地域のエコツーリズムは自然発生的に実行しているところがある。例えば、清掃ボランティアは、去年週2回の地域清掃に1033人が参加した。これは近隣の方もいるが、企業研修や修学旅行で来た外部の方も含まれる。その方たちは清掃することで「感謝してもらえることが嬉しい。」という話をしている。地域にある色々な資源を上手に組み立ててエコツーリズムに繋げていきたいと考えている。

楠部氏

エコツーリズムでは、海外の方に日本の自然を見てほしいと考えている。海外の方たちが来ることで日本の自然の価値がもっと高まる。それによりガイドのステータスを上げ、今は年収200万円程度なのを高めていきたい。日本の観光の形を変えて、環境を意識しながらの環境立国にしていくことに一緒に取組んでいければと思っている。

加藤氏

様々な自治体及び個人がエコツーリズムの推進に参加いただけるように近年変わってきたと考えている。観光振興が地域にとって重要になってきている。観光で地域を活性化するための秘策は、地域の滞在時間を長くしてもらうことが重要となる。滞在時間の中でどれだけ楽しめるコンテンツを作るかが重要になる。

城戸氏

環境省がエコツーリズムを始めて10年位になる。始める際に里地里山もエコツーリズムに入れようということになった。ここまでやってきてエコツーリズムにより地域に誇りを持ち、人と人のつながり作ってきたという社会的なメリットはとても大きいと考えている。里山地域でもエコツーリズムを進めてほしい。例えば今回の横浜市での取組はポテンシャルが高い。すでに様々な方が、環境管理や観察活動をしており、周辺にはたくさんの方が住んでいる。都市の中でもエコツーリズムができるということを発信して欲しいと考えている。

2) 総括

文教大学 国際学部国際観光学科 教授 海津 ゆりえ氏

- ・今回の報告会で一番感じたのは、なんと資源豊かな日本かと言うこと。北から南まで色々な日本をご覧いただいたと思う。地方創生の鍵を握るのはエコツーリズムであると考えている。
- ・エコツーリズムでは、いろんなステージを進めていく必要があり、大きく7つあると考えている。①地域の課題を認識している状態 ②エコツーリズムがあるということに気がついた段階 ③エコツーリズムとは何かということ共有し始めた段階 ④資源を探していく「宝さがし」を行い自分たちの魅力を発掘する段階 ⑤宝磨きを活かす段階 ⑥モニタリングなどのルール作りをする段階 ⑦形にしてビジネスにして実施していく段階がある。そして、最後までいくと全体を振り返るという事になると考えている。自分たちの地域がこの7つの段階のどこであるかということを考える必要がある。全てを順番にやる必要はないが、様々な段階の地域を参考にして進めていただきたい。また、エコツーリズムは新しいものを作るというより、既存のものをどうやって変えていったらよいかと言うやわらかい頭で考えていただきたい。
- ・これからアドバイザーとアドバイスを受ける地域が仲間になっていくことが重要となる。地域はアドバイスを受け続けるということではなく、アドバイスを受けて取組んできた所が次の地域を応援するということができたら良いと考える。今後、横の繋がりを縦横無尽に広げていって、エコツーリズムという切り口で日本全体の資源が磨かれていく将来が描けるとよいと考えている。



(8) 閉会の挨拶

環境省自然環境局総務課自然ふれあい推進室長 中尾 文子 氏

- ・本日の説明会では、2つの地域、3人のアドバイザーからの報告、パネルディスカッションを実施した。
- ・昨年度、内閣府の協力のもとエコツーリズムに関する世論調査を実施した。その中で「エコツーリズムを通じて地域づくりをしたいと思うか」という設問に対して65%程度が「そう思う」と回答であった。更に20代～30代だけをみると75%が「そう思う」と回答している。これは、潜在的にエコツーリズムを応援したい・関わりたいと



いう人が多くいるということを示していると考えている。その人たちに関わってもらうには、きっかけづくりとお声掛けが重要と考えている。機会があれば周りに声をかけてみると、思っている以上に興味をもってもらえると考えている。環境省としても様々な仕掛けをしていく予定である。

参考資料 エコツアーリズム推進法と環境省の関連施策について

1. エコツーリズムに取り組む地域への支援

環境省では、エコツーリズムに取り組む地域等への支援策として「エコツーリズムガイド等養成事業」、「エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業」、「エコツーリズム地域活性化支援事業」を実施しています。

①エコツーリズムガイド等養成事業

【エコツアーの普及、推進の中核を担うガイド及びコーディネーターを育成】

- ・観光協会、宿泊業者等エコツーリズム推進の要となる地域住民も対象としたガイド、コーディネーターの育成
- ・既存ガイド等の能力向上、連携の促進

②エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業

【エコツーリズムの推進に伴う地域の課題解決への支援】

- ・エコツーリズム等を活用した地域活性化に取り組む地域に対して、有識者をアドバイザーとして派遣
- ・エコツーリズムの推進にあたっての課題の解決を支援

③エコツーリズム地域活性化支援事業（交付金）

【地域が取り組む魅力あるエコツアープログラムづくり等への支援】

- ・エコツーリズムやジオツーリズム等に取り組む地域協議会等へ支援
- ・地域協議会は多様な主体で構成(市長村の参加は必須)
- ・国が地域協議会に対しプログラムづくり等に要する経費の2分の1を交付
- ・1協議会あたりの交付額の上限は1000万円



2. エコツーリズム推進法について

平成 19 年 6 月 20 日の参議院本会議において、エコツーリズム推進法が成立しました。

①成立の背景

近年、身近な環境についての保護意識の高まりや、自然と直接ふれあう体験への欲求の高まりが見られるようになってきました。このような背景から、これまでのパッケージ・通過型の観光とは異なり、地域の自然環境の保全に配慮しながら、時間をかけて自然とふれあう「エコツーリズム」が推進される事例が見られるようになってきました。

しかし、現在は地球の環境への配慮を欠いた単なる自然体験ツアーがエコツアーと呼ばれたり、観光活動の過剰な利用により自然環境が劣化する事例も見られます。このような状況を踏まえ、適切なエコツーリズムを推進するための総合的な枠組みを定める法律が制定されました。

②法律の趣旨

この法律は、地域の自然環境の保全に配慮しつつ、地域の創意工夫を生かした「エコツーリズム」を推進するに当たり、以下の 4 つの具体的な推進方策を定め、エコツーリズムを通じた自然環境保全、観光振興、地域振興、環境教育の推進を図るものです。

- (1) 政府による基本方針の策定
- (2) 地域の関係者による推進協議会の設置
- (3) 地域のエコツーリズム推進全体構想の策定
- (4) 地域の自然観光資源の保全

③政府の取組

エコツーリズム推進法は、平成 20 年 4 月 1 日に施行し（同日、エコツーリズム推進法施行規則公布・施行）、政府は、エコツーリズム推進のための基本方針を作成しました（平成 20 年 6 月 6 日閣議決定）。市町村が作成した地域ごとの全体構想は、主務大臣（環境大臣、国土交通大臣、農林水産大臣、文部科学大臣）の認定を申請することができ、この基本方針に適合するものが認定されます。国は、認定を受けた全体構想について広報に努めることや、法令の許可申請に際してエコツーリズムに係る事業が円滑に実施されるよう適切に配慮することとしており、地域のエコツーリズム実現に関する施策を推進します。

④エコツーリズム推進法に基づく全体構想の認定状況

平成27年3月現在で、下記の6地域の全体構想がエコツーリズム推進法に基づく認定を受けています。

市町村名	全体構想と協議会の名称	認定日
埼玉県飯能市	飯能市エコツーリズム推進全体構想 (飯能市エコツーリズム推進協議会)	平成21年9月8日認定 平成27年1月16日変更認定
沖縄県渡嘉敷村 座間味村	慶良間地域エコツーリズム推進全体構想 (渡嘉敷村エコツーリズム推進協議会及 び座間味村エコツーリズム推進協議会)	平成24年6月27日認定
群馬県みなかみ町	谷川岳エコツーリズム推進全体構想 (谷川岳エコツーリズム推進協議会)	平成24年6月29日認定
三重県鳥羽市	鳥羽エコツーリズム推進全体構想 (鳥羽市エコツーリズム推進協議会)	平成26年3月13日認定
三重県名張市	名張市エコツーリズム推進全体構想 (名張市エコツーリズム推進協議会)	平成26年7月9日認定
京都府南丹市	南丹市美山エコツーリズム推進全体構想 (南丹市美山エコツーリズム推進協議会)	平成26年11月21日認定

エコツーリズム推進法等に基づく取り組み推進

エコツーリズム推進法

・平成19年6月議員立法により成立。翌年4月1日施行。
・エコツーリズムを通じて、我が国の自然環境を保全し、後世に伝えていくことをはじめとして、国民の健やかで文化的な生活を実現していくことを目的として、地域で取り組むエコツーリズムに関する総合的な枠組みを定めた法律。

エコツーリズムとは

観光旅行者が、自然観光資源について知識を有する者から案内または助言を受け、当該自然環境資源の保護(配慮しつつ当該自然観光資源と触れ合い、これに関する知識及び理解を深めるための活動。

推進の枠組み

基本理念 ● 自然環境への配慮 ● 観光振興への寄与 ● 地域振興への寄与 ● 環境教育への活用

政府がエコツーリズム推進の基本方針を策定(平成20年6月閣議決定)

地域ぐるみの推進体制の構築

- 市町村は、事業者、NPO等、土地所有者、関係行政機関による協議会を組織できる。
- 協議会はエコツーリズム推進全体構想を作成し、エコツーリズムを推進。
⇒ エコツーリズムの実施の方法、自然観光資源(動植物の生息地等)の保護措置を規定。

全体構想の認定・保護措置

- 市町村は、主務大臣(環境、国土交通、農林水産、文部科学)に対し、全体構想の認定を申請できる。
- 認定された全体構想に係るエコツーリズムについては、国が広報に努めるとともに、各種許認可で配慮。
- 市町村は、認定された全体構想に基づき、保護を図るべき特定自然観光資源を指定できる。
⇒ 汚損・損傷等の禁止、利用者の数の制限等が可能。

【参考】エコツーリズム推進法のあらまし

1. 目的（第1条関係）

エコツーリズムが①自然環境の保全、②地域における創意工夫を生かした観光の振興、③環境の保全に関する意識の啓発等の環境教育の推進において重要な意義を有することにかんがみ、その基本理念や基本方針の策定その他エコツーリズムを推進するために必要な事項を定めることにより、関係する施策を総合的かつ効果的に推進し、現在及び将来の国民の健康で文化的な生活の確保に寄与することを目的としています。

2. 定義（第2条関係）

(1) 自然観光資源

- ・動植物の生息地または生育地その他の自然環境に係る観光資源
- ・自然環境と密接な関連を有する風俗慣習その他の伝統的な生活文化に係る観光資源

(2) エコツーリズム

観光旅行者が、自然観光資源について知識を有する者から案内または助言を受け、当該自然観光資源の保護に配慮しつつ当該自然観光資源と触れ合い、これに関する知識及び理解を深めるための活動

3. エコツーリズムの基本理念（第3条関係）

- ・自然観光資源が損なわれないよう、生物の多様性の確保に配慮しつつ、適切な利用の方法を定め、その方法に従って実施されるとともに、実施の状況を監視し、その監視の結果に科学的な評価を加え、これを反映させつつ実施すること
- ・関係事業者が自主的かつ積極的に取り組むとともに、観光の振興に寄与することを旨として実施すること
- ・地域の多様な主体が連携し、地域社会及び地域経済の健全な発展に寄与することを旨として実施すること
- ・環境の保全についての国民の理解を深めることの重要性にかんがみ、環境教育の場としての活用が図られるよう配慮すること

4. 基本方針（第4条関係）

政府は、基本理念にのっとり、エコツーリズムの推進に関する基本的な方針（内容は(1)から(5)までのとおり）を定めます。

- (1) エコツーリズムの推進に関する基本的方向
- (2) エコツーリズム推進協議会に関する基本的事項
- (3) エコツーリズム推進全体構想の作成に関する基本的事項
- (4) エコツーリズム推進全体構想の認定に関する基本的事項
- (5) 生物の多様性の確保等のエコツーリズムの実施にあたって配慮すべき事項、その他重要事項

5. エコツーリズム推進協議会（第5条関係）

市町村は、エコツーリズムを推進しようとする地域ごとに、事業者や地域住民、NPO法人、自然環境や観光の専門家、土地所有者、関係行政機関などで構成するエコツーリズム推進協議会（以下、協議会）を組織することができます。

協議会は、エコツーリズムを推進する地域や実施の方法、対象となる自然観光資源を明らかにする全体構想（エコツーリズム推進全体構想）の作成や関係者の連絡調整を行います。

6. 全体構想の認定（第6条、第7条関係）

市町村は、組織した協議会が作成した全体構想について主務大臣（環境、国土交通、文部科学、農林水産の各大臣）の認定を受けることができます。主務大臣は、認定をした全体構想についてインターネットの利用などにより周知します。

7. 特定自然観光資源の指定（第8～10条関係）

市町村長は、主務大臣の認定を受けた全体構想に従い、保護措置を講ずる必要がある自然観光資源を特定自然観光資源として指定し、汚損、除去等を禁止することができます。

また、指定した特定自然観光資源が著しく損なわれるおそれがあると認められる場合は、立入りについてあらかじめ市町村長の承認を受けるよう制限をすることができます。

8. 活動状況の公表等（第11～16条関係）

主務大臣は、毎年、協議会の活動状況を取りまとめ、公表します。また、協議会の構成員に対する技術的な助言などを行います。

9. エコツーリズム推進連絡会議（第17条関係）

政府は、環境省、国土交通省、文部科学省、農林水産省その他の関係行政機関の職員で構成するエコツーリズム推進連絡会議を設け、エコツーリズムの総合的かつ効果的な推進を図るための連絡調整を行います。

10. 罰則（第19条関係）

特定自然観光資源が所在する区域内で禁止されている行為（汚損・損傷、ゴミの投棄、騒音、占拠など）を市町村職員の指示に従わないでみだりに行った場合、30万円以下の罰金に処されます。

11. 施行期日

この法律は、平成20年4月1日から施行されます。

【参考】エコツーリズム推進基本方針の概要

【法律上の位置付け】

- エコツーリズム推進法（平成19年法律第105号）第4条に基づき、政府は、基本理念にのっとり、エコツーリズムの推進に関する基本的な方針を定めることとされており、手続きについては次のとおり定められている。
- ・環境大臣及び国土交通大臣は、あらかじめ文部科学大臣及び農林水産大臣と協議して基本方針の案を作成し、閣議の決定を求める。（第3項）
 - ・環境大臣及び国土交通大臣は、基本方針の案を作成しようとするときは、あらかじめ、広く一般の意見を聴く。（第4項）
 - ・環境大臣及び国土交通大臣は、閣議の決定があったときは、遅滞なく、基本方針を公表する。（第5項）
 - ・基本方針は、エコツーリズムの実施状況を踏まえ、おおむね5年ごとに見直しを行う。（第6項）

【概要（主な記述内容）】

はじめに

- ・地球環境問題が深刻化する中、人々の主体的な行動やライフスタイルの変革に結びつかないのは、地球とつながっている（自然の恵みで人も生きている）実感が決定的に不足しているため。
- ・エコツーリズムは、人と自然のつながり、人と人とのつながりを取り戻し生物多様性を保全しながら元気な地域社会をつくるものであり、観光旅行者や関係する人々が地球環境とつながる糸口にもなるもの。
- ・エコツーリズムに取り組む地域への国による認証制度が始まった。

第1章エコツーリズムの推進に関する基本的方向

- ・推進する意義は、①ルールの設定による自然環境の保全、旅行者や住民などの環境意識が高まり地域の環境から地球環境まで含めた保全に関する行動につながる効果、②地域固有の自然環境や生活文化等の魅力を見直す効果、③観光地としての競争力の向上・新たな観光振興の可能性などに加え持続的な地域づくりに対する意識の高まりや住民の誇りにつながる効果。
- ・進め方を次のように整理。①関係者が話し合い、②地域の宝を再認識・発見し、③宝を大切に磨き、④観光旅行者にうまく伝え、⑤その感動をさらに磨く原動力とし、⑥地域の活性化につなげる、という相互に関連する一連の行為。
- ・「大切にしながら」、「楽しみながら」、「地域が主体」という視点が基本。
- ・エコツーリズムの推進によって我が国で長期的に目指す姿を明示。
- ・重点的に取り組むべき当面の課題として、①人材育成、②取り組む地域への支援、③戦略的広報、④科学的評価方法等に関する調査研究、⑤他施策との連携を提示。

第2章エコツーリズム推進協議会に関する基本的事項

- ・「エコツーリズム推進協議会」の組織化にあたっては、①協議会の効率的な運営に配慮しつつ、②特定事業者、地域住民、NPO等、有識者、土地の所有者等、関係行政機関、関係地方公共団体など地域の多様な主体の参加・連携が必要。
- ・協議会は、①原則公開とし、透明性を確保するとともに、②相互に情報を共有し、関係者間の合意形成を図ることが必要。

第3章エコツーリズム推進全体構想の作成に関する基本的事項

- ・エコツーリズムの実施にあたっては、対象となる自然観光資源などが損なわれないよう、事前に「ルール」などを決めて「ガイドランス・プログラム」を実施し、自然観光資源の状態を継続的に「モニタリング」するとともに、その結果を科学的に「評価」し、これをルールや活動に反映させるという「順応的な管理」による進め方が重要。
- ・「ルール」には、自然観光資源が損なわれることを防ぐため、①罰則のような一定の強制力を必要に応じ持たせるものと、②自主ルールのように関係者間の内発的な取り組みとして実施するものがあり、安全確保や住民の生活への配慮などの目的も必要に応じ検討することが望まれる。
- ・「モニタリング」の実施にあたっては、①原生的自然の区域では、専門家や研究者など積極的な関わりを得てよりきめ細かく実施し、②里地里山などでは、ガイドや地域住民が主体となってモニタリングを行わない、その結果を専門家や研究者が評価するなど、地域の自然的社会的特性に応じて実施することが重要。
- ・エコツーリズムの推進にあたっては、①地産地消の取り組みなど農林水産業をはじめとする関連産業との連携・調和、②他の法令や関係法令に基づく各種計画などとの整合、③地域の生活や習わしへの配慮などが必要。

第4章エコツーリズム推進全体構想の認定に関する基本的な事項

- ・全体構想が認定されると、①これまで保護措置が講じられていなかった自然観光資源を「特定自然観光資源」として指定し、法的に保護することで、持続的かつ質の高い利用が可能となったり、②地域のブランド力が高まり、また国が積極的にその周知に努めることから、集客力の向上につながるなどの効果が期待される。
- ・認定の基準として、①協議会の参加者や運営方法、その他各種手続きなど全体構想が基本方針に適合すること、②プログラムの実施主体やモニタリングの役割分担など全体構想の内容が確実かつ効果的に実施される見込みがあることといった基準を明示。

第5章生物多様性の確保等のエコツーリズムの実施にあたって配慮すべき事項その他エコツーリズムの推進に関する重要事項

- ・他地域からのメダカやホテルの導入などによる遺伝子レベルでの攪乱にも配慮することが必要。
- ・里地里山などでは、維持管理活動をプログラムに取り入れることによる生物多様性の回復も期待。
- ・潜在的なニーズがある「子ども」の視点が重要。宝探しやプログラムづくりへの地域の子どもの積極的な関与が地域への誇りや愛着にもつながる。長期宿泊体験など学校教育との連携も重要。
- ・有識者からの助言を受けつつ、関係省等での連携を強化。

環境省請負業務
平成 26 年度 エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業 事例集
平成 27 年 3 月発行
アオイ環境株式会社
東京都港区三田 2-17-29

リサイクル適性の表示：印刷用の紙にリサイクルできます。
この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、
印刷用の紙へのリサイクルに適した材料[A ランク]のみを用いて製作しています。